

京都府遺跡調査報告書

第 5 冊

北 金 岐 遺 跡

1 9 8 5

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく5年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることを普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、この報告の北金岐遺跡も国道9号バイパス建設工事に伴う事前調査であります。調査によって発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され消滅する運命にあります。発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅してはいませんがありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この『京都府遺跡調査報告書』は、遺跡の重要性を理解していただくために、また、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものであります。この報告書のほかに、調査結果を掲載した『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、亀岡市教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに炎暑の下、厳寒の中、熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがおります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

昭和60年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

例 言

- 1 本書は、京都府亀岡市大井町北金岐に所在する北金岐遺跡B・C地点の発掘調査報告書である。
- 2 北金岐B・C地点の調査は、国道9号バイパス関連遺跡として、建設省の依頼を受け、昭和58年7月18日から昭和59年3月30日までの第1次調査、昭和59年11月5日から昭和59年12月20日までの第2次調査の2か年にわたり、財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査課 主任調査員 水谷寿克、同調査員 石井清司・田代 弘・森下 衛が担当して行った。
- 4 遺構・出土遺物の整理作業は、発掘調査終了後、国道9号バイパス吉川整理事務所で行い、出土遺物の整理・実測は、主に石井清司・田代 弘・中坪堯央・細川康晴・原田昭一が、図面のトレースは主に藤田順代・岡本美和子・村尾多美子が行った。
- 5 本書に掲載した写真は、遺構を主に石井清司・田代 弘が撮影し、遺物写真は高橋猪之介氏に、空中写真は株式会社アジア航測にそれぞれ委託した。また遺構平面図の一部は空中写真をもとに、株式会社アジア航測に委託した。
- 6 本書の執筆は石井清司・田代 弘・中坪堯央が分担し、末尾に明示した。編集は原口正三・堤圭三郎・杉原和雄のもと、劉 和子の協力を得て石井清司・土橋 誠が行った。

本文目次

はじめに	1
第1章 歴史的環境と調査経過	3
第1節 歴史的環境	3
第2節 調査経過	5
第2章 北金岐B・C地点の遺跡	6
第1節 地形と層位	6
第2節 遺構の種類とその分布	11
第3章 遺構・遺物	25
第1節 第Ⅰ期の遺構	25
第2節 第Ⅰ期の遺物	33
第3節 第Ⅱ期の遺構	89
第4節 第Ⅱ期の遺物	92
第5節 第Ⅲ期の遺構	96
第6節 第Ⅲ期の遺物	105
第7節 第Ⅳ期の遺構	111
第8節 第Ⅳ期の遺物	126
第4章 総括	139
第1節 第Ⅰ期の遺構について	139
第2節 竪穴式住居跡内出土遺物について	142
第3節 近江系土器について	143
第4節 丹後・北丹波系土器について	149
第5節 在地系土器について	150
第6節 「製塩土器」について	152
第7節 第Ⅲ期の遺構・遺物について	153
第8節 第Ⅳ期の遺構について	155
第9節 第Ⅳ期の遺物について	156
おわりに	158

挿 図 目 次

第 1 図	亀岡盆地周辺遺跡図	4
第 2 図	北金岐遺跡地形図	7
第 3 図	B地点北壁・西壁土層断面図	8
第 4 図	C地点北壁土層断面図	9
第 5 図	C地点西壁土層断面図(1)	10
第 6 図	C地点西壁・東壁・SE28・SE49土層断面図	11
第 7 図	北金岐遺跡B・C地点平面図 1/300	13
第 8 図	B地点平面図(1)	15
第 9 図	B地点平面図(2)	17
第 10 図	C地点平面図(1)	19
第 11 図	C地点平面図(2)	21
第 12 図	C地点平面図(3)	23
第 13 図	B地点 SB 02 平面図	26
第 14 図	B地点 SB 03 平面図	27
第 15 図	B地点 SB 15 平面図	28
第 16 図	B地点 SD 01 堰及び木製品出土状態	30
第 17 図	B地点 SK 09 平面図	31
第 18 図	第 I 期遺物の分類基準(1)	34
第 19 図	第 I 期遺物の分類基準(2)	35
第 20 図	第 I 期遺物の分類基準(3)	36
第 21 図	B地点 SB 03 出土遺物(1)	42
第 22 図	B地点 SB 03(2), SD 12 出土遺物	43
第 23 図	B地点 SB 15・SB 02・Pit 45 出土遺物	44
第 24 図	B地点 SD 26・SK 09 出土遺物	45
第 25 図	B地点 SD 01 出土遺物(1)	52
第 26 図	B地点 SD 01 出土遺物(2)	53
第 27 図	B地点 SD 01 出土遺物(3)	54
第 28 図	B地点 SD 01 出土遺物(4)	55
第 29 図	B地点 SD 01 出土遺物(5)	56

第 30 图	B地点 SD 01 出土遺物(6)	57
第 31 图	B地点 SD 01 出土遺物(7)	58
第 32 图	B地点 SD 01 出土遺物(8)	59
第 33 图	B地点 SD 01 出土遺物(9)	60
第 34 图	B地点 SD 01 出土遺物(10)	61
第 35 图	B地点 SD 01 出土遺物(11)	62
第 36 图	B地点 SD 01 出土遺物(12)	63
第 37 图	B地点 SD 01 出土遺物(13)	64
第 38 图	B地点 SD 01 出土遺物(14)	65
第 39 图	B地点 SD 01 出土遺物(15) 拓影	72
第 40 图	B地点 SD 01 出土遺物(16) 繩文土器	74
第 41 图	B地点 SD 01 出土木製品(1)	77
第 42 图	B地点 SD 01 出土木製品(2)	78
第 43 图	C地点 SD 16 下層出土遺物(1)	80
第 44 图	C地点 SD 16 下層出土遺物(2)	81
第 45 图	C地点 SD 16 下層出土遺物(3)	82
第 46 图	C地点 SD 16上・中層出土遺物	83
第 47 图	B・C地点出土石製品(1)	86
第 48 图	B・C地点出土石製品(2)	87
第 49 图	C地点 SB 01 平面图	90
第 50 图	C地点 SD 18 遺物出土狀態	91
第 51 图	B地点 SD 27, C地点 SB 01・SD 18 出土遺物	92
第 52 图	C地点 SB 01 出土玉類	93
第 53 图	C地点 SD 18 出土製塩土器	94
第 54 图	C地点 SB 14 平面图	98
第 55 图	C地点 SB 02・SB 13 平面图	99
第 56 图	C地点 SB 07・SA 06 平面图	100
第 57 图	C地点 SB 19・SB 20 平面图	101
第 58 图	C地点 SB 51・SB 52 平面图	102
第 59 图	C地点 SB 53 平面图	103
第 60 图	C地点 SB 32 平面图	104
第 61 图	B地点 SD 11 出土遺物	107

第 62 図	C地点 SD 08・SD 21 出土遺物	108
第 63 図	B地点 Pit 67, C地点 SD 04 出土遺物	110
第 64 図	B地点 SB 31・SB 38 平面図	113
第 65 図	B地点 SB 32 平面図	114
第 66 図	B地点 SB 33・SB 48・SA 34・SA 35 平面図	115
第 67 図	C地点 SB 09 平面図	116
第 68 図	C地点 SB 01・SB 17 平面図	117
第 69 図	C地点 SB 56・SB 57・SB 59 平面図	118
第 70 図	C地点 SB 62 平面図	119
第 71 図	C地点 SB 63・SB 64 平面図	120
第 72 図	B地点 SE 24・SE 25 平面図及び立面図	122
第 73 図	B地点 SE 04・SE 54, C地点 SE 42 平面図及び立面図	123
第 74 図	C地点 SE 23 平面図及び立面図	124
第 75 図	B地点 SE 54, C地点 SE 49 出土遺物	126
第 76 図	B地点 SE 24・SE 25・SE 04 出土遺物	127
第 77 図	B地点 SE 24(1), C地点 SE 23 出土木製品(1) 曲物	128
第 78 図	B地点 SE 24 出土木製品(2) 漆器椀	129
第 79 図	B地点 Pit 87, C地点 SB 62・SK 27・SK 64・SK 65・Pit 101 出土遺物	130
第 80 図	B地点 SD 28・SE 29・SK 30, C地点 SE 28 ほか出土遺物	131
第 81 図	C地点 SD 22・SE 23, B・C地点包含層出土遺物(1)	132
第 82 図	B・C地点包含層出土遺物(2)	133
第 83 図	北金岐遺跡 B・C地点遺構変遷図(1)	140
第 84 図	北金岐遺跡 B・C地点遺構変遷図(2)	141
第 58 図	京都府下における近江系土器の出土遺跡分布図	146

付 表 目 次

付表 1.	竪穴式住居跡内出土土器の構成	46
付表 2.	B地点SD 01内出土土器の構成	51
付表 3.	北金岐 B・C地点 出土石器法量表	88
付表 4.	B地点 SD01 出土土器器種別組成表	144
付表 5.	第IV期の土器観察表	162

図 版 目 次

- 図版第 1 B・C地点全景(垂直写真・上が南)
- 図版第 2 (1)B地点全景(垂直写真・上が西)
(2)C地点全景(垂直写真・上が西)
- 図版第 3 (1)B地点北半部の遺構(東から)
(2)B地点 SB 03 床面直上遺物出土状態(北から)
- 図版第 4 (1)B地点 SB 03 完掘状態(東から) (2)同上(北から)
- 図版第 5 (1)B地点 SB 03 土壇内遺物出土状態(東から)
(2)B地点 SB 03 床面直上遺物出土状態(西から)
- 図版第 6 (1)B地点 SB 03 床面直上遺物出土状態(東から) (2)同上(南から)
- 図版第 7 (1)B地点 SB 03 壁溝内遺物出土状態(東から)
(2)B地点 SB 15 完掘状態(北から)
- 図版第 8 (1)B地点 SD 01 完掘状態(西から) (2)同上(東から)
- 図版第 9 (1)B地点 SD 01 上面遺物出土状態(南から)
(2)B地点 SD 01 出土遺物細部(南から)
- 図版第10 (1)B地点 SD 01 堰出土状態(西から) (2)同上(北から)
- 図版第11 (1)B地点 SD 01 堰細部(西から) (2)同上(西から)
- 図版第12 (1)B地点 SD 01 船型木製品出土状態(西から) (2)同上(西から)
- 図版第13 (1)B地点 SD 01 梯子型木製品出土状態(南から)
(2)B地点 SK 09 遺物出土状態(北から)
- 図版第14 (1)B地点 SB 32・SD 11(西から)
(2)B地点 SB 32・SD 11(南から)
- 図版第15 (1)B地点 SE 24・SE 25(南西から)
(2)B地点 SE 25 細部(南西から)
- 図版第16 (1)C地点 SE 23(南から)
(2)B地点 SE 04(南から)
- 図版第17 (1)C地点南端部遺構検出状態(東から)
(2)C地点中央部遺構検出状態(東から)
- 図版第18 (1)C地点全景(南から)
(2)C地点北端部遺構検出状態(東南から)

- 図版第19 (1)C地点 SD 04・SB 13・SB 14(東から)
(2)C地点 SD 04・SB 14(東から)
- 図版第20 (1)C地点 SB 01・SB 02・SB 13(東から)
(2)C地点 SB 01・SB 03(北から)
- 図版第21 (1)C地点 SB 02・SB 13(東から)
(2)C地点 SB 19・SB 20(東から)
- 図版第22 (1)C地点 SB 20(東から)
(2)C地点 SB 51・SB 52(南から)
- 図版第23 (1)C地点 SD 18 土器出土状態(北から)
(2)C地点 SD 21(東から)
- 図版第24 (1)C地点 SD 22(東から)
(2)C地点 SD 16(北から)
- 図版第25 B地点 SB 03 出土遺物；土器(1)
- 図版第26 B地点 SB 03 出土遺物；土器(2)
- 図版第27 B地点 SB 03 出土遺物；土器(3)
- 図版第28 B地点 SB 15・SD 26 出土遺物；土器
- 図版第29 B地点 SD 01 出土遺物；土器(1)
- 図版第30 B地点 SD 01 出土遺物；土器(2)
- 図版第31 B地点 SD 01 出土遺物；土器(3)
- 図版第32 B地点 SD 01 出土遺物；土器(4)
- 図版第33 B地点 SD 01 出土遺物；土器(5)
- 図版第34 B地点 SD 01 出土遺物；土器(6)
- 図版第35 B地点 SD 01 出土遺物；土器(7)
- 図版第36 B地点 SD 01 出土遺物；土器(8)
- 図版第37 B地点 SD 01 出土遺物；船型木製品
- 図版第38 B地点 SD 01 出土遺物；梯子型木製品・鋤型木製品
- 図版第39 C地点 SD 16 出土遺物；土器(1)
- 図版第40 C地点 SD 16 出土遺物；土器(2)
- 図版第41 第Ⅱ・第Ⅲ期の遺物；土器
- 図版第42 第Ⅲ・第Ⅳ期の遺物；土器

北金岐遺跡発掘調査報告書

はじめに

北金岐遺跡は、亀岡市大井町北金岐に所在し、標高431mを測る行者山からゆるやかにのびる丘陵先端に位置する。北金岐遺跡周辺の平野部には、基盤目状の方格地割の畦畔が整然と残り、口丹波における条里制遺構として古くから知られていた。

北金岐遺跡の調査は、昭和51年度から始まる国道9号バイパス予定路線帯の事前調査の継続事業の一貫として行われたもので、昭和57年の北金岐A地点から調査を始めた。^(注1)

北金岐A地点の発掘調査では、亀岡盆地に広がる条里制遺構の検出を目的としたが、南に隣接した南金岐遺跡^(注2)における弥生時代中期前半の方形周溝墓・弥生時代後期の溝状遺構等の検出から、条里制下層遺構の有無にも留意し、試掘及び発掘調査を実施した。調査の結果、北金岐A地点では、条里制に関する明確な遺構を検出できなかったが、条里制以前のものとして溝状遺構などを検出した。

北金岐B・C・Dの各地点は、A地点の北側にあつて、A地点の調査と並行して昭和58年7月18日から開始した。調査は、まず、調査対象地である東西約70m・南北約360m、総対象面積約25,000m²について地形測量・基準杭の設定を行った。その後、対象田畑を畦畔の区画ごとに仮番号をつけ、各仮番号の田畑に3×6mの試掘坑を2～4か所(総試掘坑38か所)^(注3)設定し、掘削した。

試掘調査では、各試掘坑ごとに人力で表土以下を順次掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認に務めた。掘削の結果、各試掘坑の基本層位は、上層から耕作土・床土・灰褐色砂質土・黒褐色粘質土・黄褐色土(地山)に分かれる。灰褐色砂質土層には弥生土器のほか、土師器・須恵器・瓦器・陶器などの弥生時代後期から室町時代に至る遺物が混在し、一部灰褐色砂質土層下の直上より切り込まれた遺構(C地点SD 22など)を確認した。黒褐色土層にも弥生土器のほか、土師器・須恵器など弥生時代後期から平安時代に至る遺物が混在していた。同層直上での遺構検出に努めたが、基盤層と遺構埋土が近似し、識別が困難なため、最終的に黒褐色粘質土を除去し、識別可能な黄褐色土層直上での遺構検出に努めた。

試掘調査の結果、B地点仮番号No. 10・No. 11田畑部で溝状の落ち込み・住居跡の一部を検出したため、一部グリッドの拡張を行い、遺構の規模等の確認に務めた。その結果、溝状遺構は上面幅約6～9m・深さ約2mを測る東西方向の大溝であった。また、溝状遺構の南側で住居跡2基(B地点SB 02・SB 03)を確認した。SB 03は、一辺約5.8mの隅丸方

形の住居跡で、床面を四周するように周溝がめぐっている。床面直上には35個体以上の完形品を含む土器のほか、柱及び壁材が焼けて倒壊した状態で出土した。

C地点では、各グリッドごとにピット及び小溝を検出した。特に No. 21 田畑部では、東西方向にのびる幅約2m・深さ30cmの溝状遺構(C地点SD08)やその南に隣接して2間×3間の南北棟の掘立柱建物跡(C地点SB07)を検出した。また、No. 35 田畑部では一辺約4.2~4.4mの方形竪穴式住居跡(C地点SB01)と鍵状にのびる溝状遺構(C地点SD03)を検出している。

D地点では、B・C地点と比較し、地形的に高所にあるので、顕著な遺構の存在を期待したが、小溝及び不明ピットを数か所検出したにすぎなかった。

以上の試掘調査の結果をふまえ、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所・京都府教育委員会と協議を行った。その結果、遺跡の存在が希薄となるB地点の南半・D地点の全面を除いたB地点の北半・C地点の全面について発掘調査を実施する決定をみた。そこで、当調査研究センターは、建設省近畿地方建設局との間で発掘調査費の委託契約書の締結をするとともに、文化財保護法第57条第1項の規定に基づいて「埋蔵文化財発掘調査届出書」を文化庁長官あてに提出した。

当調査研究センターでは周到な準備を行うとともに、調査に伴う組織を次のとおり決定した。

発掘調査総括責任者	栗 栖 幸 雄 (事務局長 昭和58年度)
	荒 木 昭太郎 (事務局長 昭和59年度)
発掘調査責任者	堤 圭 三 郎 (調査課長)
発掘調査担当者	水 谷 寿 克 (主任調査員)
	石 井 清 司 (調査員)
	田 代 弘 (調査員)
	森 下 衛 (調査員)
発掘調査事務責任者	白 塚 弘 (総務課長)

発掘調査は、昭和58年7月18日から昭和59年3月30日までを第1次調査とし、昭和59年11月5日から同年12月20日までを第2次調査としてそれぞれ実施した。調査中及び本書の執筆にあたっては次の人々から御教示を賜った。記して謝意を表したい(敬称略・順不同)。高橋誠一(滋賀大学)、足利健亮(京都大学)、鈴木重治(同志社大学)、尾上 実(大阪府教育委員会)、安藤信策(京都府立丹後郷土資料館)、平良泰久・奥村清一郎(京都府教育委員会)、杉本 宏(宇治市教育委員会)、黒田恭正(神戸市教育委員会)、橋本久和(高槻市教育委員会)、樋口隆久(亀岡市教育委員会)

第1章 歴史的環境と調査経過

第1節 歴史的環境

亀岡盆地では、近年国道9号バイパス・都市計画道路などに伴う発掘調査が増大し、古代の様相が明らかになりつつある。

縄文時代には、古くから三日市遺跡が知られていたが、国道9号バイパスに伴う発掘調査により、各地点で縄文時代後・晩期の土器が出土している。千代川遺跡では弥生時代の包含層内より少量の磨消縄文系、条痕文系土器が混入されている。^(注4) 太田遺跡でも弥生時代前・中期の包含層内から縄文晩期の土器が少量出土している。^(注5) 今回発掘調査を行った北金岐遺跡B地点、SD 01 大溝内より、80点以上の長原式の深鉢・壺片が出土し、行者山を中心とした周辺部に縄文時代後・晩期の集落があったと推定される。^(注6)

弥生時代には、亀岡盆地周辺に遺跡が散在し、その多くが後期に属する。近年の調査例のうち、弥生時代前・中期の注目される遺跡として稗田野町太田遺跡、千代川町千代川遺跡^(注7)がある。

太田遺跡では推定直径約160mを測る環濠のほか、土壇などが検出された。同遺跡については集落の中心部は未確認であるが、幅約2.1~2.2m・深さ約1.2~1.3mを測る2条の溝状遺構が存在し、溝の内外には墓壇と思われる楕円形土壇を含む。出土遺物には土器、石器、木器などが多量にある。土器では第Ⅰ~第Ⅱ様式の摂津、播磨の影響を受けたものが目立ち、亀岡盆地における地域間交流を知る上で重要な遺跡である。千代川遺跡第6次調査は府道拡幅工事に伴う発掘調査であり、総延長約300mの範囲を道路側溝に平行して幅約2~3mのグリッドを十数か所設定し調査した。その結果、多種の遺構が検出された。調査地は推定丹波国府・桑寺廃寺の地割内にあり、両者の関連遺構が検出されたほか、弥生時代第Ⅲ~第Ⅳ様式の方形周溝墓・溝状遺構等も検出された。出土土器は外面にタタキ目を残す壺・甕が主体をなし、太田遺跡と同様、摂津地域の影響が認められる。

古墳時代には府下有数の群集墳が点在する地域として知られているが、群集墳に関連した集落跡については検出例が少ない。千代川遺跡(第5次調査)では古墳時代後期の竪穴式住居跡が3基確認され、北金岐遺跡でも1基の竪穴式住居跡を確認した。両者は集落の背後丘陵に横穴式石室を主体とする北ノ庄古墳群・小金岐古墳群があり、集落と墓を考える上で重要と思われる。

丹波国分寺^(注8)、丹波国分尼寺^(注9)は大堰川の東岸に位置し、発掘調査は亀岡市教育委員会により、数次にわたって行われている。丹波国分尼寺は、金堂・講堂・尼坊跡のほか、寺域を



第1図 亀岡盆地周辺遺跡図

画する土塁が確認され、主要堂宇が南北一直線上に並ぶ伽藍配置であることが明らかになった。丹波国分寺跡は昭和59年度より調査が行われ、瓦積基壇を持つ講堂跡が確認されている。

奈良時代以降の発掘調査例では、千代川遺跡(第5次調査)で奈良～平安時代の掘立柱建

物跡が数棟確認されているのみで様相は明らかでなかったが、今回調査の北金岐遺跡でも建物群が確認でき、様相が明らかになりつつある。

鎌倉～室町時代の遺跡については、横穴式石室の調査において再埋葬などとの関連で、土師器、瓦器などの出土例が知られていたが、集落の様相は明らかでなかった。しかし奈良時代の建物跡群と同様、鎌倉～室町時代の建物跡群を北金岐遺跡で検出したことで、亀岡盆地の様相が明らかになりつつある。

(石井 清司)

第2節 調査経過

発掘調査は、昭和58年7月18日から開始し、まずパワー・シャベルにより表土から灰褐色砂質土までを除去し、黒褐色粘質土層から人力により順次掘り下げ、遺構の検出に務めた。遺構の検出に際しては、遺跡が広大であり、各遺構とも土層の識別がむつかしく、またSD01・SD16の掘削には湧水とともに埋土量が多く難渋をきわめた。

調査の結果、検出遺構は弥生時代後期から室町時代に至る竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・土壇・井戸のほか、小ピット・小溝などがある。特に、弥生時代後期の竪穴式住居跡と溝の有機的関係、奈良～鎌倉時代の掘立柱建物跡など、予想を上回る重要な遺構を検出した。

昭和59年度では各遺構の検討、出土遺物の整理、報告書の準備とともにC地区北西隅の未調査部分(800 m²)について発掘調査を行い、新たに3棟の掘立柱建物跡を検出した。

なお、調査地の地区割は国道9号バイパス(建設省関係)の調査方法に準拠し、国道9号バイパスのセンター杭を基準に北から75m四方の大地区を設定し、大地区の75m四方を3m方眼で区画し、小地区を設定した。各地区は南西隅の杭を基準に南北をアルファベットで、東西をアラビア数字で呼称する。ただし、この地区割によると、北金岐遺跡は大地区のU～Aの範囲に及び、遺跡の状況とも齟齬をきたすため、大小地区とは別にトレンチ名を呼称する場合、農道を境にA・B・C・D地点と記載した。

(石井 清司)

第2章 北金岐 B・C 地点の遺跡

第1節 地形と層位

北金岐遺跡は、亀岡盆地の西方、標高431mを測る行者山からゆるやかにのびる舌状の微高地に立地する遺跡である。

北金岐遺跡を含めた周辺部には、長方形に区画された水田の畦畔が整然と残り、古代の条里跡を推定される地域として知られており、北金岐遺跡が立地する標高105mを測る盆地西端部から盆地中央を貫流する大堰川に向かって順次段差をもって水田面が広がる。

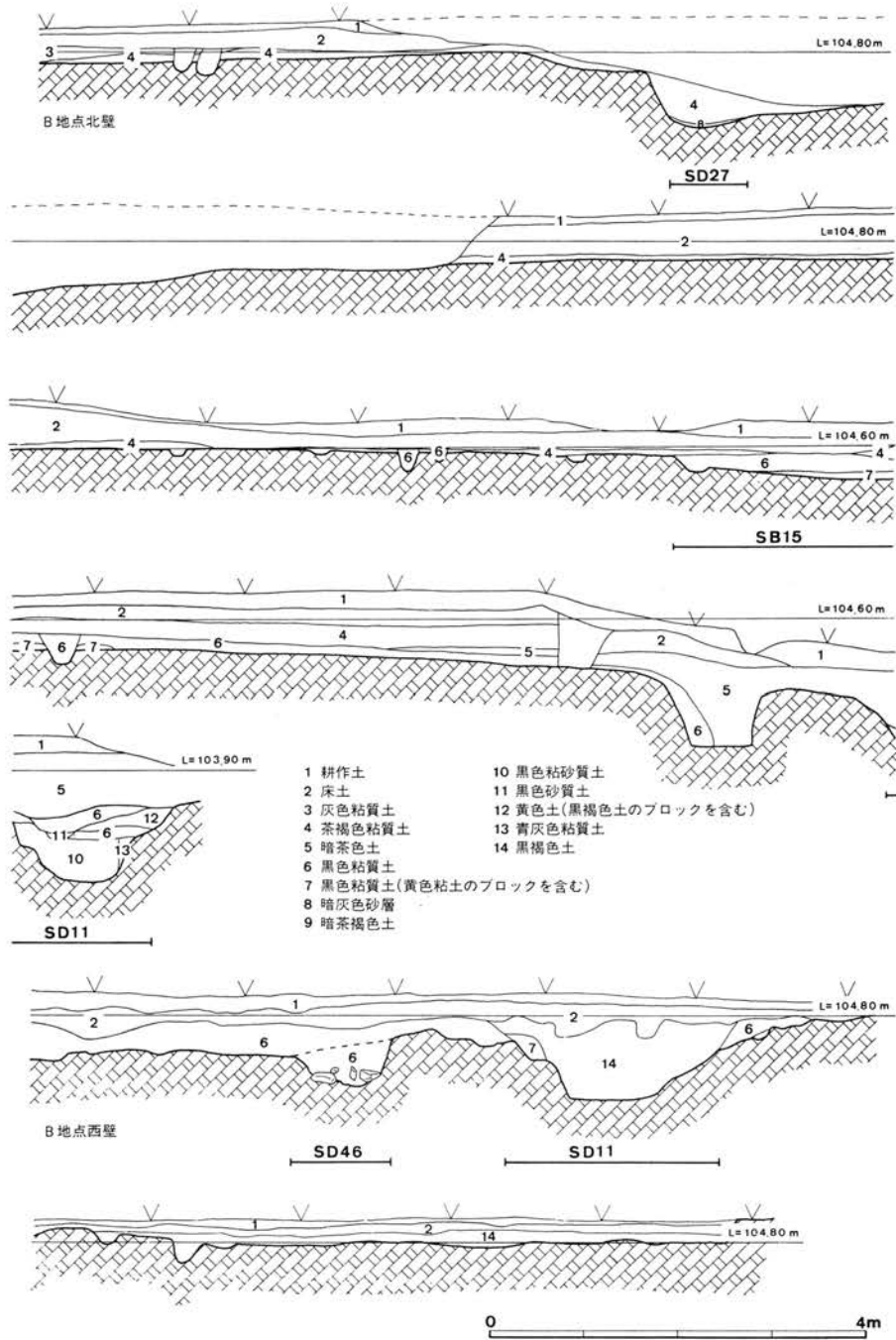
北金岐遺跡B・C地点の基本層位は、耕作土(10~20cm)・暗茶褐色土(床土・厚さ10~30cm)・灰色粘質土・茶褐色粘質土(厚さ10~20cm)・黒色粘質土(厚さ20~30cm)・黄褐色粘(砂)質土(地山面)となる。遺物は灰色粘質土・茶褐色粘質土層より土師器・瓦器・陶器・輸入磁器を含み、鎌倉~室町時代の包含層と考えられる。黒色粘質土層からは、弥生土器・土師器・須恵器を含み、弥生時代から平安時代に至る時期の遺物が混在していた。

各地区での表土下から遺構検出面までの深さは、調査地西端で約60cm、調査地東端で約20cmを測る。各壁面の土層観察によると、鎌倉~室町時代の包含層である灰色粘質土・茶褐色粘質土層は、調査地の東へ進むにしたがい堆積層が薄くなるか、消える部分があり、下層の黒色粘質土層も水田の段差を境に堆積層が薄くなる部分がある。これを各田畑の区画単位で見ると、調査地西端部の田畑では遺構の削平が著しいことから、本来は緩傾斜面であった旧地形を中世以降に現在の水田地形に改変したものと考えられる。なお、調査地での遺構検出面は標高102.60~105.20mを測り、北西方向から南東方向にむかってゆるく傾斜している。

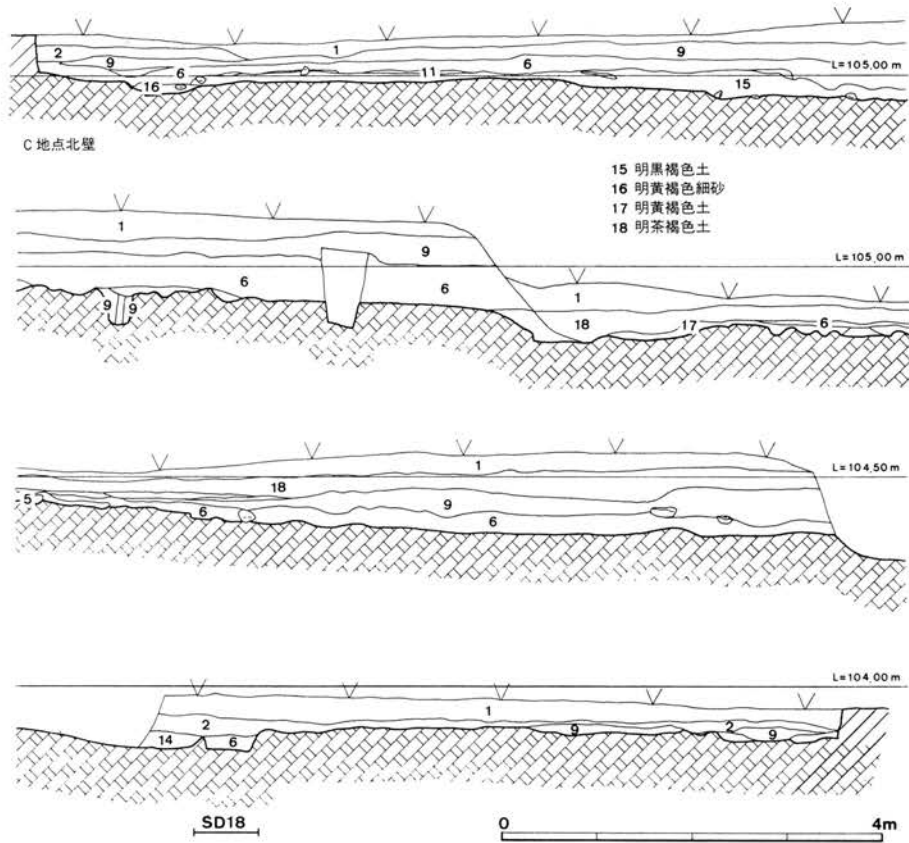
各遺構の切り合い関係をみると、弥生時代後期を中心とする竪穴式住居跡(B-SB02・B-SB03・B-SB15)・溝状遺構(B-SD01・B-SD08)は黒色粘質土層の下層より切り込まれている。奈良時代を中心とする溝状遺構(B-SD11・C-SD04・C-SD08)は黒色粘質土層の上面より切り込まれている。ただ、弥生時代後期の遺構および奈良時代の遺構の埋土は基盤層と同じ黒色粘質土を主体とするため、基盤層である黒色粘質土層の直上では遺構の輪郭を識別することは困難であった。鎌倉~室町時代の遺構は、一部灰色粘質土・茶褐色粘(砂)質土の直上より切り込まれているが、その多くが奈良時代の遺構と同様、黒色粘質土層の直上より切り込まれている。なお、古墳時代後期の遺構はその大半が調査地の北東隅にあるため黒色粘質土層の上・下層のいずれから切り込まれたかは明らかでない。



第2図 北金岐遺跡地形図



第3図 B地点北壁・西壁土層断面図



第4図 C地点北壁土層断面図

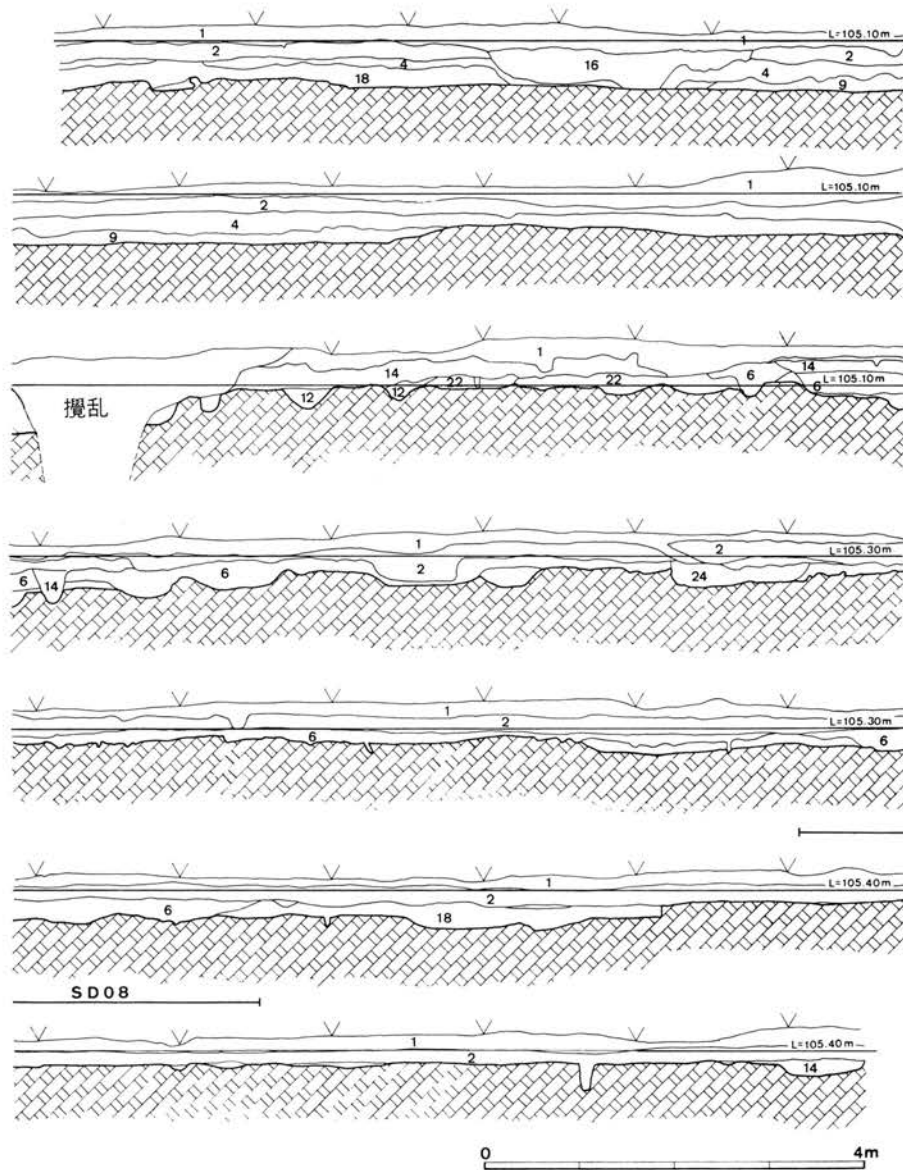
第2節 遺構の種類とその分布

北金岐B・C地点で検出された遺構は、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・井戸のほか大小の溝状遺構・土壇・ピットがある。

各遺構は、地表下約10～60cmの深さで検出され、丘陵部に近い西半では遺構検出面は深いですが、調査地東半では浅く、遺構の検出状況から調査地東半の大半が後世に削平されているものと考えられる。また各地区とも遺構検出面が浅いため、後世の畝による小溝が南北方向にはしり、各遺構とも複雑化している。

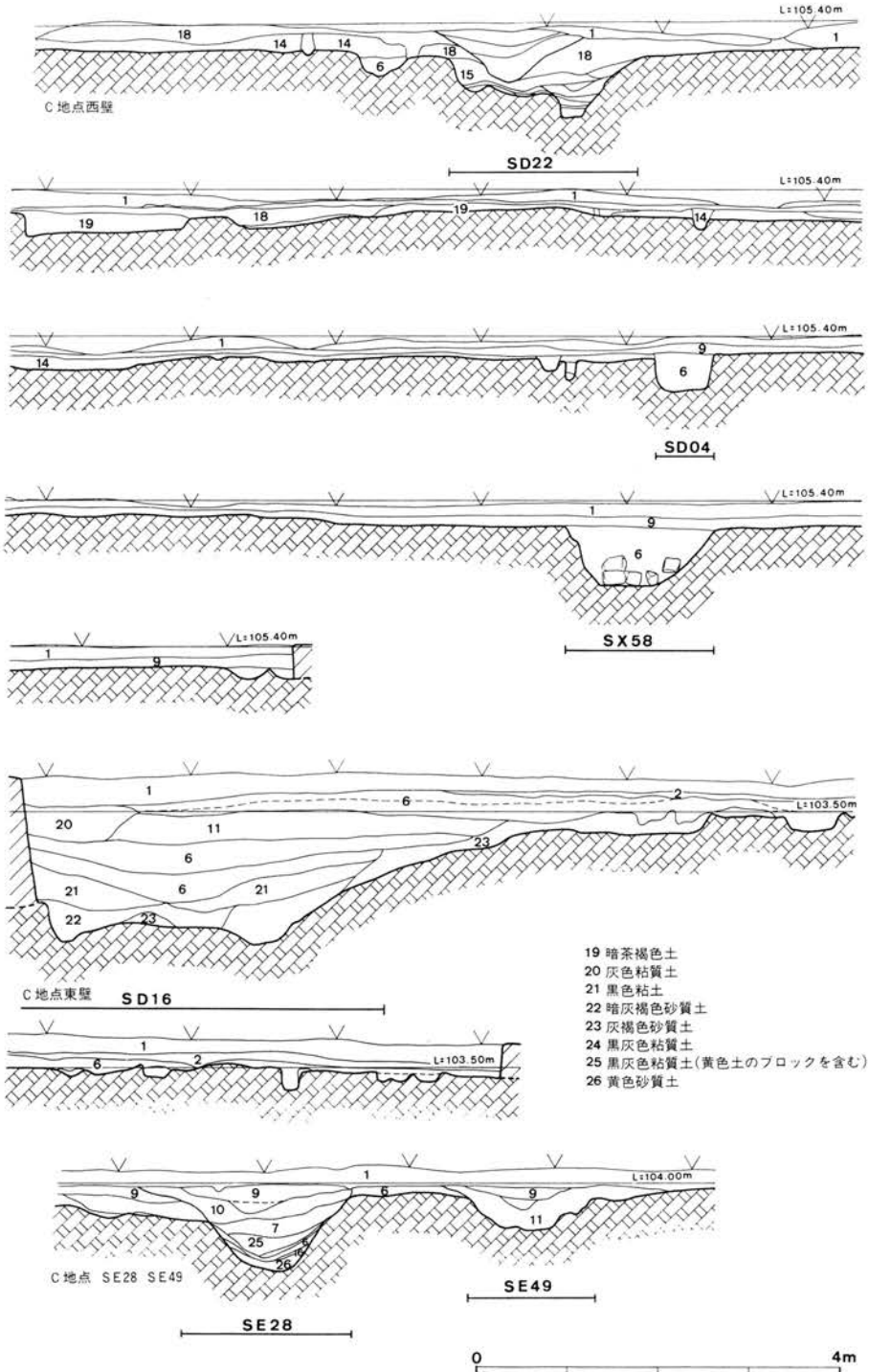
B地点では、試掘調査の結果、北半部に遺構が集中していたため、東西約65m・南北約60mのトレンチを設定した。その結果、検出した遺構は3基の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡のほか、井戸・溝状遺構・土壇・大小のピット群等を検出した。

竪穴式住居跡は、同時期の遺構である東西方向の大溝(B-SD01)を挟んで南に2基、北に1基を確認した。各竪穴式住居跡は壁面の立ち上がりが低く、遺存状態は悪い。



第5図 C地点西壁土層断面図 (1)

B地点の調査地北端(第9図), Wc~o区では遺構の密集度が高く, 東西および南北方向の溝状遺構のほか, 大小のピット群からなる。各ピットは直径約20cmを測るものが大半であり, ピット内には土師器・瓦器などの細片を含んでいるものがある。各ピットについて掘立柱建物跡を予想し, 図面の検討に務めたが, 柱間あるいは方位について整合するものが少なく, 現在確認している掘立柱建物跡はB-SB31・B-SB32・B-SB36・B-SB38の4棟にすぎない。



第6図 C地点西壁・東壁・SE28・SE49土層断面図

B地点のB-SD01を挟んだ南半部(第8図)では、B-SD01に隣接して溝状遺構・土壇・大小のピット群があり、相対的に東へいくにしたがい、遺構検出面が地表面より浅く、削平が著しい。

B地点の南西部(第8図)、Xq～x、19～20区のB地点内では遺構面が地表より深く、遺構の検出状況は良好であった。同地区では、2棟の掘立柱建物跡(B-SB33・B-SB48)と掘立柱建物跡に平行する南北方向の柵列(B-SA34・B-SA35)のほか、4条の南北方向の溝状遺構(B-SD05・B-SD06・B-SD07・B-SD08)および土壇(B-SK09・B-SK10)を検出した。

C地点にはB地点と幅約11mの農道を挟んで東西約35～50m・南北約105mを測るトレンチを入れて掘削した。C地点で検出した遺構は竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・井戸・溝状遺構のほか、大小のピット群からなる。

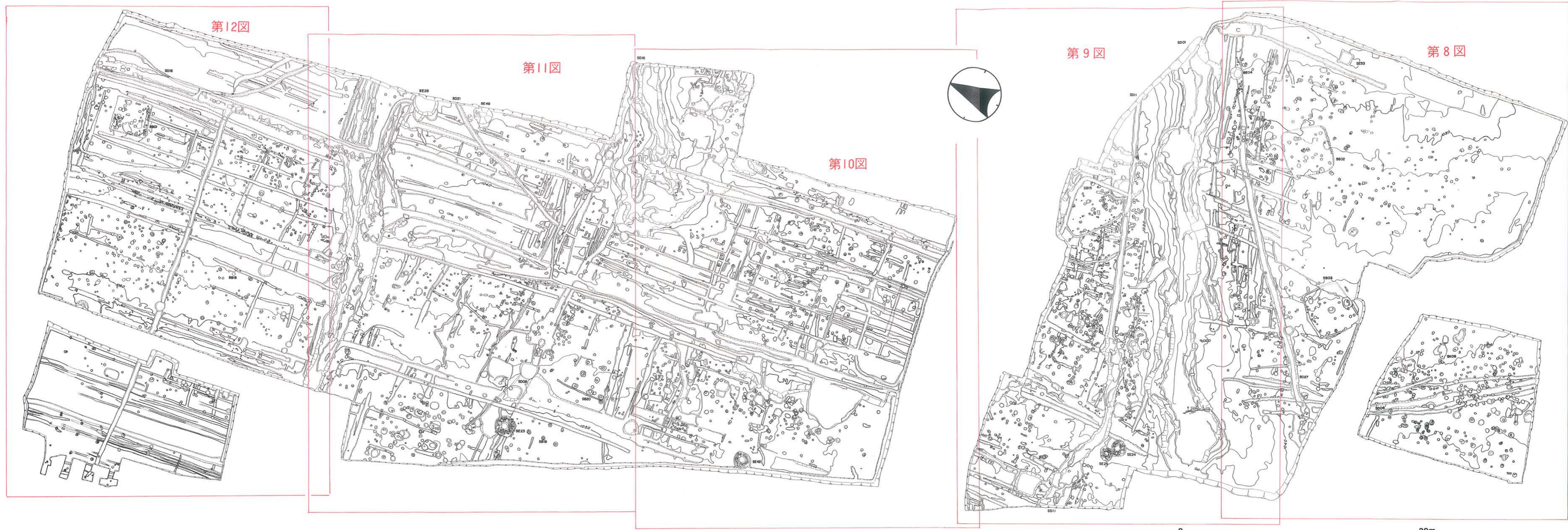
C地点の北半(第12図)、Vq～Uc区では東西方向にトレンチを縦断する溝状遺構(C-SD04)を境に、9棟の掘立柱建物(C-SB02・C-SB07・C-SB13・C-SB14・C-SB17・C-SB60・C-SB62・C-SB63・C-SB64)と鍵状に屈折する柵列(C-SA05・C-SA06)がある。掘立柱建物跡は、掘形内出土遺物や建物跡の主軸方位より奈良時代と鎌倉～室町時代のものに大別できる。Vq～Ua・34～37区では、後世に削平を受け遺構の遺存状態が悪い古墳時代後期の竪穴式住居跡(C-SB01)とS字状に曲折する溝状遺構(C-SD18)を検出した。

C地点の中央部(第11図)Ve～P区では東西方向に調査地を縦断する溝状遺構(C-SD08・C-SD22)のほか、石組みの井戸(C-SE23)・素掘り井戸(C-SE28・C-SE49)がある。掘立柱建物跡は、調査地西端Vk～P、21～23区に集中し、3棟の掘立柱建物跡(C-SB56・C-SB57・C-SB59)を重複した形で検出した。また、C-SD08の南に隣接して総柱の倉庫跡と思われる建物跡(C-SB19・C-SB20)がある。

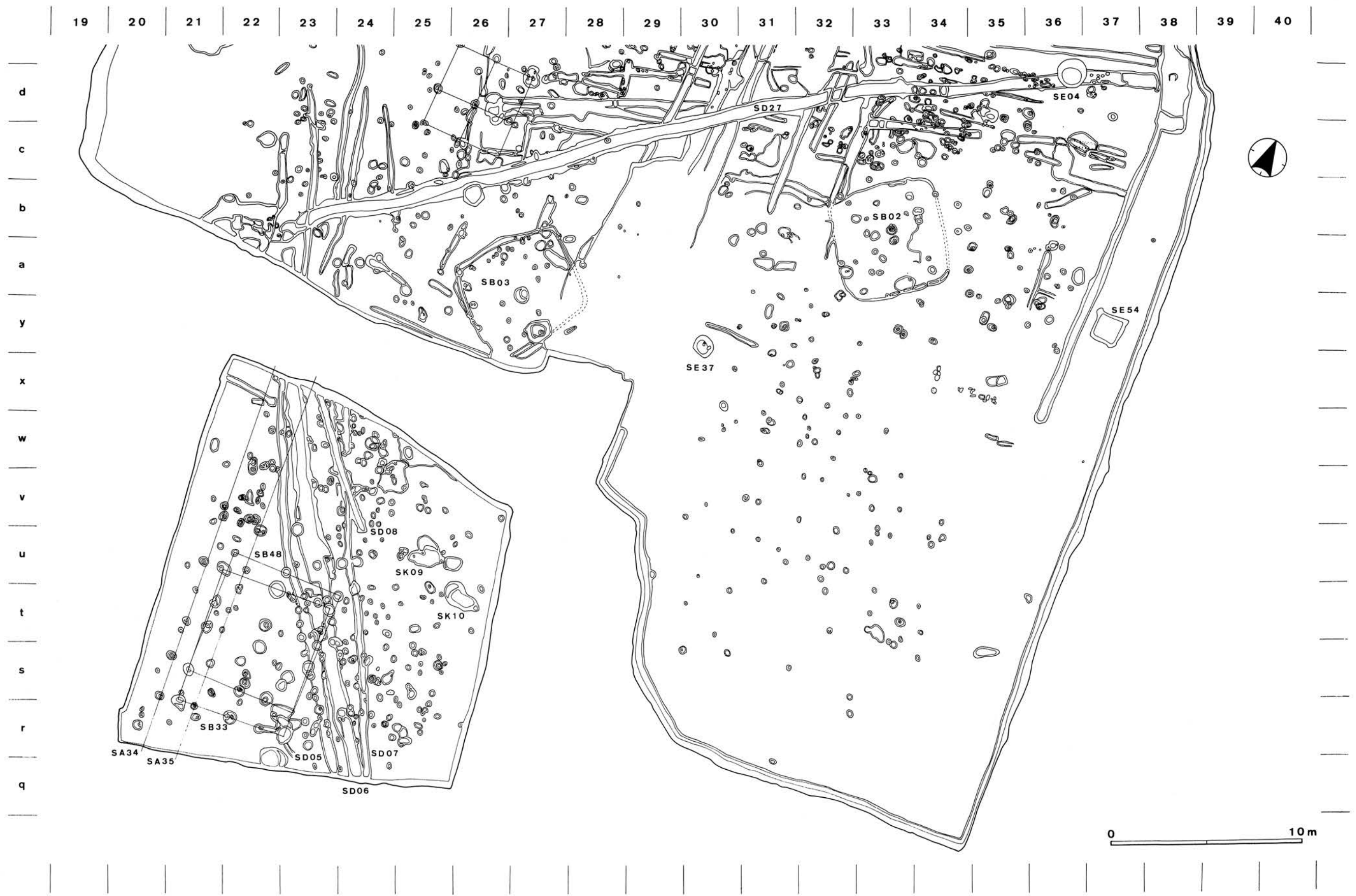
C地点の南半部(第10図)WP～Vc・20～37区では、調査地南東部に偏して4棟の掘立柱建物跡(C-SB32・C-SB51・C-SB52・C-SB53)を検出した。また、4棟の掘立柱建物跡に隣接して素掘り井戸(C-SE34)がある。C地点の南西部Wr～Vc、20～25区では遺構検出面の標高が高いにもかかわらず、不整土壇あるいは小ピットのほか、まとまった遺構は検出されなかった。

以上のように、北金岐遺跡B・C地点は各地区単位で遺構の疎密度が認められ、また、時期も弥生時代後期から室町時代に至る錯綜した遺跡である。

(石井 清司)



第7图 北金边遗址B·C地点平面图 (1/300)



第8图 B地点 平面图 (I)

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40



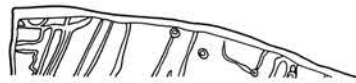
第9图 B地点 平面图 (2)

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

c
b
a
y
x
w
v
u
t
s
r
q
p



0 10 m



第10图 C地点 平面图 (1)



第11图 C地点 平面图 (2)

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

c
b
a
y
x
w
v
u
t
s
r
q



第12图 C地点 平面图 (3)

第3章 遺構・遺物

北金岐B・C地点で検出した遺構は、弥生時代後期から室町時代に至る竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・土壇・井戸などがある。本報告書では説明の便宜上、第Ⅰ期から第Ⅳ期までの四期に大別し、遺構と遺物の説明を行う。なお、第Ⅰ期は弥生時代後期～古墳時代前期(布留併行期)、第Ⅱ期は古墳時代後期、第Ⅲ期は奈良時代中期～平安時代中期、第Ⅳ期は平安時代後期～室町時代に相当する。

第1節 第Ⅰ期の遺構

第Ⅰ期の遺構には、3基の竪穴式住居跡(B-SB02・B-SB03・B-SB15)、溝状遺構(B-SD01・B-SD08・B-SD12・B-SD26・B-SD46・C-SD16)、土壇(B-SK09・B-SK10)のほか、高床倉庫とも考えられる2間×2間の総柱建物跡(B-SB30)などがある。

B-SB02(第13図)SB02は、Wa～c・32～34区で検出した弥生時代後期後半の竪穴式住居跡である。

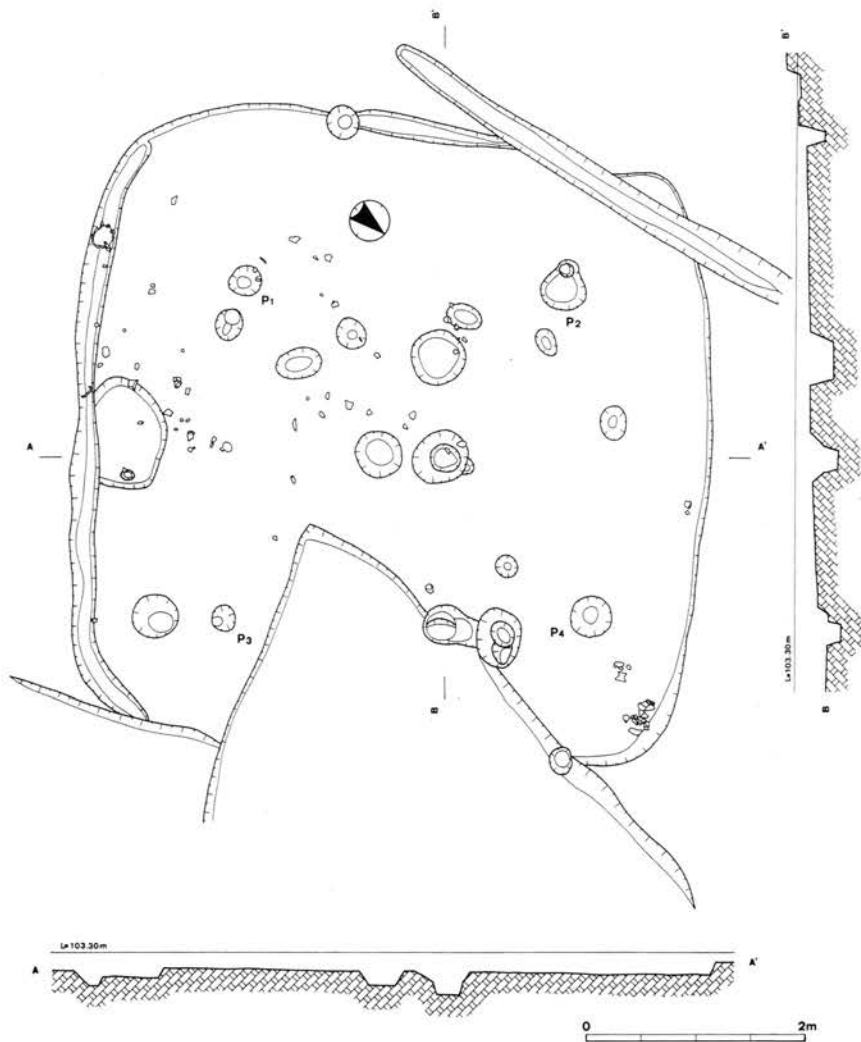
SB02は、隅丸方形の平面プランを呈し、北西隅及び東壁の大半は、中世以降の溝状遺構により削平を受けている。規模は、遺存状態のよい南辺では一辺約5.8mを測る。

SB02は上面の遺存状態が悪く、壁面の立ち上がりは床面より約5～10cmを測る。周壁溝は各辺を四周せず、南及び西辺の一部に認められたが、北辺には認められなかった。南及び西辺の周壁溝は幅約20cm・深さ約10cmを測る。床面には直径約20～40cm・深さ約10～15cmのピットも認められるが、一部は中世のものと考えられる。ピットのうちP₁・P₂・P₃・P₄は対角線上にあり、SB02の主柱と考えられる。南辺中央の壁面に接して長軸約1.1m・短軸約0.8m・深さ約20cmの土壇があり、貯蔵穴と考えられる。床面には土器の小片が散在しているほか遺存状態は悪いが、南側溝の東側で甕が、北東隅で鉢が比較的まとまって出土した。SB02では炉跡あるいは焼土は認められなかった。

B-SB03(第14図) SB03は、SD01の南約12mで検出した弥生時代後期後半の竪穴式住居跡である。

SB03は、隅丸方形の平面プランを呈し、東及び南辺は近世以降の溝状遺構により削平を受けている。SB03の規模は、遺存状態の良好な北辺で、一辺約5.8mを測り、壁面の立ち上がりは床面より約10～20cmを測る。

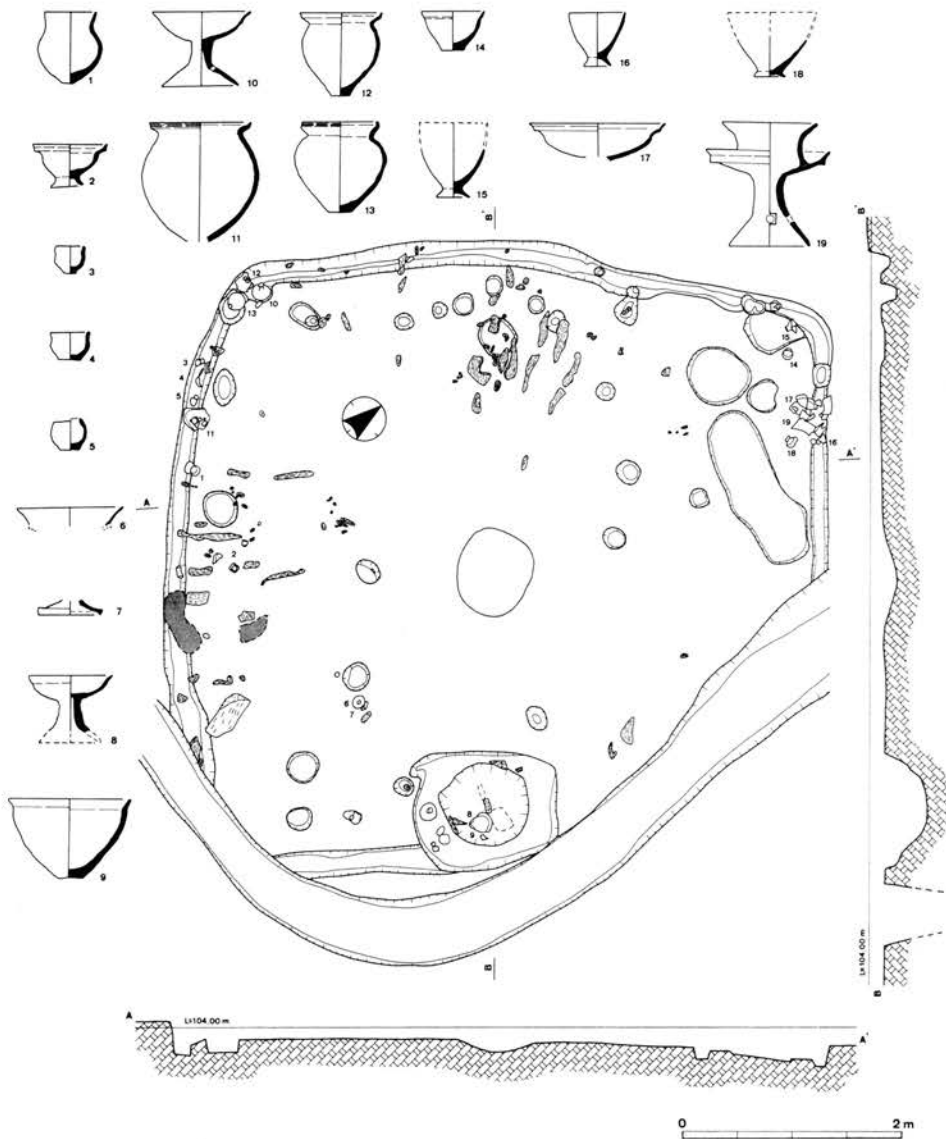
SB03の床面には、炭化木が多量に出土し、精査したところ、壁面から住居跡中央に向かって柱及び小木が火を受け、倒壊した状態で検出した。炭化木を除去し、床面精査を行



第13図 B地点 S B 02 平面図

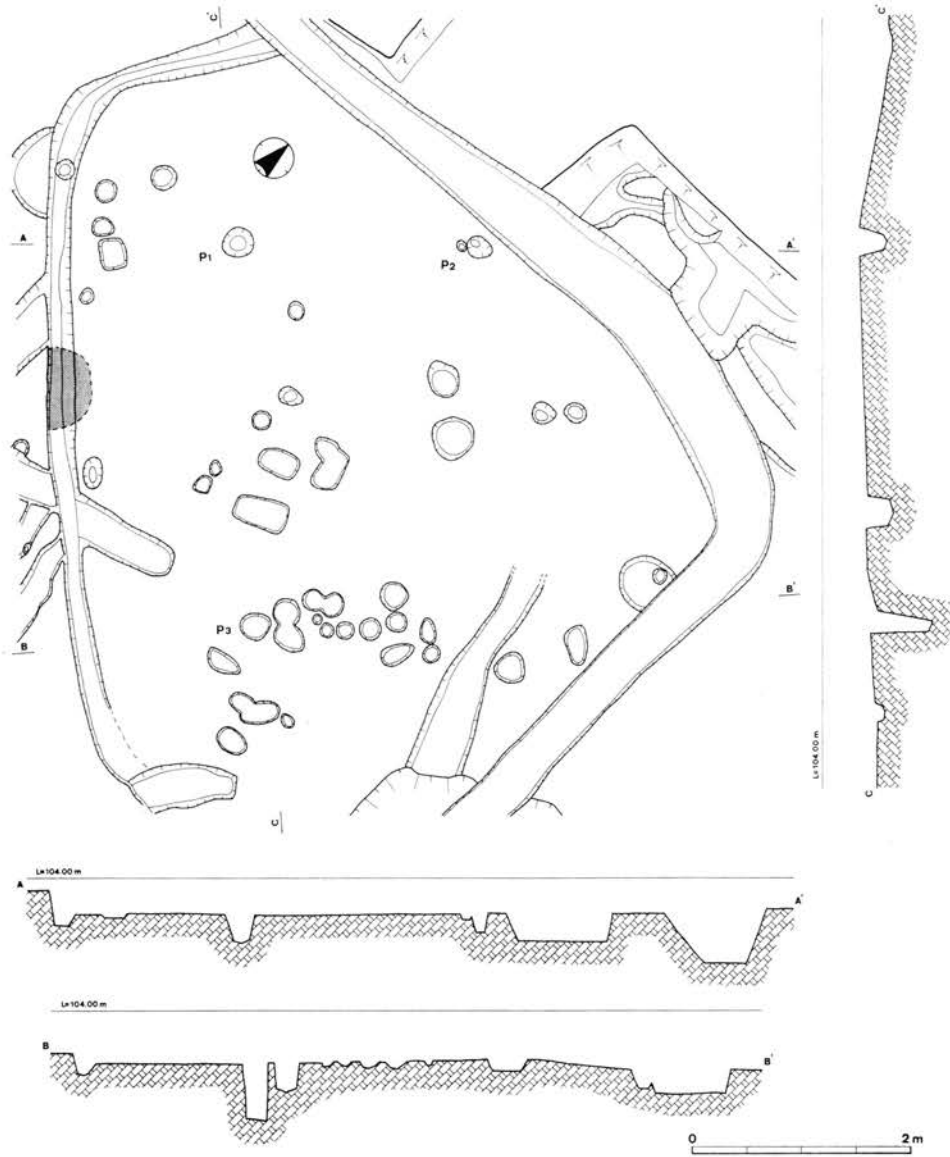
ったところ、周壁溝・炉跡・貯蔵穴のほか、25か所の小ピットを検出した。

周壁溝は四周し、上面幅約15cm、床面からの深さ約5~10cm、断面「U」字形を呈する。また、北辺周壁溝内で直径約5~10cmを測る小ピットを数か所検出し、同ピット内には炭化した立杭が遺存していた。床面には直径約10~30cm・深さ約15~25cmを測るピットが約25か所あり、各辺に沿うように配されている。直径約30cmを測るピットは支柱穴と考えられる。床面中央には長軸約80cm・短軸約65cm・深さ約10cmを測る円形土壇があり、埋



第14図 B地点 S B03 平面図

土には炭を多く含む。南辺中央の壁面に接して長軸約1.3m・短軸約1.1m・深さ約1.0mを測る隅丸方形の土坑があり、土坑の形状からみて貯蔵穴と考えられる。同土坑の埋土内には一部焼土を含む。焼土は貯蔵穴内のほか、西壁中央の周壁溝の上面でも帯状に検出された。



第15図 B地点 SB15 平面図

SB03床面直上では、前述の炭化木のほか、各辺に隣接して完形を含む土器が35個体以上出土した。土器は北東隅と北西隅に集中し、北東隅では鉢(14)・台付鉢(15・16・18)・高杯(17)・裝飾器台(19)があり、裝飾器台(19)に台付鉢(16)が乗ったかのような状態で出

土した。北西隅では壺(13)・甕(12)・高杯(10)・手づくね土器(3~5)が出土し、高杯・手づくね土器はいずれも周壁溝内より出土した。高杯(8)・鉢(9)は貯蔵穴内から出土した。

B-SB 15(第15図) SB15は、Wi~k・30~32区、SD01の北で検出した弥生時代後期後半の竪穴式住居跡である。SB15は隅丸方形の平面プランを呈し、北及び東辺は近世以降に削平を受け、遺存状態が悪く、西辺の一面が遺存するのみである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面から約12cmを測る。周壁溝は幅約15~20cm、床面からの深さ約15~20cmを測り、断面「U」字形を呈する。

床面には奈良時代以降のピットが重なり、SB15に帰属するピットとしてはP₁・P₂・P₃があり、ほぼ対角線上に位置する。ピットの各柱間はP₁-P₂が2.2m、P₁-P₃が3.5mを測る。焼土は西壁の中央、周壁溝の上層に直径約70cmの範囲で半円形に広がる。遺物は、床面の大半が削平を受けていたため床面では確認できず、北周壁溝内に壺(31)・鉢(33)・器台(32)が、P₃から甕(30)がそれぞれ出土した。

B-SB 30 SB30は、We~e・25~27区で検出した2間×2間の総柱の建物である。柱間は1.5~2.5mとふぞろいである。柱穴内には出土遺物がなく、時期決定の資料を欠くが、大溝(SD01)と竪穴式住居跡の中間にあり、またSD01の支流の先端に位置し、SD01内より高床式倉庫の付属施設である梯子型木製品が出土していることより、SB30は高床式倉庫と考えられる。

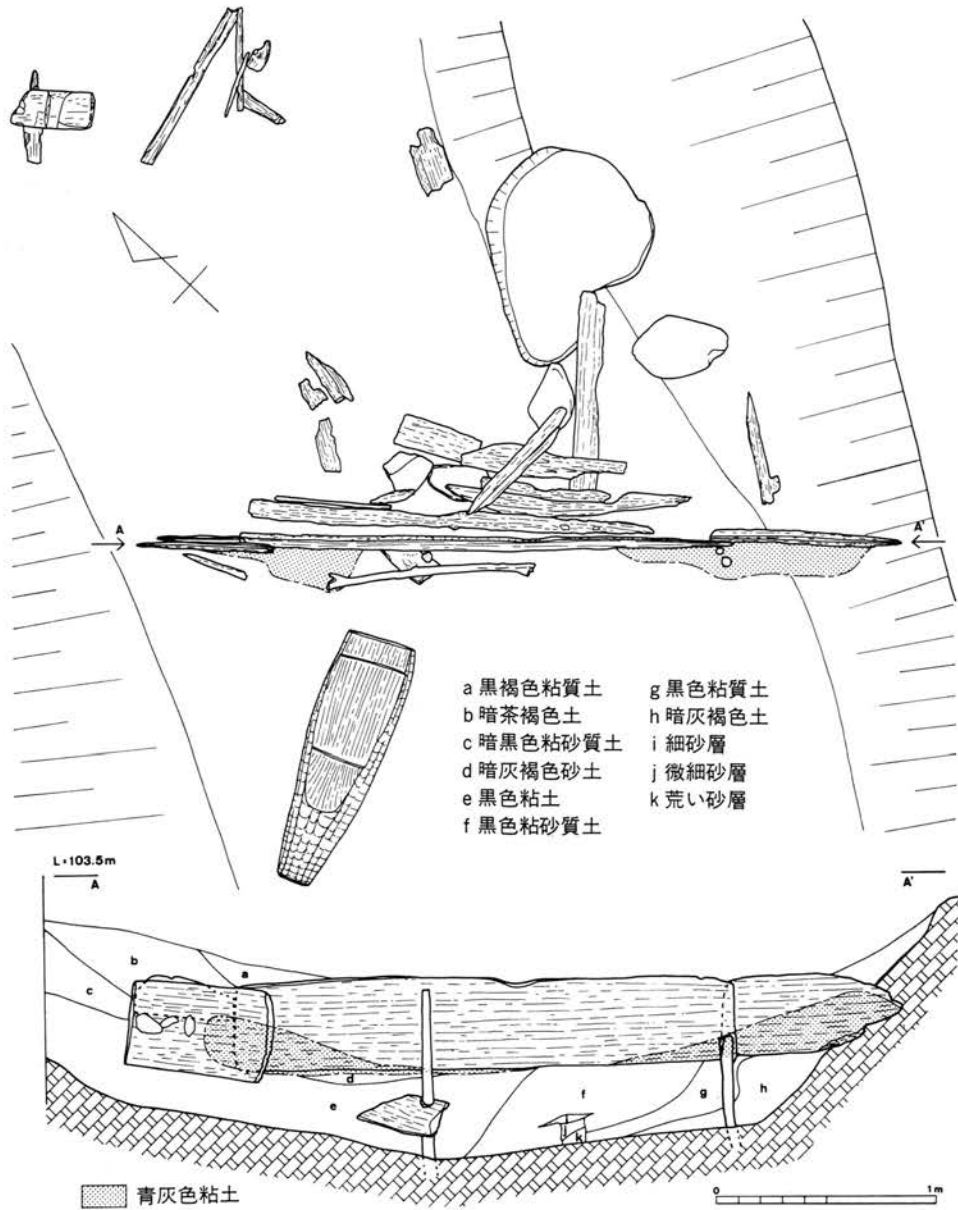
B-SD 01 SD01は、B地点の中央、We~h・20~38区で検出した^(注10)検出長約55m・上面幅約6~9m・深さ約1.5~2.0mを測る大溝である。

SD01は、北金岐遺跡が立地する丘陵部先端から平野部へ向かって東西方向にのび、調査地東端ではわずかに北側に曲折する。

SD01の上面肩部は、SD01が砂質土を含む地山面を掘削して構築されたため、肩部の崩壊が各所で認められ、上面の輪郭は整然としなかった。各地区ごとの上面幅を比較すると、25~27区では上面幅約4~5mと比較的狭く、後述するように堰が構築された20~23ライン付近では上面幅約6.5~9.0m、溝が北側に曲折する35・36ラインでは上面幅約8mを測り、比較的幅広となる。また溝が幅広くなる堰及び曲折部付近に土器の集中が認められる。

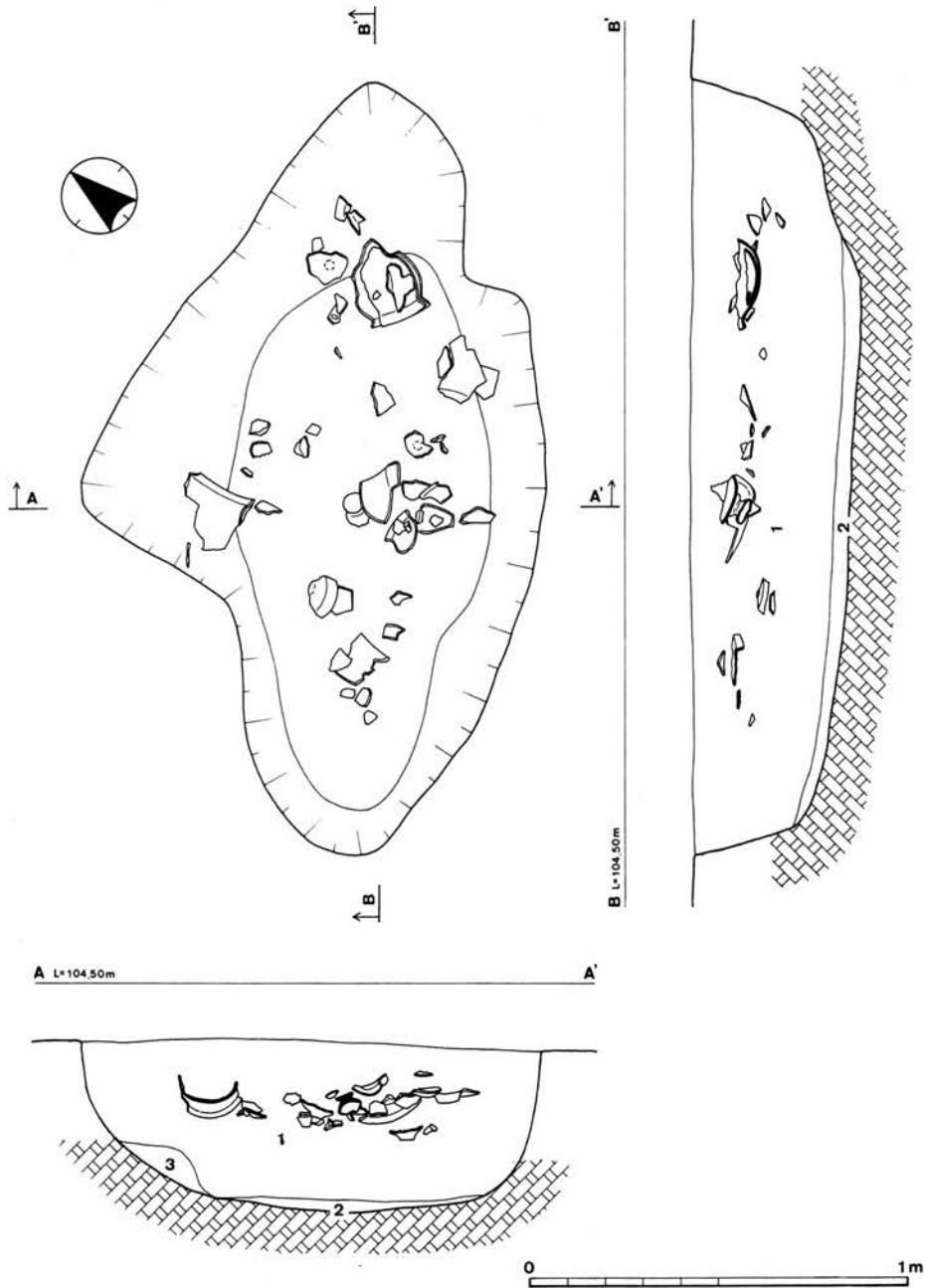
SD01の埋土は、各地点により4~5層に分かれる埋土変化が認められるが、基本的には上層から暗茶褐色粘質土・黒褐色粘質土・暗茶褐色土・暗黒色粘砂質土・灰色砂に大別でき、遺物の多くが黒褐色粘質土層から出土した。

SD01では、調査地の西壁より東約11m、22ライン付近で、SD01の底面より約20~30cmの堆積土(黒色粘土・黒色粘砂質土・黒色粘質土・暗灰褐色土)の上面にSD01を直交する形で幅約3.9mの溝の南肩部に至る掘形を穿ち、堰を構築する(第16図)。



第16図 B地点 S D01 塚及び木製品出土状態

塚は、全長約3.5m・幅約40cmを測り、3枚の板材により塚板を構成されている。3枚の
 板材は北板の裏面に中央板を、中央板の裏面には南板を重ねたもので、北板は長さ約65cm
 ・幅約35cm・厚さ約3cm、中央板は長さ約220cm・幅約39cm・厚さ約3cm、南板は長さ
 約70cm・幅約35cm・厚さ約3cmを測る。なお、中央板の上面中央に長さ約20cm・深さ約



第17図 B地点 SK09 平面図

5cmの切り込みを入れて水流調整を行う。

3枚の板材を固定する施設として、堰板の前面には丸杭を、裏面には板材及び丸木材とともに栗石を据える。前面の丸杭は3本検出され、南側で検出した2本は中央の堰板と南

堰板の接合部に打ち込まれる。他の1本は中央堰板の中央よりやや北側に偏して打ち込まれていた。各立杭は60～90cmの長さで検出され、杭下半は地山面に達する。堰板の裏面には直径約7～8cm・長さ約185cmの丸木のほか、大小6枚の板材及び人頭大の栗石を4個据える。また、堰板の固定には前述の杭・板材・栗石のほか、厚さ10cm以上に達する青灰色粘土を各堰板の接合部を中心に表裏面に貼りつけ、堰板の補強を行っていた。

SD01内の堰周辺で船型・梯子型・鋤型木製品が出土した。土器は前述のように黒色粘土層から主に出土したが、その上層、暗茶褐色粘質土層及びその下層、暗茶褐色土・暗黒色粗砂質土中からも出土した。土器の詳細については後述するが、黒色粘質土層には弥生後期後半の土器を主体とするが、堰に隣接した22e区では黒色粘質土の下層の黒色粘砂質土内より、完形品を含む布留式甕が数個体出土した。これは土器形式の逆転であるが、溝という遺構の性格とともに、堰が溝の改修ののち、構築されたことを考えると、堰の構築後、布留式甕を排棄したのではあるまいか。堰上層の黒色粘土層出土の土器は、溝が一旦埋没したのち溝周辺を含めた一括土器を排棄したものと思われる。

B-S D08 SD08は、Xu～x・23・24区で検出した。検出長約7.5m・上面幅約50cm・深さ約20cmを測る小溝である。

B-SD12 SD12は、Wi～k・29区で検出したもので、SB15を弧状に囲むかのようにめぐる溝状遺構である。SD12は検出長約8.5m・上面幅約25～40cm・深さ約20cmを測り、南へ行くにしたがい、地山面が低く傾斜するため、hライン近くで浅く立ち消える。SD12内より甕(27・28)・高杯(29)が出土した。

B-SD26・SD46 SD26は、Wh・22・23区で検出した大溝(SD01)に注ぎ込む小溝である。SD26は、検出長約5m・上面幅約40～60cm・深さ約20～25cmを測り、断面「U」字形を呈する。SD26は西へ行くにしたがい、浅くなりとぎれる。SD46は検出長約2.6m・上面幅約30cm・深さ約10cmを測り、方位・出土遺物からSD26と同一遺構と考えられる。SD26は23h区に集中して、完形に復元しえる壺(48)・器台(45・46)・鉢(44)が出土した。SD46からは甕の体部片が出土した。

B-SK 09・SK 10(第17図) SK09は、Xu・25区で検出した楕円形土塚である。SK09は長径約1.6m・短径約1.2m・深さ約15～20cmを測り、底部は船底状を呈する。遺物は、土塚肩部より約10cm上層で甕4個体が出土した。これは土塚上面に黒色粘質土層が堆積し、土塚埋土も同層であるため、上面での土塚輪郭の識別が不可能で、識別可能な茶褐色土(地山)まで掘り下げた結果であり、本来は10cm以上上面に土塚の肩部があったと考えられる。

SK10は、Xt・25・26区で検出した不整形土塚である。SK10は東西約1.8m・南北約1.0m・

深さ約30cmを測り、埋土内から弥生時代後期の土器細片が出土した。

C-SD 16 SD16は、C地点WY~Ve・29~37区で検出した検出長約22m・上面幅約7~11m・深さ約2mを測る溝状遺構である。SD16は自然傾斜を大きく挟り込むように形成され、底部には凹凸が顕著である。SD16の埋土は黒色粘質土を主体とし、一部には水流の痕跡と思われる砂と粘土の互層が認められる。SD16出土遺物には弥生土器のほか、土師器・須恵器が混在するが、基本的には上~中層から古墳時代中期~平安時代の、下層から弥生時代後期~古墳時代前期の遺物がそれぞれ出土した。(石井 清司)

第2節 第I期の遺物

第I期の遺物にはSB03・SB02・SB15・SD01・SD12・SD26・SK09出土のものがあり、80%以上がSD01内から出土した。

第I期の遺物には壺・甕・高杯・鉢・器台・蓋があり多種にわたる。ここでは、まず第I期遺物の分類基準を設定し、そのうち、各遺構出土土器の説明を行う。

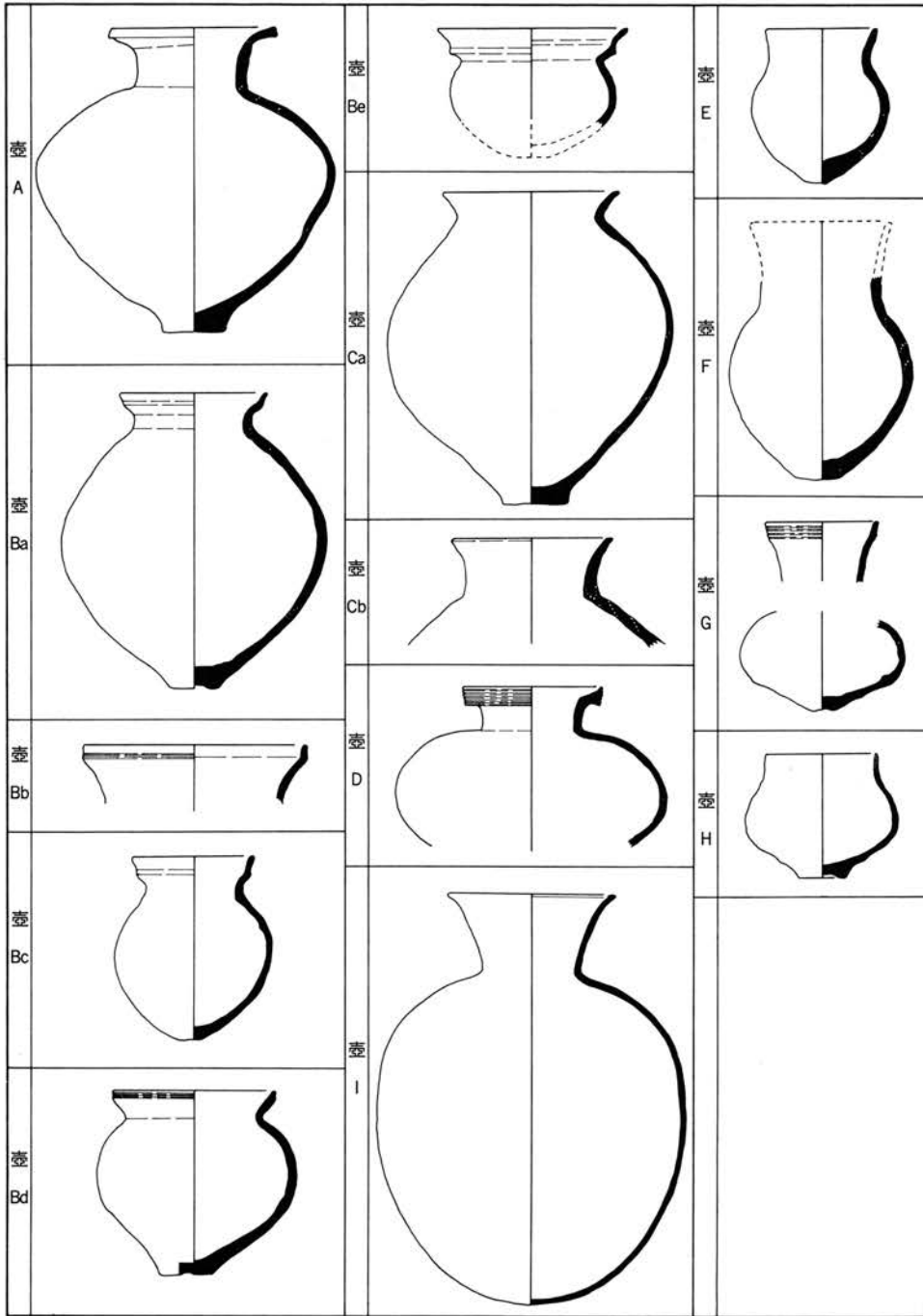
第I期遺物の分類基準(第18・19・20図)

第I期の遺物はコンテナ・バット180箱以上の莫大な量にのぼり、その大半がSD01から出土した。分類基準はSD01出土遺物の整理作業を通じ、基準器形を設定・分類し、その分類を基礎に個体数の数量化を行うという方法を用いた。

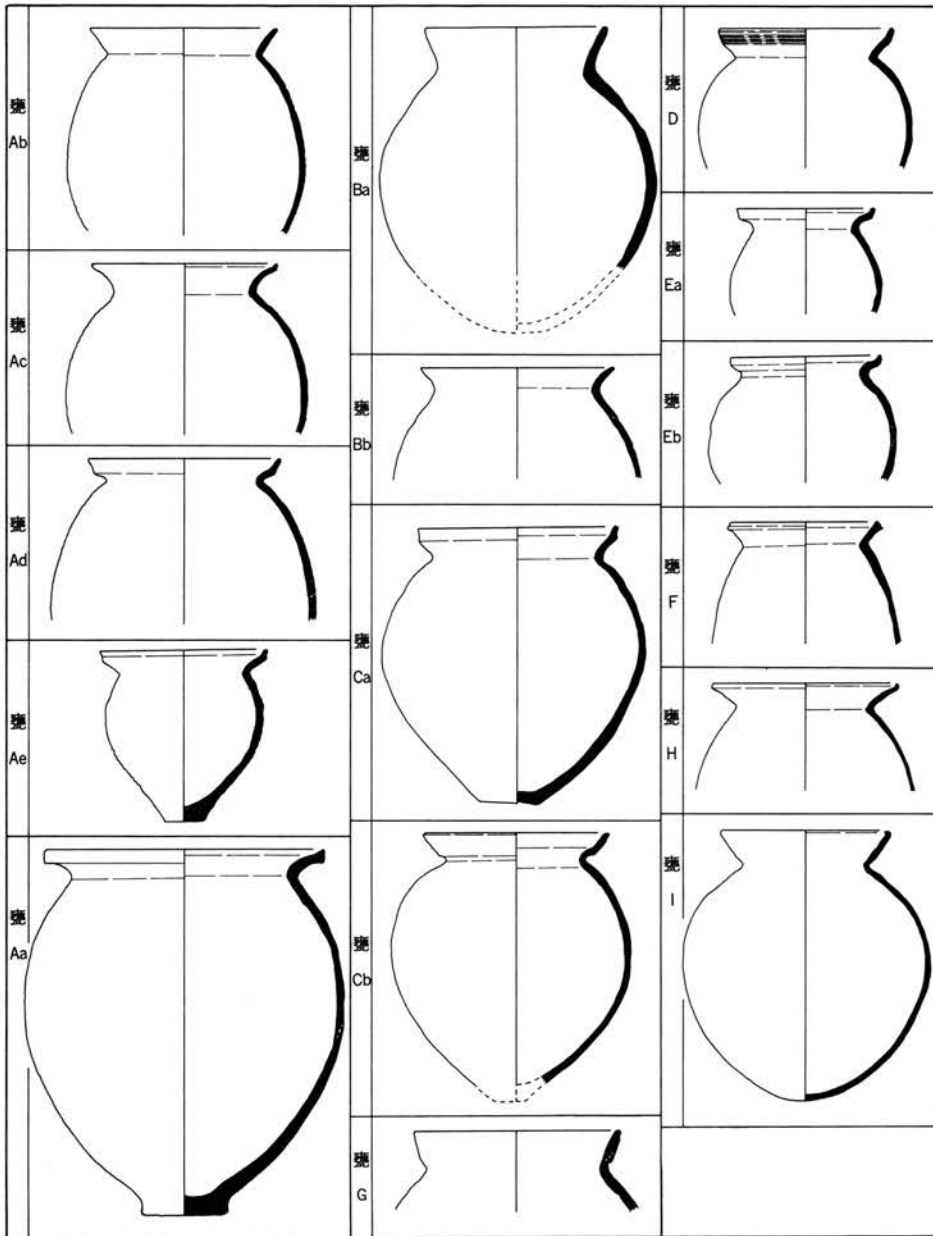
壺はA・B・C・D・E・F・G・H・I・Jに大別できる。

壺Aは、体部最大径が中位よりやや上方にある扁球形の体部から筒状の頸部へ続き、口縁部が強く水平ぎみに外反する。口縁端部が上・下方へわずかに肥厚するものがある。

壺Bは、体部最大径が中位あるいはやや上方にある球形の体部から頸部が「く」の字形にゆるく屈曲し、口縁部が直立あるいはゆるく内・外反する「複合口縁形」を呈するものである。壺Baは、完形に復元しえるもので口径12.2cm・器高24.9cmを測り、壺Bc・壺Bdに比し、大型化が認められる。壺Bbは完形に復元しえるものがなく、いずれも口縁部のみ残存する。壺Bbは図化しえるもので口径19~21cmを測り、壺Ba・Bc・Bdに比し大型化が認められる。壺Bbには口縁部外面に1~3条の擬凹線文を施すものがあり、形態的には甕Daに近似するが、外面にススが付着せず、胎土が全体に精良であること、口縁部内・外面に横方向のヘラミガキ調整を施すことにより、壺と考えられる。壺Bcは、倒卵形の体部から筒状の頸部へ続き、口縁部は「く」の字形に屈曲したのち、直立ぎみに立ち上がるもので、完形に復元しえるものでは口径10.2cm・器高15.7cmを測る小型壺である。壺Bdは、「複合口縁形」を呈するが、口縁部の立ち上がりが壺Bcに比し短く、外面には2~3条の擬凹線文を施すものである。壺Bdは、完形に復元しえるもので、口径13.4cm・

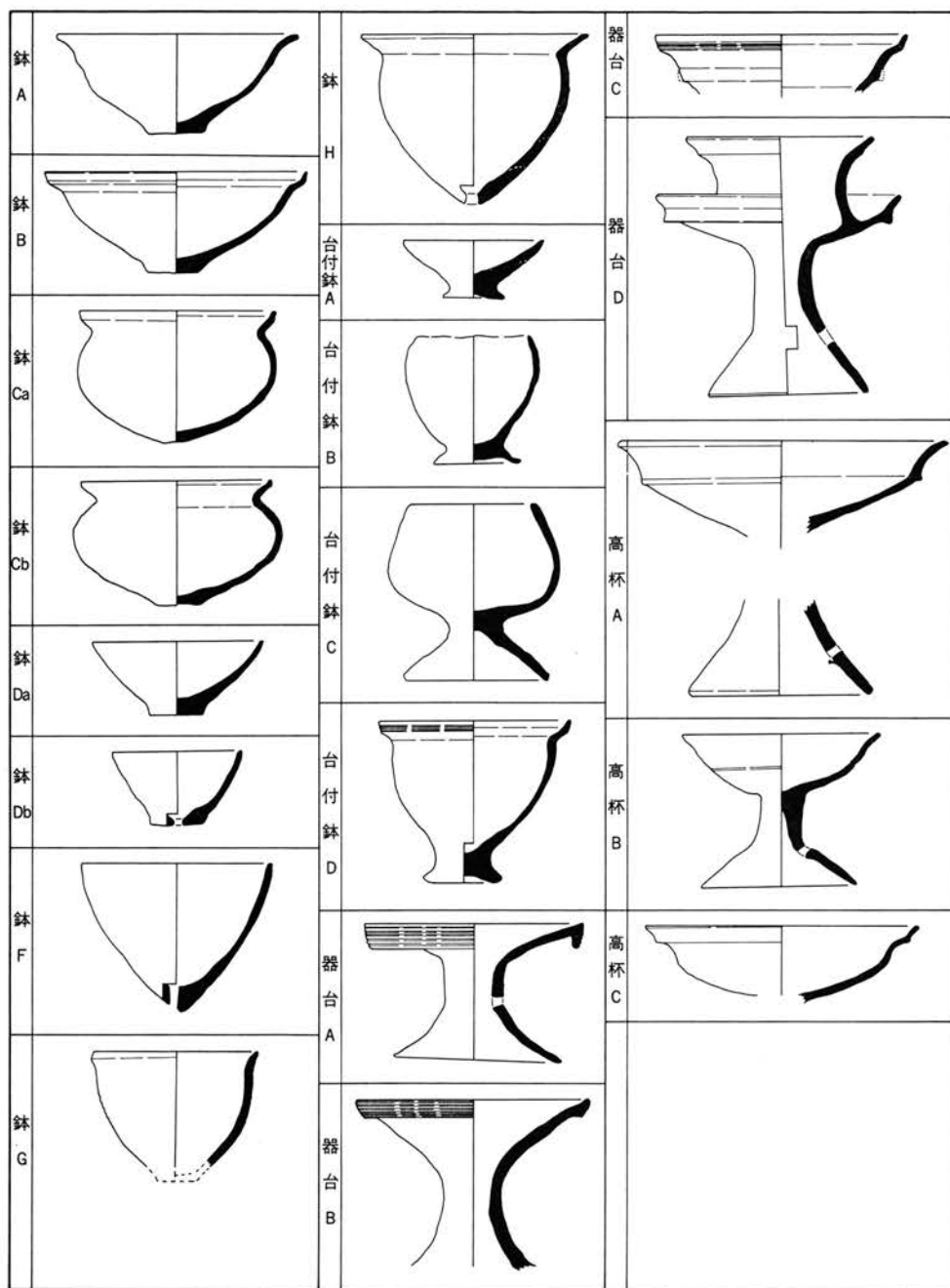


第18図 第I期遺物の分類基準 (1)



第19図 第I期遺物の分類基準 (2)

器高16.6cmを測る小型品である。壺 Be は、扁球形の体部から、口縁部が複合口縁形を呈し、口縁部の立ち上がりが高く、外反度も強い。



第20図 第1期遺物の分類基準 (3)

壺Cは口縁部を単純「く」の字形に外反するもので、口縁部が短く外反する壺Caと頸部の立ち上あがりが高い壺Cbがある。壺Caは、体部最大径が中位よりやや上方にあり、口縁部

は短く、単純「く」の字形に屈曲する。壺Cbは完全に復元しえるものがなく全体の様相は明らかでないが、ナデ肩の体部から口縁部が長く立ち上がる。

壺Dは、扁球形の体部から直立ぎみに立ち上がる頸部へ続き、口縁部は斜め上方へ立ち上がる「複合口縁形」を呈し、口縁部外面には4～5条の擬凹線文を施すもので、丹後・丹波北部地方で特徴的な器形である。

壺Eは、倒卵形の体部から口縁部が直立あるいはやや斜め方向に立ち上がるもので、完形に復元しえるものでは口径9.4cm・器高13.2cmを測る小型品である。

壺Fは、倒卵形の体部から頸部が直立ぎみに長く立ち上がる長頸壺であるが、第V様式前～中頃にみられる長頸壺と比較すると退化形態が認められる。

壺Gは、扁球形の体部から頸部が細く直立ぎみに立ち上がる細頸壺である。

壺Hは、扁球形の体部から直立ぎみに立ちあがる口縁部へ続くもので、口径9.4cm・器高10.6cmを測る小型品である。

壺Iは、丸底で球形を呈する体部から口縁部が斜め上方に外反ぎみに立ち上がるもので、口縁端を内側に折り返し、面をなす布留式の壺である。

壺Jは、筒状の頸部から「く」の字形に屈曲する口縁部へ続き、さらに粘土帯をつぎたし外反させる二重口縁の壺である。

甕は、口縁部の形態とともに調整技法の差異によりA・B・C・D・E・F・G・H・I・Jに大別できる。

甕Aは、体部外面にタタキ目が認められるもので、口縁部の差異によりAa・Ab・Ac・Ad・Aeと細分できる。甕Aaは単純「く」の字形に屈曲する口縁部を呈し、口縁端部を上・下方にわずかに肥厚させ、面をなす。体部は体部最大径が中位にあり、倒卵形を呈する。体部外面は横あるいは右上がりのていねいなタタキを施したのち、下半を中心に不徹底な縦方向のハケ調整を加える。底部は安定した平底である。甕Aaは、完形に復元しえるもので口径24.6cm・器高32.8cmを測り、Ab～Afに比し大型品である。甕Abは、長胴形の体部を呈し、口縁部は単純「く」の字形に外反し、口縁端部は丸みをもっておわるものである。体部外面下半は横方向、上半は右上がりの平行タタキを施す。甕Acは、長胴形の体部を呈し、口縁部は単純「く」の字形に外反し、口縁端部を上方へわずかにつまみ上げるもので、体部外面には横あるいは右上がりのタタキ目が認められる。甕Adは、長胴形の体部から単純「く」の字形に屈曲する頸部へ続き、口縁部は段をもって屈曲する複合口縁形を呈する。甕Adと甕Aeとは口縁部の立ち上がりにより差異が認められる。甕Aeは、なで肩の体部から単純「く」の字形に屈曲する頸部へ続き、口縁部は直立あるいは外反ぎみに短く立ち上がる複合口縁形を呈し、口縁部外面に2～4条の擬凹線文を施す。体部外面には右上がりの

タタキを施したのち、ハケにより一部タタキ目を消すものがある。甕Aeは、これまで園部町曾我谷遺跡などで、丹後・丹波北部の口縁形態に畿内中心部に特徴的なタタキ技法をとり入れる折衷形態として考えられている器形である。

甕Bは、球形あるいは長胴形の体部より、頸部は単純「く」の字形に屈曲するもので、口縁部は直線的に立ち上がる。体部外面には一部タタキ目を残すが、大半が最終ハケ調整により仕上げる。体部内面は、甕Aがハケを主体とするものに対し、甕Bは削り手法を主体とする。甕Baは、口径13~16cm・復元器高25~30cmを測る。甕Bbは、完形に復元しえる資料がなく、体部の形態は不明瞭であるが、長胴形の体部と思われる。口縁部はナデ肩の体部から単純「く」の字形に屈曲したもので、口縁部の外反度が甕Baに比し強い。

甕Cは、単純「く」の字形に屈曲する頸部より、口縁部が直立あるいは斜め上方に立ち上がる複合口縁形を呈する。体部外面の最終調整はハケにより仕上げ、内面はヘラ削りあるいはハケ調整を施す。甕Caは、複合口縁形であるが口縁部の立ち上がりが甕Cbに比し短く受口状を呈する。甕Cbは、頸部の屈曲が強く、口縁部の立ち上がりが長くなる。底部は甕Ca・甕Cbとも丸底ぎみの平底と思われる。

甕Dは、単純「く」の字形に屈曲する頸部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続く複合口縁形を呈し、口縁部外面に4~5条の擬凹線文を施すもので、丹後・丹波北地方で特徴的な器形である。体部外面は最終ハケ調整を行い、体部内面はヘラ削り調整を行う。甕Dは、口縁部に擬凹線文を施すDaと擬凹線文を施さないDbがある。

甕Eは、ナデ肩の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲したのち、直立ぎみに丸みをもって立ち上がる「受口状口縁」を呈するもので、近江地方に特徴的な器形である。甕Eaは、口縁部外面に楕円列点文、肩部に楕円直線文+楕円列点文を配するもので、甕Ebはヘラ描列点・棒状列点を配したものである。甕Ecは甕Ea・Ebに近似するが、口縁部及び体部外面に装飾を施さないものである。

甕Fは、長胴形を呈し、体部最大径が下位にある。口縁部は単純「く」の字形を呈し、口縁端部は上下に肥厚する。甕Fは外面をハケ調整し、内面には粗いヘラ削りを施す。

甕Gは、ナデ肩の体部から口縁部が単純「く」の字形を呈し、口縁部外面には粘土帯をつぎたし肥厚させたものであり、粘土帯の貼りつけ痕が明瞭である。

甕Hは、ナデ肩の体部から、口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部をわずかに上方へつまみ上げる。体部外面は細かいタタキを施し、内面はていねいなヘラ削りにより仕上げる庄内式の甕である。

甕Iは、丸底の底部から球形の体部を呈し、口縁部は「く」の字形に屈曲し、口縁端部を内側に折り返し肥厚させたもので、体部外面はハケ、内面はヘラ削りで仕上げる布留式の

甕である。

甕Jは、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部は斜め上方に長く立ち上がるもので、二重口縁形を呈する布留式甕である。

高杯はA・B・C・Dに大別できる。

高杯Aは、水平ぎみに立ち上がる杯部から口縁部が外反ぎみに短く立ち上がるもので、脚部は裾開きとなる。杯部外面にはていねいなへら磨きを施す。

高杯Bは、浅い椀状の杯部から中空の柱状部へ続き、脚部は裾開きとなる。高杯Bは高杯A・高杯Cに比し、小型品である。

高杯Cは、浅い椀状の杯部から口縁部が外反したのち、端部が斜め上方に立ち上がる複合口縁形を呈するもので、丹後・丹波北部によくみられる器形である。

鉢は、多種にわたり、口縁部及び体部の形態・底部穿孔の有無・調整技法の差異によりA・B・C・D・E・F・Gに大別できる。

鉢Aは、平底の底部から浅い椀状の体部へ続き、口縁部が外反するもので、体部と口縁部の境が不明瞭である。鉢Aには外面にハケあるいはへら磨きを施すもののほか、タタキ目をそのまま残すものがある。

鉢Bは、平底の底部から浅い椀状の体部へ続くもので、口縁部は「く」の字形に屈曲したのち、端部を上方につまみあげる複合口縁形を呈したものである。

鉢Cは、鉢Bと同様、椀状の体部から「く」の字形に屈曲する頸部へ続き、口縁端部は直立あるいは斜め上方に短く立ち上がるもので、口縁部外面に面をもつ。鉢Cは、口縁部及び体部外面に装飾を施さない鉢Caと口縁部外面に櫛描列点文、体部外面に櫛描直線文+櫛描列点文の装飾を施す鉢Cbがある。鉢Cは、体部外面をハケあるいはへら磨きで仕上げるもので、タタキ技法を施すものはない。

鉢Dは、平底の底部から斜め上方に内湾ぎみに立ち上がる体部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。鉢Dは内・外面ともハケ調整で仕上げる。鉢Dは、底部穿孔の有無により穿孔を施さない鉢Daと穿孔を施す鉢Dbに大別できる。

鉢Eは、平底の底部から体部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は「く」の字形に屈曲したのち、直立ぎみに立ち上がる複合口縁形を呈する。鉢Eに脚部を付したものが台付鉢Dとなる。

鉢Fは、尖りぎみの底部から砲弾形の体部へ続くもので、口縁部と体部の境が不明瞭であり、口縁端部は尖りぎみにおわる。鉢Fは底部に焼成前に円孔を穿つものが多い。

鉢Gは、平底あるいは尖底形の底部から砲弾形の体部へつづくもので、鉢Fに近似するが、口縁部がわずかに外反し、体部と口縁部の境が明瞭となる。

鉢Hは、尖りぎみの底部から内湾ぎみに立ち上がる体部へ続き、口縁部は単純「く」の字形に屈曲したもので、体部外面はナデ、体部内面はナデあるいはヘラ削り調整を施す。鉢Gは形態的には甕に近似するが、底部に円孔を穿つことにより鉢と考えた。

台付鉢はA・B・C・Dに大別できる。

台付鉢Aは、低い脚部から斜め方向に直線的に立ち上がり、体部外面には左上がりのタキを施したもので、第V様式以降にみられる分割成形によって成立した器形である。

台付鉢Bは、低い脚部から深い椀状の体部へ続き、口縁部が内湾ぎみに立ち上がるものである。

台付鉢Cは、裾開きの体部から腰部の張った浅い椀状を呈し、口縁部が内湾ぎみに立ち上がるもので、体部内・外面にヘラ磨き調整を施す。

台付鉢Dは、椀状の体部から口縁部が複合口縁形を呈するもので、脚部をひねり出して成形する。

器台はA・B・C・Dに大別できる。

器台Aは、中空の柱状部から受部が斜め方向に水平ぎみに立ち上がり、口縁端部は粘土帯を下方へつぎたした面をつくる。口縁部外側には4～5条の明瞭な凹線文をめぐらす。脚部は、中空の柱状部より裾開きとなる。受部内・外面及び脚部外面にはていねいなヘラ磨き調整を施す。

器台Bは、斜め上方に立ち上がる受部から口縁部が下方にわずかに粘土帯をつぎたし面をつくる。口縁部外面には2～3条の不明瞭な擬凹線文をめぐらす。脚部はいずれも欠損し不明瞭であるが、裾開きになるものと思われる。

器台Cは、斜め上方に立ち上がる受部から口縁部が「く」の字形に屈曲する複合口縁形を呈するもので、口縁部外面には2～3条の不明瞭な擬凹線文をめぐらす。器台Cは杯部下半以下を欠損するため、高杯となる可能性がある。

器台Dは、斜め上方に水平ぎみに立ち上がる受部から口縁部が上・下方に屈曲し、外面に面をなす。器台Dは、器台Bの受部の上にさらに筒状を呈する受部をつぎたした二段受部となる装飾器台である。器台Dは、丹後・丹波北部で出土例が知られる特殊器形である。

B-SB03 出土遺物 (第21・22図)

SB03出土遺物は、床面直上のほか周壁溝・貯蔵穴内から出土し、壺Bd・D・E、甕Ae・Da・Db、鉢A・Da・E、台付鉢A・B・D、高杯A・B・C、器台D、手づくね土器等があり、総個体数35個体以上を数える。

壺Bd(3・4)は、体部最大径が中位よりやや上方にあり、「く」の字形に外反する頸部から

わずかに内傾する口縁部へ続く。口縁端部には1～2条の鈍い擬凹線文を施す。体部外面にハケあるいはナデ、内面下半にナデ、上半にハケあるいはナデ調整、口縁部内・外面には横ナデ調整をそれぞれ施す。3は口径13.4cm・体部最大径16.4cm・器高16.6cm・径高指数1.23・腹径指数1.22、4は口径13.8cm・体部最大径17.3cm・器高15.7cm・径高指数1.14・腹径指数1.25を測る。

壺D(2)は、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁端部が下方に垂下し面をつくる。口縁部内・外面に横ナデ調整を施す。2は口径16.4cmを測る。

壺E(1)は、小さな平底を呈し、体部は最大径が中位よりやや上方にある倒卵形を呈する。口縁部は直立ぎみに立ち上がる。体部及び口縁部内・外面にはていねいな縦方向のヘラ磨き、体部内面には斜めあるいは横方向のヘラ削り、口縁部内面には横ナデののち、一部横方向のヘラ磨きを加える。1は口径9.4cm・器高13.2cm・体部最大径11.6cm・径高指数1.40・腹径指数1.23を測る。

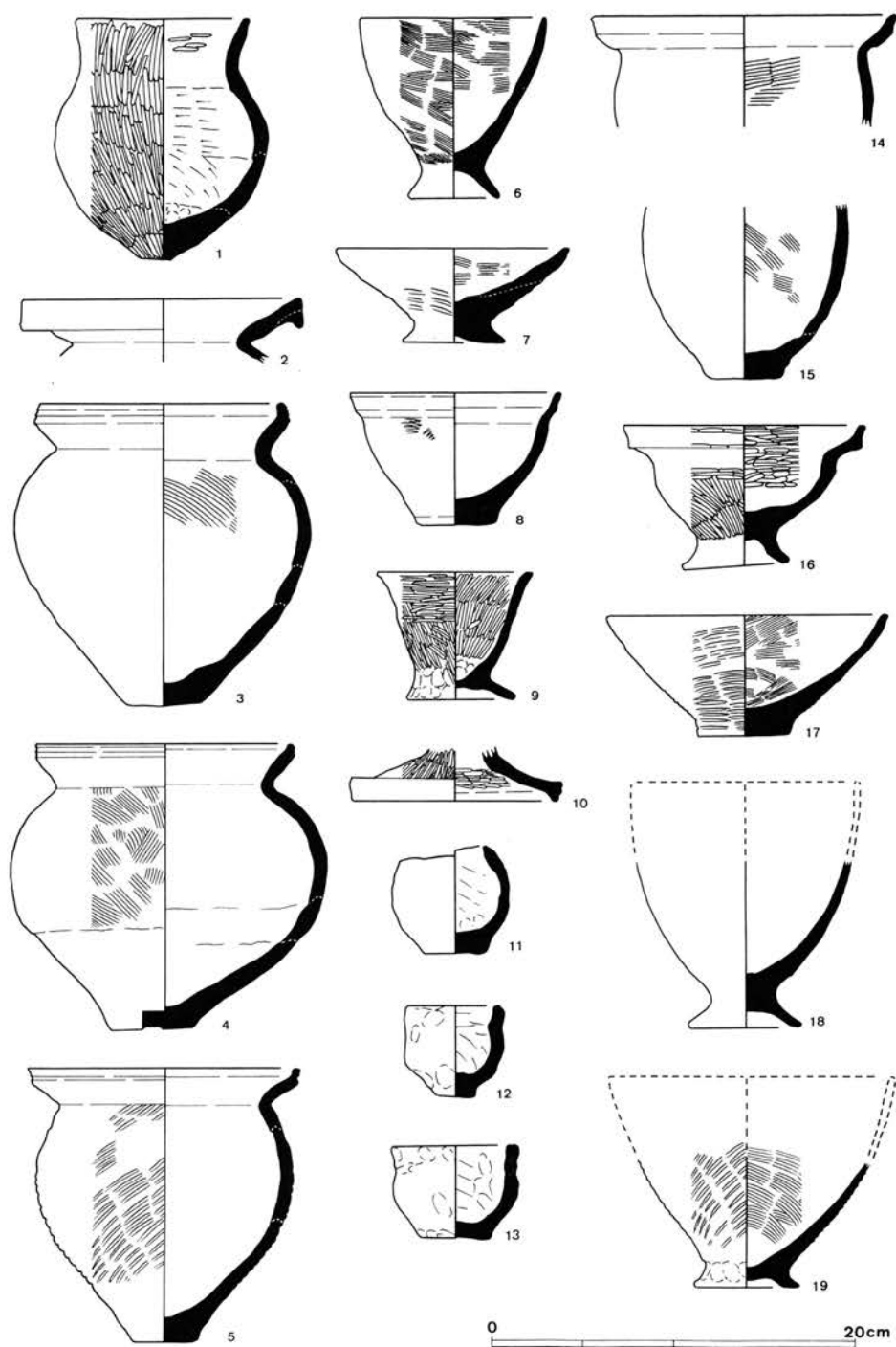
甕Ae(5)は、平底の厚い底部から体部へと続き、体部最大径は中位よりやや上方にある。口縁部は「く」の字形に屈曲する頸部から口縁端部を短く外反させる。口縁端部外面には1条の凹線文がめぐる。体部外面には右上がりの平行タタキ、内面にナデ調整、口縁部内・外面は横ナデ調整を施す。5は口径14.9cm・器高15.2cm・体部最大径14.0cm・径高指数1.02・腹径指数0.94を測る。

甕Da(26)は、扁球形の体部から口縁部が丸味をもって「く」の字形に屈曲し、口縁端部は尖りぎみにゆるく外反する。口縁端部には2条の鈍い擬凹線文を施す。底部は欠損しているが丸底ぎみの平底と思われる。体部外面は遺存状態が悪く不明瞭であるが、ハケあるいはナデ調整が施されたと思われる。体部内面下半には縦方向の、上半には横方向のハケ調整、口縁部内・外面には横ナデ調整をそれぞれ施す。甕Dは丹後地方に特徴的な器形に類似する。26は口径18.2cm・体部最大径21.8cm・腹径指数1.20を測る。

甕Db(14)は、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部が直立ぎみに立ち上がる複合口縁形を呈し、口縁部外面には擬凹線文を施さず、ナデ調整のみである。体部内面には横方向のハケ調整を施す。14は口径16.6cmを測る。

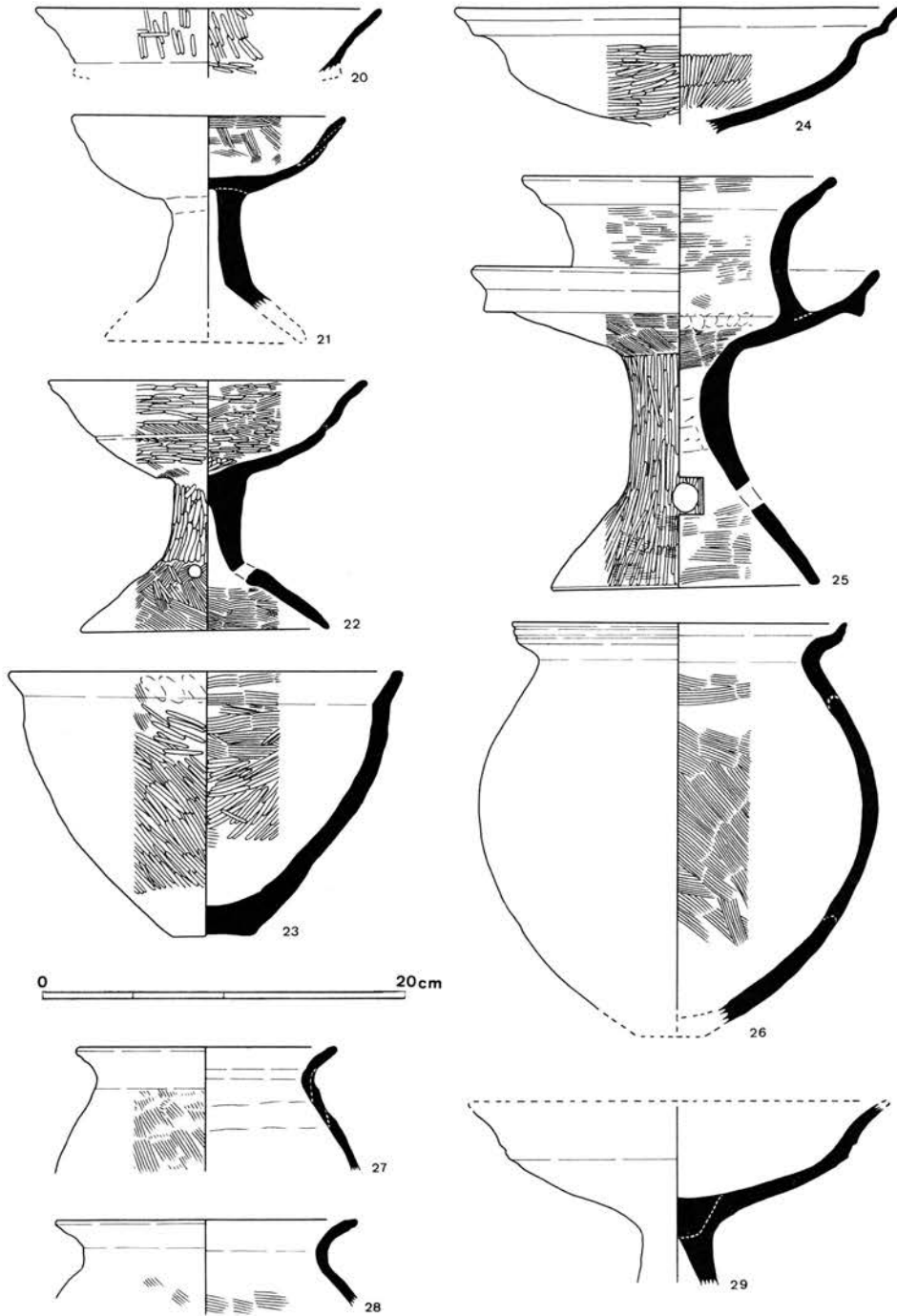
鉢A(23)は、平底の底部から上方に立ち上がる体部へ続き、口縁部が「く」の字形に屈曲する。体部外面には斜め方向の細かいヘラ磨きを施し、体部内面には横ハケののち下半のみ横方向のヘラ磨き調整を加える。口縁部外面には横ナデを施すが、頸部屈曲には口縁部成形時の指オサエが認められる。口縁部内面は横ハケ調整を施す。23は口径21.4cm・器高14.6cm・径高指数0.68を測る。

鉢Da(17)は、平底の厚い底部から斜め上方に立ち上がる体部へ続き、口縁部はわずか



第21図 B地点 SB03 出土遺物 (1)

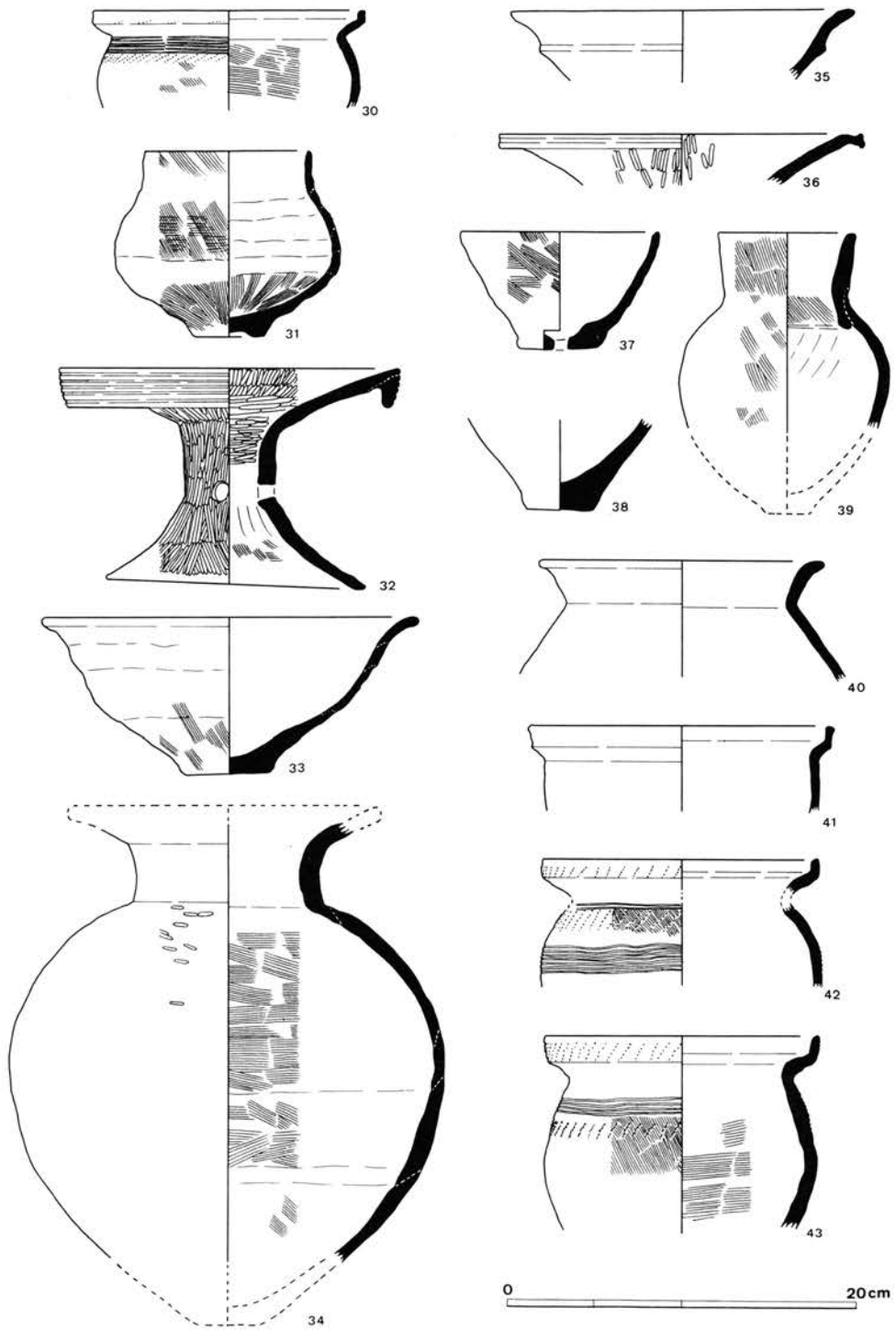
壺 Bd; 3・4, D; 2, E; 1, 甕 Ae; 5, Db; 14, 不明; 15, 鉢 Da; 17, E; 8, 台付鉢 A; 7, B; 6・9・18・19, D; 16, 不明; 10, 手づくね土器; 11~13



第22図 B地点 SB03(2), SD12出土遺物

SB 03; 20~26, SD 12; 27~29

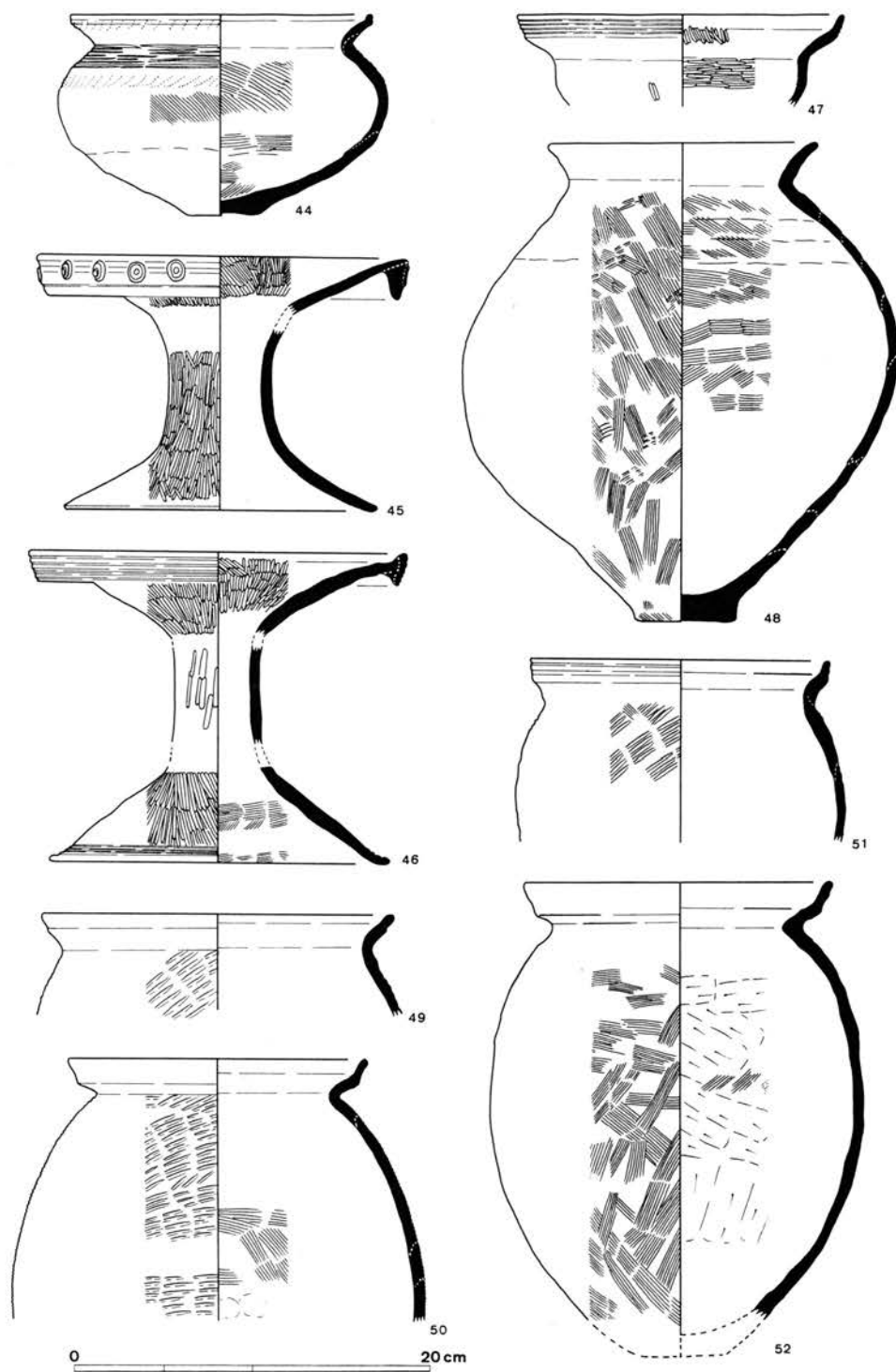
甕 Bb; 27・28, Da: 26, 鉢 A; 23, 高杯 A; 20・29, B; 21・22, D; 24, 器台, D; 25



第23図 B地点 SB15・SB02・Pit45 出土遺物

SB15; 30~33, SB02; 34・36~43, Pit45; 35

壺 A; 34, Ca: 40, F; 39, H; 31, 甕 Db; 41, Ea; 30・42・43, 鉢 A; 33, Db; 37, 高杯 A; 35, 器台 A; 32, B; 36



第24圖 B地点 SD26・SK09 出土遺物

SD 26; 44~48, SK 09; 49~52

壺 C; 48, 甕 Ad; 49~51, Cb; 52, Da; 47, 鉢 Cb; 44, 器台 A; 45・46

に内湾し、丸みをもっておわる。体部下半には粗い右上がりあるいは横方向のタタキを、上半にはタタキののちナデを、体部内面にはハケ調整をそれぞれ施す。17は口径15.4cm・器高6.7cm・径高指数0.43を測る。

鉢E(8)は、平底の厚い底部から体部へ続き、口縁部が「く」の字形の頸部より斜め上方に立ち上がり、複合口縁形を呈する。体部内・外面にはナデを、口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。なお、体部外面肩部に一部横方向のタタキ目が認められる。8は口径11.4cm・器高指数0.64を測る。

台付鉢A(7)は、鉢Daに脚部を付したものである。7は口径12.6cm・器高5.3cm・径高指数0.42を測る。

台付鉢B(6・9・18・19)は、短い裾開きの脚部から内湾ぎみに立ち上がり深い椀状を呈する体部へ続く。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部と体部の境が不明瞭

である。体部外面にはハケ(6)・ヘラ磨き(9)と左上がりの平行タタキ(19)を施すものがあり、体部内面にはハケ調整を施す。

台付鉢D(16)は、鉢Eに似た体部に脚部を付したものであり、体部外面には斜め方向の、体部内面及び口縁部内・外面には横方向のていねいなヘラ磨きを施す。16は口径13.2cm・器高7.7cm・径高指数0.58を測る。

高杯A(20)は、口縁部のみが遺存する。皿状の杯部より口縁部は外反ぎみに斜め上方へ立ち上がる。杯部内面には横方向の、口縁部内・外面には縦方向の不徹底なヘラ磨きをそ

分類基準	SB02		SB03		SB15	
	個体群	比率	個体群	比率	個体群	比率
壺	A	1 } 37.5%	2 } 11.4%	1	25.0%	
	Ba					
	Ca					
	D	1 } 11.4%				
	E					
	F	1 } 25.0%				
	H					
甕	Ae	1 } 37.5%	1 } 14.3%	1	25.0%	
	Da					
	Db					
	Ea	2 } 25.0%				
	その他					
鉢	A	1 } 12.5%	1 } 2.9%	1	25.0%	
	Da					
	Db					
	E					
台付鉢	A	1 } 12.5%	1 } 2.9%	4 } 25.7%	34.3%	
	B					
	D					
	脚のみ					
高杯	A	1 } 12.5%	2 } 25.7%	2		
	B					
	D					
	脚のみ					
器台	A		1 } 2.9%	1	25.0%	
	D					
ね手土器			4 } 11.4%			
	合計	8 個体	100%	35 個体	100%	4 個体

付表1 竪穴式住居跡内出土土器の構成

れぞれ施す。20は口径19.0cmを測る。

高杯B(21・22)は、椀状の深い杯部から口縁部が外反ぎみに立ち上がる。脚部は中空で、裾開きである。22は脚部に焼成前に3か所の円孔を穿つ。21は全体に器壁の遺存状態が悪く不明瞭であるが、22では全体の器壁調整が認められる。これによると、杯部内・外面には斜め方向のハケののち、粗い横方向のヘラ磨きを加え、脚部外面には上半縦ハケ、下半斜め方向のハケののち、ヘラ磨き調整を施す。21は口径15.0cm、22は口径17.5cm・器高13.8cm・器高指数0.79を測る。

高杯D(24)は、浅い椀状の杯部から口縁部が「く」の字形に屈曲する。杯部外面はハケののち横方向のヘラ磨き、内面にはハケのち放射状のヘラ磨きを、口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。24は口径24.3cmを測る。

器台D(25)は、裾開きの脚部から受部が斜め方向に立ち上がり、口縁端部が上・下方に肥厚する。受部は筒状の体部から口縁部が外反し、さらに二段受部を裾える。一、二段とも内・外面にはナデ、脚部外面には縦方向のヘラ磨き、内面には横方向のハケ調整を施す。23は口径17.0cm・器高22.6cmを測る。

手づくね土器(4～6)は、粘土塊をひねり出して壺あるいは甕の形態を模したもので、体部外面にはナデ調整を施し、内面は未調整である。

B-SB02 出土遺物 (第23図)

SB02出土遺物は、床面直上に散在し、完形に復元しえるのは37のみである。

SB02出土遺物の器種には、壺A・Ca・F、甕Db・Ea、鉢Db、器台Bがある。

壺A(34)は、口縁端部及び底部を欠損する。倒卵形の体部から筒状の頸部へ続き、口縁部は外反する。体部外面には横方向のヘラ磨き、内面には細かい横方向のハケ、口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。

壺Ca(40)は、ナデ肩の体部から口縁部が外反ぎみに立ち上がるもので、体部外面に一部縦ハケが認められる。口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。40は口径16.2cmを測る。

壺F(39)は、長頸壺であるが、後期中葉に代表される長頸壺から退化した形態と考えられる。倒卵形の体部から口縁部が直立ぎみに立ち上がる。体部及び口縁部外面には細かい縦ハケを、体部内面にはナデを、口縁部内面には横ナデ調整をそれぞれ施す。39は口径8.0cm・体部最大径12.1cm・腹径指数1.53を測る。

甕Db(41)は、口縁部が複合口縁形を呈し、口縁部外面には擬凹線文を施さないものである。41は口径17.0cm・体部最大径16.0cm・腹径指数0.94を測る。

甕Ea(42・43)は、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部が直立ぎみに立ち上がる「受口状口縁」を呈するもので、口縁部外面には4～5本単位で、6～10mm間隔を置いて口縁端

部には至らない櫛描列点文を加飾する。体部外面には櫛描直線文・櫛描列点文を交互に加飾する。体部外面には加飾する以前に縦ハケを、内面には横ハケを、口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。42は口径16.0cm・体部最大径16.4cm・腹径指数1.03、43は口径15.6cm・体部最大径15.6cm・腹径指数1.00を測る。

鉢Db(37)は、平底の厚い底部より内湾ぎみに立ち上がる体部へ続く。底部中央には焼成前に円孔を穿つ。体部外面には横及び斜め方向のハケを、内面にはナデ調整を施す。37は口径11.6cm・器高6.7cm・径高指数0.58を測る。

器台B(36)は、外反ぎみに立ち上がる受部で、口縁端部は上方にわずかにつまみあげる。口縁部外面には1条の凹線文をめぐらす。受部内・外面には縦方向のヘラ磨き調整を施す。36は口径21cmを測る。

B-SB 15 出土遺物 (第23図)

SB15は、周壁溝内より壺H・鉢A・器台Aが、柱穴内から甕Eaが出土した。

壺H(31)は、輪状の底部から扁球形の体部へ続き、口縁部は直立ぎみに短く立ち上がる。31は粘土帯のつなぎ目が明瞭であり、体部上半では1.2~1.4cm単位の粘土帯をつみ上げる。体部外面上半には横方向のタタキのち縦ハケを、内面下半にはハケを、上半にはナデを、口縁部外面には縦ハケのちナデを、内面には横ナデ調整をそれぞれ施す。31は口径9.4cm・器高10.6cm・体部最大径13.0cm・径高指数1.13・腹径指数1.38を測る。

甕Ea(30)は、体部下半を欠損する。口縁部は受口状を呈し、口縁部外面には櫛描列点文を、体部外面には櫛描直線文+櫛描列点文を加飾する。30は口径15.2cm・体部最大径14.8cm・腹径指数0.97を測る。

鉢A(33)は、厚い平底の底部から体部が斜め方向に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。33も粘土帯のつなぎ目が明瞭である。体部外面下半に一部縦ハケが認められる。体部内面にナデ、口縁部内・外面に横ナデ調整を施す。33は口径21.6cm・器高8.8cm・径高指数0.41を測る。

器台A(32)は、裾開きの脚部から筒状の柱状部へ続き、受部は斜め方向に直線的に立ち上がったのち、口縁端部に粘土帯をつぎたし、垂下させる。口縁部外面には5条の明瞭な凹線文をめぐらす。外面および受部内面にはていねいなヘラ磨き調整を施す。32は口径19.2cm・器高12.3cm・径高指数0.64を測る。

Pit 45 出土遺物 (第23図)

Pit45出土遺物には高杯Aがある。高杯A(35)は、受部のみ遺存する。受部は、斜め上方に立ち上がり、口縁部は、強く外反する。35は、口径19.8cmを測る。

B-SD 12 出土遺物 (第22図)

SD12出土遺物には甕 Bb, 高杯Aがある。

甕 Bb(27・28)は、ナデ肩の体部から口縁部が「く」の字形に屈曲するもので、口縁端部を丸くおさめる。体部外面にハケ、内面にナデあるいはハケ調整を施す。口縁部内・外面に横ナデ調整を施す。27は口縁部と体部の粘土成分を異にする。27は口径14.0cm, 28は口径16.4cmを測る。

高杯A(29)は、斜め上方にわずかに内湾する杯部から口縁部が外反ぎみに立ち上がる。器壁内・外面は遺存状態が悪く調整は不明瞭であるが、ヘラ磨きと思われる。

B-SD 26 出土遺物 (第24図)

SD26出土遺物には壺C, 甕Da・Ea, 器台Aがある。

壺C(48)は、突出ぎみの平底で、体部は最大腹径が中位からやや上位にある倒卵形を呈する。口縁部は「く」の字形に屈曲し、丸みをもっておわる。体部成形は鉢型の底部から幅2~3cmの粘土帯を順次つみ上げる輪積み成形であり、体部内・外面とも粘土帯のつなぎ目が顕著である。体部外面にはタタキののち縦及び横方向のハケ調整を加える。体部内面下半にはナデ、上半には横及び斜め方向のハケ調整を、口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。48は口径15.0cm・器高26.9cm・体部最大径24.4cm・径高指数1.79・腹径指数1.63を測る。

甕Da(47)は、ナデ肩の体部から頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部が斜め上方に立ち上がる複合口縁形を呈する。口縁部外面には4条の擬凹線文を施す。体部外面には一部縦方向のヘラ磨きが認められる。体部内面には横方向のていねいなヘラ磨き調整を施す。47は下半を欠損し、高杯杯部となる可能性がある。47は口径18.6cmを測る。

鉢Ca(44)は、扁球形の体部から口縁部が「く」の字形に屈曲し、端部は直立ぎみに短く立ち上がる。口縁部下半から頸部にかけて4本単位の櫛描列点文を、体部外面には10~11本単位の櫛描直線文を、その下端には8本単位の櫛描列点文を加飾する。体部外面には斜め方向のハケ調整を、内面下半には横ナデを、上半には斜め方向のハケ調整を施す。44は粘土帯の接合痕が明瞭である。44は口径17.0cm・器高11.3cm・体部最大径18.7cm・径高指数0.66・腹径指数1.1を測る。

器台A(45・46)は、裾開きの脚部から柱状部へ続き、受部は斜め上方に広がる。口縁部は粘土帯をつぎたし、垂下させるもの(45)と上下に拡張するもの(46)がある。口縁部外面には5~6条の凹線文をめぐらし、そののち円形浮文を貼りつけるもの(45)がある。外面及び受部内面にはていねいな縦方向のヘラ磨きを、脚部内面にはハケ調整を施す。45は口径20.4cm・推定高14.6cm, 46は口径21.4cm・推定高17.0cmを測る。

B-SK 09 出土遺物 (第24図)

SK09出土遺物には甕Ad・甕Cbがある。

甕Ad(49~51)は、ナデ肩の体部から頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部は直立あるいは外方ぎみにわずかに肥厚する。体部外面には右上がりの粗いタタキ目を残し、内面にはハケあるいはナデを、口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。51は口縁部外面に2条の擬凹線文をめぐらす。49は口径19.6cm、50は口径16.6cm・体部最大径23.7cm・腹径指数1.43、51は口径16.8cm・体部最大径18.8cm・腹径指数1.12を測る。

甕Cb(52)は、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部に粘土帯をつぎたし、斜め上方に拡張したもので、口縁端部が丸みをもっておわる。52は体部最大径が下方にある。体部外面にはハケを、体部内面にはヘラ削りののち、一部ハケ調整が認められる。口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。52は口径17.0cm・体部最大径20.4cm・腹径指数1.20を測る。

B-SD 01 出土遺物 (第25~42図)

SD01出土遺物は、コンテナ・バット150箱以上の莫大な量にのぼり、北金岐B・C地点出土遺物の70%以上をしめる。出土遺物を層位的にみると上位の暗茶褐色粘質土層から溝底部の暗黒色粘砂質土にかけ出土し、中層では第V様式後半から庄内併行期までの遺物が大半であり、下層から完形に復元しえる布留式甕が出土した。層位的には土器形式が逆転しているため、層位からみた土器の形態変化は認めがたかった。そのため、今回の記述では上層から下層まで一括して資料の記述を行い、今後、亀岡盆地における同時期資料の増加をまってSD01内出土遺物の細分が可能と考えられる。

SD01出土遺物には壺A・Ba・Bb・Bc・Bd・Be・Ca・Cd・D・E・F・G・J、甕Aa・Ab・Ac・Ad・Ae・Af・Ba・Bb・Ca・Cb・Da・Db・Ea・Eb・Ec・F・G・H・I、鉢A・B・Ca・Cb・Da・Db・E・F・G・H、台付鉢A・B・C・D、高杯A・B・C、器台A・B・C、蓋、手焙型土器などがある。

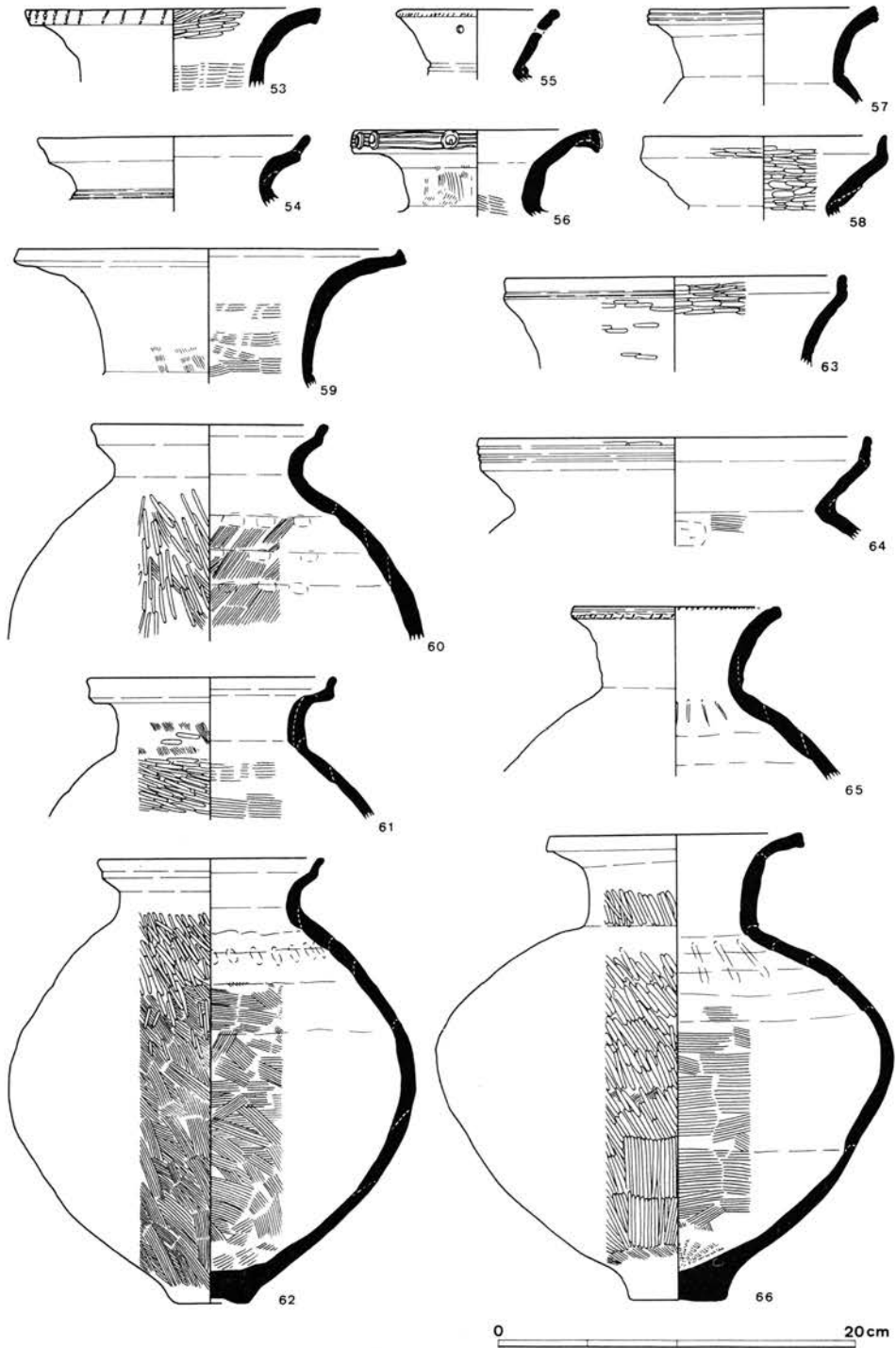
壺A(53・56・57・59・66)は、筒状の頸部から口縁部が強く外反する。口縁端部は上方に肥厚するもの(59)、下方に肥厚するもの(53・56・57・66)がある。口縁端部外面には無文のもの(59・66)、櫛描列点文を施すもの(53)、擬凹線文を施すもの(56・57)がある。完形に復元しえる66でみると、体部最大径が中位より上方にあり、体部最大径25.6cmに対し、器高26.0cmとほぼ等しい。66は粘土帯の接合痕が明瞭であり、その粘土帯の接合痕から成形方法を推測すると、まず、平底の厚い底部をなす鉢形に成形し、そののち、上位へ幅2~8cmの粘土帯をつぎたし口縁部まで続ける。体部内面にはハケにより粘土接合痕を不徹底ながら消す意図があり、体部外面にはハケののち縦方向のヘラ磨きによりていねいに仕上げる。

壺Ba(54・58・60~62・160)は、筒状の頸部から口縁部を外反させたのち、口縁端部を

器種	器形	個体数	器種別の比率(%)	総個体数に対する比率(%)
壺	A	34	16.6	18.5%
	a	25	12.2	
	b	12	5.9	
	B c	47	22.9	
	d	5	2.4	
	e	2	1.0	
	C a	16	7.8	
	b	13	6.3	
	D	5	2.4	
	E	17	8.3	
	F	17	8.3	
	G	9	4.4	
	J	3	1.5	
	小計	205	100%	
甕	a	9	1.4	57.4%
	b	77	12.1	
	A c	12	1.9	
	d	6	0.9	
	e	1	0.2	
	f	2	0.3	
	B a	3	0.5	
	b	134	21.0	
	C a	190	29.8	
	b	21	3.3	
	D a	43	6.7	
	b	13	2.0	
	a	59	9.2	
	E b	14	0.8	
	c	2	1.4	
	F	4	0.6	
	G	1	0.2	
	H	7	1.1	
	I	40	6.3	
その他	0	0		
小計	638	100%		

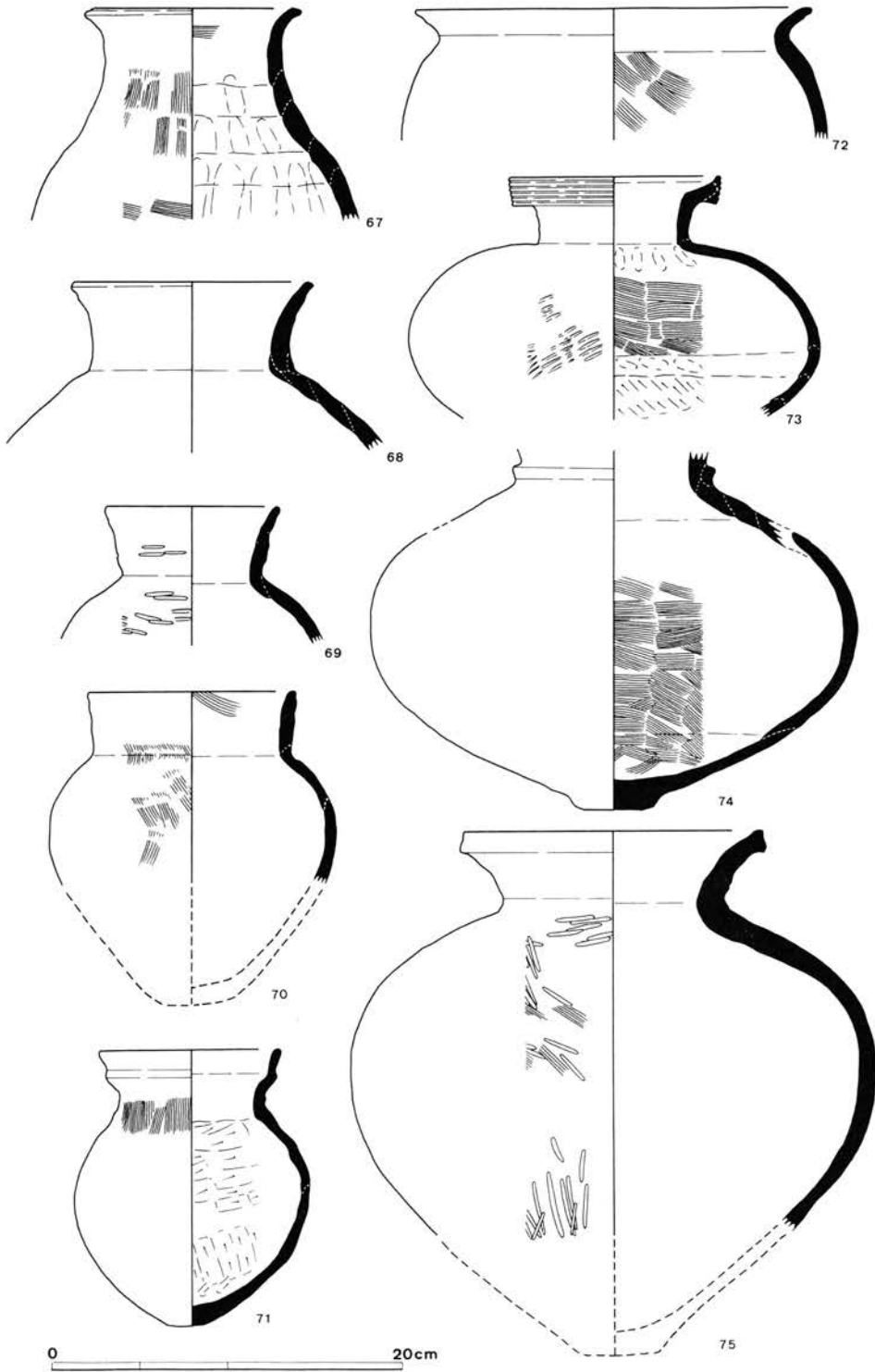
器種	器形	個体数	器種別の比率(%)	総個体数に対する比率(%)
鉢	A	5	4.8	中型品
	B	1	1.0	
	C a	2	1.9	
	b	4	3.8	
	D a	2	1.9	小型品
	b	9	8.6	
	E	1	1.0	
	F	44	42.3	
	G	3	2.9	
	H	4	3.8	
台付鉢	A	1	1.0	9.4%
	B	1	1.0	
	C	1	1.0	
	D	2	1.9	
	脚部のみ	24	23.1	
小計	104	100%		
器台	A	40	51.9	16.9%
	B	2	2.6	
	C	2	2.6	
	その他	3	3.9	
	脚部のみ	30	39.0	
	小計	77	100%	
高杯	A	20	24.1	7.5%
	B	2	2.4	
	C	2	2.4	
	D	3	3.6	
	脚部のみ	56	67.5	
	小計	83	100%	
蓋		1		0.1%
手焙型土器		1		20.2%
総計		1100		100%

付表2 B地点 S D01 内出土土器の構成



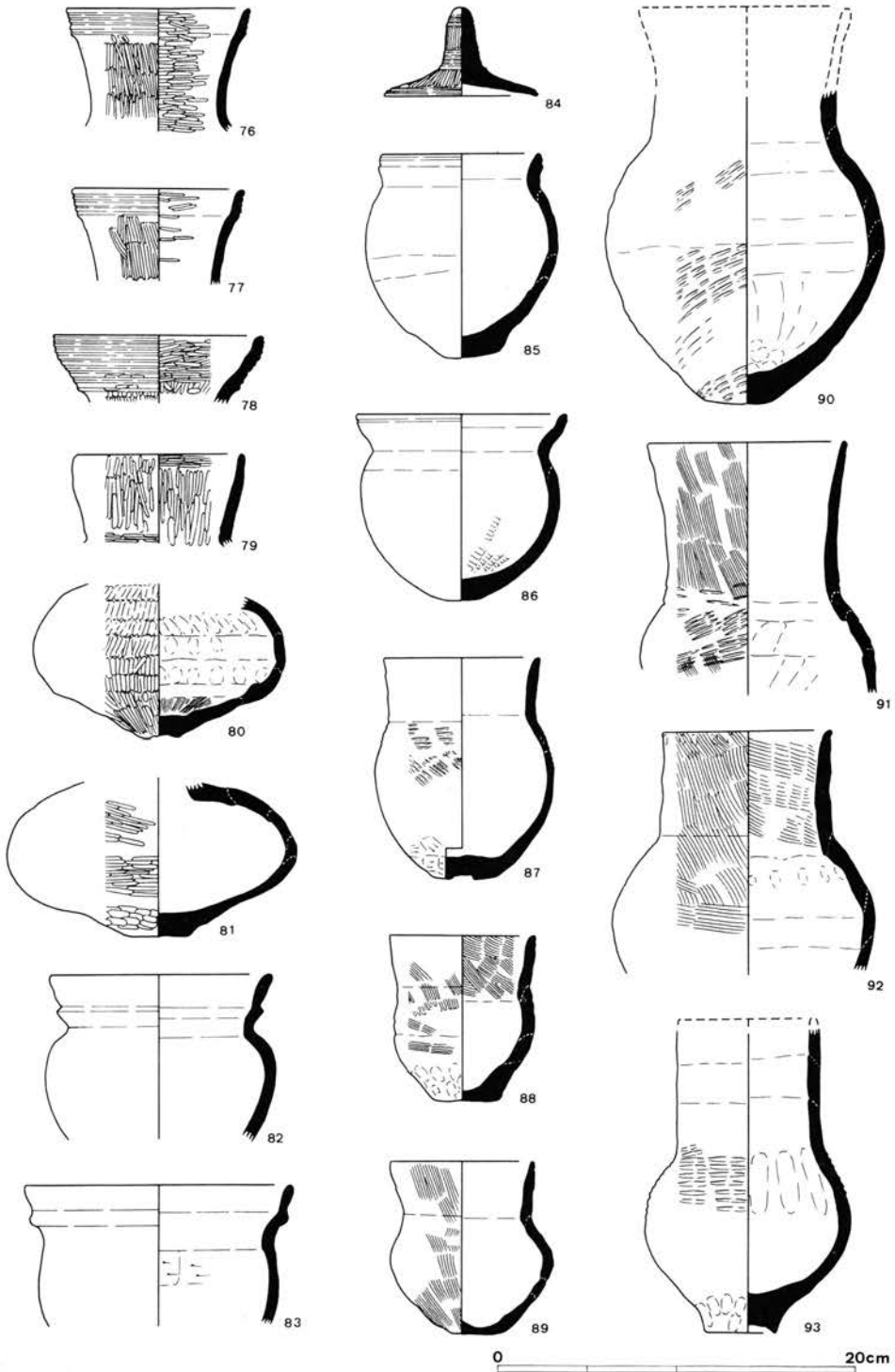
第25図 B地点 S D01 出土遺物 (1)

壺 A; 53・56・57・59・66, Ba; 54・58・60~62, Bb; 63・64, Cb; 55・65



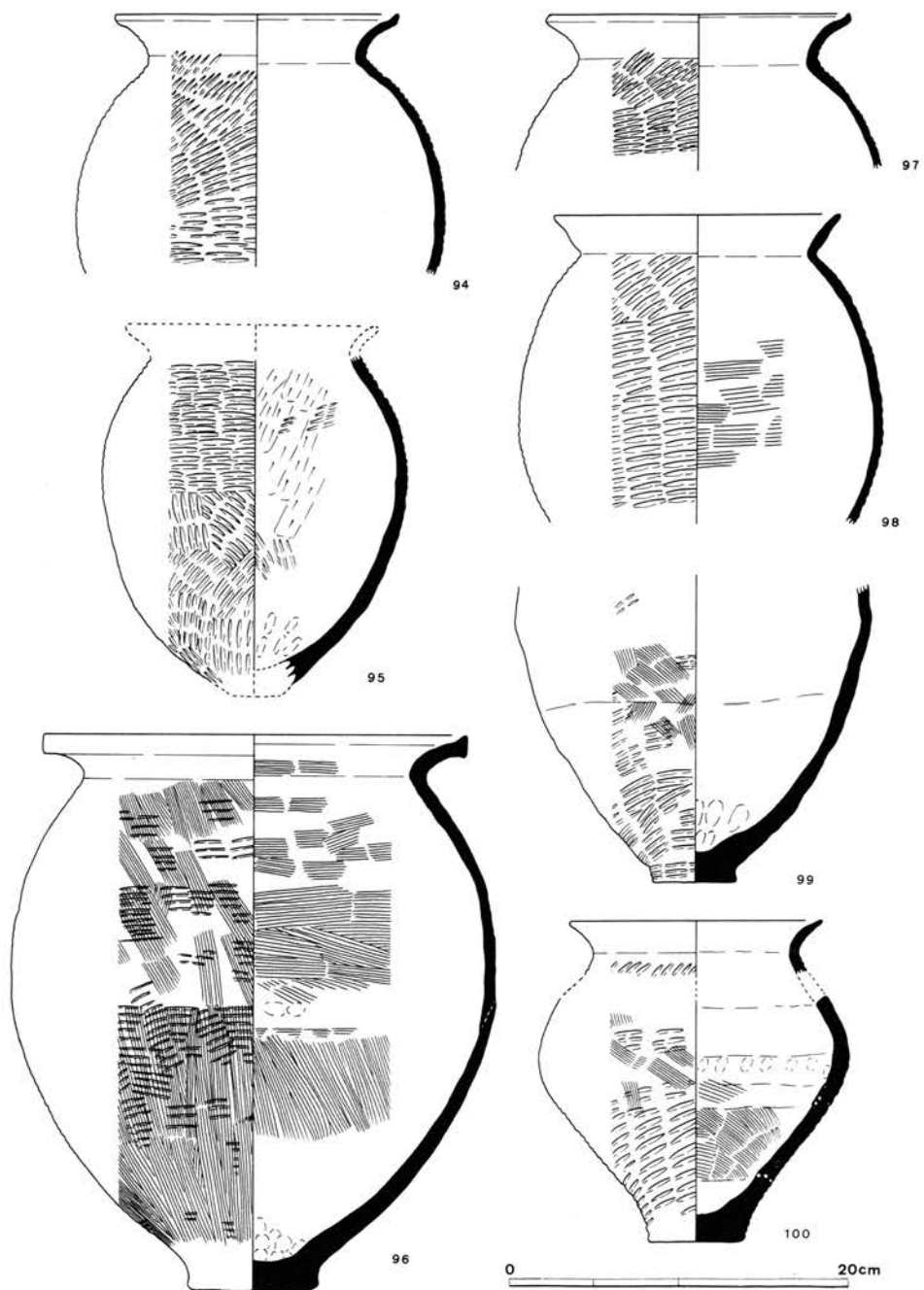
第26図 B地点 S D01 出土遺物 (2)

壺 Bc; 71, Ca; 72, Cb; 67~69・75, D; 73, E; 70, 不明; 74



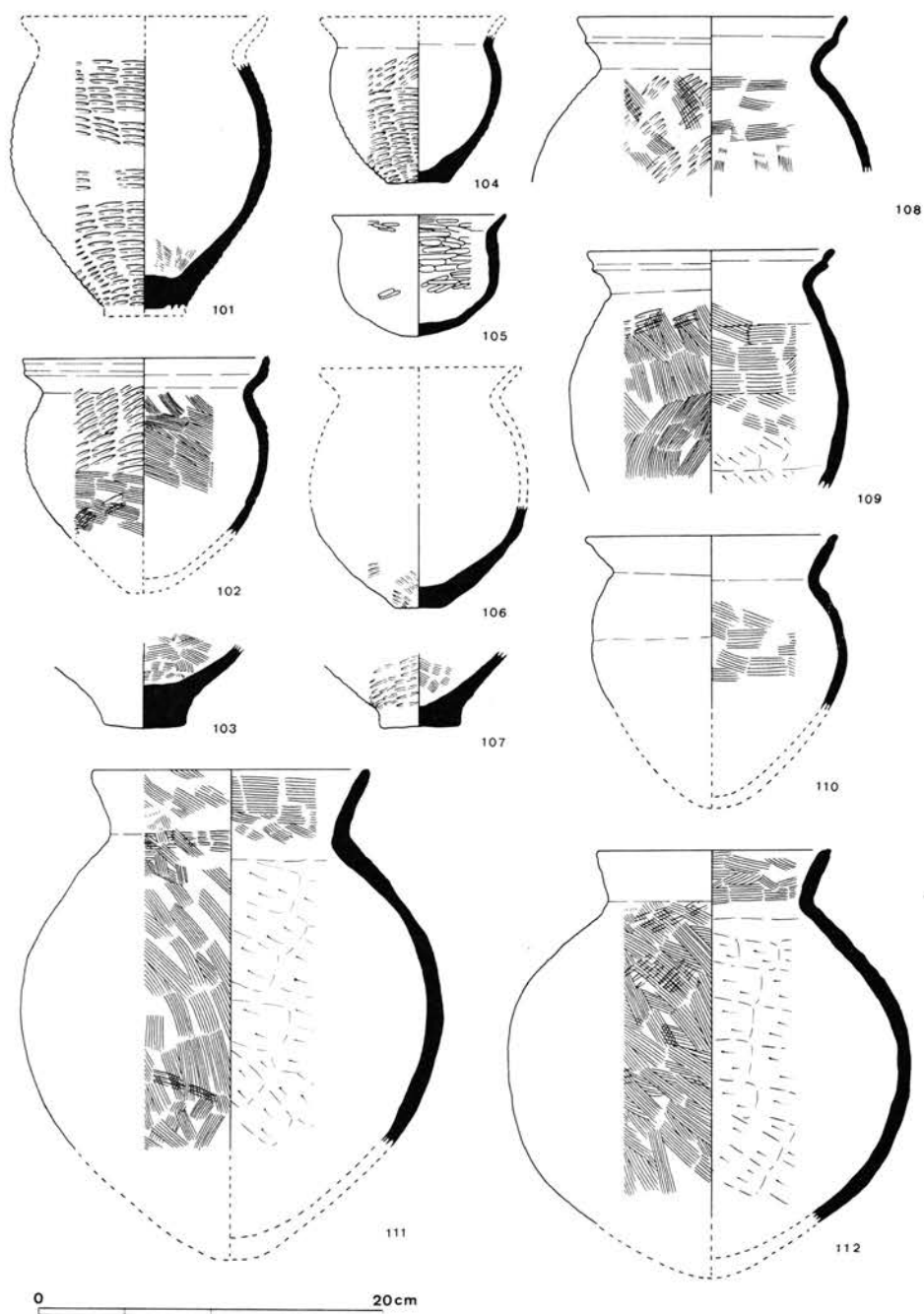
第27図 B地点 S D01 出土遺物 (3)

壺 Bc; 82・83・85・86, E; 87~89, F; 90~93, G; 76~81, 蓋; 84



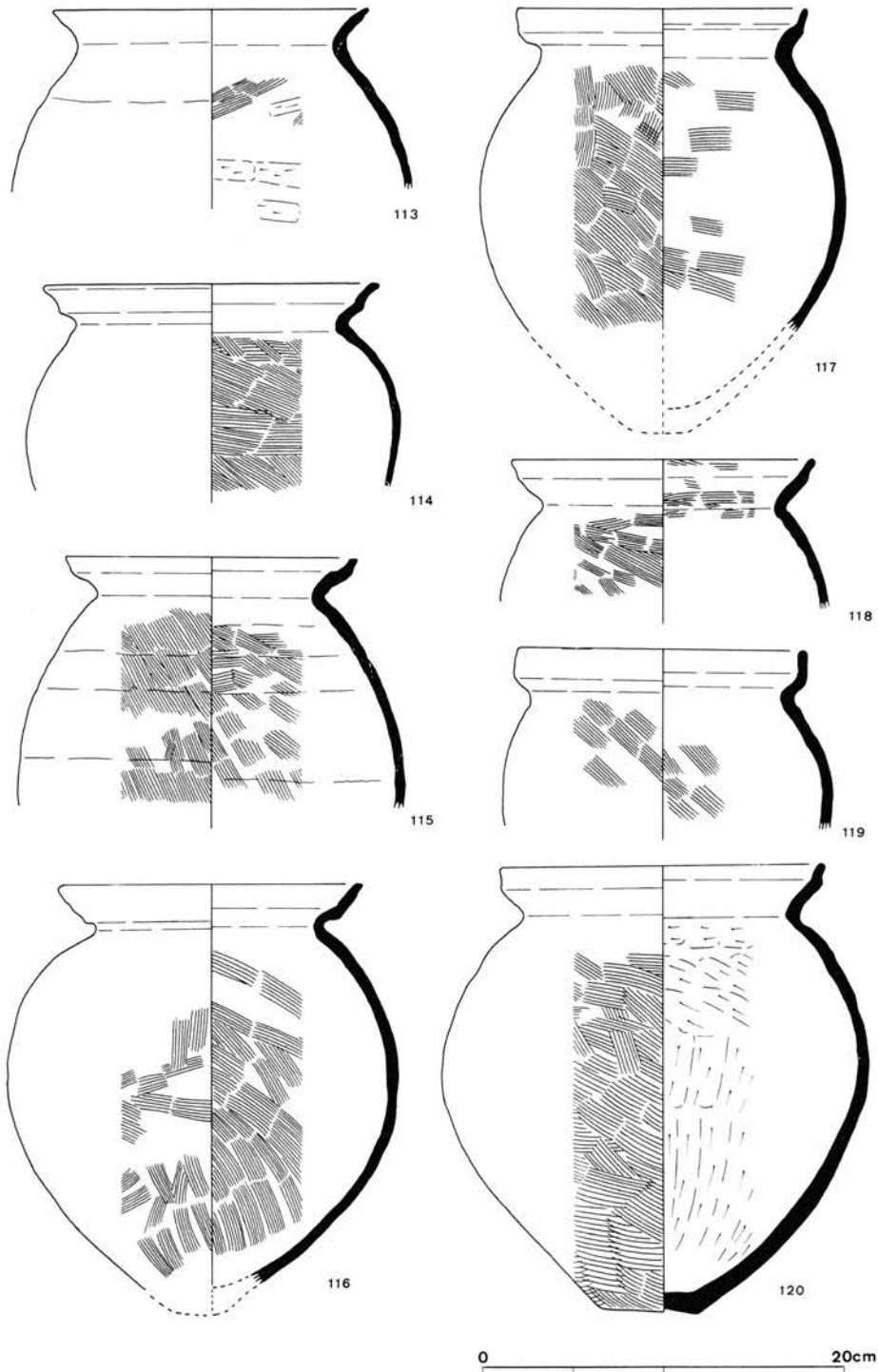
第28図 B地点 S D01 出土遺物 (4)

甕 Aa; 96, Ab; 98・100, Ac; 94・97, 不明; 95・96



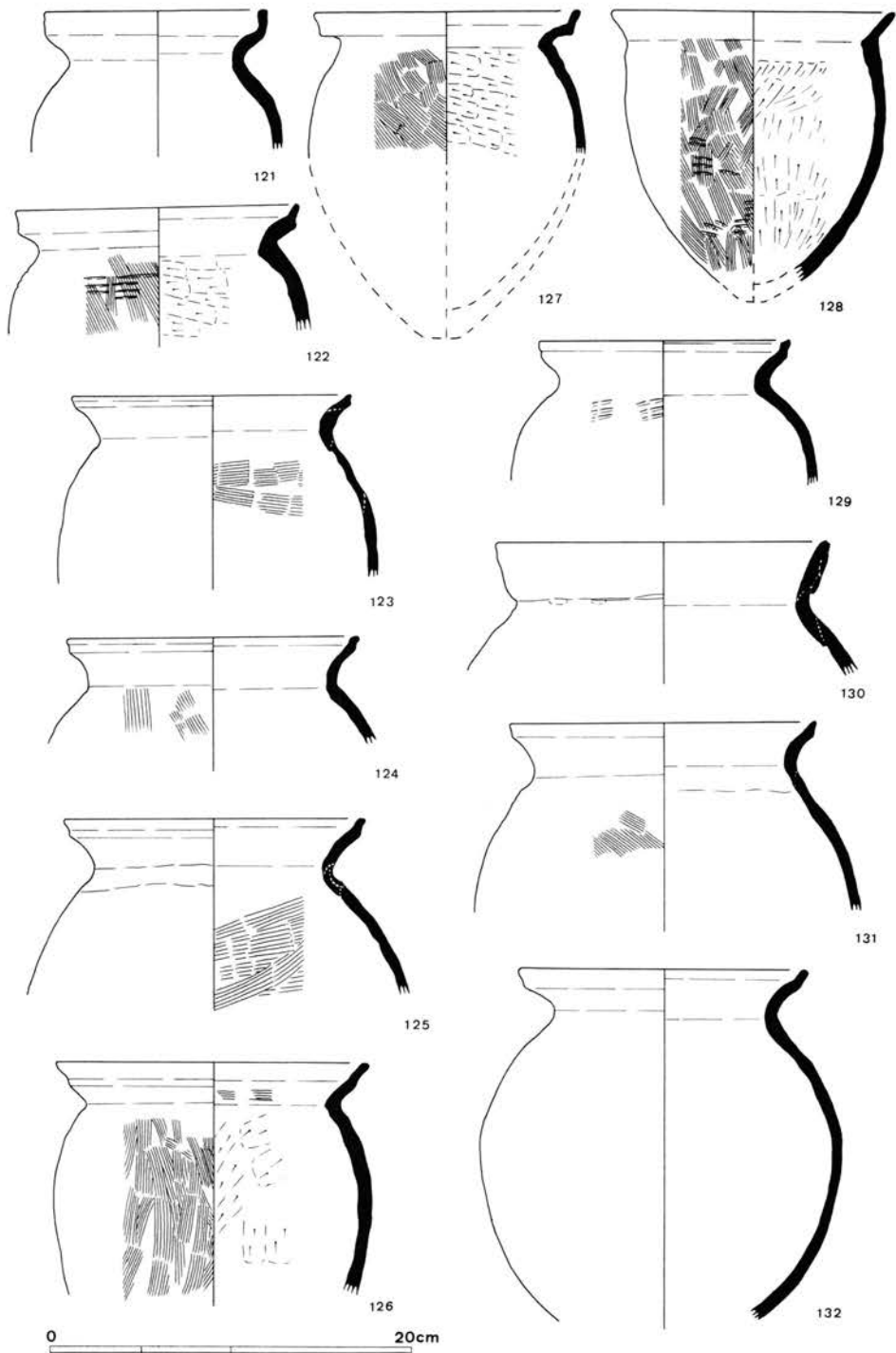
第29図 B地点 S D01 出土遺物 (5)

甕 Ad; 108・109, Ae; 102, Ba; 111・112, Bb; 110, 不明; 103・106・107, 鉢 H; 105



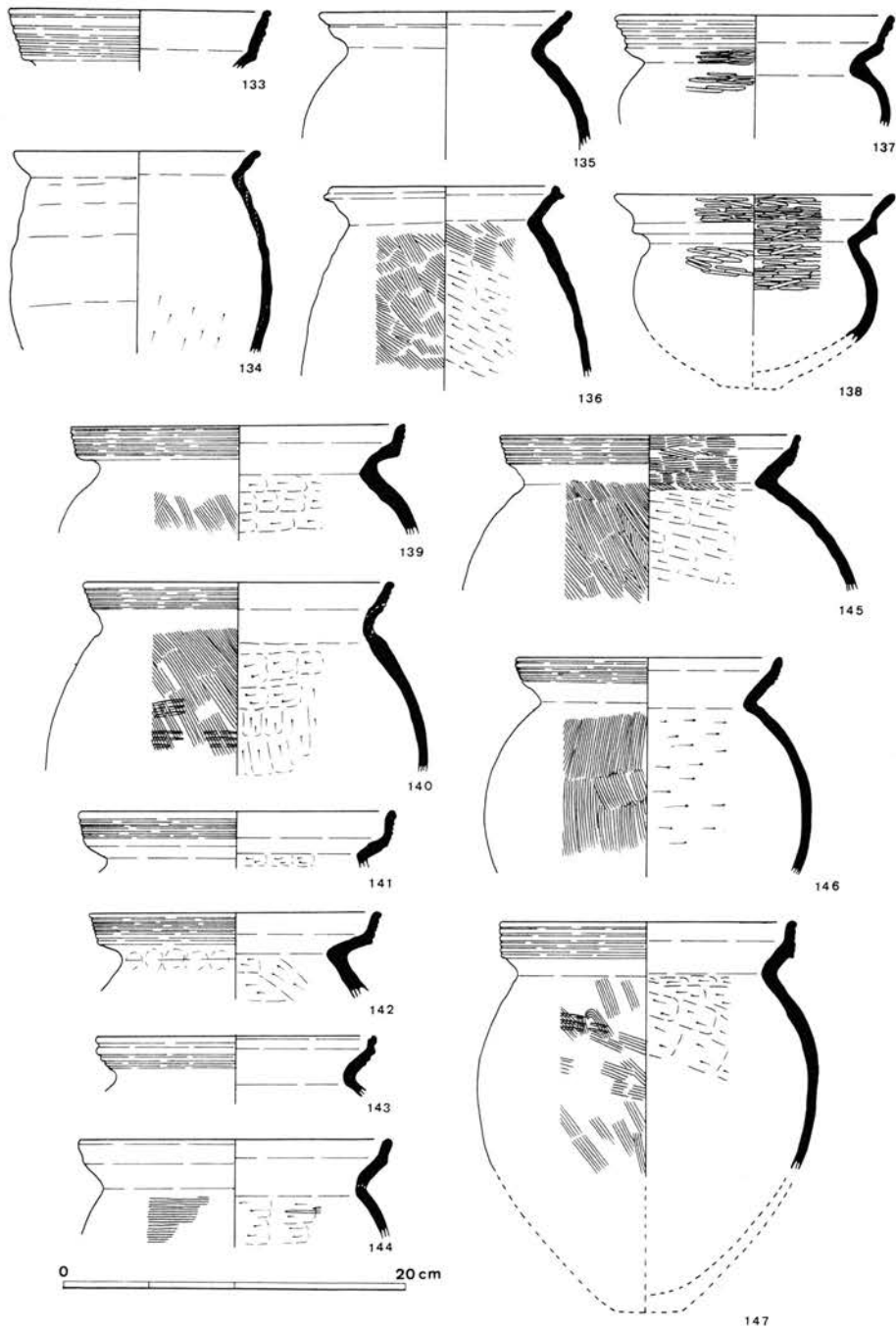
第30図 B地点 S D01 出土遺物 (6)

甕 Bb; 113, Ca; 115・117・118・120, Cb; 114・116・119



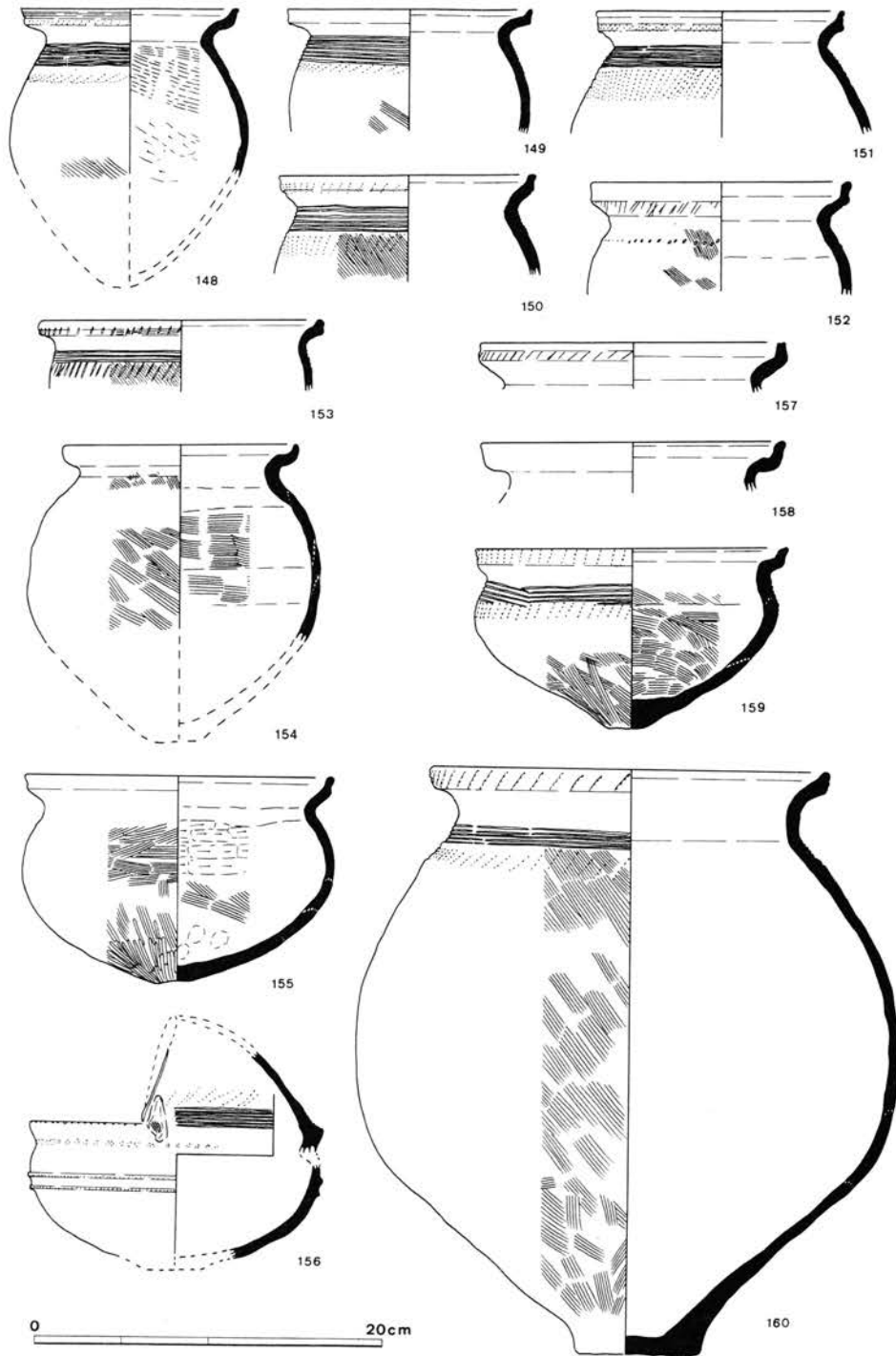
第31図 B地点 S D01 出土遺物 (7)

甕 Ad; 122・129, Bb; 123・128, Ca; 124・125・131・132, Cb; 121, Db; 126, G; 130



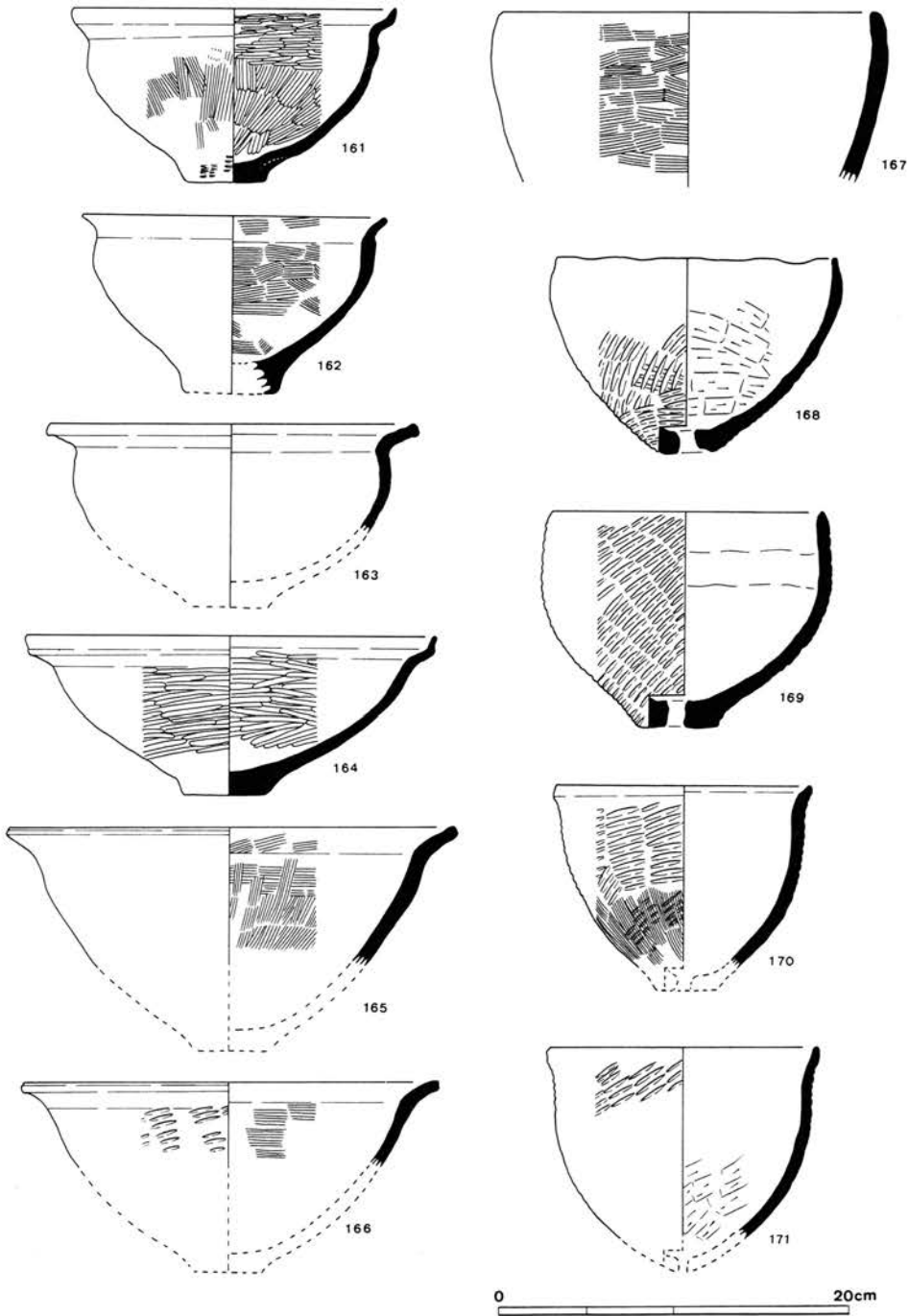
第32図 B地点 S D01 出土遺物 (8)

壺 Bc; 137・138, 甕 Bb; 134, Ca; 135, Da; 133・139~143・145~147, Db; 144
F; 136



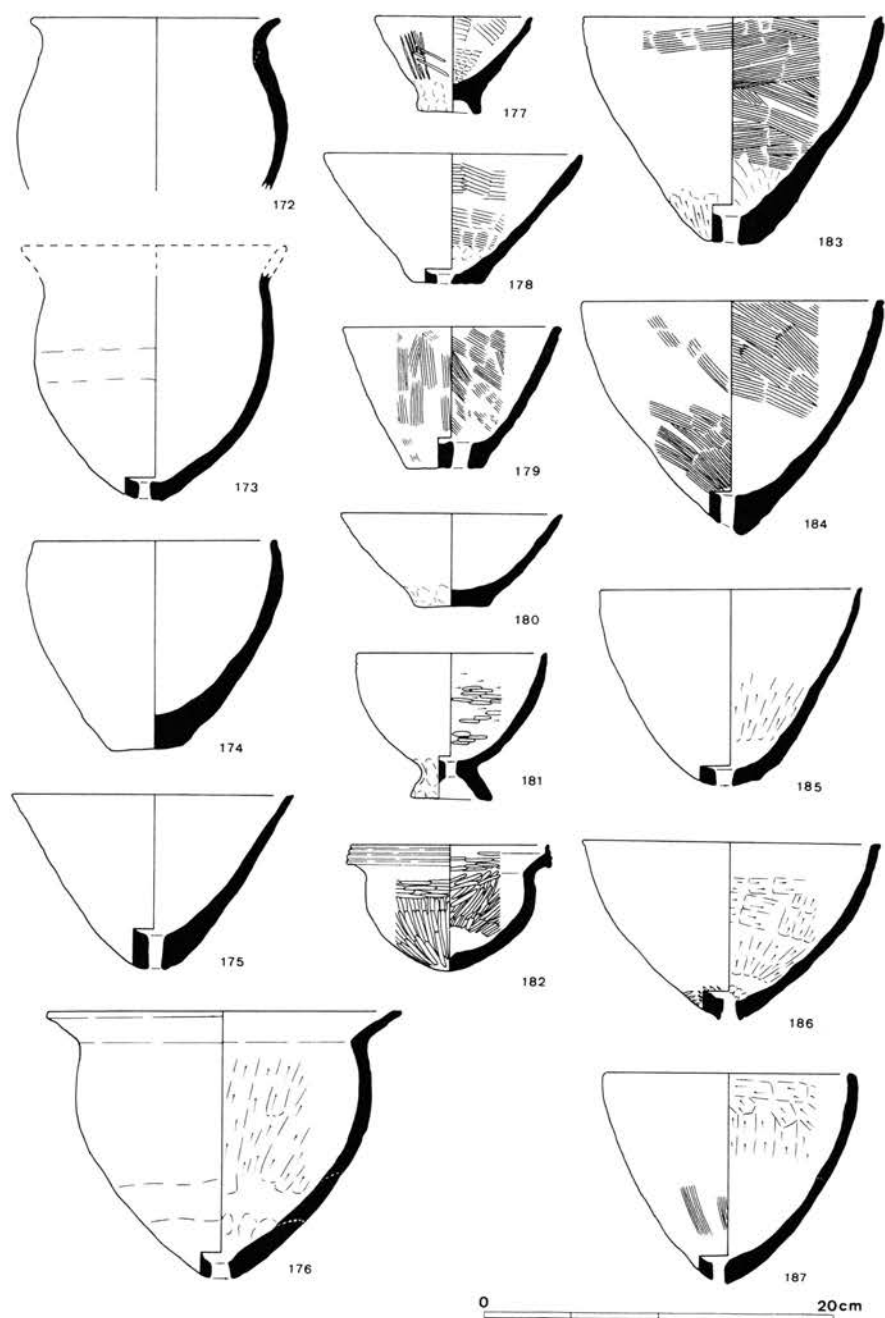
第33図 B地点 S D01 出土遺物 (9)

壺 Ba; 160, 甕 Ea; 148~151, Eb; 152・153・157, Ec; 154・158,
鉢 Ca; 155, Cb; 159, 手焙型土器; 156



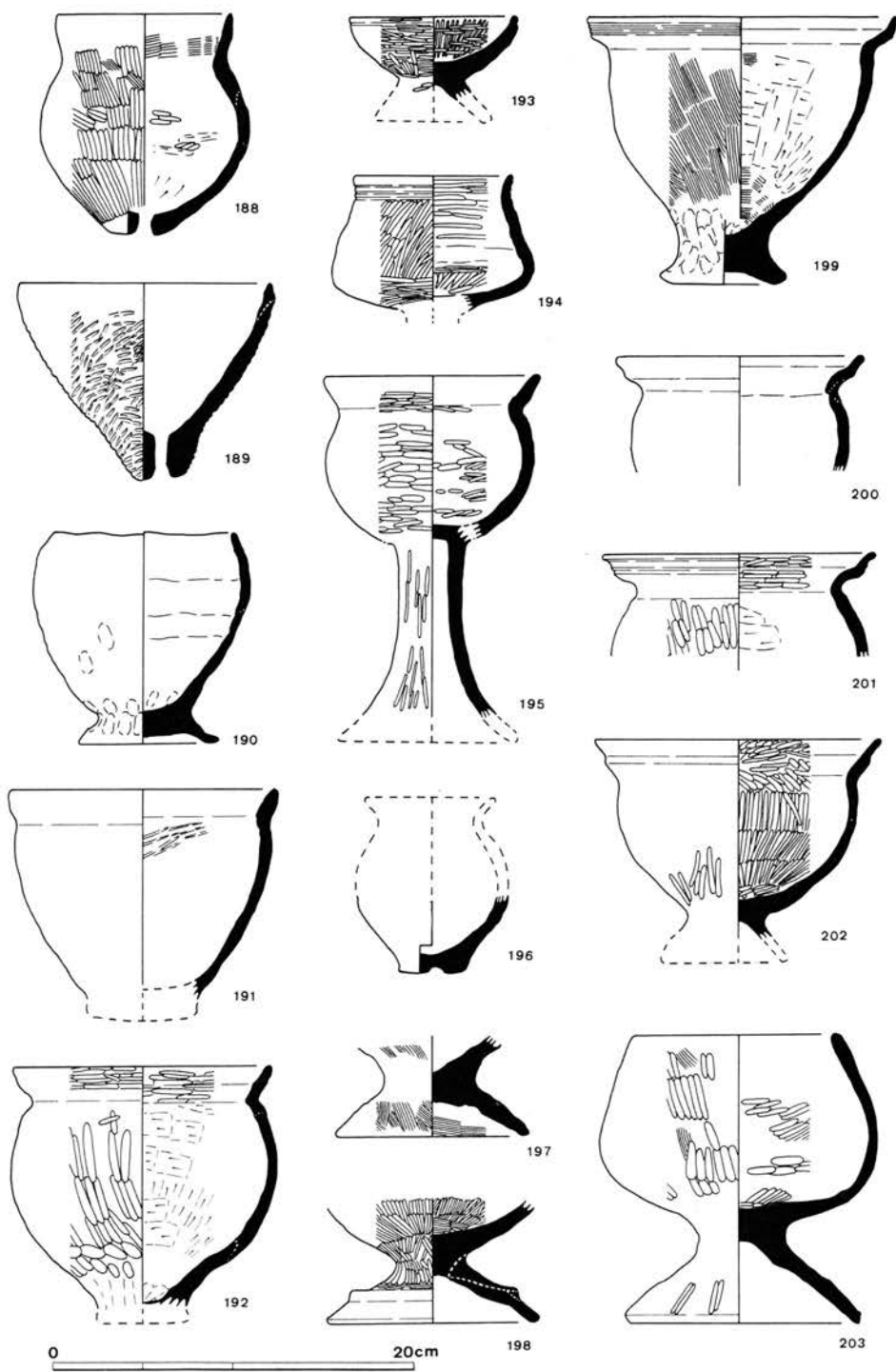
第34図 B地点 SD01 出土遺物 (0)

鉢 A ; 162・163・165・166, 鉢 B ; 164, 鉢 Ca ; 161, 鉢 F ; 167~169, 鉢 G ; 170・171



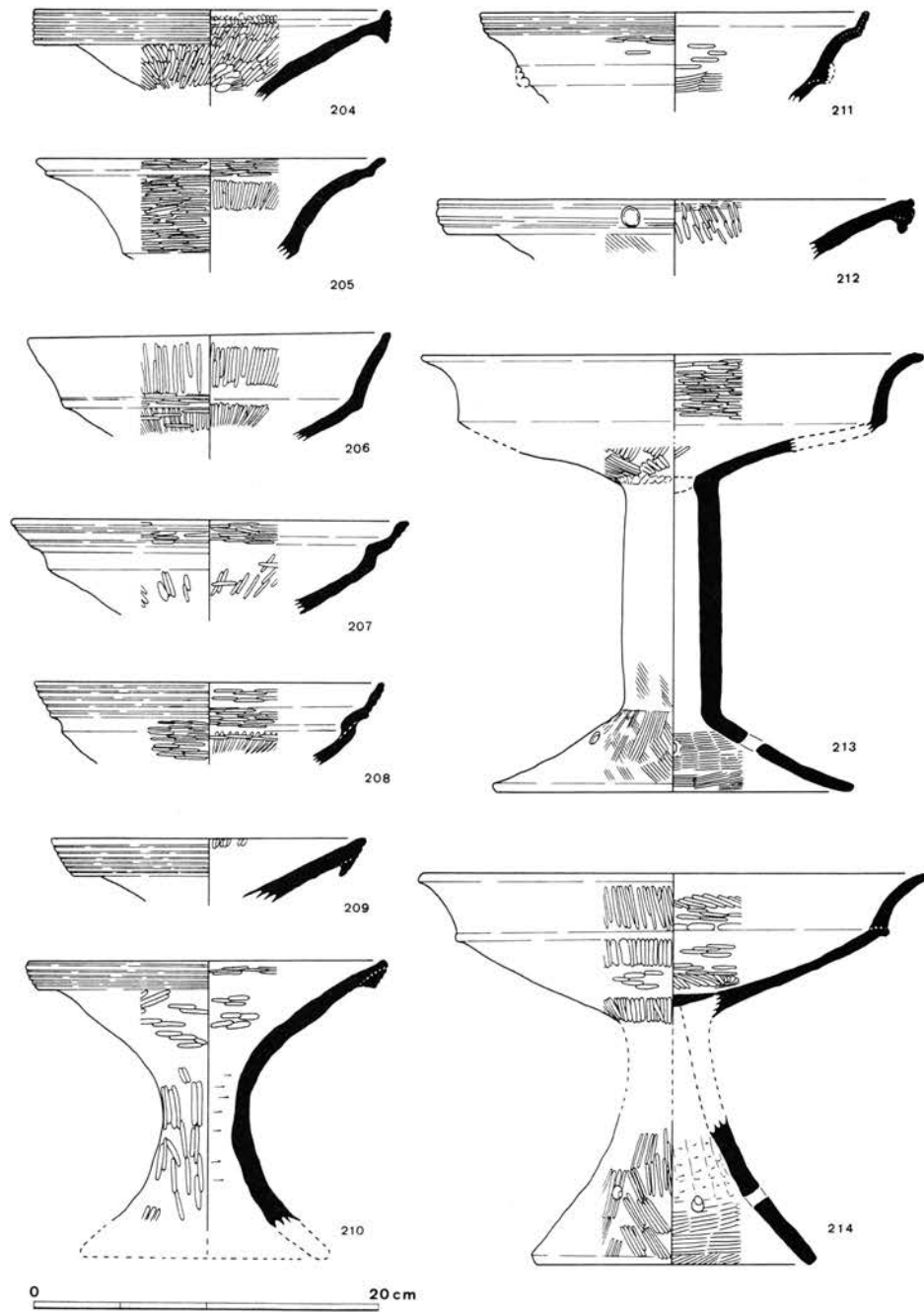
第35図 B地点 S D01 出土遺物 (II)

鉢 Da; 180, Db; 178・179, F; 174・175・183~187, H; 172・173・176, E; 182,
台付鉢A; 177, B; 181



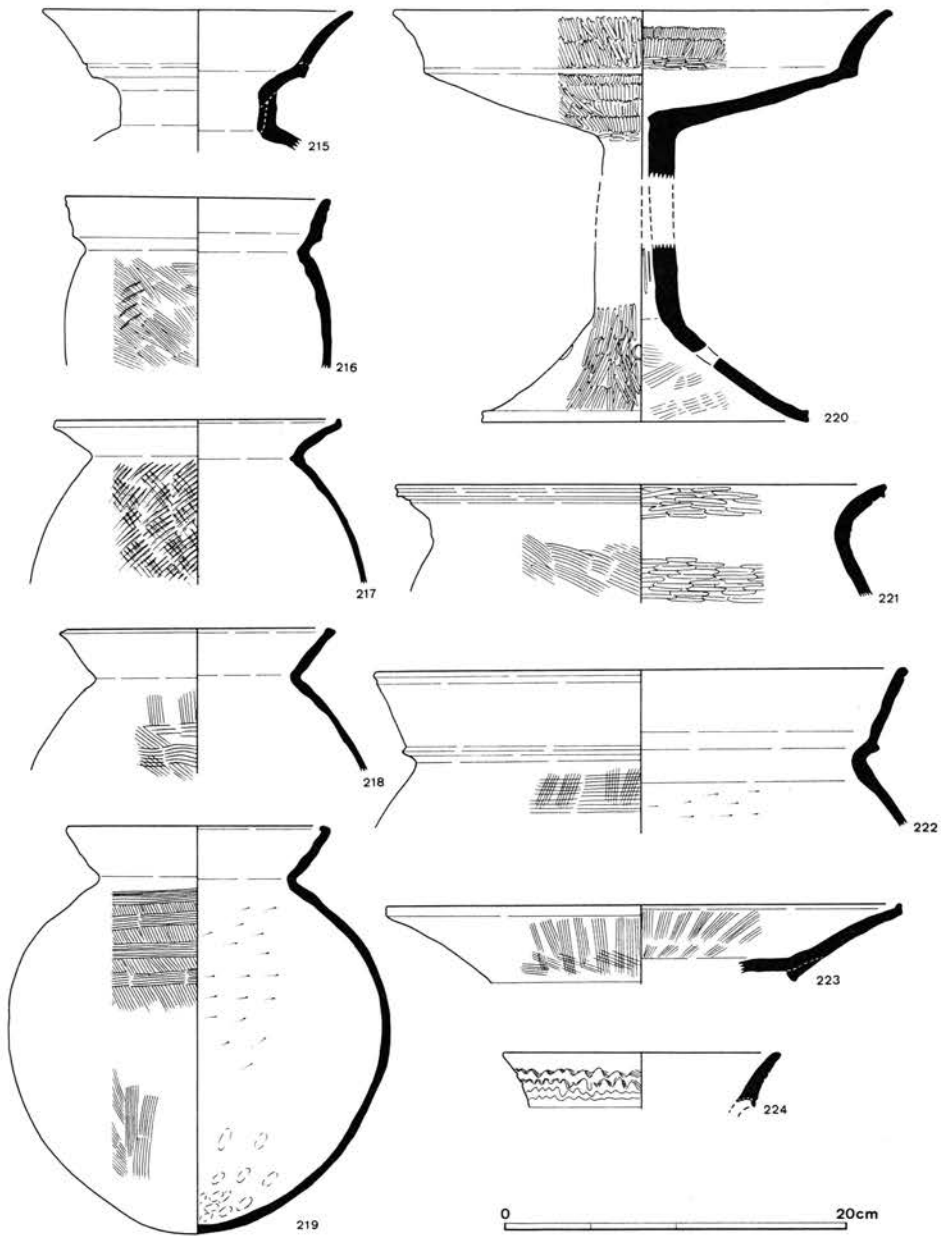
第36図 B地点 SD01 出土遺物 (12)

壺 E; 188, 鉢 F; 189, H; 191・192, 台付鉢 B; 190, C; 193・194・203, D; 199~202, E; 195



第37図 B地点 S D01 出土遺物 03

高杯 A ; 206・213・214, C ; 207・208, 器台 A ; 204・212, B ; 209・210, C ; 205・211



第38圖 B地点 SD01 出土遺物 (4)

壺 J; 215・223, 甕 Bb; 221, Da; 216, H; 217, I; 218・219, J; 222, 高杯 A; 220

直立あるいは斜め上方に屈曲させた複合口縁形を呈するもので、体部は完形に復元しうる62でみると、口径12.2cm・器高24.7cm・体部最大径22.7cmを測る。62は、上げ底ぎみの平底を呈し、66と同様、鉢形土器を形成したのち、粘土帯をつぎたしたものである。体部内面には横あるいは斜め方向のハケ、体部外面にはハケののち、肩部のみ縦方向のヘラ磨きを加える。口縁部内・外面は横ナデ調整であるが、58は内・外面に横方向のヘラ磨きを、61はハケののち一部横方向のヘラ磨き調整を行う。160は体部最大径が下位にあり、体部最大径31.2cm・器高33.4cm・腹径指数1.37を測り扁平な感を与える。160は口縁部外面に4～5本単位の櫛描列点文、体部外面には櫛描直線文+櫛描列点文を施し、後述する甕Eaと同様の文様を施す。

壺Bb(63・64)は複合口縁形を呈するが、頸部の外反度が弱く、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。壺Bbは壺Baの口径が12～14cmに対し、口径17～22cmを測る大型品である。口縁部外面には1～3条の擬凹線文を施すものが多い。

壺Bc(71・82・83・85・86)は、倒卵形の体部から筒状の頸部へ続き、口縁部が頸部より外反したのち、直立ぎみに立ち上がり、複合口縁形を呈する。71は口径10.2cm・器高15.7cm・体部最大径13.4cmを測り、体部外面にナデ、内面にヘラ削り、頸部外面に縦ハケ、口縁部内・外面に横ナデ調整を施す。82・83・85・86は体部の形状が倒卵形を呈しないが、口縁部の形状から壺Bcに含めた。

壺Be(137・138)は、単純「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部が外反ぎみに立ち上がる複合口縁形を呈し、口縁部外面には4条の擬凹線文を施すもの(137)と施さないもの(138)がある。137・138は口縁部内・外面にいていねいなヘラ磨き調整を施す。壺Beは体部下半を欠損し、全体の形状が不明であるため、鉢に含まれる可能性がある。

壺Ca(72)は、口縁部が単純「く」の字形に屈曲したもので、口縁部の立ち上がりが短い。壺Caは体部及び口縁部の形態から甕に近似するが、全体に胎土が精良であり、外面にススを含まないため、壺と考えられる。72は口径22.0cmを測る。

壺Cb(55・65・67～69・75)は、ナデ肩の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲したもので、壺Caに比し、口縁部の立ち上がりが長い。口縁部はヘラによる刻み目を施すもの(55・65)、凹線文をめぐらすもの(67)、無文のもの(68・69・75)がある。口縁部及び体部外面にはハケ調整(67)、ヘラ磨き調整(69・75)のほかナデ及び横ナデ調整を施すものがある。67は内面の粘土帯の接合痕が明瞭である。

壺D(73)は、筒状の頸部から口縁部が屈曲したのち、口縁部下方に粘土帯をつぎたし面をなす。口縁部外面には4～5条の擬凹線文を施す。73は粘土帯のつなぎ目が明瞭であり、体部内面下半はヘラ削り、上半はハケ調整を施す。体部外面は右上がりのタタキ目が認め

られる。壺Dは口縁部の形状・擬凹線文の存在などに丹後・丹波北部の特徴が認められる。

壺E(70・87~89・188)は、ナデ肩の体部から口縁部が直立あるいは斜め方向に直接的に立ち上がり、口縁端部が尖りぎみにおわる。体部外面にはハケ調整(70・88・89)と横方向のタタキのち一部ハケ調整を加えるもの(87)がある。底部は平底あるいは丸底ぎみの平底となる。188は底部中央に焼成前に円孔を穿つ。87の底部は上げ底ぎみとなり、外面には一部ヘラ削りが認められる。

壺F(90~93)は、倒卵形の体部から頸部が直線的に長く立ち上がる長頸壺であり、体部外面にはハケ(92)あるいは横及び右上がりのタタキを施すもの(90・91)がある。壺Fは完形に復元しえる資料がない。91は口径12.0cm、92は口径9.0cm・体部最大径14.7cm・腹径指数1.13を測る。

壺G(76~81)は、扁球形の体部から外反ぎみに長く立ち上がる頸部へ続き、口縁部は直立ぎみに立ち上がる細頸壺である。口縁部外面には無文のもの(79)と擬凹線文を施すもの(76~78)がある。体部外面及び口縁部外面にはいずれもていねいなヘラ磨き調整を施す。

壺J(215・223)は、筒状の頸部から口縁部が「く」の字形に屈曲したのち、粘土帯をつぎたし、さらに外反させる二重口縁の壺である。223は口縁部屈曲の下端に粘土帯をつぎたし、複合口縁形をなすもので、口縁部内・外面には放射状の粗いハケ調整を施す。215は口径18.4cm、223は口径29.6cmを測る。

蓋(84)は、裾開きの口縁部で、把手部は棒状を呈し、長く立ち上がる。把手部及び口縁部には凹線文をめぐらす。外面には全面でていねいなヘラ磨きを、内面にはナデ調整を施す。

甕Aa(96)は、倒卵形の体部から口縁部が「く」の字形に屈曲したのち、口縁端部を上下に肥厚させ面をもつもので、口径24.6cm・器高32.8cm・体部最大径28.4cmを測り、口径指数1.33・腹径指数1.15となる。96は粘土帯の接合痕より、体部中位までまず突出ぎみの厚い平底の鉢形土器を成形したのち、粘土帯を口縁部まで積み上げたもので、内面下半にはナデ及び縦ハケ、上半には横ハケ調整、体部外面には横方向の幅広のタタキのち横ハケ調整を加える。口縁部内・外面には横ナデ調整を施すが、一部内面に横ハケが認められる。甕Aは後述する甕Ab~eに比して大型品である。

甕Ab(98・100)は、長胴形の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲し、口縁端部が丸みをもっておわるものである。体部外面には横あるいは右上がりの粗いタタキを施したのち、ナデあるいは縦ハケ調整を一部加えるもので、体部内面はいずれもナデあるいはハケ調整である。98は口径16.8cm・体部最大径21.4cm・腹径指数1.27、100は口径14.8cm・体部最大径18.3cm・腹径指数1.24を測り、甕Aaに比し、腹径指数は大きい。

甕Ac(94・97)は、口縁部が「く」の字形に屈曲したのち、口縁端部を上方につまみあげ

たもので、口縁端部外面にわずかに面をもつ。体部外面は甕Aa・Abと同様、横あるいは右上がりの粗いタタキ目を残すが、ハケ調整は認められない。94は口径16.8cm・体部最大径21.8cm・腹径指数1.30を測る。

甕Ad(108・109・122・129)は、長胴形の体部から「く」の字形にゆるく屈曲する頸部へ続き、口縁部は直立ぎみに短く立ち上がる。口縁端部外面には2条の不明瞭な擬凹線文をめぐらす。体部内面にはハケ、外面には右上がりの平行タタキののち、下半のみ斜め方向のハケ調整を加える。102は口径14.4cm・体部最大径14.2cm・腹径指数1.00となり、口径と体部最大径がほぼ等しい。

甕Ba(111・112)は、球形に近い体部から口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がる。体部外面は横あるいは右上がりのタタキののち、縦ハケによりタタキ目を消す。体部内面下半は斜め方向の、上半は横方向のヘラ削り、口縁部内・外面はハケあるいは横ナデ調整を施す。111は口径16.0cm・体部最大径24.6cm・腹径指数1.53、112は口径13.2cm・体部最大径23.4cm・腹径指数1.77を測る。

甕Bb(110・113・123・128・134)は、ナデ肩の体部から口縁部が「く」の字形に屈曲したもので、甕Abに口縁部形態は近似するが、体部外面がナデあるいはハケ調整で仕上げる。体部内面にはヘラ削りのほか、一部ハケあるいはナデ調整を施したものがある。

甕Ca(115・117・118・120・124・125・131・132・135)は、倒卵形あるいは長胴形の体部から「く」の字形に屈曲する頸部へ続き、口縁部は斜めあるいは直立ぎみに短く立ち上がり複合口縁形を呈する。体部外面にはハケあるいはナデ調整を、内面にはヘラ削りあるいはハケ調整を施す。甕Caは完形に復元しえる120でみると、口径17.8cm・体部最大径23.6cm・器高24.9cm・径高指数1.40・腹径指数1.33を測り、器高と体部最大径がほぼ等しい。120の体部最大径が中位よりやや上方にあるのに対し、115は完形に復元しえないが、体部下半に体部最大径があり、他例とは体部の形態を異にする。

甕Cb(114・116・119・121)は、倒卵形の体部から「く」の字形に強く屈曲する頸部へ続き、口縁部は斜め上方に直立あるいは外反ぎみに長く立ち上がるもので、甕Caに比し口縁部の立ち上がりが高い。体部外面にはハケあるいはナデ調整を、体部内面にはハケ調整を施す。114は体部最大径が肩部近くにあり、口径18.0cm・体部最大径20.8cm・腹径指数1.16を測る。116は体部最大径が中位近くにあり、口径16.6cm・体部最大径21.4cm・腹径指数1.29を測る。

甕Da(133・139～143・145～147)は、複合口縁形を呈し、口縁部外面に板状工具によって4～5条の擬凹線文を施したもので、頸部から口縁部の屈曲が鋭いもの(139・142・147)と丸みをもつもの(133・140・141・143・145・146)があり、形態的には前者が古相である。143は口縁部の屈曲に丸みをもち、口縁部から頸部外面にかけ4条の擬凹線文をめぐらす。

ぐらす。甕Daは体部外面をハケで仕上げるのが主体であるが、140・147は横方向のタタキ目が一部認められる。体部内面はいずれもヘラ削り調整されてる。甕Daは口径16～19cmを測り、遺存状態のよい146は、口径15.4cm・体部最大径17.1cm・腹径指数1.24、147は口径17.2cm・体部最大径19.8cm・腹径指数1.15を測る。甕Daは丹後・丹波北部に出土例が多い。133は口縁部の立ち上がりが長く、口縁部外面に6条の擬凹線文を施したもので、他例とは若干形態を異にする。

甕Db(126・144)は、口縁部の形態は甕Cbに近似するが、体部内面にヘラ削り調整を行い、甕Daから派生した丹後・丹波北部に特徴的な器形と考えられる。126は体部外面に一部右上がりのタタキ目が認められる。

甕Ea(148～151)は、「く」の字形に屈曲する頸部から直立ぎみに立ち上がる受口状口縁形を呈し、口縁部外面には4～5本単位の櫛描直線文を施すもの(148・150・151)と施さないもの(149)がある。体部外面には4～8条の櫛描直線文と櫛描列点文を施文する。体部外面には施文前に斜め方向のハケ調整を、体部内面はナデあるいはハケ調整を主体とするが、一部ヘラ削り(148)を施すものがある。甕Eaは口径12.5～14.5cmを測り、遺存状態のよい148では口径12.6cm・体部最大径13.7cm・腹径指数1.09を測る。甕Eaは近江地方に特徴的な器形及び施文方法をなす。

甕Eb(152・153・157)は、受口状口縁形を呈するが、口縁部外面にはヘラ描列点文を、体部外面にはヘラ描きあるいは棒状列点文をそれぞれ施す。体部外面及び口縁部外面の一部に施文前にハケ調整を施す。体部内面はハケ調整を施す。

甕Ec(154・158)は、甕Caに近似するが頸部から口縁部の屈曲に丸みをもち、甕Ea・Ebの形態でありながら施文しないものである。遺存状態のよい154は、体部内・外面にはハケ、口縁部内・外面及び体部上半の一部に横ナデ調整を施す。口径13.4cm・体部最大径17.8cm・腹径指数1.33を測る。

甕F(136)は、体部下半を欠くが、体部最大径が中位より下方にあるものと思われる。口縁部は、ナデ肩の体部から「く」の字形に屈曲したのち、口縁端部を肥厚させる。口縁部外面には不明瞭な一条の擬凹線文をめぐらす。体部外面には縦ハケ、内面には粗いヘラ削り調整を施す。136は、口径13.0cmを測る。

甕G(130)は、ナデ肩の体部から「く」の字形に屈曲する口縁部へ続くが、口縁部外面に粘土帯をつぎたし幅広の口縁をなす。体部内・外面にはナデ、口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。130は、口径18.2cmを測る。

甕H(217)は、ナデ肩の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲したのち、口縁端部をわずかにつまみあげる。体部外面に右上がりの細かいタタキののち、左上がりのタタキを一

部加える。217は口径16.0cmを測る。

甕I(218・219)は、球形の体部から口縁部を単純「く」の字形に屈曲させ、口縁端部は上方につまみ上げたのち、内側に折り返し面をつくるもので、典型的な布留式の甕である。218・219は体部外面にハケ、内面上半にヘラ削り調整を施す。218は口径15.4cm、219は口径14.6cm・器高23.6cm・径高指数1.61を測る。

鉢A(162・163・165・166)は、半球形の体部から口縁部が「く」の字形に屈曲したもので、底部は突出ぎみの平底と考えられる。体部外面はナデ、内面はハケあるいはナデ調整である。166は体部外面に右上がりのタタキ目が認められる。162は口径17.4cm・器高10.0cm・径高指数0.57を測る。

鉢B(164)は、鉢Aと同形態を呈するが、口縁端部を上方に屈曲させ、複合口縁形を呈したものである。鉢Bは後述する鉢Caと口縁部の形態が近似するが、口径が大きく扁平な感をあたえる。164は口径23.2cm・器高9.1cm・径高指数0.39を測る。

鉢Ca(155・161)は、半球形の体部から「く」の字形に屈曲する頸部へ続き、口縁部が直立ぎみに立ち上がる複合口縁形を呈する。体部外面はハケあるいはヘラ磨きによりていねいに仕上げる。体部内面はていねいなヘラ磨き(161)のほか、ハケあるいはヘラ削りを施すもの(155)がある。155は口径17.8cm・器高11.8cm・体部最大径19.9cm・径高指数1.66・腹径指数1.01を測る。161は口径18.4cm・器高9.9cm・体部最大径16.6cm・径高指数0.54・腹径指数0.90を測る。

鉢Cb(159)は、半球形の体部から「く」の字形に屈曲する頸部へ続き、口縁部が直立あるいは斜め上方に短く立ち上がる受口状口縁形を呈するもので、口縁端部外面に4本単位の櫛描列点文を、体部外面には4本単位の櫛描直線文+櫛描列点文を施文したもので、体部内・外面は施文前にハケ調整を施す。鉢Caは甕Eaと同様、近江地方に特徴的な器形である。159は口径18.0cm・器高10.3cm・体部最大径21.8cm・径高指数0.57・腹径指数1.21を測る。

鉢Da(180)は、平底の底部から直線的に立ち上がる体部へ続き、口縁端部は尖りぎみに終わる。体部及び口縁部内・外面は横ナデ調整を施す。180は口径15.6cm・器高6.6cm・径高指数0.24を測る。

鉢Db(178・179)は、鉢Daに近似するが、底部に焼成前に円孔を穿つ。178は体部外面をナデ、体部内面をハケ調整、179は体部内・外面ともハケ調整を施す。178は口径14.8cm・器高7.4cm・径高指数0.5、179は口径12.5cm・器高8.0cm・径高指数0.63を測る。

鉢E(182)は、半球形の体部から「く」の字形に屈曲する頸部へ続き、口縁部が直立ぎみに立ち上がる複合口縁形を呈するもので、口縁端部外面には3条の擬凹線文をめぐらす。182

は口径11.2cm・器高7.2cm・径高指数0.64を測る小型品である。

鉢F(167~169・174・175・183~187・189)は、平底あるいは尖頭ぎみの底部より、内湾ぎみに立ち上がる体部から口縁部へ続く砲弾形のもので、底部には174を除き焼成前に円孔を穿つ。鉢Fには体部外面にタタキ目を残すもの(168・169・189)、ハケあるいはナデ調整で仕上げるもの(167・174・175・183~187)がある。体部内面はハケ(183・184)、ナデ(167・169・174・175)、ヘラ削り(168・185~187)がある。168・169は口縁部が擬口縁を呈し、後期以降の分割成形により成立した器形である。

鉢G(170・171)は、砲弾形の体部より口縁部をゆるく外反させたもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部は欠損し不明であるが、焼成前に円孔を穿つものと思われる。体部外面には横あるいは右上がりのタタキを施し、下半にはナデあるいはハケ調整を加える。体部内面にはナデあるいはハケ調整を施す。170は口径14.6cm, 171は口径15.2cmを測る。

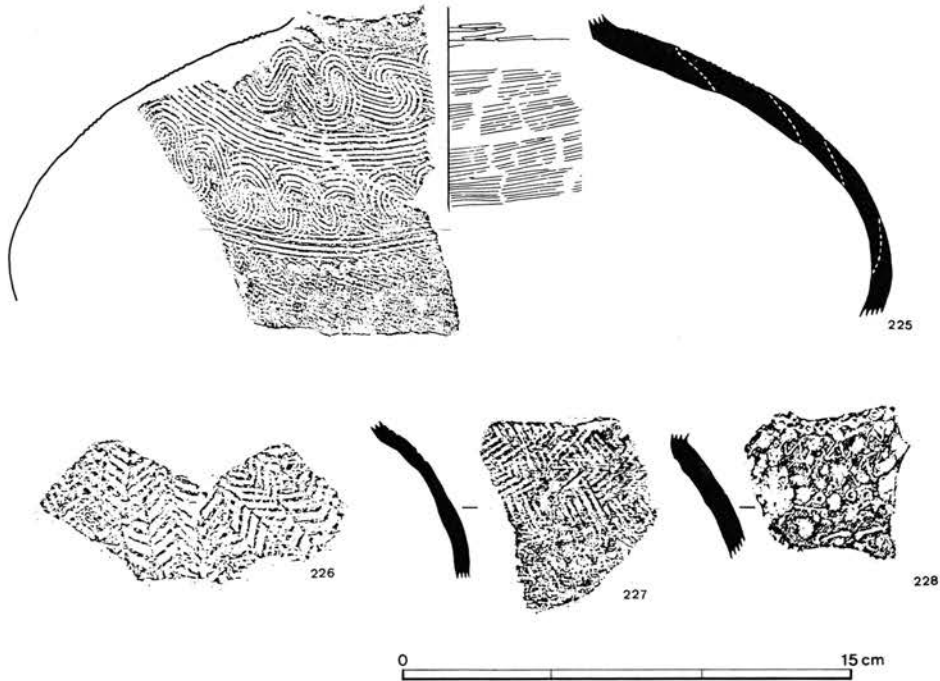
鉢H(172・173・176・191・192)は、倒卵形あるいは砲弾形の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲したもので、底部は平底(191・192)あるいは尖頭形(173・176)を呈し、尖頭形のものには焼成前に円孔を穿つものがある。172・173・191は体部内・外面にナデ調整を、176は体部外面をナデ、内面をヘラ削り、192は口縁部内・外面、体部外面にヘラ磨きを、体部内面にヘラ削り調整を施す。172は口径14.2cm, 176は口径20.1cm・器高15.3cm・径高指数0.76, 191は口径14.6cm, 192は口径14.6cmを測る。

台付鉢A(177)は、鉢Dに脚部を付したもので、脚部は粘土帯をつぎたし成形する。177は口径8.5cm・器高5.5cm・径高指数0.65を測る。

台付鉢B(181・190)は、深い椀状の体部から口縁部は直立ぎみに立ち上がる。脚部は粘土帯をつぎたし裾開きとなる。181は底部に円孔を焼成前に穿つ。181は口径11.4cm・器高8.2cm・径高指数0.72, 190は口径10.0cm・器高11.5cm・径高指数1.15を測る。

台付鉢C(193・194・203)は、半球形の体部から口縁部は内傾あるいは外反ぎみ(194)に立ち上がり、口縁端部が尖りぎみにおわる。脚部は裾開きとなる。体部内・外面にハケのちヘラ磨きを施すもの(203)と内・外面ともていねいなヘラ磨きするもの(193・194)とがある。194は口縁部内・外面に3条の擬凹線文をめぐらす。194は口径8.6cm, 203は口径11.2cm・器高16.0cm・径高指数1.43を測る。

台付鉢D(199~202)は、深い椀状の体部から「く」の字形に屈曲する頸部へ続き、口縁部が外反ぎみに立ち上がる複合口縁形を呈するもので、口縁部外面に擬凹線文を施すもの(199・201)と施さないもの(200・202)がある。脚部の遺存するものは199のみであり、199によると短い脚部を付したものがある。体部外面にはハケ(199)のほか、ナデあるいはヘラ磨きを施すもの(200~202)があり、内面はヘラ磨きを施すもの(202)とヘラ削りを施すもの



第39図 B地点 SD 01 出土遺物 (5)

(199・201)がある。完形に復元しえる199では口径17.2cm・器高14.7cm・径高指数0.85を測る。

台付鉢E(195)は、球形の体部から口縁部が斜め方向に短く立ち上がる。脚部は柱状の高い脚部を貼りつける。体部内・外面及び脚部外面にはヘラ磨き調整を施す。

脚部(197・198)は、裾開きの短い脚部であり、198は粘土帯を貼りつけ段をなす。

高杯A(213・214)は、斜め上方に直線的に立ち上がる杯部から口縁部が粘土帯をつぎたし直立ぎみに外反させた浅い皿状を呈するもので、脚部は長い柱状部から裾開きの脚部へ続くもの(213)と杯部からゆるく裾開きぎみとなるもの(214)がある。杯部内・外面にはていねいなヘラ磨きを施し、脚部はヘラ磨きあるいはハケ調整により仕上げる。脚部内面にはヘラ削りあるいはハケ調整を施す。213は口径29.0cm, 214は口径29.2cmを測る。

高杯C(207・208)は、浅い碗状の杯部から口縁部が「く」の字形に屈曲したのち、斜め上方に立ち上がるもので、口縁部外面には2～5条の擬凹線文をめぐらす。杯部及び口縁部内・外面にはていねいなヘラ磨き調整を施す。高杯Cは丹後・丹波北部でよくみられる器形である。207は口径22.4cm, 208は口径20.0cmを測る。

器台A(204・212)は、脚部から斜め上方にゆるく立ち上がる受部へ続き、口縁部が内・

外方に粘土帯でつぎたし、面をなす。口縁部外面には3～5条の擬凹線文を施す。212は擬凹線文を施したのち、円形浮文を貼りつける。受部内・外面はヘラ磨きを施すもの(204)と、外面にハケが認められるもの(212)がある。

器台B(209・210)は、斜め上方に立ち上がる受部を呈し、口縁端部は下方に粘土帯でつぎたし面をつくる。口縁部外面には5～6条の鈍い擬凹線文をめぐらす。器台Bの脚部は裾開きとなる。受部内・外面及び脚部外面にヘラ磨きを、脚部内面にヘラ削り調整を施す。209は口径18.0cm, 210は口径20.4cmを測る。

器台C(205・211)は、斜め上方に立ち上がったのち、内傾ぎみに屈曲する受部から口縁部が斜め上方に短く立ち上がる。口縁部外面には無文のもの(205)と3～4条の擬凹線文を施すもの(211)がある。受部内・外面をていねいなヘラ磨きによって仕上げる。205は口径19.8cm, 208は口径22.0cmを測る。

手焙型土器(156)は、半球形の体部に覆い部をつけたもので、体部には2条のヘラによる刻み目突帯を、口縁部には刻み目を、覆い部下半には櫛描列点文+櫛描波状文を加飾する。体部と覆い部の境には下半に布目圧痕をもつ耳を貼り付ける。

拓影(225～228) 225は壺Aの体部片と思われる。扁球形の体部を呈し、肩部外面には直線文と波状文を加飾する。226・227は甕Aの体部片である。体部外面には羽状のタタキ目を施す。羽状のタタキ目の出土例として京都府下では、京都市長刀鉾町遺跡^(注11)・同中臣遺跡^(注12)・向日市今里遺跡^(注13)などがある。228は壺の体部片である。体部外面に波状文と円形竹管文を加飾する。

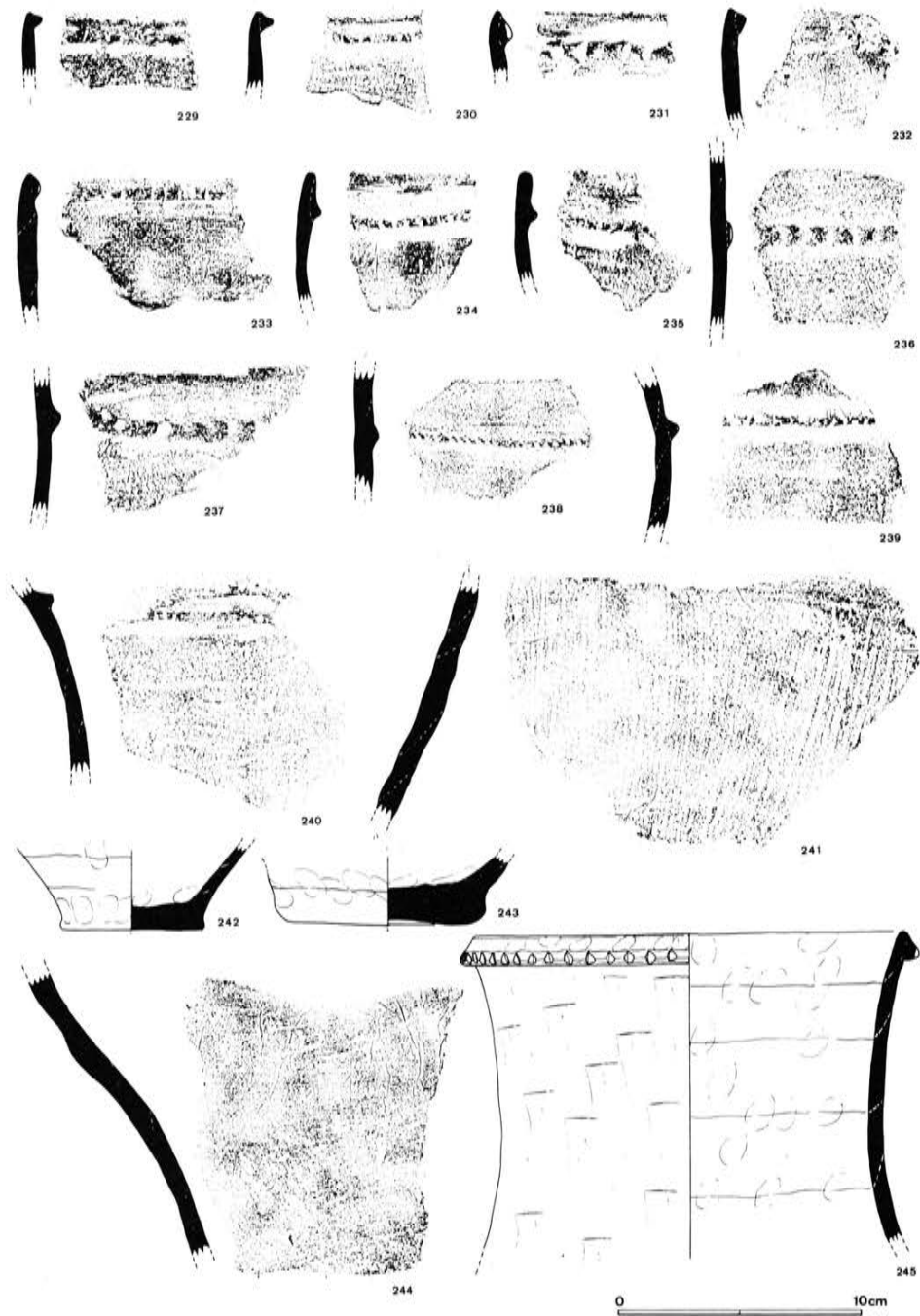
(石井 清司)

縄文土器 (第40図)

SD01出土遺物には弥生土器のほか、縄文土器が細片を含め81点出土した。縄文土器81点の内訳は口縁部片10、体部片69(そのうち、突帯を有するもの6)、底部片2である。縄文土器の胎土には長石・石英粒を主体とし、頁岩ないし粘板岩・ホルンフェルス・チャート等の岩石を含む在地型(A型)と角閃石を多く含む砂質で「チョコレート色」を呈する非在地型(B型)とがある。A・Bの比率はA:B=34:47で後者が前者を上回る。器種は深鉢と壺形土器で、その他の器種は認められない。いずれも長原式に属するものであろう。

深鉢(229～241・244)

229～241は口縁部片である。229・230は口唇部に接して幅の狭い断面三角形の貼りつけ突帯をめぐらし、刻みを施す。突帯の造作にかかる調整としては、主に上端から行う。突帯の調整は、口唇部の調整を兼ねて丁寧に行われるが、下端は整形痕とみられる爪状の痕跡を残すなどやや粗雑である。刻みは、229では残存状態が良くないため明確ではないが、先端の鋭いヘラ状の工具によって軽く浅く施されている。230はV字状に近いD字形でかる



第40図 B地点 SD 01 出土遺物 06 縄文土器

く浅い。調整はナデを基調とする。230は内面指オサエののち横方向のナデ、外面は指オサエののち横方向のていねいなナデによって平滑に仕上げる。胎土はいずれも「チョコレート色」を呈し、径1mm未満の角閃石の混入が著しい。229は長石・石英粒が目立ち、全体に粗さが認められるが、230では長石・石英粒が微量であり、長石・石英粒にかわって径1mmを越える金雲母の混入が顕著である。231は口唇部に接して断面▶形のやや幅の広い刻み目突帯をめぐらす。突帯は229・230と同様、上端部の調整に主眼をおく。刻みは深く幅の広いD字形で右方向から施されている。内・外面ともナデ調整を施す。231は「チョコレート色」を呈し、長石・石英・角閃石等の鉱物の混入が顕著である。232は断面▶形のやや幅広い突帯を口唇部に接してめぐらす。230～241にみられた刻み目は認められない。232は指オサエによる成形ののち、ていねいなナデによって器壁を平滑に仕上げる。胎土は在地型と考えられる。径1mm前後の長石・石英粒の混入が認められるが、角閃石は認められない。232は外面にススが付着している。233は口唇部に接してD字形のやや幅広い刻み目突帯をめぐらす。突帯はナデ調整が施され、ていねいに仕上げる。刻み目はヘラの先端を用いて浅く細いV字形を呈する。器壁調整は口縁部内面に指オサエ痕が残るが、内・外面は横方向のナデ調整によって仕上げる。胎土には径1～2mmの均質な質量をもつ石英・長石の著しい混入が認められ、全体的に砂質である。233は暗灰褐色の色調を呈し、在地型と考えられる。なお、233の接合方向は内傾接合と考えられる。234・235は直口の口縁をもち、口唇部下約1.5cmに幅の狭い貼りつけ突帯をめぐらしたものである。突帯は234では粘土帯を貼りつけたのち、下端を強いナデによって断面三角状につくりだすのに対し、235では口唇部下端にやや幅広い粘土帯を貼りつけたのち、下方へ強くナデ押しつつ、下から受けることによって成形を行う。従って、両者は突帯の部位・形状等において共通性が認められるが、断面にあらわれる接合痕には顕著な差が生じている。刻みはいずれも軽く浅く押され、小さなD字形を呈する。234は指オサエによる成形ののち内・外面を横方向のナデで仕上げる。234の成形は、内傾接合による。235は指オサエによる成形ののち、ていねいなナデ調整により仕上げる。胎土は234・235とも径1mmの長石・石英の混入をみる。角閃石を含まない在地型のものと思われる。なお、234の外面にはヘラ先端による縦位の刻みが認められる。236～240は頸・胴部間の破片資料である。胴部は張りをもたないもの(236～238)と張りの著しいもの(239・240)がある。刻み目突帯の形状は断面D字形を呈し、やや幅広いもの(236・237)と断面三角形を呈し、幅の狭いもの(238・239・240)がある。体部成形はいずれも内傾接合による。236・237はやや幅の広い断面D字形の刻み目突帯をもち、刻み目の形状はやや間のびしたD字形で、広く浅いのが特徴的である。236・237は器壁外面はナデ、内面は横方向の細かいヘラ磨きによってていねいに仕上げる。胎土は「チョコレート色」を

呈し、角閃石の混入が著しく、全体に砂質である。236は外面に炭化物の付着が認められる。239・240の刻み目は幅が狭く、突帯上面を強くナデつけ、やや凹状を呈し、下端も指オサエ痕を残すなど229・230に近似する。239・240の刻み目はヘラ先端により軽く浅いD字形を呈し、間隔は狭い。体部外面は縦位のヘラ削りののちナデ、内面はていねいなナデ調整によって仕上げる。胎土は「チョコレート色」を呈し、角閃石・金雲母の混入が著しい。238は幅の狭く低い断面三角形の突帯を貼りつけ、突帯上面を強いナデによって成形する。刻み目は幅が狭く浅いもので、刻み目の工具としては棒状工具側縁で施したものと思われ、一つ一つの刻みの形状は曲面をもち平滑である。238は暗茶褐色を呈し、径1mm未満の長石・石英粒の微細砂を多量に含み、在地型のものと思われる。241・244は深鉢の体部片である。241は内・外面をナデ調整によって仕上げるが、外面には上から下へ向けての粗い削り痕が、内面には内傾接合による粘土接合痕がそれぞれ顕著に認められる。241は径1~2mmの長石・石英粒の混入が著しく、在地型のものと思われる。244は頸・胴部間の体部片であり、下半には斜方向の削り痕が著しい。244は茶褐色を呈し、角閃石をはじめ長石・石英粒・金雲母等が混入し、非在地型と考えられる。244は内傾接合と思われる。

245は壺の口縁部であり、口径約20cmを測る。口縁部はやや外反しながら直立し、口唇部に接して断面D字形の刻み目突帯をめぐらす。突帯は指オサエののち、上端を強くナデ、口唇部の調整をかねる。下端は軽いナデによって仕上げ、指オサエ痕を残す。刻み目は浅く幅の狭いD字形を呈する。器壁外面は縦位のナデ調整で仕上げるが、幅1.5cmの板状工具の小口による削り痕が認められる。内面は横方向のナデ調整を施し、一部、内傾接合による接合痕が認められる。245の胎土は「チョコレート色」を呈し、径1~2mmの長石・石英粒が混入されるが、角閃石が主体を占める。角閃石は1mm以下を測り、他の石粒とはほぼ等質量のものが主体をなすが、中には径5mmを越える角礫もあり、全体には砂質である。

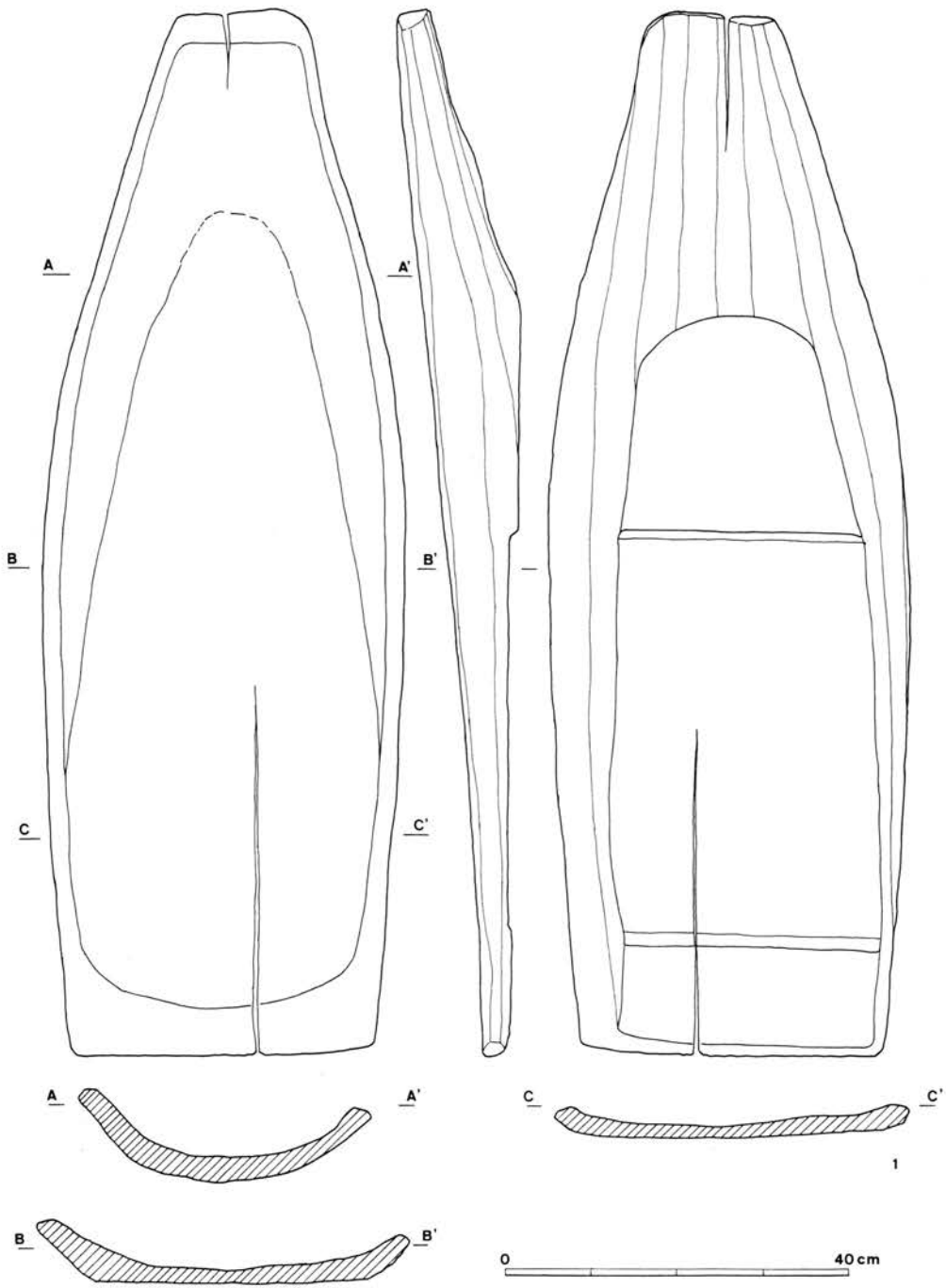
242・243は底部片である。242・243は角閃石を多く含む非在地型の胎土である。242は底径約6cmを測る。内・外面には指オサエ痕を残す。体部の接合は内傾接合と思われる。243は底径約8.5cmを測る。底部内面には指オサエ痕が顕著に認められる。

(田代 弘)

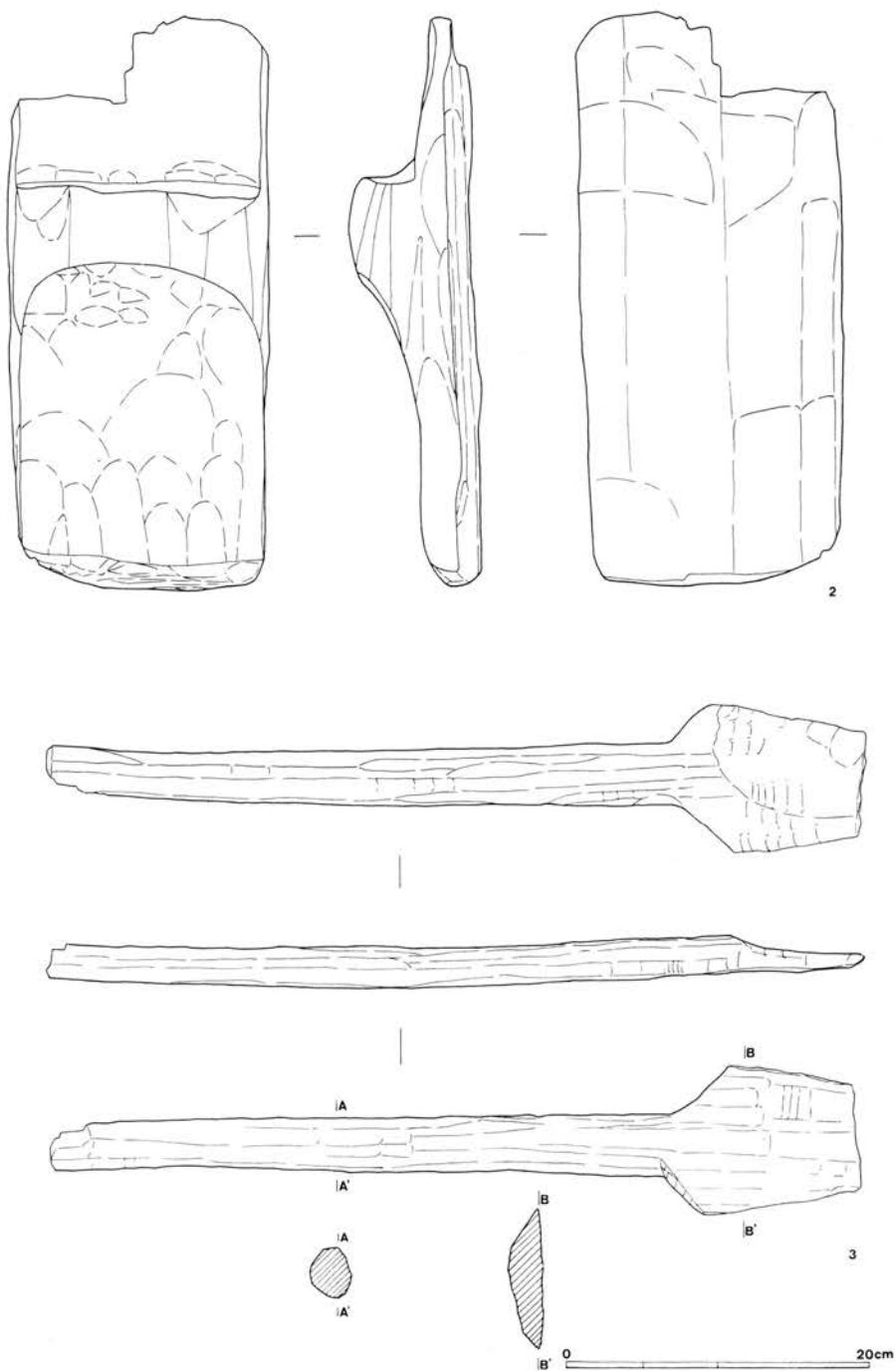
木製品 (第41・42図)

SD01出土の木製品には、遺構で記した堰板・立杭のほか、形態及び性格が明らかなものとして船型・梯子型・鋤型木製品がある。

船型木製品(M-1)は、堰の前面約3mに、北東方向に触先を向け、反転した状態で出土した。船型木製品は全長約118.8cm・最大幅約42.5cm・厚さ約3.2cmを測り、1本の丸木を刳り抜いて製作されている。触先部はわずかに反りをもち、尖りぎみとなる。艫は船部中



第41図 B地点 SD01 出土木製品 (1)



第42図 B地点 S D01 出土木製品 (2)

中央より同じ幅で続き、反りをもたず平坦となる。船部の削り抜きは舳先部の反りに沿い、厚さを等間隔にするため船部中央に向かって深く削り抜く。船体裏面には木材の反りの防止・水面の抵抗を少なくするため、長さ約47cm・幅約39cm・深さ約1~2cmの段を設ける。表面には調整痕が顕著であり、特に体部前半部の削り抜きの際の調整痕が著しい。

梯子型木製品 (M-2)は、堰の下流約3mで、踏部を上にして出土した。梯子型木製品は削り出しにより成形し、現存長約45cm・幅約18cm・蹴上げ部の厚さ約4cm・踏み込み部の厚さ約9cmを測る。踏み込み部は上部を直角に、下端はやや曲線をもって削り込み、断面カマボコ形を呈する。蹴上げ部は下端から約26.8cmを測り、下端はていねいに切断される。下端の切断痕より梯子の最下段のみ遺存したものと思われる。梯子型木製品はこれまで報告されている出土例から5段程度と考えられ、SD01出土梯子型木製品は推定長約1.7mと思われる。

鋤型木製品 (M-3)は、堰の前面、船型木製品に隣接して出土した。現存長約54cmを測り、柄部及び先端部は欠損している。柄部の断面は円形に近くていねいな面取りを行う。刀部は柄部から鈍角に広がり左右対称形をなさない。刀部断面は山形を呈し、厚さ約2cmを測る。

(石井 清司)

C-SD 16 出土遺物 (第43・44・45・46図)

SD16出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器がある。

下層出土遺物(246~282)

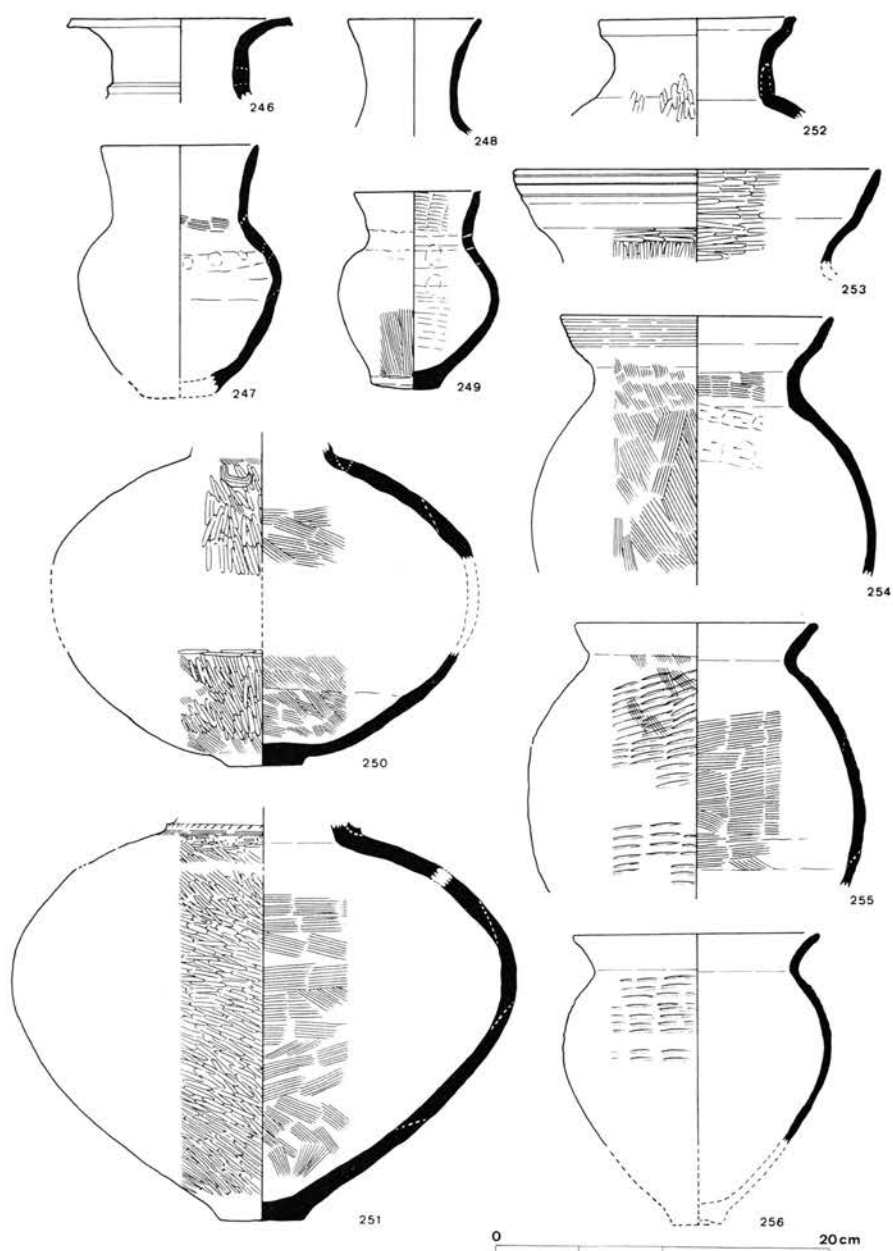
下層出土遺物には壺A・Ba・Bb・E・G・I、甕Ab・Bb・Ca・D・Ea・I、鉢Db・F・H、高杯A、器台A・B・C、小型器台がある。

壺A(246)は、筒状の頸部から口縁部が水平ぎみに広がるもので、頸部には突帯をめぐらす。246は口径13.0cmを測る。

壺Ba(252)は、筒状の頸部から口縁部がわずかに外反したのち、上方に立ち上がる複合口縁形を呈する。体部外面には縦方向の粗いヘラ磨きを施す。252は口径11.8cmを測る。

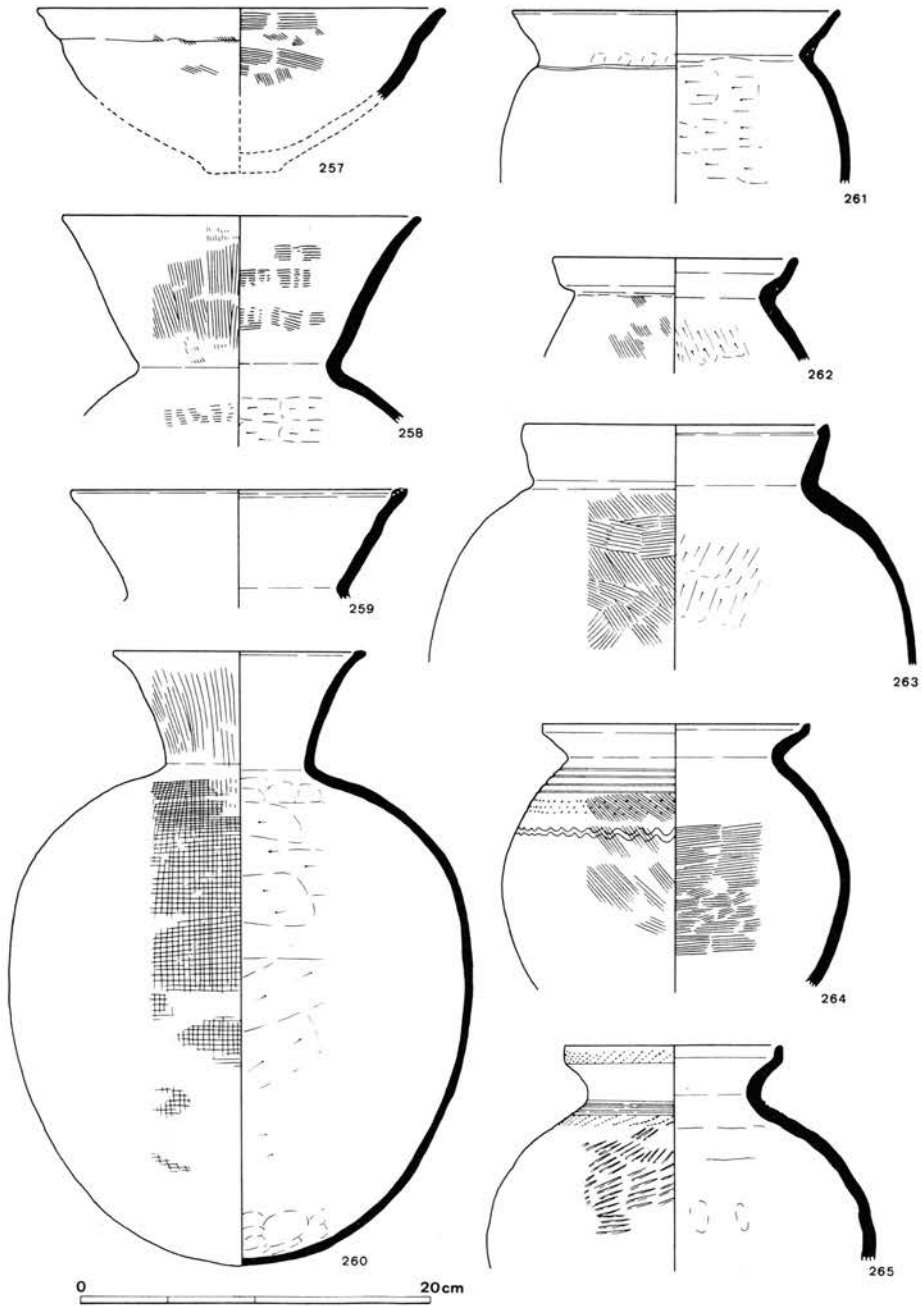
壺Bb(253)は、筒状の頸部から口縁部が外反したのち、直立ぎみに立ち上がる複合口縁形を呈するもので、口縁部外面には3条の擬凹線文をめぐらす。口縁部外面は横ナデ、口縁部内面は横方向のていねいなヘラ磨き調整を施す。253は口径21.8cmを測る。

壺E(247・249)は、倒卵形の体部から直立ぎみに立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。体部外面にはナデ(247)、あるいは縦ハケ調整(249)を施し、体部内面には粘土接合痕が顕著である。口縁部外面には横ナデ、内面には斜め方向のハケ調整が認められる。247は口径9.4cm、249は口径7.6cm・器高11.7cmを測る。



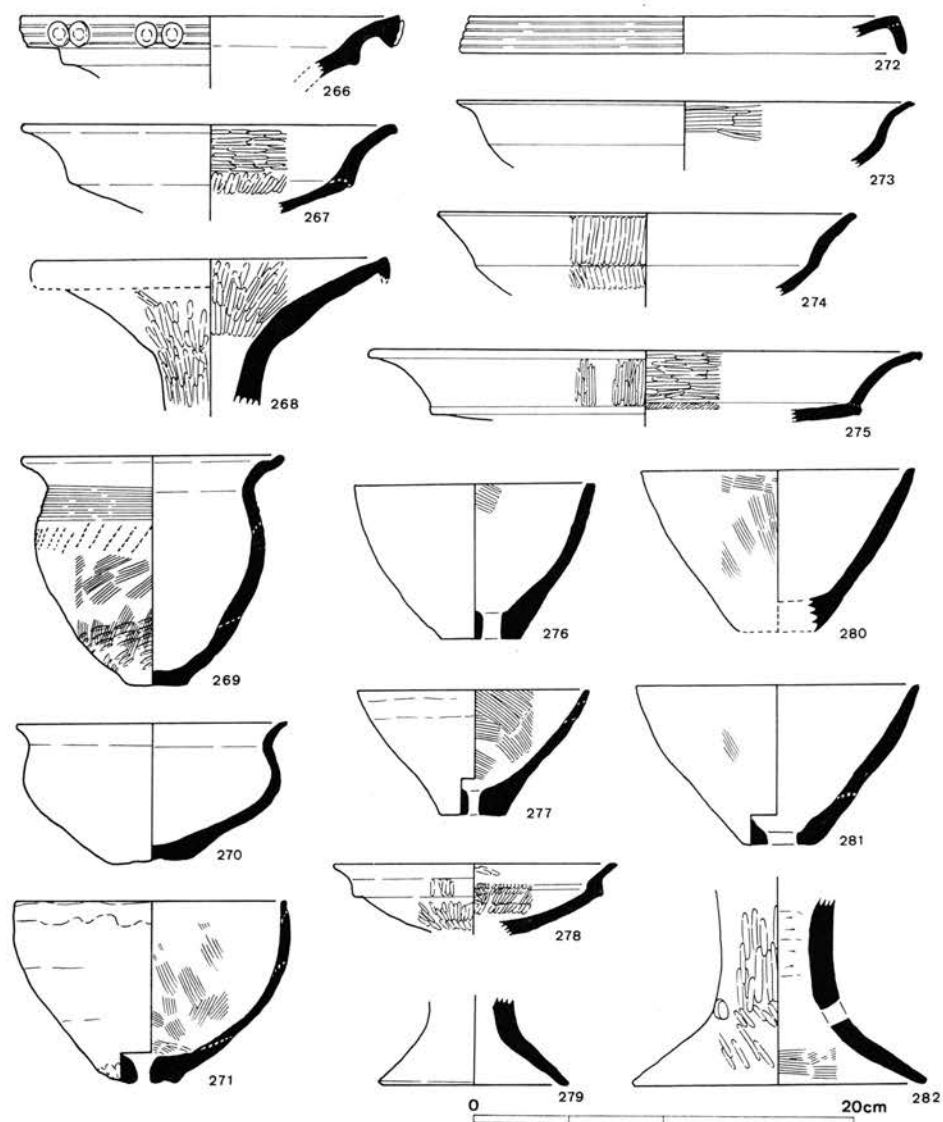
第43図 C地点 SD16 下層出土遺物 (1)

壺 A ; 246, Ba ; 252, Bb ; 253, E ; 247・249, G ; 248, 不明 ; 250・251,
甕 Ab ; 255・256, D ; 254



第44図 C地点 S D16 下層出土遺物 (2)

壺 I; 258~260. 甕 Bb; 261, Ca; 262・264, Ea; 265, I; 263, 鉢 A; 257

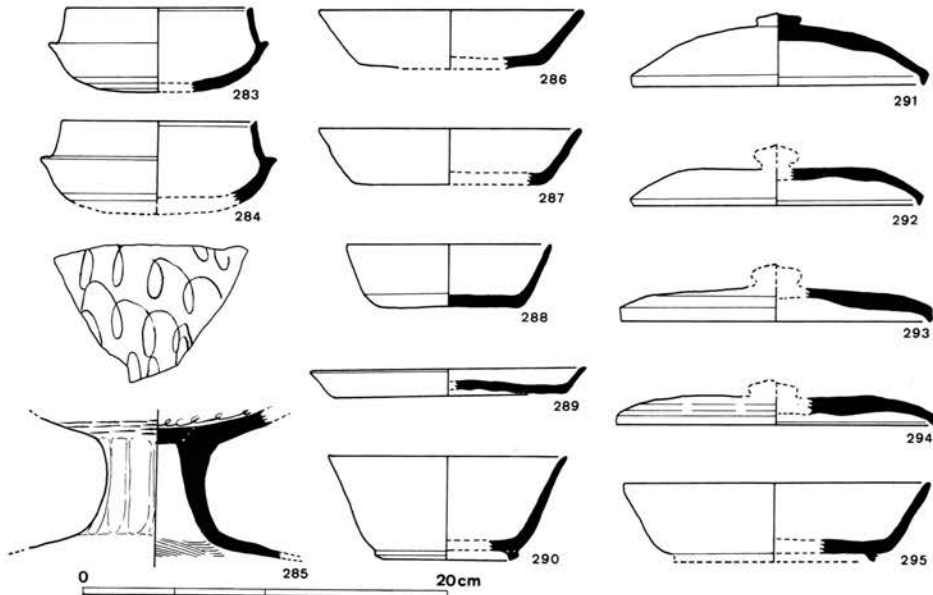


第45図 C地点SD16下層出土遺物 (3)

甕 Ea; 269, 鉢 A; 270, Db; 276・277・280・281, F; 271, 高杯 A; 267・273~275, 器台 A; 272, B; 268, C; 266, 小型器台; 278・279

壺G(248)は、口縁部のみ遺存する。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。口縁部内・外面には横ナデ調整を施す。248は口径7.8cmを測る。

壺I(258~260)は、丸底を呈し、長胴形の体部から口縁部が外反ぎみに高く立ち上がるもので、口縁端部が尖りぎみにおわるもの(258)と内側に肥厚させるもの(259・260)がある。口縁部外面には縦ハケののち、横ナデ調整を加える。口縁部内面は横ナデ調整を施すが、一部横方向のハケ調整が認められるもの(258)がある。体部外面にはハケ、内面にはヘラ



第46図 C地点 SD16 上・中層出土遺物

須恵器杯身；283・284，杯 A；286～288，杯 B；290・295，皿 A；289，
蓋；291～294，土師器高杯；285

削り調整を施す。258は口径20.2cm，259は口径19.2cm，260は口径14.2cm・器高35.0cmを測る。

壺不明(250・251)は，扁球形の体部を呈し，底部は厚い平底である。体部外面には縦(250)あるいは斜め方向(251)のていねいなヘラ磨き調整を施す。体部内面にハケ調整を施す。251は体部と頸部の屈曲部に断面三角形の刻み目突帯を貼りつける。

甕Ab(255・256)は，ナデ肩の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲する。体部外面は横方向の粗いタタキののち，一部縦ハケが認められる。体部内面にはナデ(256)あるいは横方向のハケ調整を施す。口縁部内・外面にはいずれも横ナデ調整を施す。255は口径14.4cm，256は口径14.6cmを測る。

甕Bb(261)は，ナデ肩の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲する。口縁部内・外面には横ナデ，体部外面にはナデ，体部内面には横方向のヘラ削り調整を施す。

甕Ca(262・264)は，ナデ肩の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲したのち，直立ぎみに立ち上がる複合口縁形を呈する。口縁部内・外面には横ナデ，体部外面には縦ハケ，体部内面にはハケ(264)あるいはヘラ削り(262)調整を施す。264は体部外面に沈線文+棒状列点文+波状文を加飾する。262は口径14.0cm，264は口径15.2cmを測る。

甕D(254)は，ナデ肩の体部から筒状の頸部へ続き，口縁部が外反したのち直立ぎみに立

ち上がる複合口縁形を呈するもので、口縁部外面には4～5条の鈍い擬凹線文をめぐらす。体部外面には縦ハケ、内面には横方向のヘラ削り調整を施す。254は口径16.2cmを測る。

甕Ea(265・269)は、倒卵形あるいは扁球形の体部から口縁部が単純「く」の字形に外反したのち、直立あるいは斜め方向にわずかに立ち上がる受口状口縁形を呈するもので、体部外面には横あるいは斜め方向のタタキを施す。269はタタキののち斜め方向のハケ調整を加える。口縁部内・外面には横ナデ、体部内面にはナデ調整を施す。

甕Eaは、体部外面に楕描直線文+楕描列点文を加飾し、口縁部外面には楕描列点文を加飾するもの(265)と加飾しないもの(269)がある。265は口径12.4cm, 269は口径13.6cm・器高12.0cmを測る。

甕I(263)は、扁球形の体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲したもので、口縁端部は内側にわずかに肥厚する。体部外面にはハケ、内面には縦方向のヘラ削り調整を施す。263は口径17.4cmを測る。

鉢A(257・270)は、浅い椀状の体部から口縁部が単純「く」の字形に外反したもので、体部外面はナデ調整であるが、一部縦ハケが認められる(257)。体部内面にはナデ(270)あるいはハケ調整(257)を施す。257は口径13.2cm, 270は口径14.2cm・器高7.2cmを測る。

鉢Db(276・277・280・281)は、平底の底部から斜め方向に立ち上がる体部へ続き、口縁端部が尖りぎみにおわる。底部にはいずれも焼成前に円孔を穿つ。体部外面にはハケ(280・281)あるいはナデ調整(276・277)を施し、体部内面にはハケ(276・277)あるいはナデ調整(280・281)を施す。

鉢F(271)は、尖りぎみの底部から深い椀状を呈する体部へ続くもので、口縁端部が尖りぎみにおわる。体部外面にはナデ、内面にはハケ調整を施し、底部外面には指の圧痕が顕著である。271は口径14.2cm・器高9.5cmを測る。

高杯A(267・273～275)は、浅い皿状の杯部から口縁部が外反ぎみに立ち上がるもので、杯部及び口縁部内・外面にはていねいなヘラ磨き調整を施す。267は口径19.6cm, 273は口径24.0cm, 274は口径21.8cm, 275は口径31.8cmを測る。

器台A(272)は、斜め方向に浅く立ち上がる受部から口縁部が下方に垂下するもので、口縁部外面には4条の凹線文をめぐらす。272は口径23.2cmを測る。

器台B(268)は、斜め上方に立ち上がる受部から口縁部がわずかに垂下したもので、受部内・外面には縦方向のヘラ磨き調整を施す。268は口径18.4cmを測る。

器台C(266)は、斜め上方に立ち上がる受部から口縁部が強く外反し、口縁端部を下方に肥厚させたもので、口縁部外面には3条の凹線文を施したのち、2個1対の円形浮文を貼りつける。266は口径20.0cmを測る。

器台脚部(282)は、中空の柱状部から脚部が裾開きとなるもので、脚部外面には縦方向のヘラ磨きを、内面にはハケ調整を施す。

小型器台(278)は、浅い皿状の受部から、口縁部が外反ぎみに立ち上がるもので、受部内・外面は縦方向のヘラ磨き調整を施す。278は口径14.8cmを測る。

C-SD 16 上・中層出土遺物 (第46図)

SD16上・中層出土遺物は、古墳時代中期から平安時代に至る土器が混在していた。

須恵器杯身(283・284)は、扁球形の体部から水平にのびる鋭い受部へ続き、立ち上がり部は内傾しつつ上方に立ち上がり、高さは約2.0cmを測る。外面調整には底部より約1/3程度にいたるまでヘラ削りを施す。283は口径10.4cm、284は口径10.8cmを測る。283・284は陶邑編年によるとTK47に相当し、6世紀前半と考えられる。

土師器高杯(285)は、脚柱部と杯部の一部が残存するものである。脚部は削りにより12面体の面取りを行い、杯部内面には螺旋状暗文を施す。

須恵器杯A(286~288)は、平底の底部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。口縁部内・外面にロクロナデ調整を施す。

須恵器杯B(290・295)は、杯Aに高台を貼りつけたもので、高台の位置は底部と口縁部の屈曲部の境にあるもの(290)と屈曲部より内側にあるもの(295)がある。

須恵器皿A(289)は、上げ底ぎみの底部から短く立ち上がる口縁部へ続くもので、内底面及び口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

須恵器蓋(291~294)は、水平あるいは笠形を呈する天井部から口縁部が垂直ぎみとなるもので、天井部には扁平な宝珠形つまみを貼りつける。

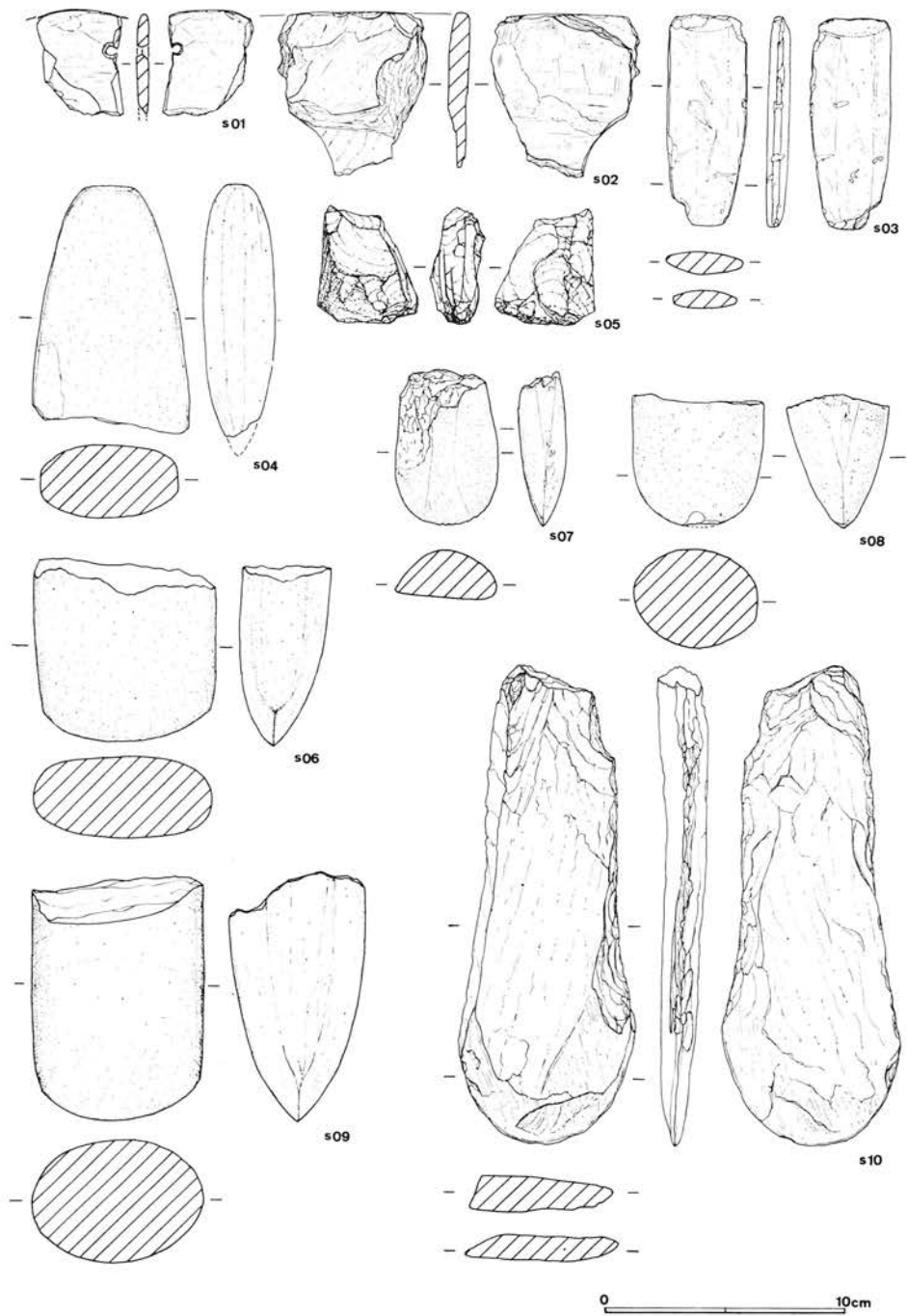
(石井 清司)

石製品 (第47・48図)

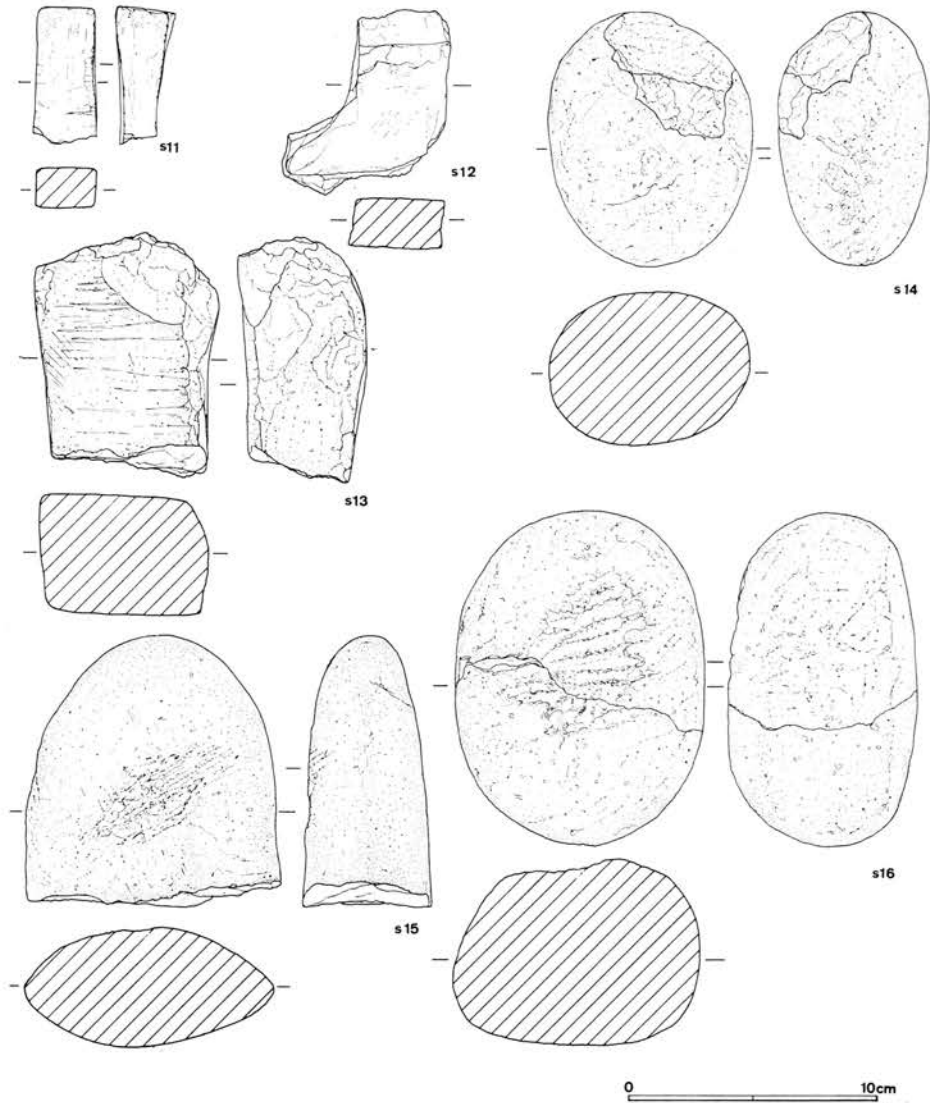
北金岐B・C地点で出土した石製品は総数23点を数える。そのうち、遺構内出土は12点を数え、その他は包含層中から出土した。ここでは各石製品について一括して記述を行う。出土地区・遺構については付表3(北金岐B・C地点出土石器法量表)に示し、記述をひかえる。

個々の石器の記述に際しては、便宜上図面左側をA面、右側をB面と呼称することにする。法量は図示した状態において縦(長さ)、直交する方向で横(幅)の最大値を求めた。厚さは最大値である。石庖丁については機能面を重視し、長さは刃縁に平行するラインを最大幅とし、幅は刃縁に直交するラインに求めた。なお、法量・石材については付表3に掲げた。

石庖丁(S-01・S-02) 01は半月形直線刃形態で、葉理に沿って素材剥片を剥取する。背縁に整形剥離痕をとどめる。器表はていねいに研磨調整する。刃部は欠損ののち、主にB



第47図 B・C地点出土石製品 (1)



第48図 B・C地点出土石製品 (2)

面側から研ぎ出している。紐擦れ痕は肉眼では観察できない。02は大型の石庖丁状の石器である。背縁のみが残存しているので旧状は復元しえないが、刃部が外湾ぎみの形態をもつものであろう。背縁には整形時の剝離痕がみられるが、全体にしていねいな調整が施されている。

磨製石剣(S-03) 鉄剣形石剣であり、基部のみが残存する。折損後転用を意図したものらしく、折損面が主にB面から研磨されている。両側面には2mm内外の面が拵えられ、基部底にも器体に平行～直交する研磨により面がみられる。器表は第一次粗研磨痕をとど

付表3 北金岐B・C地点出土石器法量表

図 番 号	出土地区	出土層位	最 大 長 cm	最 大 幅 cm	最 大 厚 cm	重 量 g	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
1	B地点 SD01 Wd-e35~36	中~下層	(4.4)	(3.5)	0.5	12.6	頁岩ない し粘板岩	新		折損。
2	C地点 VI22 P-45		6.5	(6.2)	0.8	48	頁岩ない し粘板岩	弱		折損。
3	B地点 SD01 Wi-31	黒色粘砂 質土	8.8	3.3	0.9	45	頁岩ない し粘板岩	新~弱		二次的の加工痕あり。
4	B地点 Xx-34		9.8	6.6	3.0	293	砂岩	新	粗~極粗粒 砂。 SHALL, パッチ含む	折損。
5	B地点 We 34~36	中~下層	4.6	(4.2)	2.0	47	ガラス質 安山岩 (サヌキ トイド)	新		自然礫面のこす。
6	C地点 SD16 Va-30	中層	6.5	4.3	2.0	70	脈石英	新		基部側は未加工。
7	B地点 SD01 Wd・e-35~30	中~下層	5.0	5.4	4.3	142	玢岩	新	閃緑岩風。	折損。
8	B地点 SD01 Wd・e-25~26	中~下層	7.3	7.5	3.7	320	玢岩か	新	長石斑晶。 閃緑岩風。	折損。
9	C地点 SD16 Vc-32	中層	10.0	7.2	5.7	530	玢岩か	新~弱	長石, 角閃 石斑晶。	折損。
10	C地点 SD16 Va-30		19.8	7.3	2.1	300	珪質頁岩	新		極部磨製。
11	C地点 包含層		5.4	2.4	2.2	42	アブライ ト	弱~中		折損。
12	B地点 SD01 Wg-24	中層	6.5	6.4	2.0	108	珪岩	弱		折損。石皿か。
13	B地点 SB 03		9.5	7.4	5.0	469	アブライ ト			住居跡床面出土。 折損。
14	B地点 Xx-35		10.3	8.3	6.0	655	アブライ ト	新		二次的な欠損あり。
15	B地点 SD01 Wd-35~36	中~下層	10.8	10.0	4.9	718	アブライ ト	弱		自然円礫利用。
16	B地点 SD01 Wd-35~36	中~下層	13.4	10.0	7.7	1,570	玢岩か	弱~中	長石, 角閃 石斑晶。	擦り石としての機 能を併せもつ。

める。鑄が明瞭に造り出されないため、断面形は菱形をなさずやや丸みを帯びている。

楔形石器(S-05) 礫核状を呈するものである。上・下両縁辺からほぼ平行に剝離痕が入り、両端には著しい階段状の剝離痕をとどめる。上端は横方向からの剝離の侵入によって大半は欠損している。右側はポジティブな裁断面、右側縁・下端の一部には自然礫面をとどめ流状構造が観取される。礫の素材は垂角礫で、礫面に若干の磨耗がみられることから産出地周辺の円礫を搬入したものであろう。断面は漆黒色を呈する。

磨製石斧(S-04・06~10) 磨製石斧には、小型で片刃のもの(S-07)、基部側から刃部側に向かって次第に広がる撥状を呈するもの(S-04)、円柱状で両刃のもの(S-08・09)、側縁がほぼ平行し、やや扁平な形状を呈するもの(S-06)、板状の素材剥片の先端を研磨し、刃部を造り出して石斧としたもの(S-10)などがあり多様である。04は撥形を呈し、縄文時代にみられる定角式磨製石斧に形態的に近似する特徴をもつ。06は脈石英を素材とし、基部側に節理面を顕著にとどめる。06~09は大型蛤刃石斧の範疇で捉えられるもので、弥生時代の所産であろう。10は珪質頁岩を素材とする。右側を主に階段状剝離によって整形を行ったのち、先端を局部的に研磨調整し、刃部を造り出すものである。

砥石(S-11~13) 11は方柱状を呈し、小型である。下半は折損している。頭部を含め5面すべてを砥面として利用する。12は舌状を呈し、大型である。一面を残して折損している。石皿状石器の可能性もあるが、研磨による磨耗の状態から、ここでは砥石として扱うこととした。13は方柱状を呈し、やや大型である。4面を砥面として利用している。11~13は転礫をほとんど加工することなく用いる「転礫利用の石器」である。

磨石(S-14) 磨石は2点出土し、そのうち1点を図示した。14は2次的な衝撃によって一部欠損するが、ほぼ全形をとどめる。側縁・頭部についても一部利用しているようである。機能部は主に両面のゆるやかな球面にあり、使用のため平滑化している。14は「自然転礫利用の石器」である。

凹み石(S-15・16) 15は扁平な自然礫を利用している。あばた状の凹み以外は人為的加工痕は観察されない。16は円礫を利用しているが、器体成形を行ったのち、A面に顕著なあばた状の凹みが形成されている。B面は平坦な面をなし、磨石として使用された痕跡が著しい。

(田代 弘)

第3節 第Ⅱ期の遺構

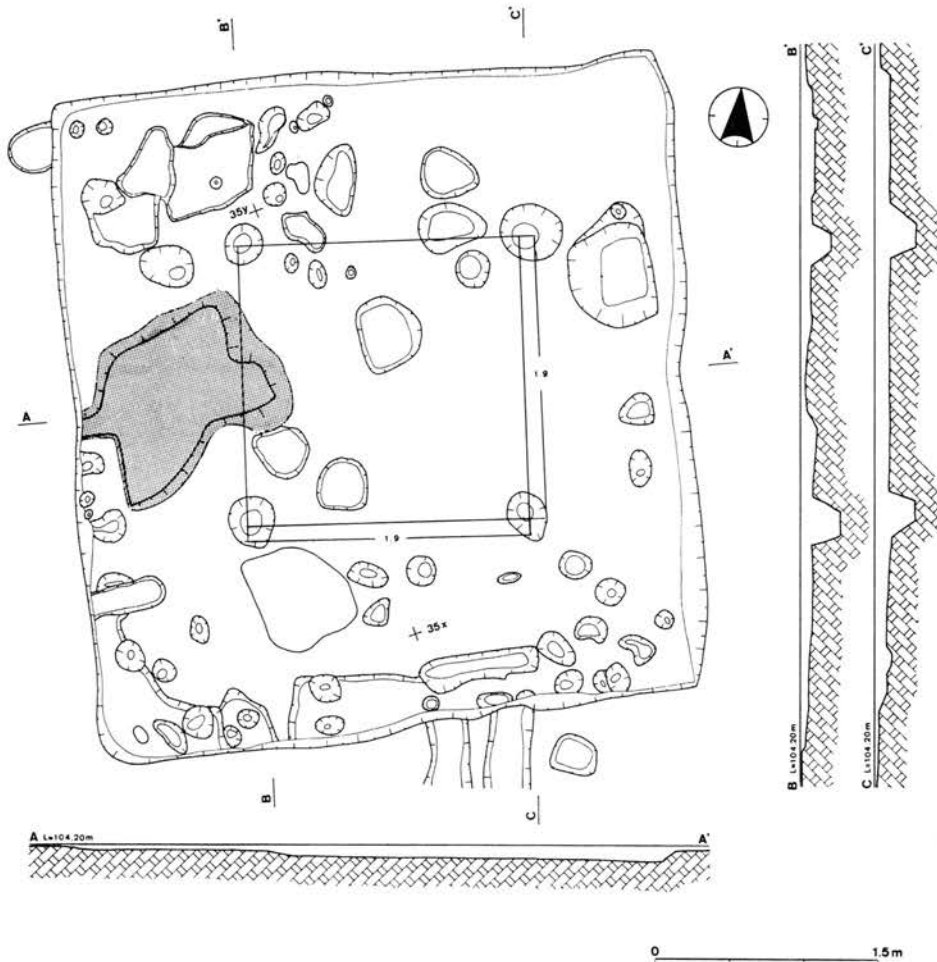
第Ⅱ期の遺構にはB地点のSD06・SD27、C地点のSB01・SD18があるが、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ期の遺構と比較し、遺構密度が希薄である。なお、第Ⅱ期の遺構には第Ⅰ期の遺構であるB地点のSD01、C地点のSD16と重複するかのようになり、上層より第Ⅱ期の遺物が出土し

ている。

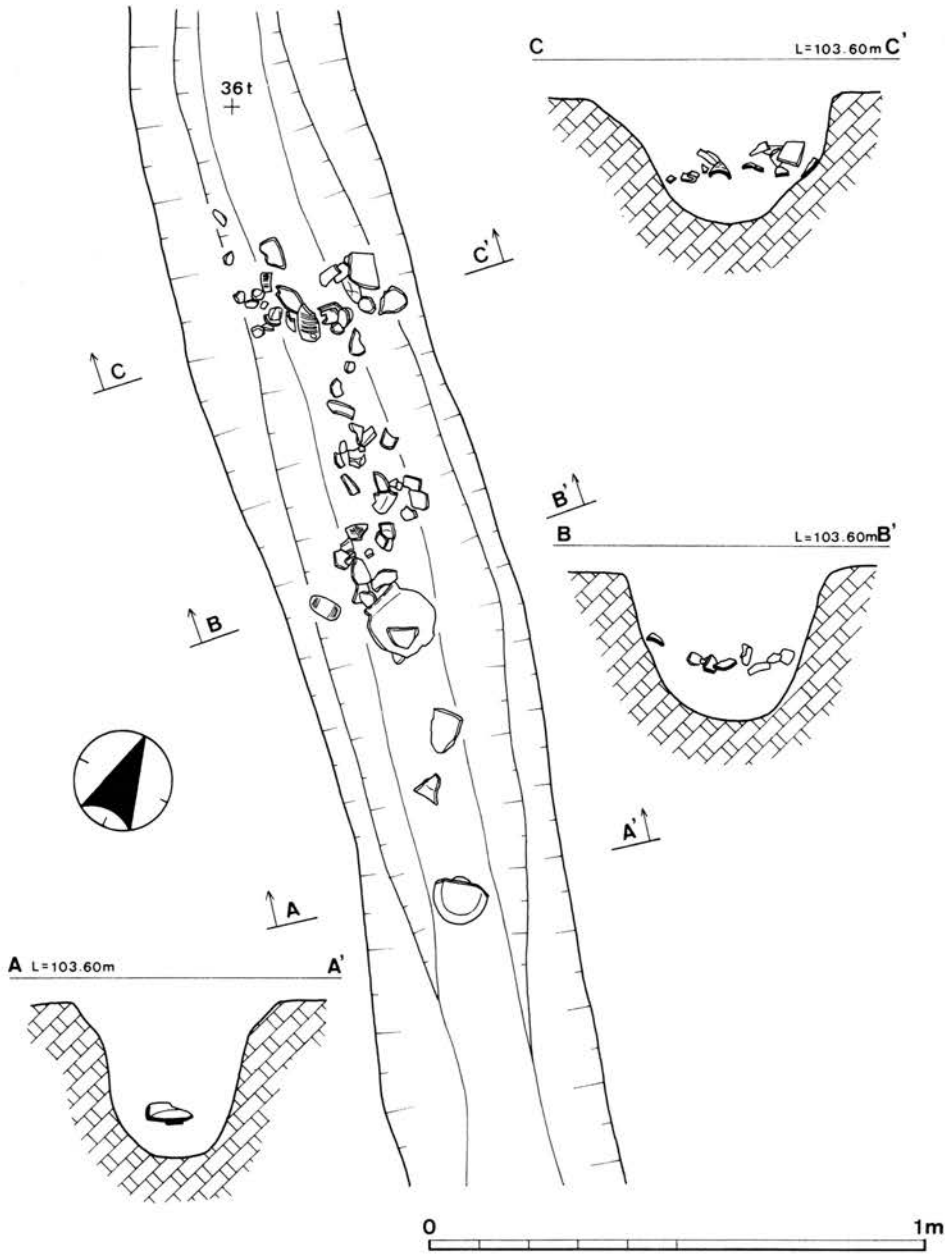
B-S D06 SD06は、Xg~x・23・24区で検出された断面「L」字形の南から北に流れる溝状遺構であり、検出長約20m・上面幅約40cm・深さ約30cmを測る。SD06は、第IV期の遺構であるSB33によって切られる。SD06からは須恵器高杯の脚部が1点出土した。

B-S D27 SD27は、Wb~d・22~38区で検出した断面「L」字形を呈する溝状遺構であり、検出長約50m・幅約1.0~1.4m・深さ約60cmを測る。SD27は調査地中央を西から東に貫流するが、SD27の南端で南に曲折し、SD06に続く可能性がある。SD27出土遺物には土師器小壺、須恵器杯身がある。

C-S B01(第49図) SB01は、調査地の北端Vx~y・34・35区で検出した、一辺約4.2~4.4mを測る方形の竪穴式住居跡である。SB01は中世の遺構によって大きく削平を受け、



第49図 C地点 SB01 平面図



第50図 C地点 SD18 遺物出土状態

遺存状態が悪く地山直上層の暗褐色土層中で検出された。壁面の立ち上がりは5cm前後が遺存するのみである。床面には40か所以上をかぞえる小ピット群があり、その一部は中世以降に穿たれたものである。各小ピットは深さ5cm前後を測るが、そのうち、相対する位置に配された pit 1~4は深さ20~25cmを測り、柱間も1.9mの等間隔であることから、主

柱穴と考えられる。周壁溝は北・東・西辺では確認できず、南辺に一部落ち込む傾向が認められるのみである。カマドの施設は認められなかったが、西壁に接して約1.4×1.4mの範囲に楕円形状に極めて堅く焼き締まった焼土の分布がみられ、炉跡と推定される。この焼土中には製塩土器の細片が微量ながら出土した。住居跡床面は黄色粘砂質土を厚さ約2~4cmにわたり充填し、水平面をつくる貼り床がある。遺物は床面ないしその上層から出土した。遺物の大半は遺存状態が悪く、細片化していた。出土遺物には須恵器杯身・高杯、土師器甕・製塩土器、滑石製白玉、ガラス小玉などがある。

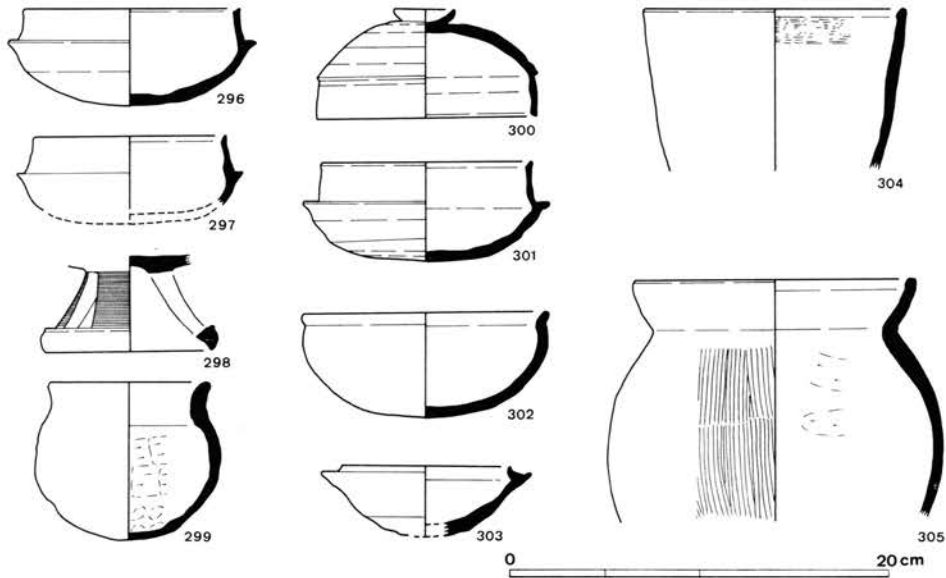
C-SD18(第50図) SD18は、調査地の東北端、Vq~y・36・37区で検出され、検出長約30m・上面幅約30~50cm・深さ30cmを測り、北から南にS字形に曲折する溝状遺構である。SD18出土遺物はVs・t区の1mの範囲に集中し、土師器壺・甕、須恵器杯身・杯蓋のほか、製塩土器がある。(石井 清司)

第4節 第II期の遺物

第II期の遺物は、出土量が少なく、図示しえたものはC-SD16上・中層出土遺物を含め31点である。

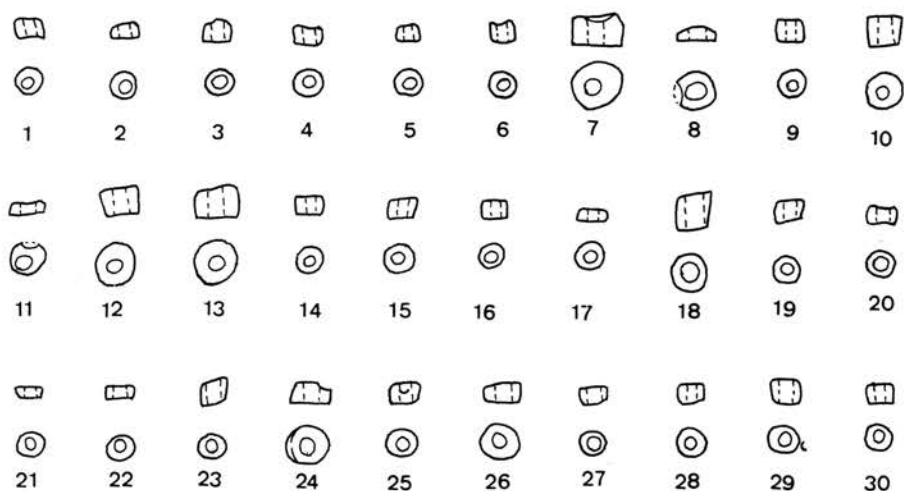
C-SB01 出土遺物 (第51・52図)

SB01 出土遺物には須恵器杯身・有蓋高杯のほか、滑石製・ガラス製小玉、製塩土器の



第51図 B地点 SD27, C地点 SB01・SD18 出土遺物

SD 27; 299・303, SB 01; 296~298, SD 18; 300~302・304・305, 須恵器杯身; 296・297・301・303, 杯蓋; 300, 有蓋高杯脚部; 298, 土師器壺; 299・314, 甕; 305, 碗; 302



第52図 C地点 S B01 出土玉類 (S=1/1)

細片がある。

須恵器杯身(296・297)は、扁球形の体部からほぼ水平にのびる受部へ続き、口縁部の立ち上がりが高く、やや内傾しつつ直線的に立ち上がる。底部には約 $\frac{1}{3}$ の範囲にわたり、ヘラ削りを施す。296は口径11.4cm・器高5.1cmを測る。

須恵器有蓋高杯(298)は、脚部が短く、脚端部を上下に突出させる。脚部には長方形の一段透し穴をもち、外面にはカキ目を施す。

玉類(1~30)は、竪穴式住居跡の埋土内から、滑石製小玉(1~17・19~30)とガラス製小玉(18)が出土した。滑石製小玉は幅3.0~4.0mmと4.5~6.0mmを測るものがあり、外面には粗いタテ磨きを施し、中央には片側尖孔による円孔を穿つ。18は幅4.1~4.9mm・厚さ4.8mm・円孔径2.7mmを測るガラス小玉である。

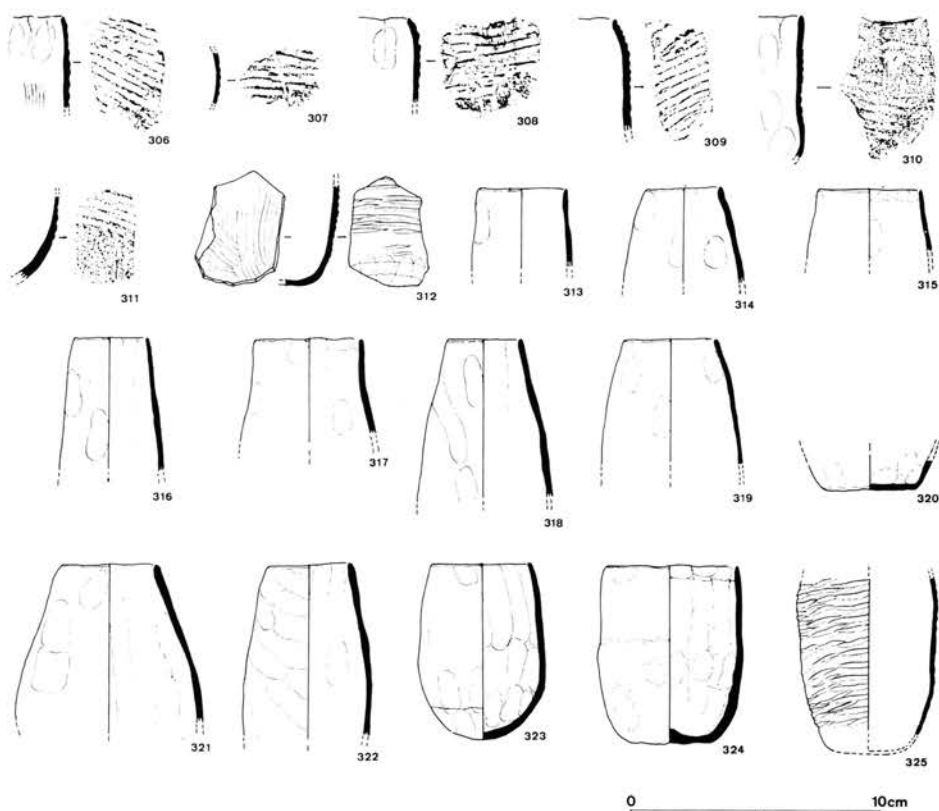
製塩土器は、埋土内より細片が出土したが図示しえる資料はなかった。細片観察によると、後述するC-SD18と同様相を呈する。

C-SD18出土遺物 (第51・53図)

SD18出土遺物には須恵器杯身・杯蓋、土師器壺・甕・椀のほか、製塩土器がある。

須恵器杯身(301)は、扁球形の体部からほぼ水平にのびる受部へ続き、立ち上がり部は高さ20mmをこえ、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部はわずかに内方に傾斜し、明瞭な稜をなす。底部には全体の約 $\frac{1}{3}$ 程度の範囲にわたりヘラ削りを施す。301は口径11.3cm・器高5.3cmを測る。

須恵器杯蓋(300)は、天井部が比較的平らであり、天井部中央に中凹みのつまみを貼りつける。天井部と口縁部の境は鋭い稜をもち、口縁部の立ち上がりは高い。口縁端部は鋭く



第53図 C地点 SD18 出土製塩土器

内傾し、面をつくる。天井部の調整は全体の約1/3にわたりヘラ削りを施す。300は口径11.7cm・器高5.7cmを測る。

土師器壺(304)は、口縁部のみ遺存する。口縁部は外上方へわずかに開きつつ直立し、口縁端部をわずかに内側に肥厚させる。口縁部内・外面はヨコナデ調整を施すが、内面には一部横方向のハケが残る。304は口径14cmを測る。

土師器甕(305)は、体部中央からやや上方に最大腹径があり、やや長胴化傾向を呈し、体部から口縁部が単純「く」の字形に屈曲する。口縁端部は内側にわずかに肥厚させる。体部外面には粗い縦方向のハケ、内面には横方向のヘラ削りを施す。口縁部内・外面はヨコナデ調整を施す。305は口径14.9cmを測る。

土師器椀(302)は、口径に対し器高が低く扁球形を呈する。口縁部は体部より直立きみに立ち上がり、口縁端部を外方にわずかに屈曲させる。底部は不安定な丸底を呈する。調整は底部付近に部分的なハケ調整を残すほか、体部内・外面をナデ調整で仕上げる。302は口径13cm・器高5.5cmを測る。

製塩土器(306~325)は、SD18の中・下層において須恵器・土師器および炭化物とともに一括出土した。SD18出土製塩土器はほぼ全形を知りえる323・324を除き、その多くが細片化し、全形を知りえるものは少なかった。

SD18出土製塩土器には、体部外面にタタキを有するもの(Aタイプ)とタタキを持たずナデ調整によるもの(Bタイプ)がある。

Aタイプ(306~312・325)は、タタキを有するもので、体部外面にススが付着するものが散見するが、顕著に二次焼成をとどめるものはない。胎土は明褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない精良なもの(306~309・312)と明灰褐色を呈し、長石・石英粒の亜角礫をわずかに含むもの(310・311)とがある。

306~310は口縁部片である。306・310は口縁部が直線的に立ち上がる。307~309は口縁部がやや内傾して立ち上がる。306~310は、体部内面をていねいなナデ調整で仕上げ、口縁部内面にはしほり痕を残す。

311・312は、体部下半および底部片である。311は丸底化、312は平底化の傾向がある。体部外面には斜め方向のタタキののち、平行タタキを加える。体部及び底部内面にはナデ(311)あるいはハケ調整(312)で仕上げる。311は外面にススが付着している。

325は口縁部および底部を欠くが、体部の残りは良好である。体部は円筒状を呈し、体部外面には粗い平行タタキ、内面にはナデ調整を施す。

Bタイプ(313~324)は、体部外面を最終的にナデ調整で仕上げたものである。

Bタイプのもは、Aタイプと同様、口縁部がほぼ直線的に立ち上がるもの(313・317・324)と、体部に張りをもちやや内傾して立ち上がるもの(314~316・318・319・321~323)とがある。Bタイプはいずれも内面をていねいなナデ調整で仕上げ、外面には指頭圧痕を残すものが多い。

313・321は黄灰色を呈し、砂粒を含まない精良な胎土をもち、わずかに赤色酸化粒を含む。313・321は軟質で脆い。

315・316・318は胎土に長石・石英の亜角礫を多く含み、雲母・赤色酸化粒をわずかに含む。315は外面に二次焼成痕がみられる。315・316は薫黒褐色を呈し、器体の内・外面に著しい火はげが見られ、器壁内面に二次焼成痕をもつ。

317・319・322は暗灰褐色を呈し、焼きしまりがいい。317・319は外面に弱い二次焼成痕がみられる。322はまったく二次焼成の痕跡をもたない。

320は平底の底部片である。明褐色を呈し、胎土は精良である。320は二次焼成痕をもたない。

323は324と同様、完形に復元しえる資料である。323は丸底を呈し、底部には接合痕を

残す。体部内面は板状の工具によりかき上げたのち、ていねいなナデ調整によって仕上げる。内底面には爪痕・指頭圧痕をとどめる。

324は平底を呈する。体部外面中央を横方向に強くナデ、頸胴部の境をつくる。内面調整はナデであるが、全体にはあまりていねいでない。

SD27 出土遺物(第51図)

SD27出土遺物には須恵器杯身・土師器壺がある。

須恵器杯身(303)は、口縁部の立ち上がり部は短く、内傾する。308は口径9.0cmを測る。

土師器壺(299)は、球形の体部から口縁部が外反ぎみに短く立ち上がる。底部は丸底を呈する。体部外面にはナデ、内面には横方向のヘラ削りを施す。口縁部内・外面はヨコナデ。299は口径8.5cm・器高8.4cmを測る。
(田代 弘)

第5節 第III期の遺構

第III期の遺構には掘立柱建物跡(C-SB07・SB13・SB14・SB19・SB20・SB32・SB51・SB52・SB53)、井戸(C-SE34・SB54)、溝状遺構(B-SD05・SD11, C-SD03・SD04・SD08・SD21)のほか、小ピット群がある。

掘立柱建物跡は、柱穴及び掘形内からの遺物の出土例が少なく、厳密には第IV期掘立柱建物跡との区分が困難である。ここでは掘形の形状・建物方位とともに建物配置に留意し、第III期と第IV期の区分を行った。

B-SD05 SD05は、調査地西南部Xq~x・22・23区で検出した、検出長約20.5m・幅約50~60cm・深さ約30cmを測る南北方向の溝状遺構である。SD05は北から南へ流れ、SB33・SA35に切られる。

B-SD11 SD11は、Wh~l・19~35区で検出した検出長約105m・上面幅約0.6~1.8m・深さ約1.0~1.5mを測る東西方向の溝状遺構である。SD11は西から東に注ぎ、19~22区では幅広で曲折するが、26区以東では直線的に流れる。比較的直線と考えられる26~36区での方位はN72°30'Eを測る。断面は「\」字形を呈し、上層から黒色粘質土・黄色土・黒色粘砂質土の3層に分かれる。遺物は黒色粘砂質土より土師器・須恵器などが出土した。

C-SB07(第56図) SB07は、Vq~t・30~32区で検出した1間(2.85m)×3間(7.05m)の南北棟の掘立柱建物跡である。桁行の柱間は2.1m・2.85m・2.1mを測り、桁行中央の柱間が若干広い。掘形は円形あるいは隅丸方形を呈し、直径約25~60cm・深さ約10~20cmを測る。SB07は後述する柵列(SA06)によって区画されている。SB07の方位はN5°15'Wを測る。

C-SB13(第55図) SB13は、Vw~y・29~31区で検出した2間(3.7m)×3間(5.25m)

の南北棟の掘立柱建物跡である。桁行の柱間は1.85m・1.65m・1.8mを測り、桁行中央の柱間が若干狭い。掘形は円形あるいは隅丸方形を呈し、直径約35～70cm、柱穴の直径は約20～30cmを測る。SB13は南をSD04に、東をSA05により区画される。SB13の方位はN0°50'Wを測る。

C-SA05 SA05は、Vu～y・31～33区で検出した東西約8.7m・南北約8.0m以上を測る鍵状の柵列である。SA05は東西ラインがSD04と並行で、方位はN3°50'Wを測る。

C-SA06(第56図) SA06は、Vr～u・30～33区で検出した東西約6.8m・南北約10.4mを測る鍵状の柵列である。SA06はSA05と同様、東西ラインがSD04と並行で、南北ラインはSB07と並行である。SA06はN5°10'Wを測る。

C-SB14(第54図) SB14は、Vs～u・26～28区で検出した。2間(4.2m)×3間(6.3m)の東西棟の掘立柱建物跡である。各柱間は2.1mの等間隔をなすが、東辺中央の柱間が若干ずれる。柱の掘形は径約40cmを測り、柱根は残っていないが、掘形内の土質変化から推定すると柱の直径は約20cmを測る。SB14に隣接して北には溝状遺構(SD04)が、南東部には素掘り井戸(SE54)がある。SB14の方位はN4°40'Wを測る。

C-SB19(第57図) SB19は、Vg～h・21～23区で検出した2間(3.6m)×2間(3.9m)の総柱の掘立柱建物跡である。SB19は東辺が中世以降の溝状遺構によって削平を受け、遺存状態が悪い。柱間は南北1.8mの等間隔、東西は1.8m・2.1mを測る。掘形は直径約50cm・柱穴は約20cmを測る。掘形は検出面から深さ30cmまで遺存する。SB19の方位はN0°30'Eを測る。

C-SB20(第57図) SB20は、Ve～f・23～25区で検出した2間(3.6m)×2間(3.3m)の総柱の掘立柱建物跡である。柱間は東西1.8m・1.5m、南北2.1m・1.5mと間隔を異にする。SB20は一部掘形の重複があり、また南辺中央の柱間にずれがある。掘形は約60～70cmの円形あるいは隅丸方形を呈し、柱穴の直径は約30～40cm、深さは遺構検出面から約20～30cmを測る。SB20の方位はN0°00'Eを測る。

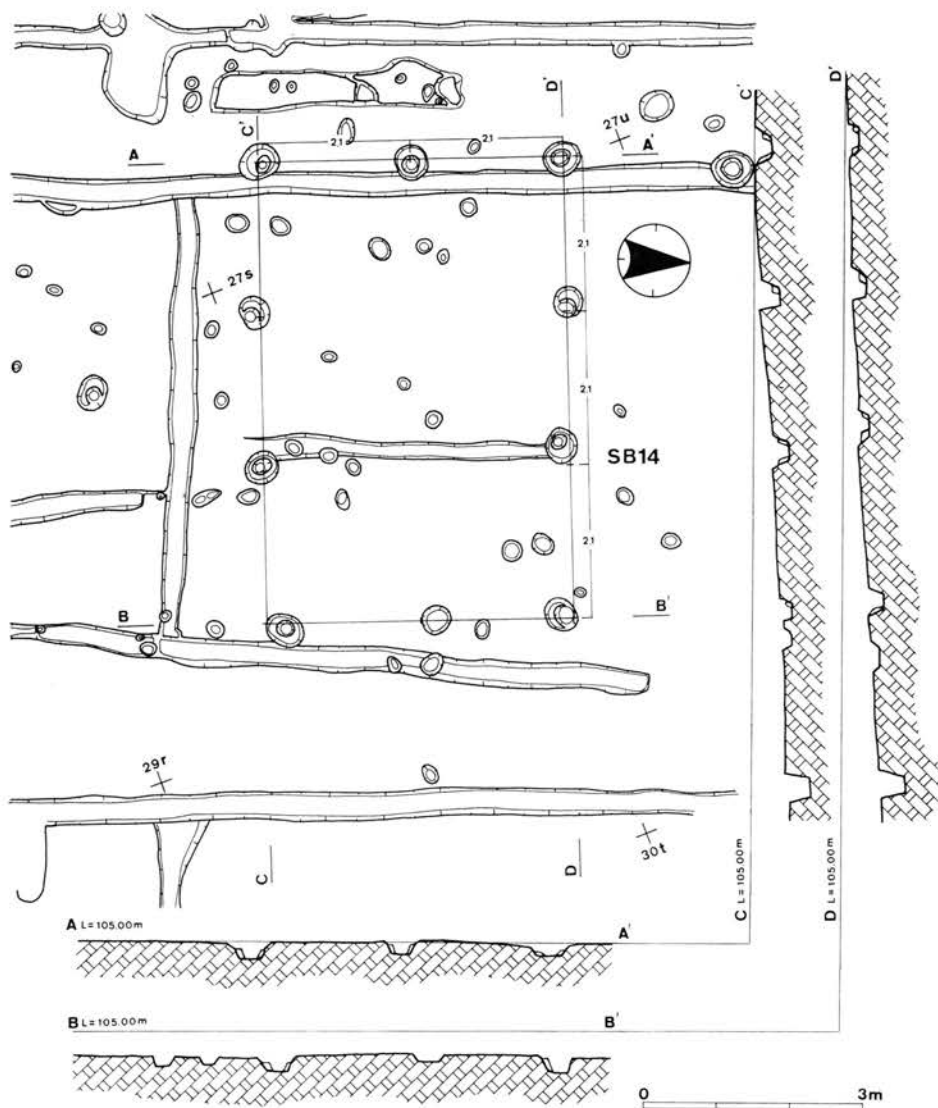
C-SB51(第58図) SB51はWv～x・29～31区で検出した2間(4.2m)×4間(7.2m)の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行1.8m・梁行2.1mの等間隔で、掘形は直径約40～60cmの円形あるいは隅丸方形を呈する。柱穴は直径約20～25cm、柱穴の深さは遺構検出面から約15～20cmを測る。SB51は遺構配置からSB52と重複するが、前後関係は明らかでない。SB51の方位はN1°20'Wを測る。

C-SB52(第58図) SB52は、Wt～w・28～30区で検出した2間(4.2m)×3間(7.1m)の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行2.1m・3.0m、梁行2.1mで桁行中央の柱間が若干広い。掘形は直径約40cmの円形を呈する。柱穴は約15cmで、柱穴の深さは遺構

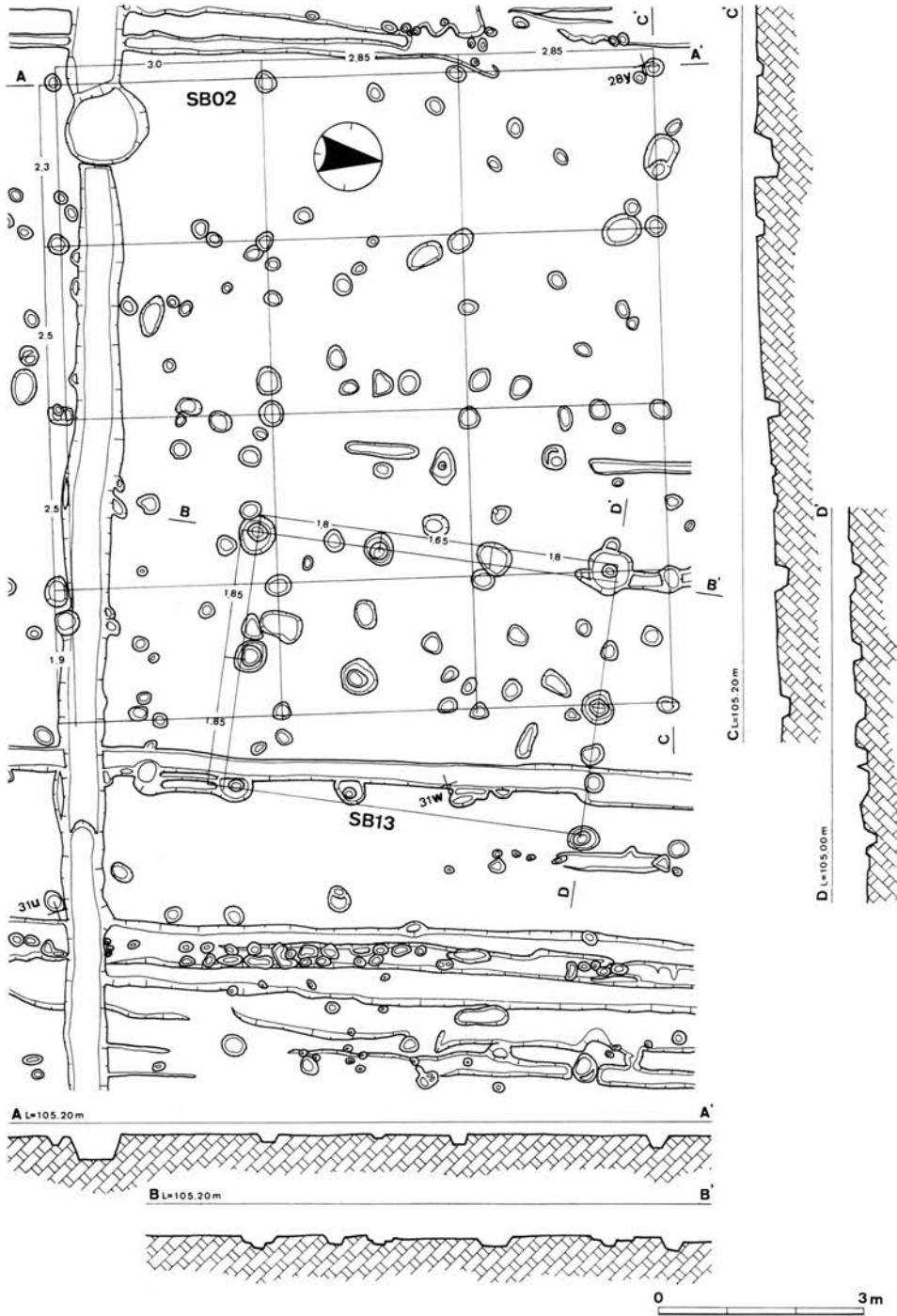
検出面から約20cmを測る。SB52の方位は $N2^{\circ}10'W$ を測る。

C-S B53(第59図) SB53は $W_r \sim v \cdot 27 \sim 30$ 区で検出した2間(4.2m)×3間(9.9m)の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行 $1.8m \cdot 2.4m$ 、梁行 $3.0m \cdot 3.3m \cdot 3.6m$ となり梁行の柱間寸法が他例に比し広い。掘形は、直径約30~60cmの円形あるいは隅丸方形を呈し、柱穴は直径約20cm、深さは遺構検出面より約20~40cmを測る。SB53の方位は $N3^{\circ}30'W$ を測る。

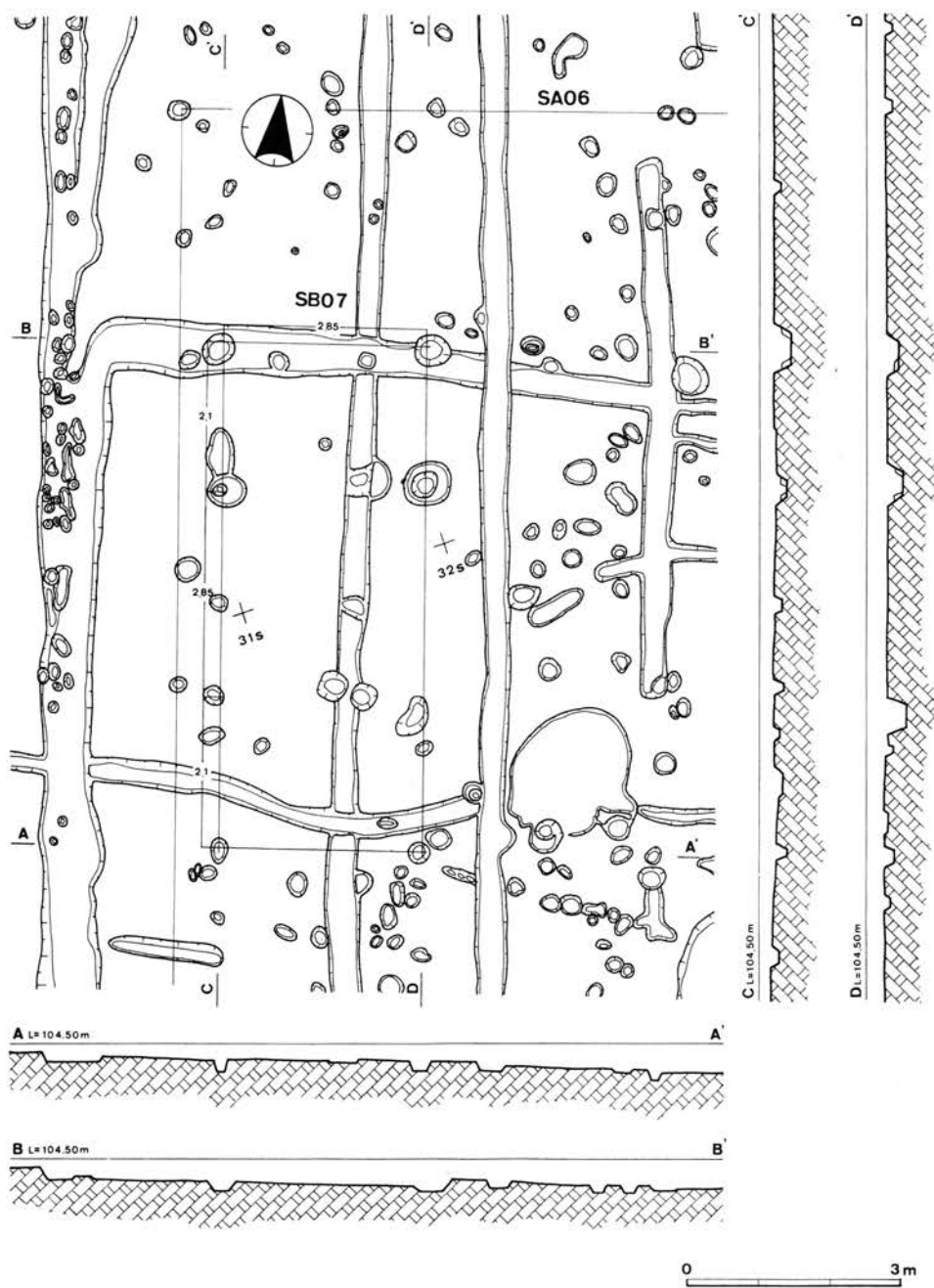
C-S B32(第60図) SB32は、 $W_v \sim x \cdot 26 \sim 28$ 区で検出した2間(3.6m)×3間(6.6m)



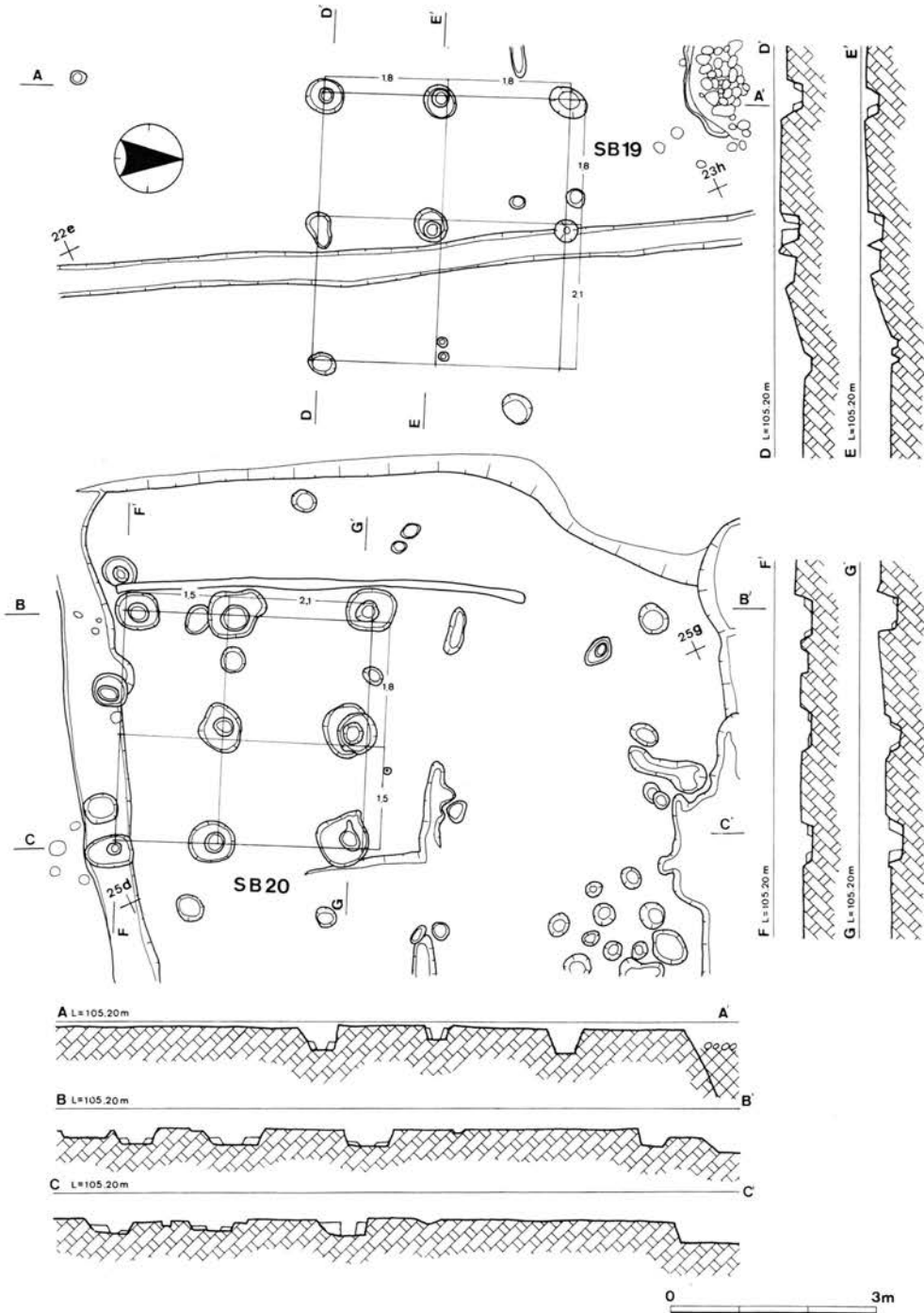
第54図 C地点 SB14 平面図



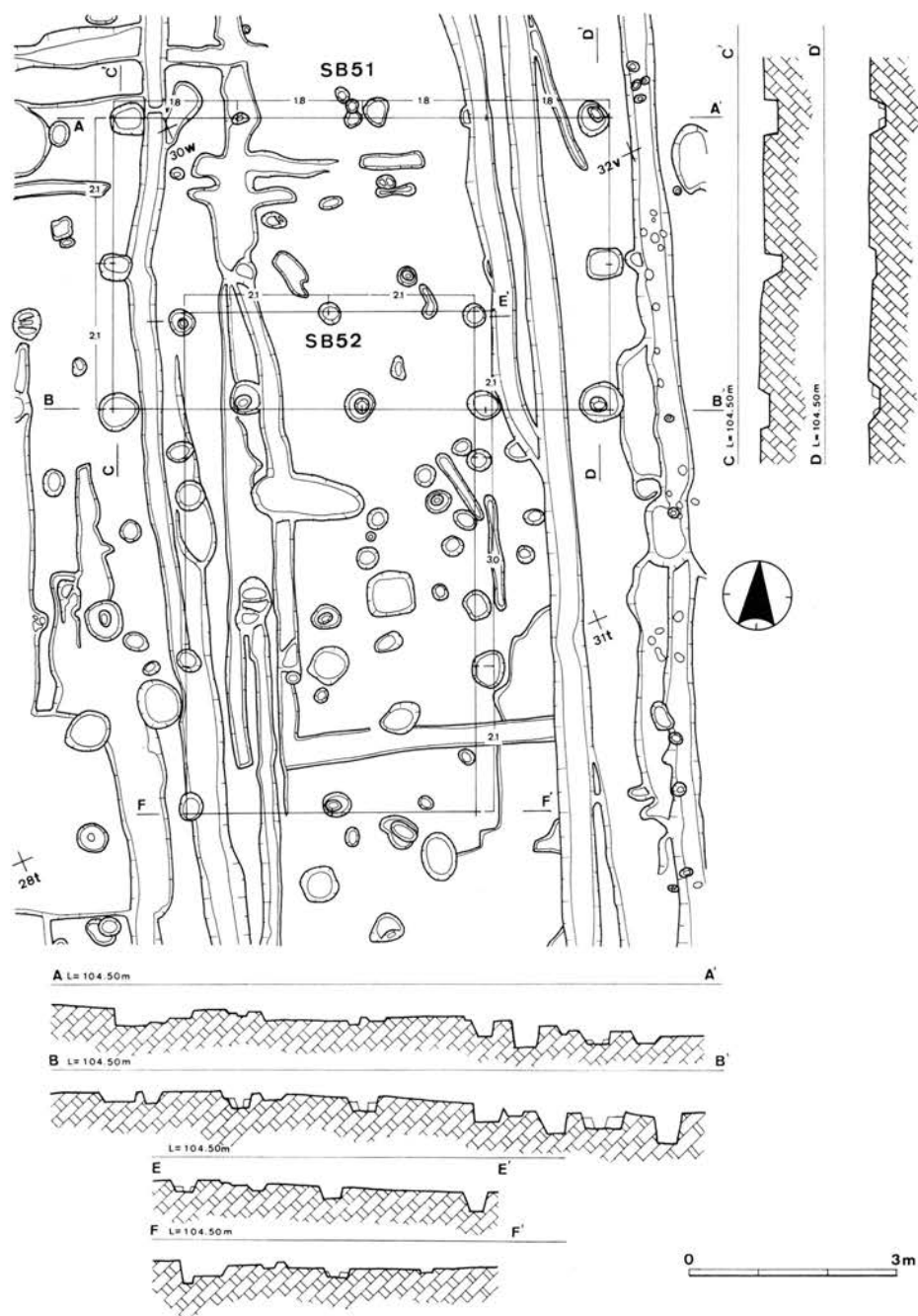
第55図 C地点 SB02・SB13 平面図



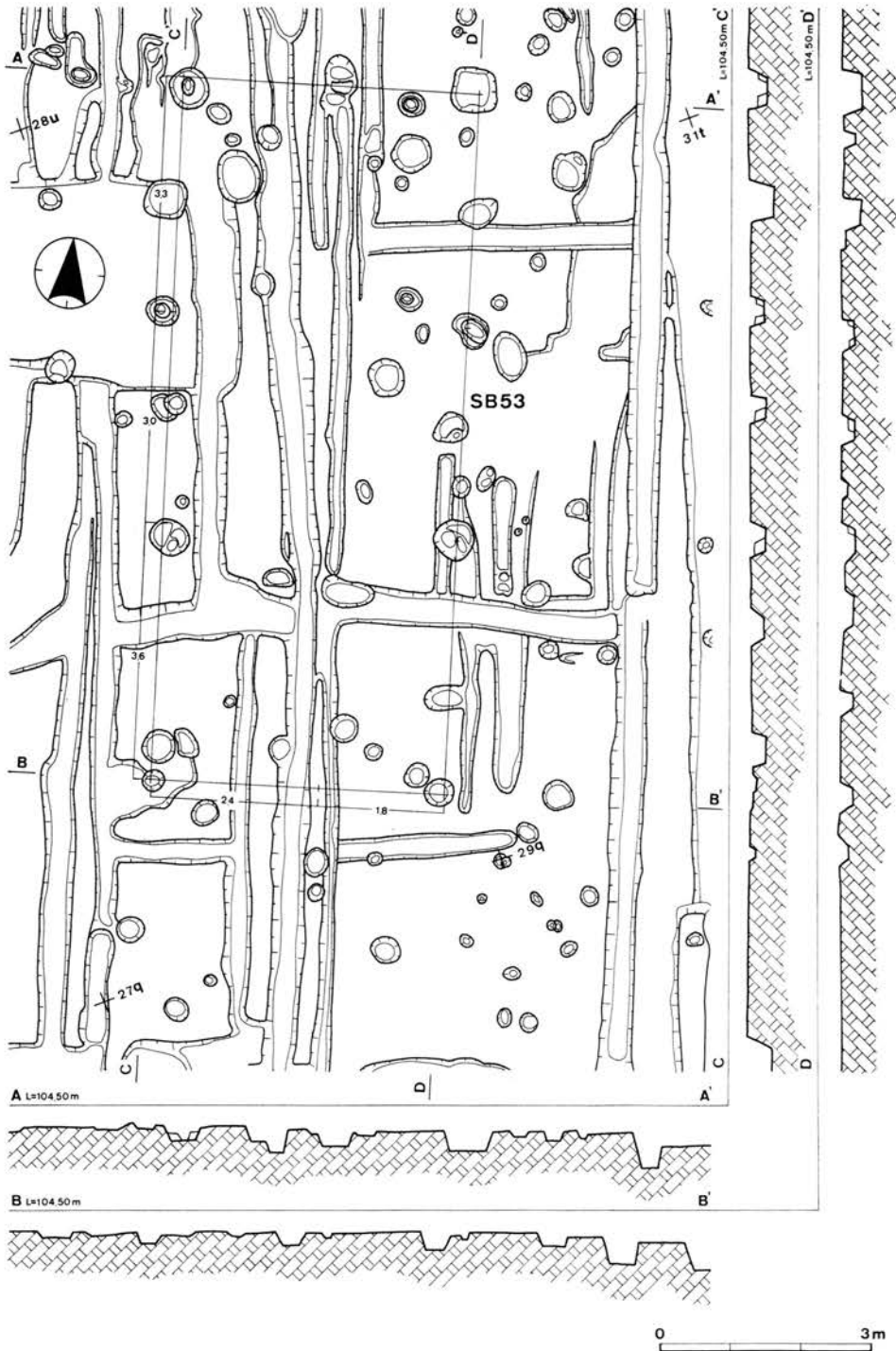
第56図 C地点 SB 07・SA 06平面図



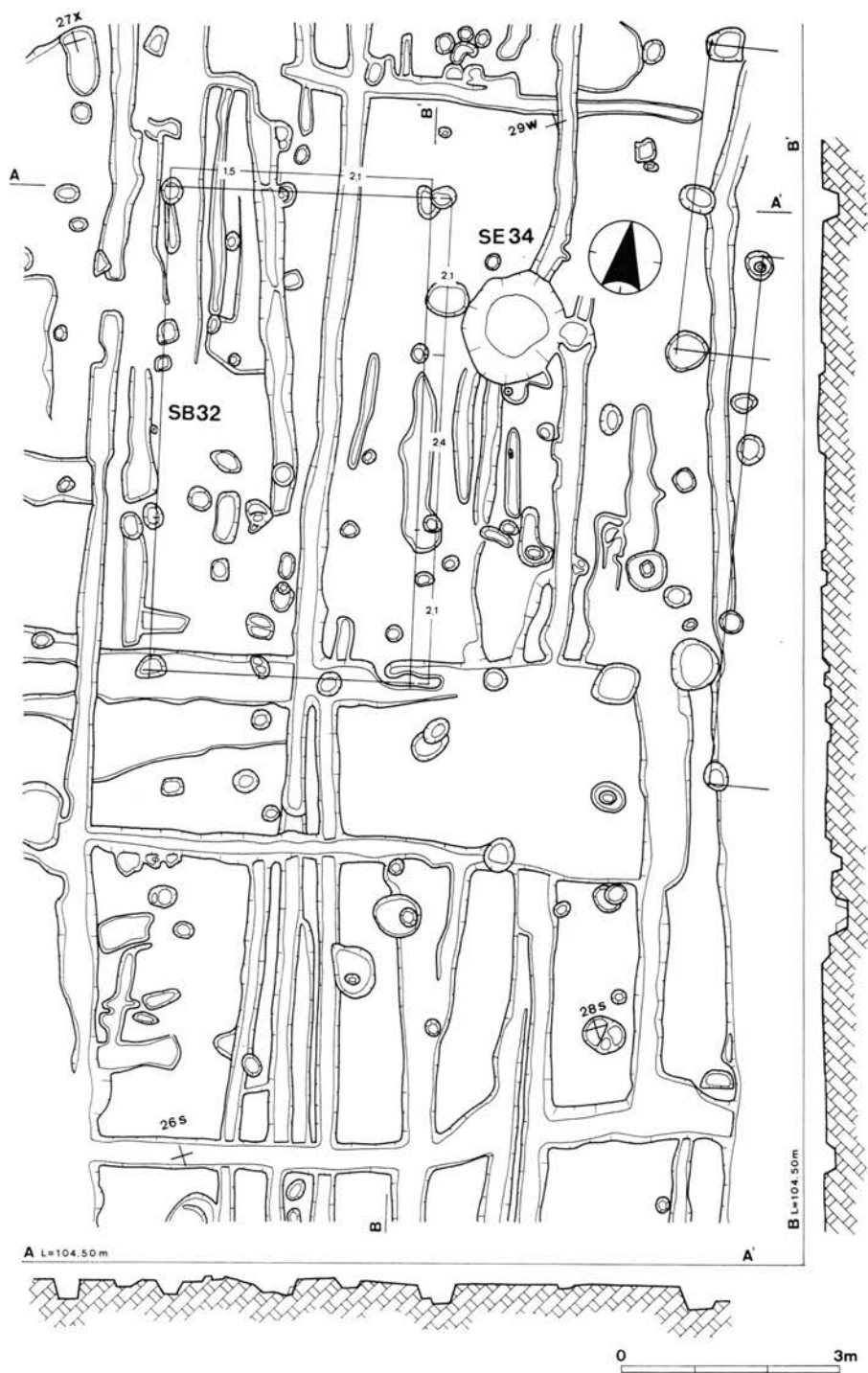
第57图 C地点 SB19・SB20 平面图



第58図 C地点 SB 51・SB 52 平面図



第59图 C地点 SB 53 平面图



第60図 C地点 SB 32 平面図

の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行1.5m・2.1m、梁行2.1m・2.4m・2.1mを測り、梁行中央の柱間が若干広い。掘形は直径30～60cmの円形あるいは隅丸方形を呈し、深さは検出遺構面より10～30cmを測る。SB32の方位はN6°00'Wを測る。

C-S E34(第60図) SE34は、Ww・28区で検出した直径約1.4m・深さ約50cmを測る素掘り井戸である。SE34は、出土遺物がなく時期決定の資料を欠くが、第Ⅲ期の建物であるSB32・SB51・SB52に隣接することにより第Ⅲ期の遺構と考えられる。

C-S E54 SE54は、Vr・s・28区で検出した直径約1.6m・深さ約50cmを測る素掘り井戸である。SE54は埋土が3層に分かれ、出土遺物は土師器・須恵器の細片がある。出土遺物とともに隣接してSB14があることから第Ⅲ期の遺構と考えられる。

C-S D 03 SD03は、Vu～Ua・32～36区で検出した溝状遺構である。SD03は鍵形に屈曲し、西辺は約13mを測り、北辺は約10m、南辺は約5mでとぎれる。上面幅約40～50cm、深さ約30～40cmを測る。出土遺物には須恵器杯・土師器甕がある。SD03は、第Ⅲ期の建物あるいは後述するSD04とは主軸を異にする。

C-S D 04 SD04は、Vr～a・21～37区で検出した溝状遺構である。SD04は断面「U」字形を呈し、検出長約56.5m・上面幅約60cm・深さ約30～40cmを測る。SD04は第Ⅲ期の建物群であるSB13・SB14・SA05・SA06の間を、方位を同じくして直線的に流れ、調査地西端から49.5mの所で南へ曲折する。出土遺物には須恵器杯・土師器甕などがある。SD04の方位はN7°42'Eを測る。

C-S D 08 SD08は、Ve～j・22～30区で検出した溝状遺構である。SD08は検出長約32m・上面幅約0.6～2.0m・深さ約30cmを測る。SD08は南東方向に一部曲折しながらのび、東延長部では明らかな遺構を検出しえなかったが、出土遺物から第Ⅰ期の遺構であるSD16の上層へ続くものと思われる。出土遺物には土師器皿・甕・須恵器杯・蓋などがある。SD08は性格を同じくするSD04とは44.5～46.0m、B地点のSD11とは66.5mの間隔をおいて穿たれている。SD08の方位はN6°30'Wを測る。

C-S D 21 SD21は、Vg～k・30～35区で検出した南東から北西方向へ流れる溝状遺構である。SD21は、断面「U」字形を呈し、検出長約20m・上面幅約60～70cm・深さ約20～30cmを測る。出土遺物には土師器・須恵器がある。

(石井 清司)

第6節 第Ⅲ期の遺物

第Ⅲ期の遺物は溝状遺構(B-SD11・C-SD08・C-SD21・C-SD04・C-SD27)、ピット(P-67・P-87)のほか、包含層中から出土したが、建物跡掘形内には、図化しえる資料が

なかった。

B-S D 11 出土遺物 (第61図)

SD11出土遺物には土師器皿A, 須恵器杯A・杯B・杯蓋・鉢・甕がある。

土師器皿A(340~343)は、底部から口縁部が開きぎみとなり、口縁端部が内側にわずかに折り返す。口縁部外面には横方向のていねいなへら磨き、底部外面にはへら削りののち、へら磨き調整を施さない^{b₁}手法と粗いへら磨き調整を施す^{b₃}手法がある。底部及び口縁部内面には2条の螺旋文と右回りの斜放射暗文を施す。340・341は口径18cm前後・器高37cm前後、342・343は口径15cm前後・器高30cm前後を測り、径高指数は2.2前後である。

須恵器杯A(326~330・334・335)は、底部から斜め上方に立ち上がる口縁部で、口縁部内・外面には横ナデ、内底面にはナデ調整を施す。杯Aは口径12.0~13.5cm・器高3.2~3cm・径高指数0.25~0.28を測るもの(326~329・334・335)と口径18.4cm・器高5.3cm・径高指数0.29を測るもの(330)がある。

須恵器杯B(331~333・336・337・345~347・350)は、杯Aに高台を貼りつけたものである。高台は全体に底部から口縁部へ屈曲する屈曲点よりやや内側に踏んばった高台を貼りつける。口縁部内・外面には横ナデ、内底面にはナデ調整を施す。杯Bは口径10.0~12.5cm・器高4.2~4.8cm・径高指数0.37~0.42を測るもの(331~333)、口径15.0~16.5cm・器高4.0~5.9cm・径高指数0.27~0.36を測るもの(345~347・350)、口径18.6~19.0cm・器高6.2~6.5cm・径高指数0.35を測るもの(336・337)がある。

須恵器皿B(348・349)は、杯Bと同形態を呈するが、口縁部の立ち上がりが短く、口径指数が0.25以下なので皿Bと考えた。口縁部内・外面には横ナデ、内面にはナデ調整を施す。348は口径11.2cm・器高4.4cm、349は口径15.6cm・器高3.8cmを測る。

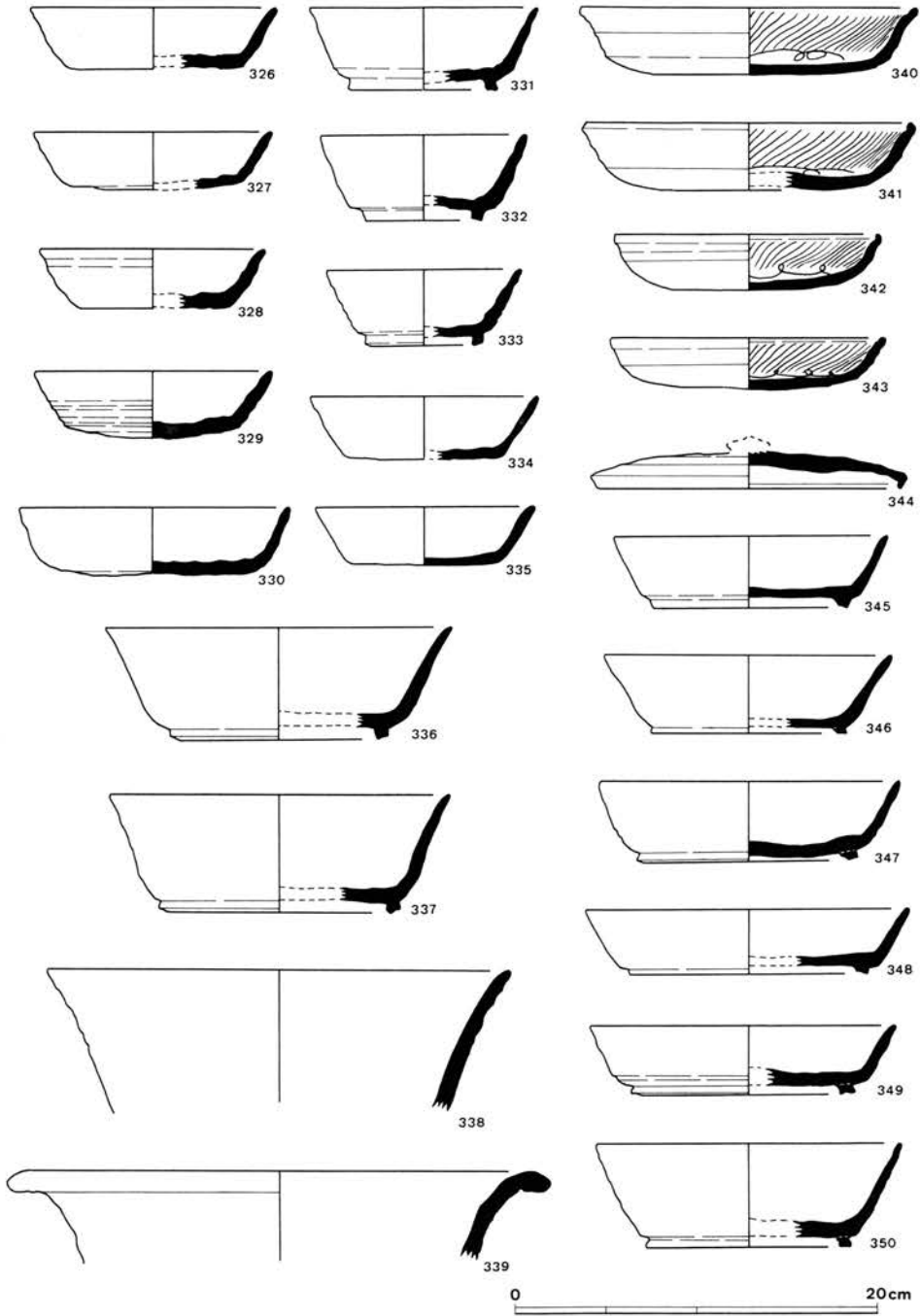
須恵器甕(339)は、口縁部を外反させたのち口唇部を下方にやや折り返し端面を整える。口径28.0cmを測る。須恵器(338)は鉢あるいは杯Bの口縁部と思われる。直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部は尖りぎみに終わる。口径25.4cmを測る。

C-S D 08 出土遺物 (第62図)

SD08出土遺物には土師器皿A・皿B, 須恵器杯A・杯B・杯蓋・壺がある。

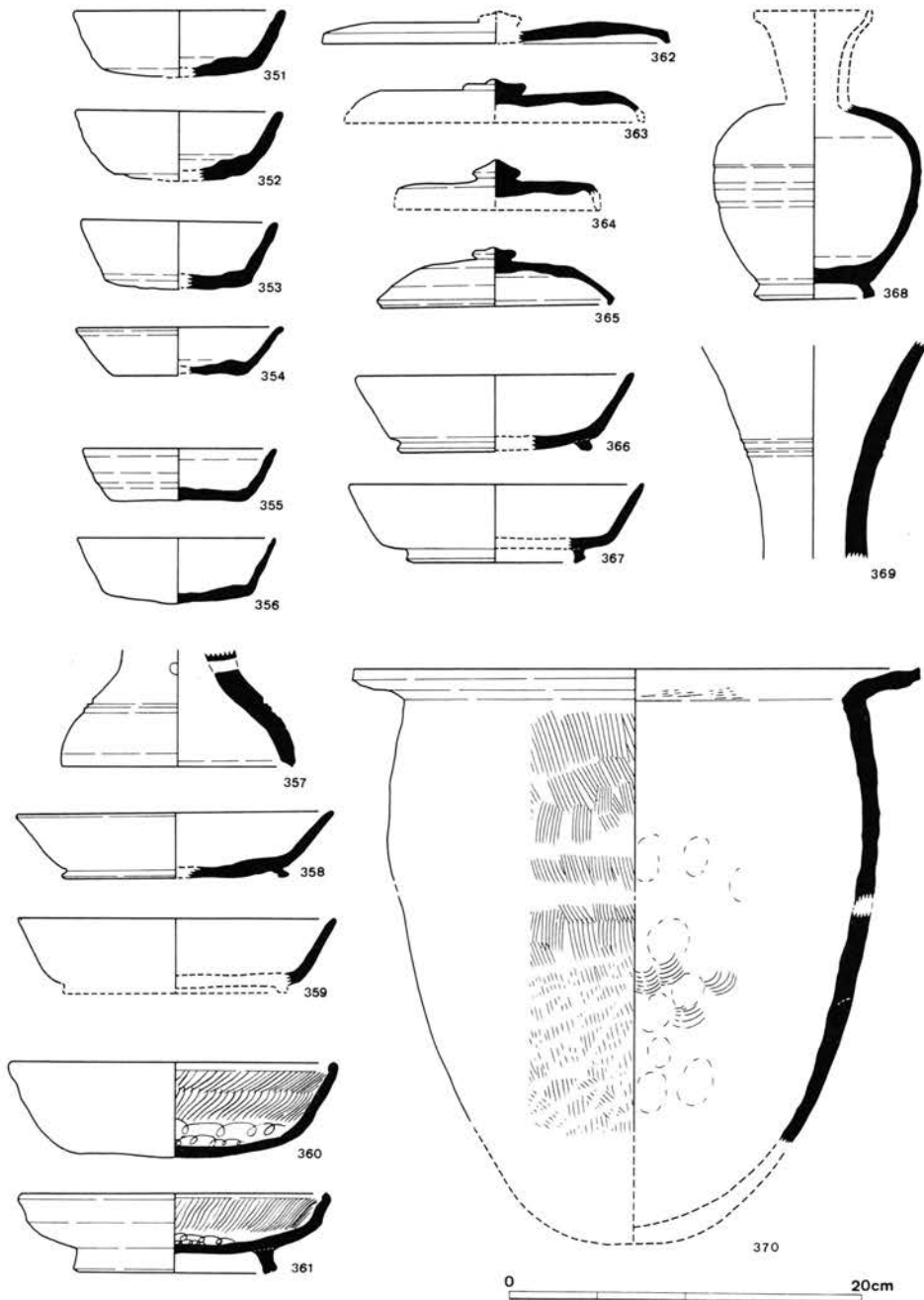
土師器皿A(360)は、丸みをもつ底部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は内面に屈曲する。底部外面はへら削りののち、口縁部外面を含め、ていねいなへら磨きを施す^{b₃}手法である。内面には2重の螺旋暗文+2段の右回りの斜放射暗文を施す。360は口径18.4cm・器高5.3cm・径高指数0.29を測る。

土師器皿B(361)は、丸みをもつ底部より口縁部は短く立ち上がり、口縁端部を内側にわずかにつまみ上げる。底部には口縁部の屈曲点から内側に外方へ踏んばった高い高台を



第61図 B地点 SD 11 出土遺物

土師器皿 A；340~343，須惠器杯 A；326~330・334・335，杯 B；331~333・336・337・345~347・350，甕；339，不明；338



第62図 C地点 SD 08・SD 21 出土遺物

SD 08; 351~354・360~370, SD 21; 355~359, 土師器皿 A; 360, 皿 B; 361, 甕; 370 須恵器杯 A; 351~356, 杯 B; 358・359・366・367, 蓋; 362~364, 壺蓋; 365, 壺; 368・369

貼りつける。外面は b_3 手法による。内面には2重の螺旋暗文+1段の放射状暗文を施す。口径17.0cm・器高4.5cm・径高指数0.26を測る。

土師器甕(370)は、長胴形の体部から口縁部が外反ぎみに立ち上がり、口径が体部最大径を凌駕する。体部外面には粗く幅広のハケ調整を、内面にはナデ調整を施すが、内面下半に一部青海波文が認められる。370は口径32.0cm・体部最大径28.0cm・腹径指数3.88を測る。

須恵器杯A(351~354)は、平底あるいは丸みをもった平底の底部から口縁部が斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸みをもっておわる。口縁部内・外面にはロクロナデ、内底面にはナデ調整を施す。351~353は器壁を厚く仕上げる。351~353は口径10.7~11.8cm・器高3.7~3.9cm・径高指数0.31~0.36を測る。354は口径12.0cm・器高2.8cm・径高指数0.23を測る。

須恵器杯B(366・367)は、底部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部へ続き、口縁部の屈曲点より内側に直立あるいは外方へ踏んばった高台を貼りつける。口縁部内・外面にはロクロナデ、内底面にはナデ調整を施す。366は口径11.5cm・器高4.3cm・径高指数0.27、367は口径16.8cm・器高4.4cm・径高指数0.26を測り、口径に対して器高が低く皿Bに近似する。

須恵器杯蓋(362・363・365)は、水平ぎみの天井部から口縁部へ続き、口縁端部は直立あるいは内方に折り返す。天井部中央には扁平な宝珠形つまみを貼りつける。365は口径13.0cm、362は口径19.9cmを測る。

須恵器壺蓋(364)は、口縁部を欠くが、水平な天井部から直角に屈曲する口縁部へ続く。天井部中央には高い宝珠形つまみを貼りつける。

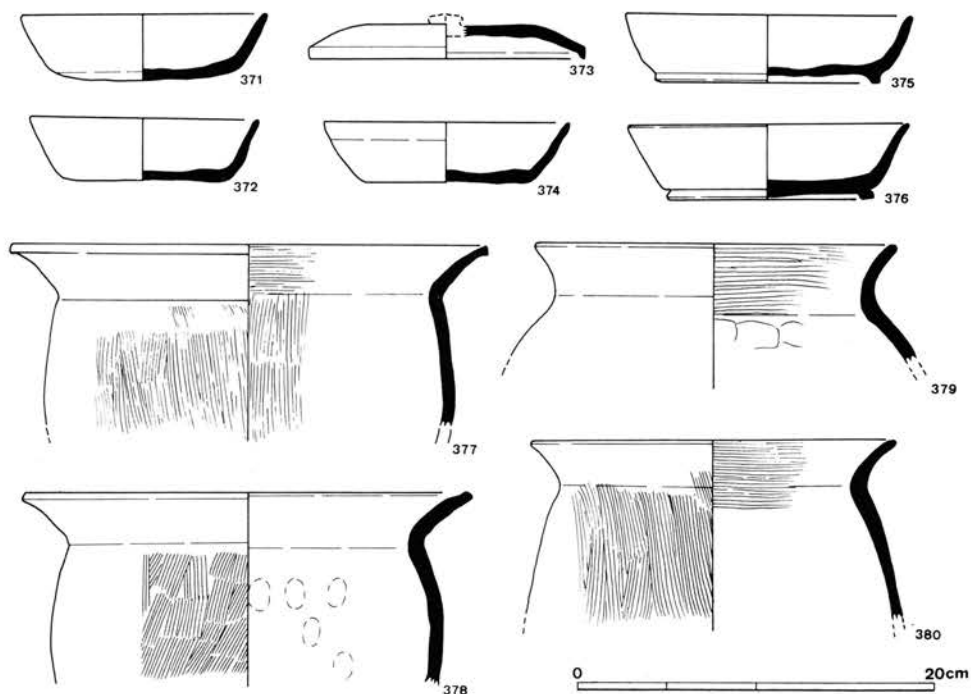
須恵器壺(368・369)は、口縁部を欠損する。体部は肩部の張った倒卵形を呈し、底部から体部への屈曲点に外方へ踏んばった高台を貼りつける。体部はロクロ水挽きののち、底部をヘラ切りによって切り離す。368は細い頸部から口縁部が外反するものと思われる。369は、口縁部の中位に2条の浅い沈線がめぐる。

C-SD 21 出土遺物 (第62図)

SD21出土遺物には須恵器杯A・皿B・脚部がある。

杯A(355・356)は、底部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。口縁部内・外面にはロクロナデ、内底面にはナデ調整を施す。355は口径11.0cm・器高2.9cm・径高指数0.26、356は口径11.3cm・器高3.7cm・径高指数0.33を測る。

皿B(358・359)は、底部から斜め上方に短く立ち上がる口縁部へ続く。口縁部内・外面



第63図 B地点 Pit 67, C地点 SD 04 出土遺物

Pit 67; 371~373, SD 04; 374~380, 土師器甕; 377~380, 須恵器杯A; 371・372・374, 杯B; 375・376, 蓋; 373

にはロクロナデ調整を施す。358は口径18.1cm・器高3.7cm・径高指数0.27, 359は口径18.0cmを測る。

脚部(357)は内湾ぎみに踏んばった脚部で, 脚部中位には2条の沈線をめぐらす。脚部には焼成前に円孔を穿つ。底径13.0cmを測る。

C-SD 04 出土遺物 (第63図)

SD04出土遺物には土師器甕, 須恵器杯A・皿Bがある。

土師器甕(377~380)は, 長胴形の体部から口縁部が外反ぎみに立ち上がり, 口径が体部最大径を凌駕する。体部外面には粗く幅広のハケ調整を施し, 外面はナデ(377・378・380)あるいはハケ調整で仕上げる。口縁部内・外面には横ナデ調整(380)あるいは横ハケ調整で仕上げる。379は口径24.4cm・体部最大径22.0cm・腹径指数0.90を測る。

須恵器杯A(374)は, 底部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続き, 口縁端部が尖りぎみに終わる。口縁部内・外面にはロクロナデ調整, 内底面にはナデ調整を施す。口径13.8cm・器高3.3cm・径高指数0.24を測る。

須恵器皿B(375・376)は, 底部から丸みをもって屈曲し, 口縁部へ続くもので, 底部か

ら口縁部へ屈曲する屈曲点に外方へ踏んばった高台を貼りつける。374は口径16.0cm・器高3.8cm・径高指数0.24, 376は口径15.6cm・器高4.2cm・径高指数0.27を測る。

C-Pit 67 出土遺物 (第63図)

Pit 67出土遺物には須恵器杯A・杯蓋がある。

杯A(371・372)は、底部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部が丸みをもって終わる。口縁部内・外面にはロクロナデ、内底面にはナデ調整を施す。371は口径14.0cm・器高3.7cm・径高指数0.24, 372は口径13.0cm・器高3.5cm・径高指数0.27を測る。

蓋A(373)は、水平な天井部から丸みをもって口縁部へ続き、口縁部が屈曲し口縁端部は尖りぎみに終わる。口縁部内・外面には横ナデ、内面にはナデ調整を施す。371は口径14.4cmを測る。

(石井 清司)

第7節 第IV期の遺構

第IV期の遺構には掘立柱建物跡(B-SB31・B-SB32・B-SB33・B-SB38・B-SB48・C-SB02・C-SB09・C-SB17・C-SB56・C-SB57・C-SB59・C-SB60など)、柵列(B-SA34・B-SA35)・井戸(B-SE04・B-SE24・B-SE25・B-SE37・B-SE54・C-SE23・C-SE28・C-SE42・C-SE49)・溝状遺構(B-SD28・C-SD22など)のほか、無数の小ピットがあり、北金岐遺跡B・C地点で検出した遺構の半数以上が第IV期に帰属する。

掘立柱建物跡は現地調査および整理期間中に柱間・方位などを考え、建物跡と把握しえるピット群のまとまりを検討したが、建物跡としてまとまりえないピット群が無数にあり、報告者自身が把握あるいは見落した建物跡がある可能性は否めない。

B-SB 31 (第64図) SB31は、B地点の北西隅W1~n・22~24区で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。SB31の規模は2間(4.8m)×2間以上(4.2m以上)を測り、梁行柱間は1.5m・1.8m, 桁行柱間は2.4m・1.8mを測り、桁行柱間の間隔が広い。掘形は方または円形を呈し、直径約30~70cm・深さ約10~25cmを測る。SB31の北側は調査範囲外であり、東側は後世の削平を受け、遺存状態は悪い。出土遺物には掘形内から出土した土師器・瓦器の細片がある。SB31の方位はN0°07'Wを測る。

B-SB 38 (第64図) SB38は、SB31に重複して検出した2間(4.5m)×2間以上(5.7m以上)の南北棟の掘立柱建物跡である。SB38は北辺部が調査地の範囲外であるため、全長は不明である。梁行柱間は2.1m・2.4m, 桁行柱間は2.7m・3.0mを測り、桁行の柱間が若干広い。掘形は円形を呈し、直径約35~50cm, 深さ約20~30cmを測る。掘形は黒色粘

土を埋土とし、埋土内には、土師器・瓦器の細片を含む。SB38の方位はN2°50'Wを測る。

B-SB 32 (第65図) SB32は、B地点の北端、Wj~m・24~26区で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。SB32の規模は2間(5.1m)×3間(6.6m)を測り、梁柱柱間は2.4m・2.7m、桁行柱間は1.8m・2.4m・2.4mを測る。掘形は円形を呈し、直径約20~50cm、深さ約30~90cm、柱穴の直径は約20~25cmを測る。掘形内から土師器・瓦器の細片が出土した。SB32の方位はN2°26'Eを測る。なお、SB32の南および東辺に隣接して土師器・瓦器を含む溝状遺構(SD28・SD29)を検出した。

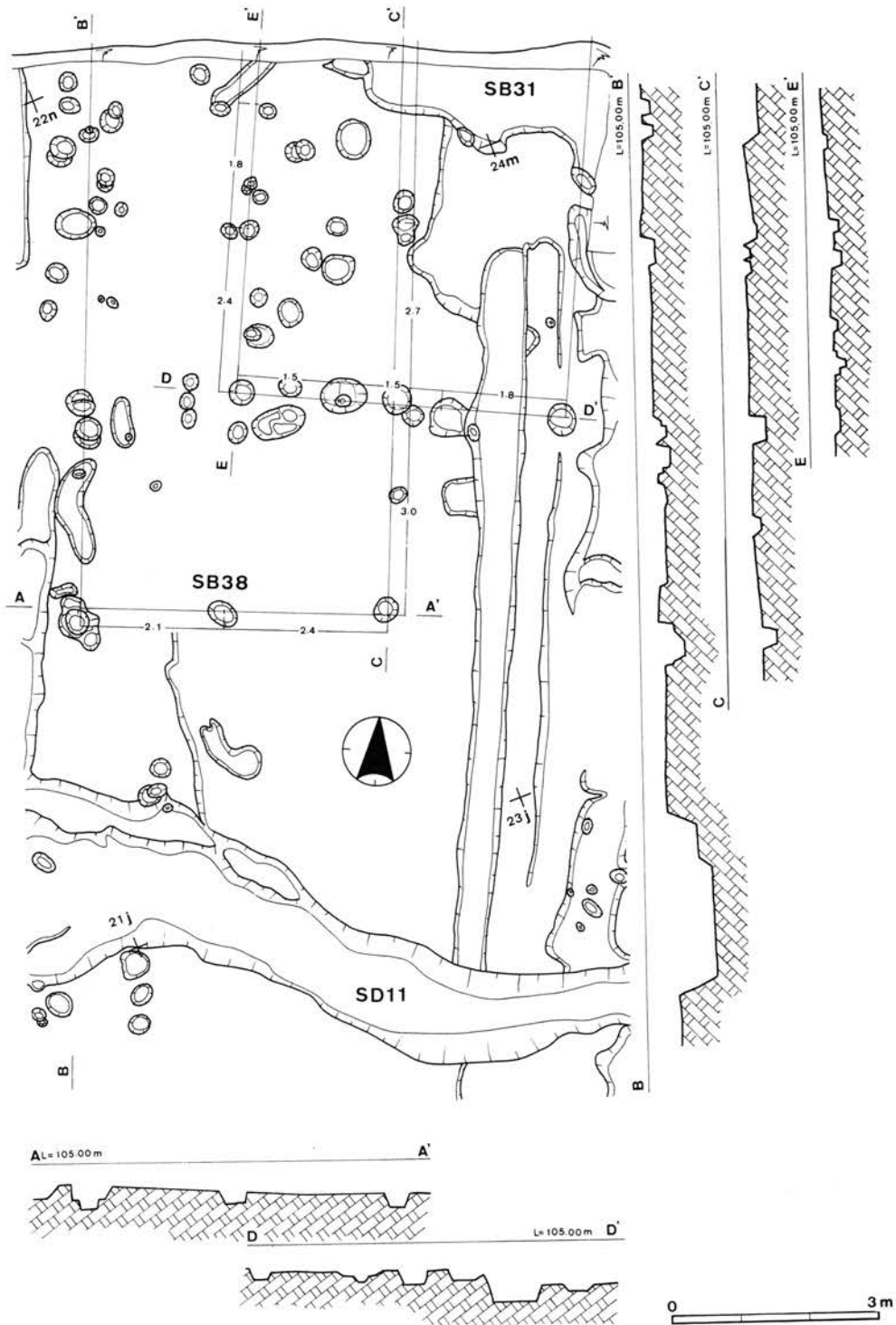
B-SB 33 (第66図) SB33は、B地点の南西隅、Xr~u・21~23区で検出した2間(6.0m)×2間(6.9m)を測る総柱の建物跡である。東西柱間は3.0mの等間隔、南北柱間は3.0m・3.9mを測り、他の掘立柱建物跡に比し、柱間が広く、掘形規模も大きい。SB33には出土遺物がなく、時期決定の資料を欠くが、第Ⅲ期の遺構であるSD05を切る。掘形埋土は第Ⅲ・Ⅳ期の掘形埋土が黒色粘質土であるのに対し、SB33は黒色粘質土とともに地山土に近似した黄色粘土をブロック状に含み、第Ⅲ・Ⅳ期の掘立柱建物跡とは様相を異にする。SB33の方位はN7°21'Wを測る。

B-SB 48 (第66図) SB48は、SB33に重複して検出した2間(6.0m)×2間(6.6m)を測る総柱の掘立柱建物跡である。東西柱間は3.0mの等間隔、南北柱間は2.7m・3.9mを測り、東西方向の柱間が若干広い。掘形は円形を呈し、直径約40~55cmを測る。SB48は第Ⅲ期の遺構であるSD05を切り、SB33によって切られる。SB48の方位はN3°21'Wを測る。

B-SA 34 (第66図) SA34は、Xr~x・20~22区で検出した南北方向にのびる柵列である。SA34は検出長約10mを測り、南北方向にさらにのびるものと思われる。各柱穴の掘形は円形を呈し、掘形直径約30~40cm・深さ約10~20cmを測る。各柱間は1.5~2.1mを測り、等間隔には配されていない。SA34はN7°27'Wを測る。

B-SA 35 (第66図) SA35は、SA34の東2mに位置し、SA34と平行に走る柵列である。SA35は検出長約13mを測り、SA34と同様、さらに南北方向にのびるものと思われる。SA35の各柱間は2.0~2.5mを測り、等間隔には配されていない。SA35は第Ⅲ期の遺構であるSD05を切って構築されている。SA35の方位はN5°53'Wを測る。

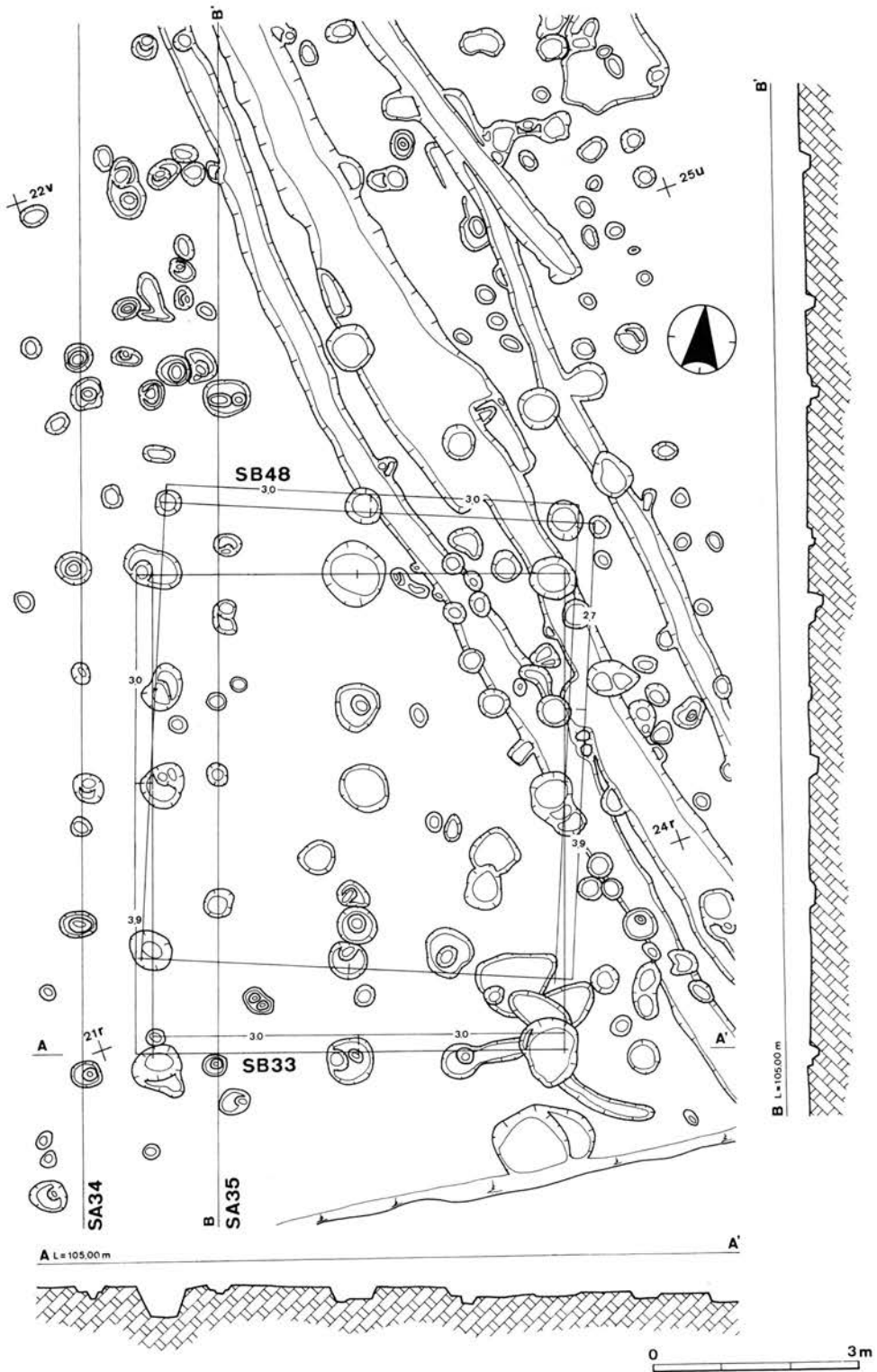
C-SB 02 (第55図) SB02は、Vv~Ua・27~30区で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。規模は3間(8.7m)×4間(9.2m)を測る総柱の建物跡である。東西柱間は3.0m・2.85m・2.85mを測り、南北柱間は2.3m・2.5m・2.5m・1.9mを測る。掘形は円形を呈し、直径約20cm・深さ約15cmを測る。SB02は第Ⅲ期の遺構であるSD04を切ると思われるが、SB02の埋土とSD04の埋土が近似するため、SB02の西南隅の掘形の検出は困難であった。出土遺物は掘形内から出土した瓦器の細片がある。SB02の方位はN8°24'Wを測る。



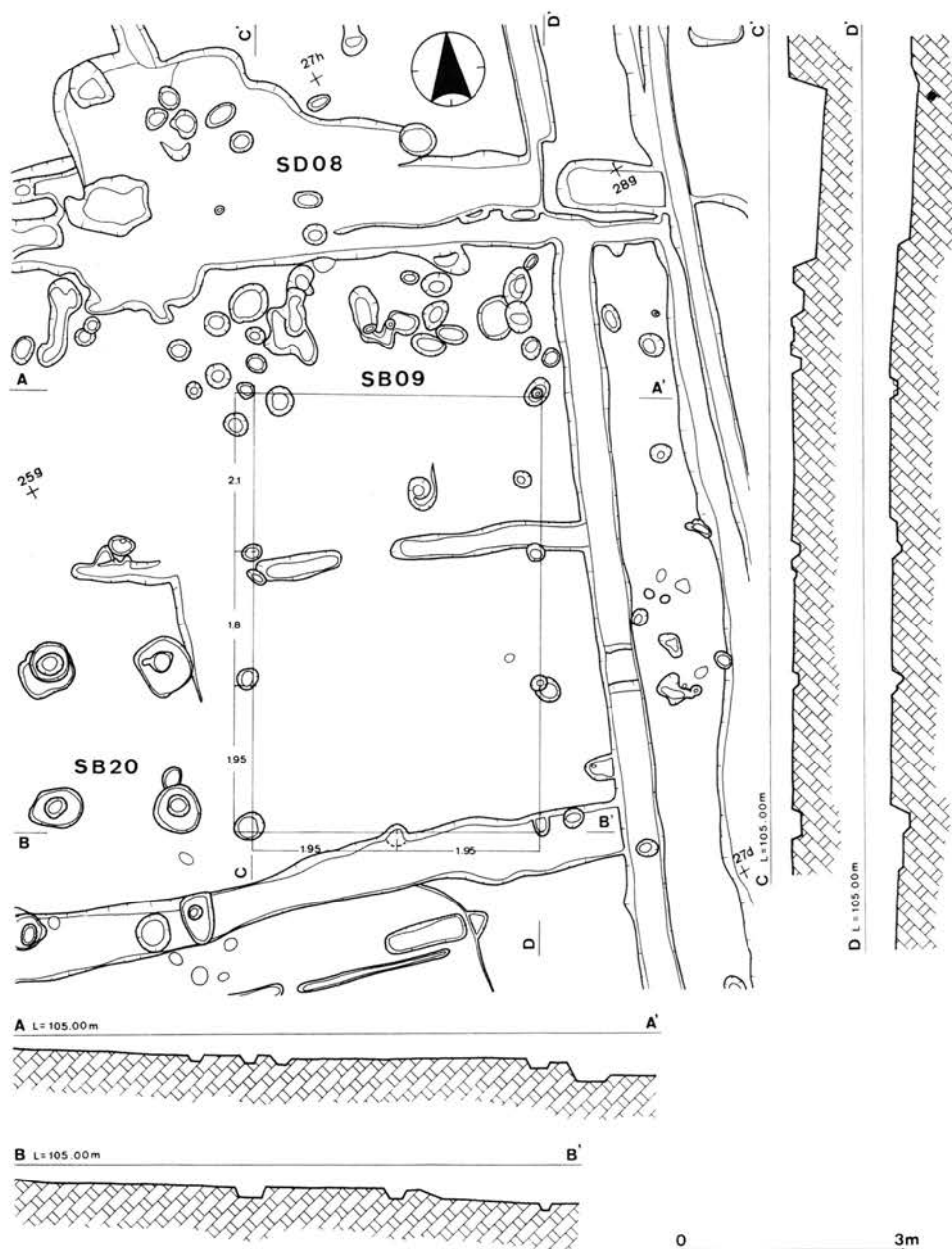
第64図 B地点 SB 31・SB 38 平面図



第65図 B地点 SB32 平面図

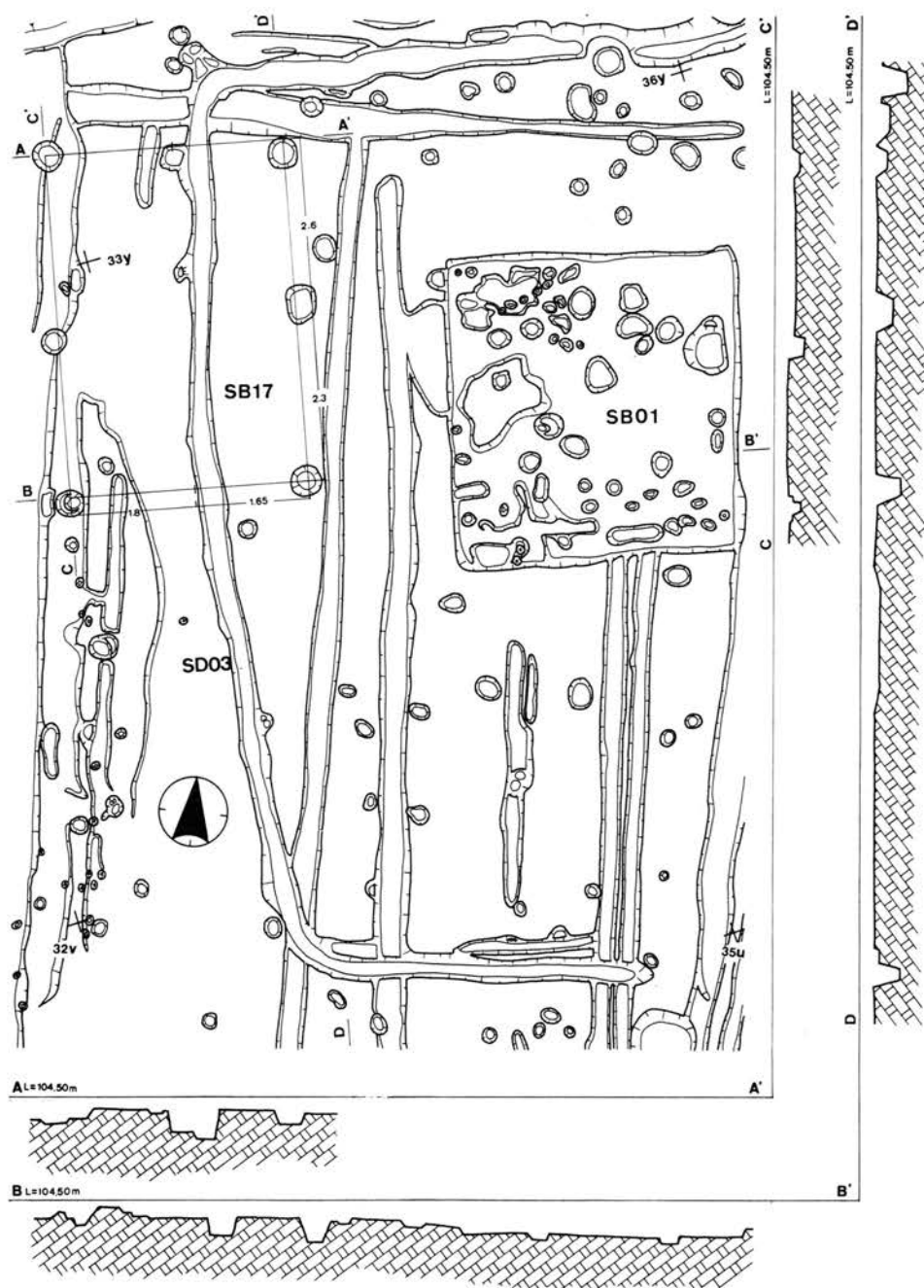


第66图 B地点 SB 33・SB 48・SA34・SA35 平面图

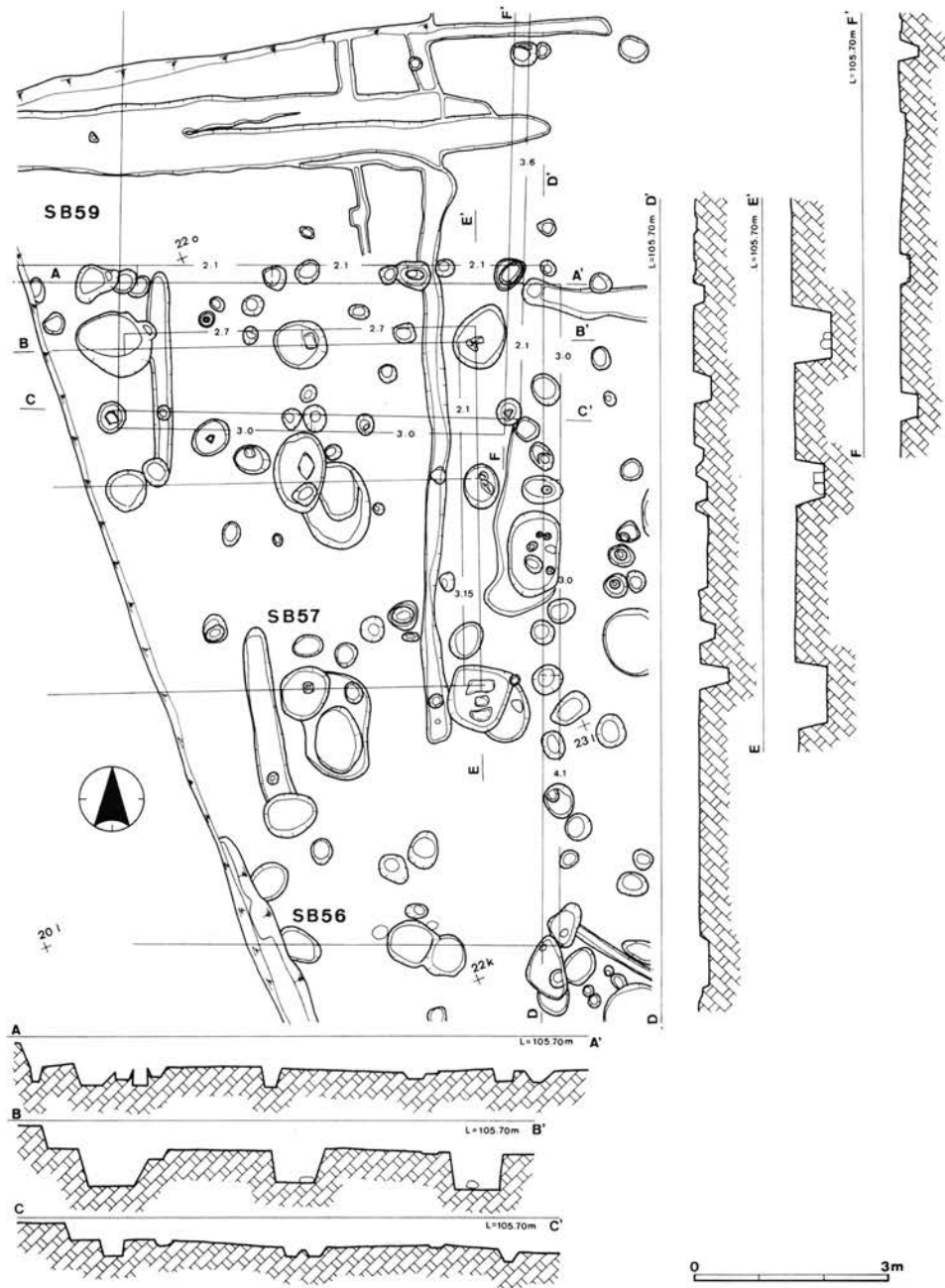


第67図 C地点 SB09 平面図

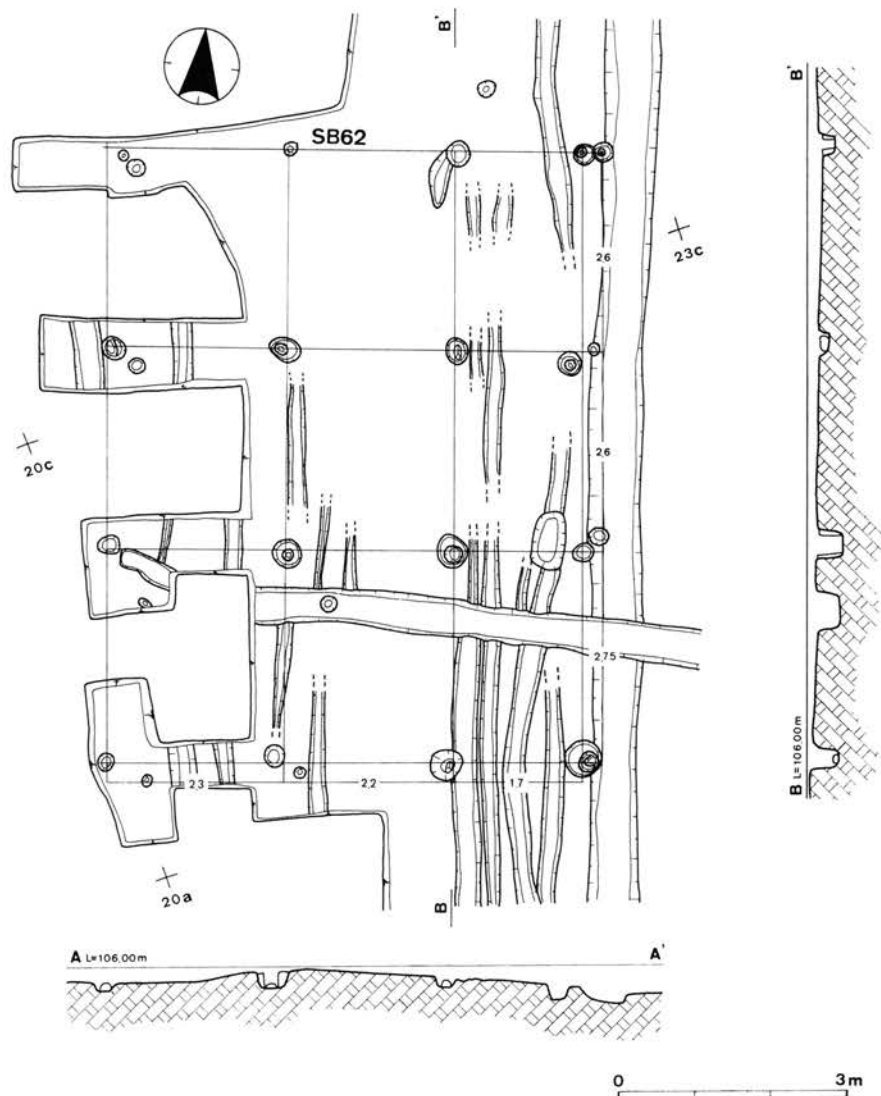
C-SB09 (第68図) SB09は、Ve~g・25~27区で検出した2間(3.9m)×3間(5.85m)を測る南北棟の掘立柱建物跡である。梁行柱間は1.95mの等間隔を測り、桁行は2.1m・1.8m・1.95mと不統一である。各掘形は円形を呈し、直径約30~40cm・深さ約15~25cmを測り、柱穴痕が明瞭な北東隅では柱穴直径約15cmを測る。なお、SB09の北柱間列の梁行中



第68图 C地点 SB01・SB17 平面图



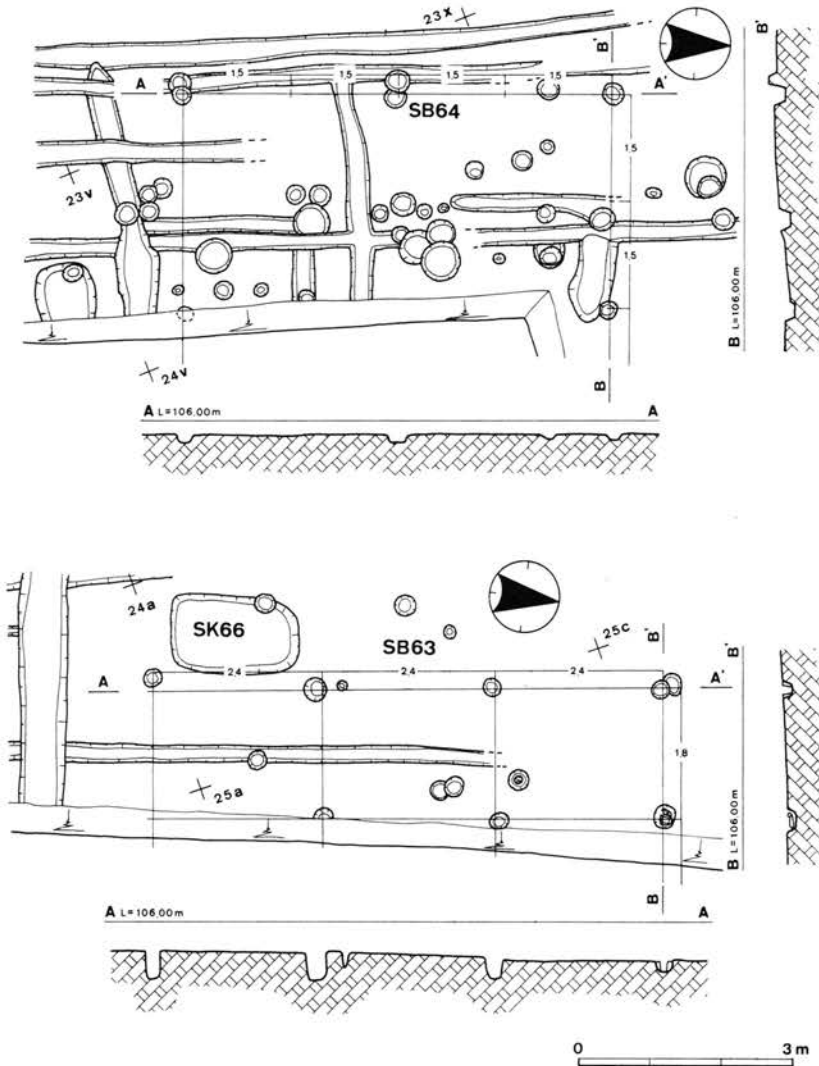
第69図 C地点 SB56・SB57・SB59 平面図



第70図 C地点 SB 62 平面図

中央の掘形が確認できず、第Ⅲ期の遺構であるSD08部分までのび、桁行が4間となる可能性がある。SB09の方位は $N3^{\circ}27'E$ を測る。

C-SB 17 (第68図) SB17は、 $V_x \sim U_a \cdot 32 \sim 34$ 区で検出した2間(3.45m)×2間(4.9m)を測る南北棟の掘立柱建物跡である。梁行柱間は1.65m・1.8m, 桁行柱間は2.3m・2.6mを測り、各柱間は不統一である。各掘形は方形あるいは隅丸方形を呈し、直径約30~45cm・深さ約20~30cmを測る。柱穴の直径は西南隅のもので直径約20cmを測る。SB17掘形内には遺物が遺存せず、時期決定の資料を欠くが、建物跡方位が $N10^{\circ}30'W$ を測ることから、



第71図 C地点 SB63・SB64 平面図

第IV期の建物跡と考えられる。

C-SB 56 (第69図) SB56は、Vk~o・21~23区で検出した3間(10.1m)×3間(6.3m)以上を測る東西棟の掘立柱建物跡である。梁行は3.0m・3.0m・4.1mを測り、南柱間が若干広い。桁行は2.1mの等間隔を測る。西側については調査地域外となるため不明である。掘形は円形を呈し、直径約30~50cm・深さ約40cmを測る。SB56の方位はN5°00'Wを測る。

C-SB 57 (第69図) SB57は、SB56・SB58に重複して検出した2間(5.25m)×2間以上(5.4m以上)を測る東西棟の掘立柱建物跡である。梁行柱間は2.1m・3.15mを測り、桁行柱間は2.7mの等間隔である。各掘形は円形あるいは隅丸方形を呈し、埋土にはB-SB33

と同様、黒色粘土のうちに地山土に近似した黄色粘土のブロックを含む。SB57は掘形内に柱痕をとどめ、そのまわりに栗石が認められる。出土遺物は掘形内出土の陶器片がある。SB57の方位はN3°26'Wを測る。

C-SB 59 (第69図) SB59は、Vm~o・21~23区で検出した2間(6.0m)×2間(5.7m)以上を測る南北棟の掘立柱建物跡である。梁行柱間は3.0mの等間隔をなし、桁行柱間は2.1m・3.6mを測る。掘形は円形を呈し、南西隅・南東隅の掘形底部で根石と思われる平石を検出した。SB59の方位はN2°58'Wを測る。

C-SB 60 SB60は、Vr~t・25~27区で検出した2間(3.6m)×2間(5.1m)を測る東西棟の掘立柱建物跡である。梁行柱間は1.5m・2.1m、桁行柱間は1.8m・3.3mを測る。掘形は円形を呈し、直径約40cm・深さ約15cmを測り、柱穴直径は20~25cmを測る。SB60の方位はN3°14'Wを測る。

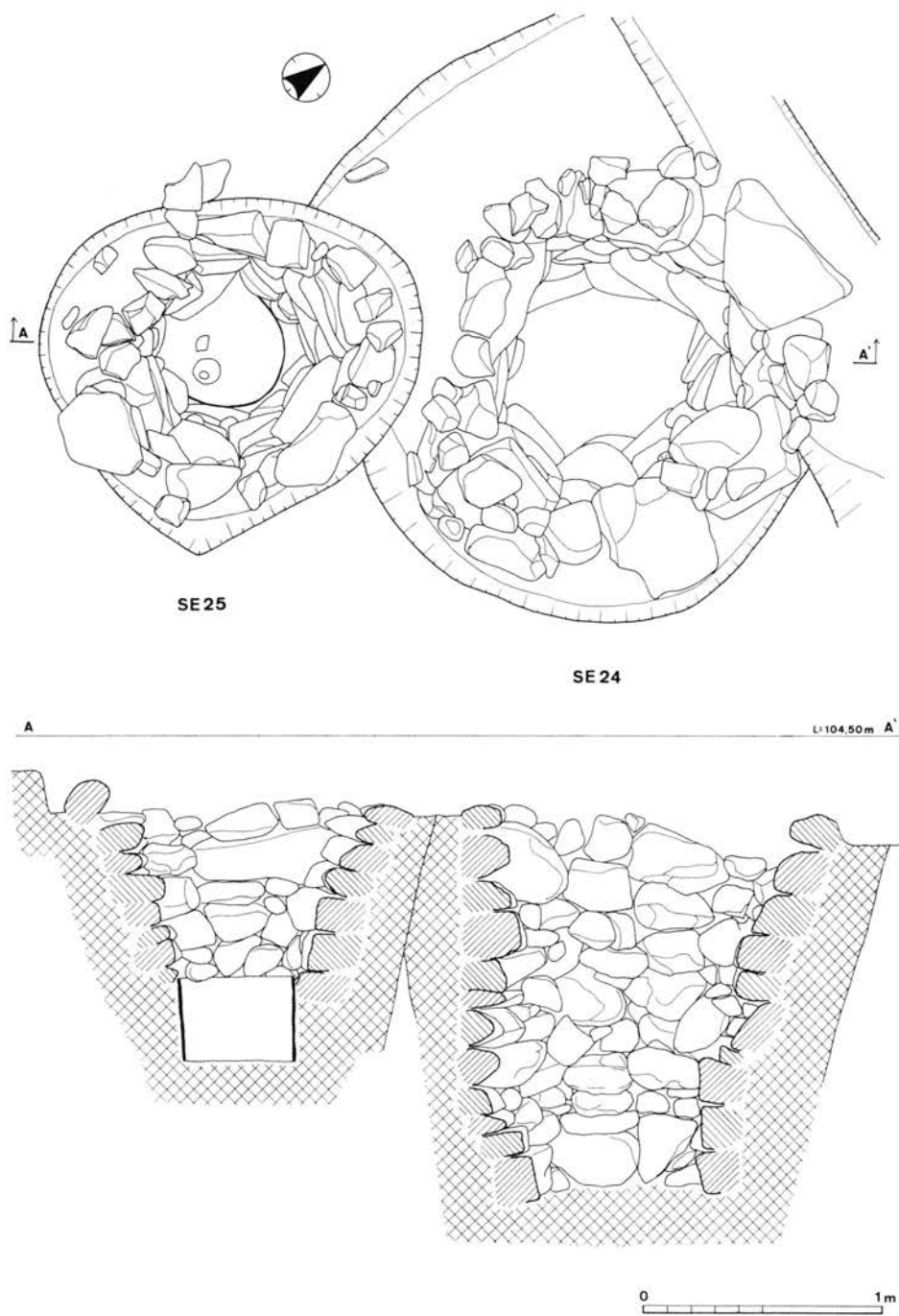
C-SB 62 (第70図) SB62は、Vy~Uc・20~23区で検出した3間(6.2m)×3間(7.95m)を測る総柱の掘立柱建物跡である。東西柱間は2.3m・2.2m・1.7m、南北柱間は2.6m・2.6m・2.75mを測り、東西柱間が狭くなる。掘形は円形を呈し、直径20~50cm・深さ15~40cmを測り、柱穴は25cmを測る。SB62の方位はN7°02'Wを測る。

C-SB 63 (第72図) SB63は、Vu~w・23~25区で検出した、3間(7.2m)×1間(1.8m)以上を測る建物である。SB63は南側が田畑畦畔のため調査できず、建物の東端を確認したのみである。SB63はSB02・SB62と同様、総柱の建物跡と思われる。SB63の方位はN2°49'Wである。

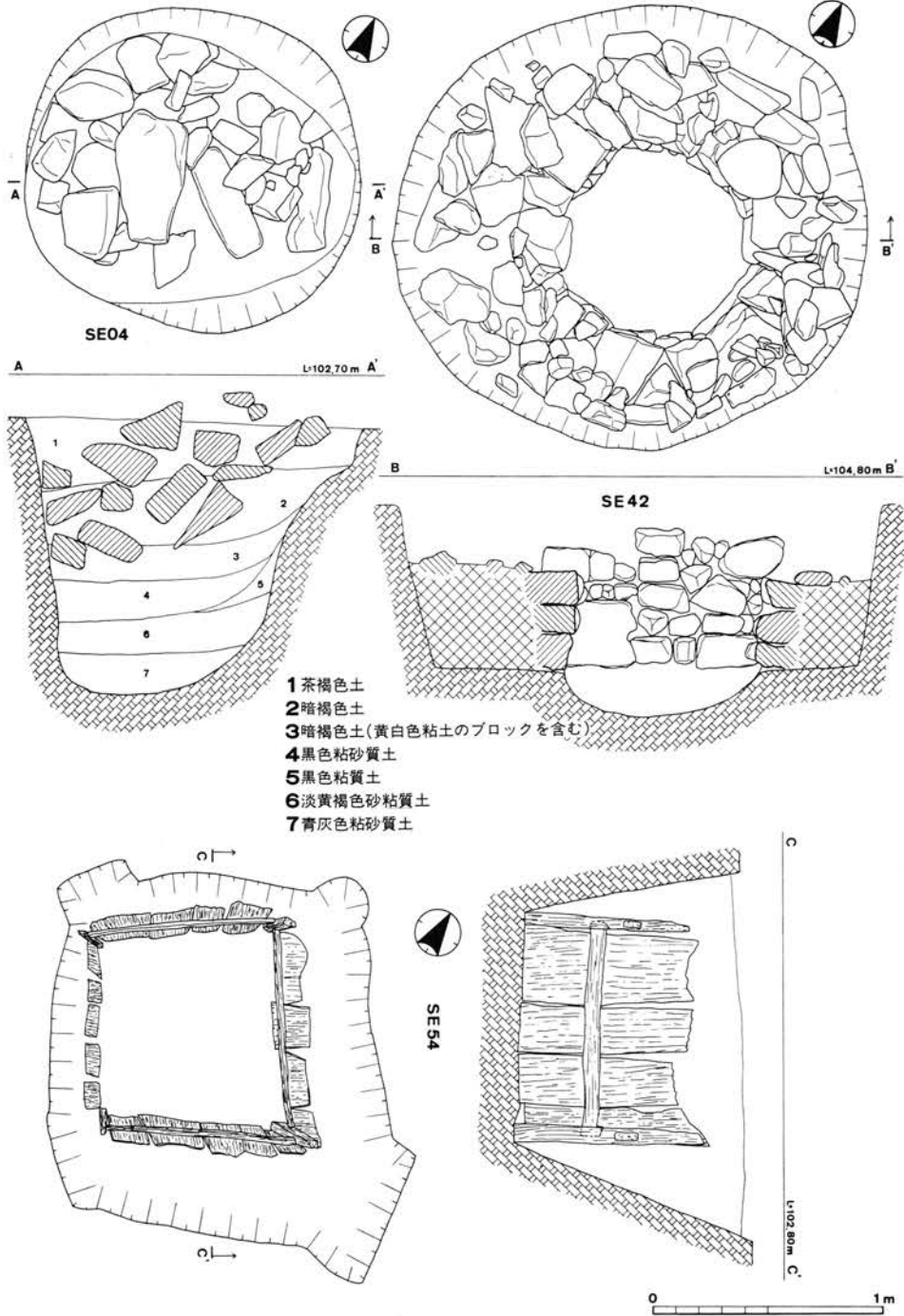
C-SB 64 (第72図) SB64は、Vy~Ub・24~26区で検出した2間(3.0m)以上×4間(6.0m)を測る掘立柱建物跡である。SB64はSB63と同様、建物の東半分を確認したのみである。各柱間は1.5mの等間隔である。SB64の方位はN5°59'Wを測る。

B-SE 24 (第73図) SE24は、Wi~g・21区で検出した石組みの井戸である。SE24は掘形直径約2.2m・石組みの内径約1.2m・深さ約1.5mを測る。SE24は河原石を組み立て、底部には直径約27cmの曲物を据える。SE24からは石組み内より瓦器・土師器のほか漆器碗が、掘形内より瓦器碗が出土した。

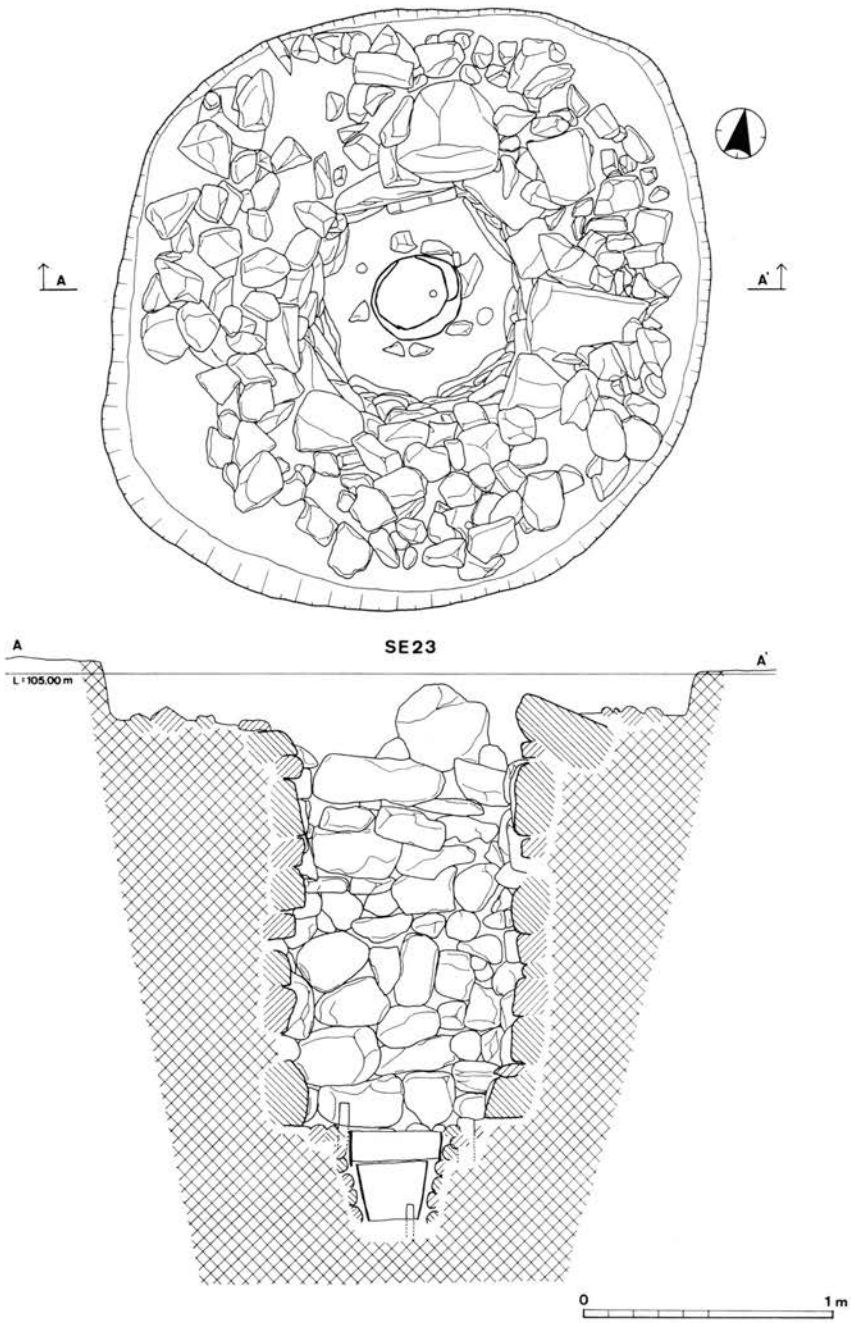
B-SE 25 (第73図) SE25は、Wj・21区で検出した石組みの井戸である。SE25の掘形は直径1.4×1.7m・石組みの内径約9.5m・深さ約1.1mを測り、掘形に対して石組みは小規模となる。底部はレンズ状に凹み、SE24にみられた曲物等は検出されなかった。SE25は河原石を組みあわせたもので、下段は方形に近く、上段は上へいくにしたがい円形に組み合せる。遺物は石組みおよび掘形内より瓦器碗が出土した。なお、SE25はSE24に切られている。



第72図 B地点 SE 24・SE 25 平面図及び立面図



第73図 B地点 SE 04・SE 54, C地点 SE 42平面図及び立面図



第74図 C地点 SE23 平面図及び立面図

B-SE 04 (第74図) SE04は、We・d・36・37区で検出した直径1.5m・深さ1.18mを測る素掘り井戸である。SE04の埋土は6層に分かれ、1・2層には人頭大の河原石が堆積していた。遺物は第3・4層内から土師器、瓦器の細片が多量に出土した。また第1層直上で鉄器片が出土した。

B-SE 29 SE29は、XY・x・30区で検出した直径1.0m・深さ約60cmを測る素掘り井戸である。SE29の出土遺物には土師器・瓦器のほか青磁がある。

B-SE 54 (第73図) SE54は、XY・37区で検出した方形の木枠組み井戸である。SE54の掘形は一辺約1.5~1.7m・深さ約1.0mを測る。SE54の内側で木枠組みを検出した。木枠は四隅に一辺約5~7cmの柱材を据え、横木との接合には枘を穿ち組み合わせる。側材は4~5枚の薄い板材を組み合わせたもので、全体にていねいな造りである。SE54からは木枠組み内より土師器・瓦器が出土している。

C-SE 23 (第74図) SE23は、Vi・22区で検出した円形石組み井戸である。掘形直径は約2.0m・石組みの内径約90cm・深さ約2.1mを測り、井戸底部で二段に重ねた曲物を検出した。また、井戸底部には曲物の内・外側に隣接して2か所の木杭が打ち込まれている。SE23出土遺物には土師器・瓦器・陶器の各細片がある。

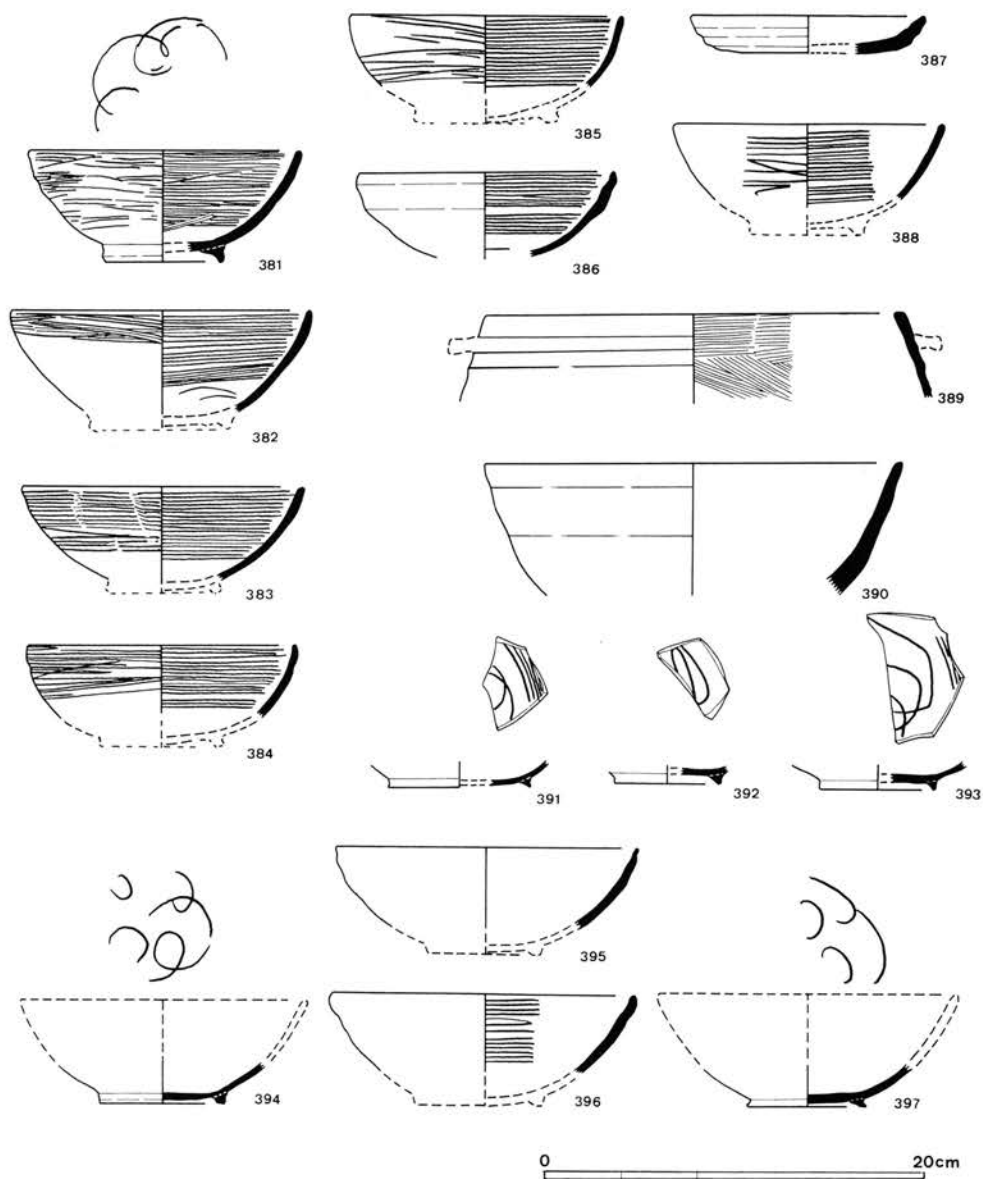
C-SE 28 SE28は、Vi・m35区で検出した直径約2.8m・深さ約1.5mを測る円形素掘り井戸である。SE28は断面観察によると、黒色粘土層から切り込まれているが、黒色粘土層の直上にある灰色粘質土層が後世に削平を受け、認められないことから、本来灰色粘土層から切り込まれていたものかどうかは不明である。SE28出土遺物には瓦器碗がある。

C-SE 42 (第73図) SE42は、Wx・y・20・21区で検出した円形石組み井戸である。掘形直径は約1.7m・石組みの内径約1.0m・深さ約50cmを測り、底部にはレンズ状の凹みが認められる。SE42出土遺物は石組み内出土の須恵器甕、瓦器がある。

C-SE 49 SE49は、SE28と同様、トレンチ東端で検出した直径約3.0m・深さ約1.2mを測る円形素掘り井戸である。SE49出土遺物には瓦器碗がある。

C-SD 22 SD22は、Vm~q・24~36区で検出した検出長約36.5m・幅約2.5~3.0m・深さ約80cmを測る東西方向の溝状遺構である。SD22は土層観察によると、2~3回の改修があり、そのため、底部の凹凸が著しい。出土遺物は須恵器・土師器のほか、青磁・陶器片があり、出土遺物から第Ⅲ期より第Ⅳ期まで時期が重複する溝状遺構と考えられる。

(石井 清司)

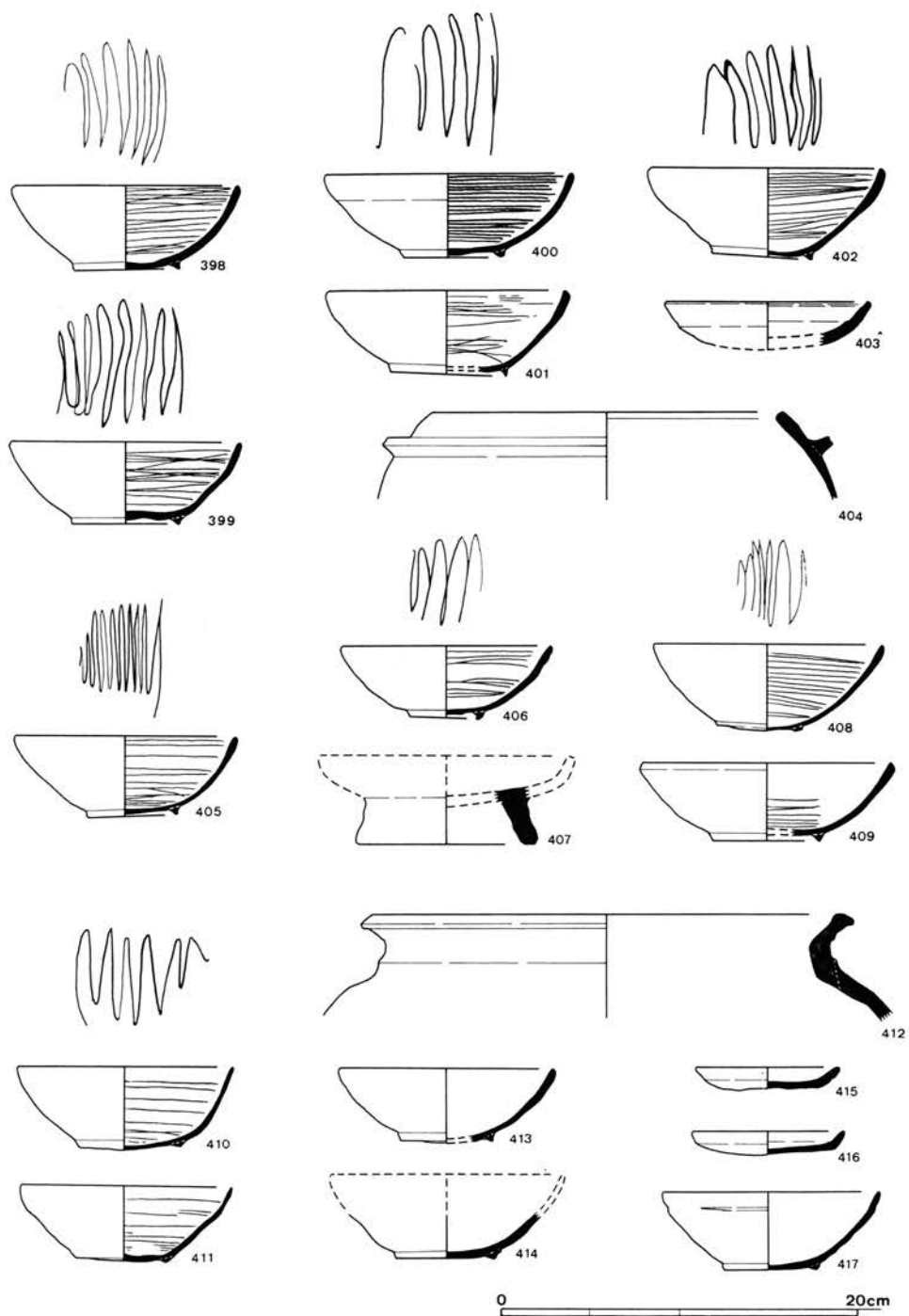


第75図 B地点 SE54, C地点 SE49 出土遺物
SE54; 381~393, SE49; 394~397

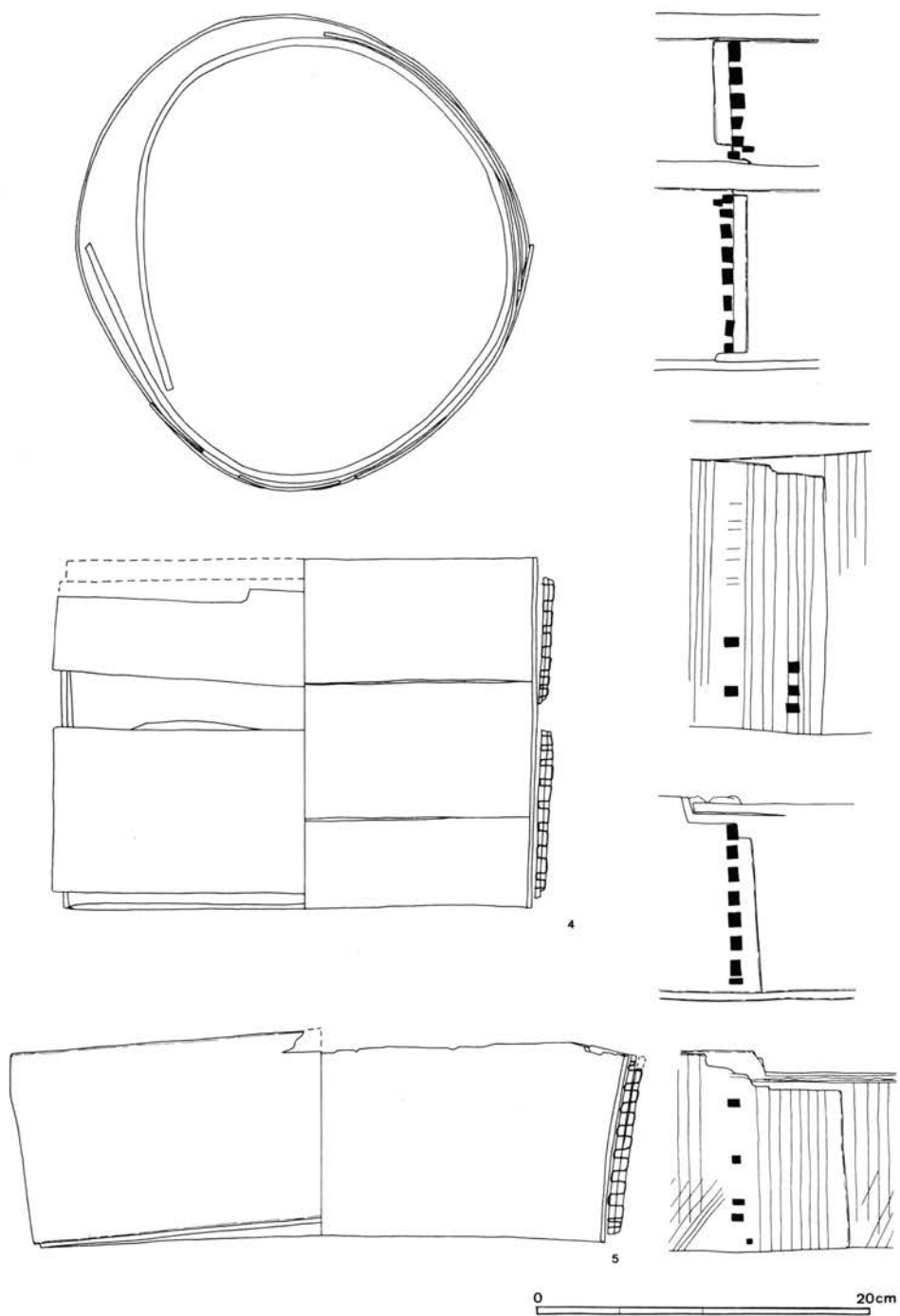
第8節 第IV期の遺物

第IV期の遺物は、瓦器・土師器を中心に須恵器・中国製磁器・国産陶器などが多数出土した。これらの遺物について、出土遺構ごとに述べていきたい。

B-SE 54 出土遺物 (第75図)



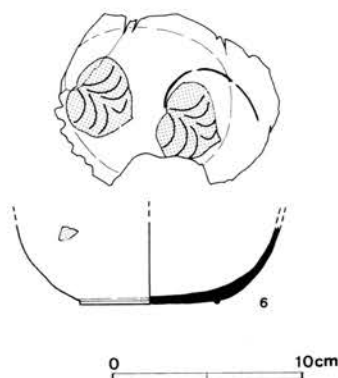
第76図 B地点 SE 24・SE 25・SE 04 出土遺物



第77図 B地点 SE 24(1), C地点 SE 23 出土木製品(1)曲物

瓦器碗，土師器皿・釜，須恵器鉢が出土した。

瓦器碗は，体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾するもの(381～383・388)，体部がやや深く内湾するもの(384・385)，口縁部が肥厚し器面に波状の凹凸をなすもの(386)がある。いずれも内面に密な渦巻状暗文，外面には386を除いて，口縁部または口縁部から体部にかけて比較的密な暗文を施す。381には見込み部に螺旋状暗文が見られ，底部に断面方形の安定した高台を貼りつける。391～393は，いずれも底部に断面三角形の低い高台をもち，見込み部に螺旋状暗文を施す。



第78図 B地点 SE 24
出土木製品 (2) 漆器碗

土師器大皿(387)は，口縁部は斜上方にまっすぐ立ち上がり，口縁部外面に2段の強い横ナデ調整を施す。

土師器釜(389)は，口縁部が内傾し，端部は面をなす。内面にハケ調整を施す。口縁部直下に鏝が貼りつけられるが，欠損している。

須恵器鉢(390)は，口縁部が斜上方にまっすぐ伸び，端部は尖り気味である。東海系の製品か。

SE54出土遺物は，瓦器碗の形態などからみて，12世紀前葉頃に中心を置く。

C-SE 49 出土遺物 (第75図)

瓦器碗が出土した。394は底部に断面方形の高台，397は外方に踏んばる高台をもち，いずれも見込み部に幅広の螺旋状暗文を施す。395は口縁部が内湾し，端部は尖り気味である。内・外面とも磨滅している。396は口縁部がわずかに内湾し，端部は直立気味で，内面にのみやや間隔のあく渦巻状暗文を施す。12世紀中葉頃である。

B-SE 24 出土遺物 (第76・77・78図)

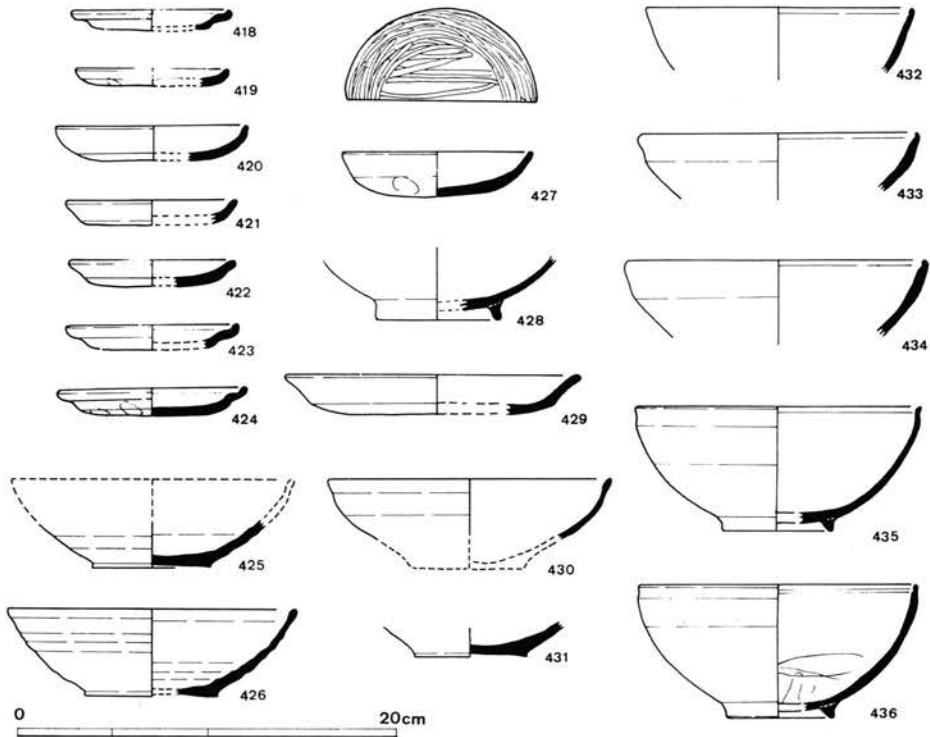
瓦器碗・釜，土師器皿，木製品として曲物・漆器碗が出土した。

瓦器碗は，口縁部がまっすぐなもの(398～400)，口縁部が肥厚・内湾し端部が鋭角的なもの(401・402)がある。いずれも底部に断面方形(400)ないし，三角形の低い高台を貼りつける。内面には比較的密(400)またはやや間隔のあく渦巻状暗文，見込み部には底部欠損の401を除いて4～8往復の鋸歯状暗文を施す。

瓦器釜(404)は，口縁部が内湾し，端部が面をなす。肩部に短い鏝を貼りつける。山城型。

土師器大皿(403)は，丸味をもつ底部から口縁部がまっすぐ斜め上方に伸びる。

曲物(M-4)は，井戸底部に据えられていたもので，内側にやや厚目の，外側に薄目の板



第79図 B地点 Pit 87, C地点 SB 62・SK 27・SK 64・SK 65・Pit 101 出土遺物

材を2～3重に重ね合わせ、樹皮で上下2段に分けて綴じる。

M-5は、M-4と同様、2重に重ねた板材を樹皮でとじる。下端に木釘を用いている。M-4はM-5の内側に据えてあった。

漆器碗(M-6)は、黒漆を全面に施した後、見込み部に朱漆で2葉の葵を描く。外面にも一部朱漆が見られる。底部には小さく高台を削り出す。

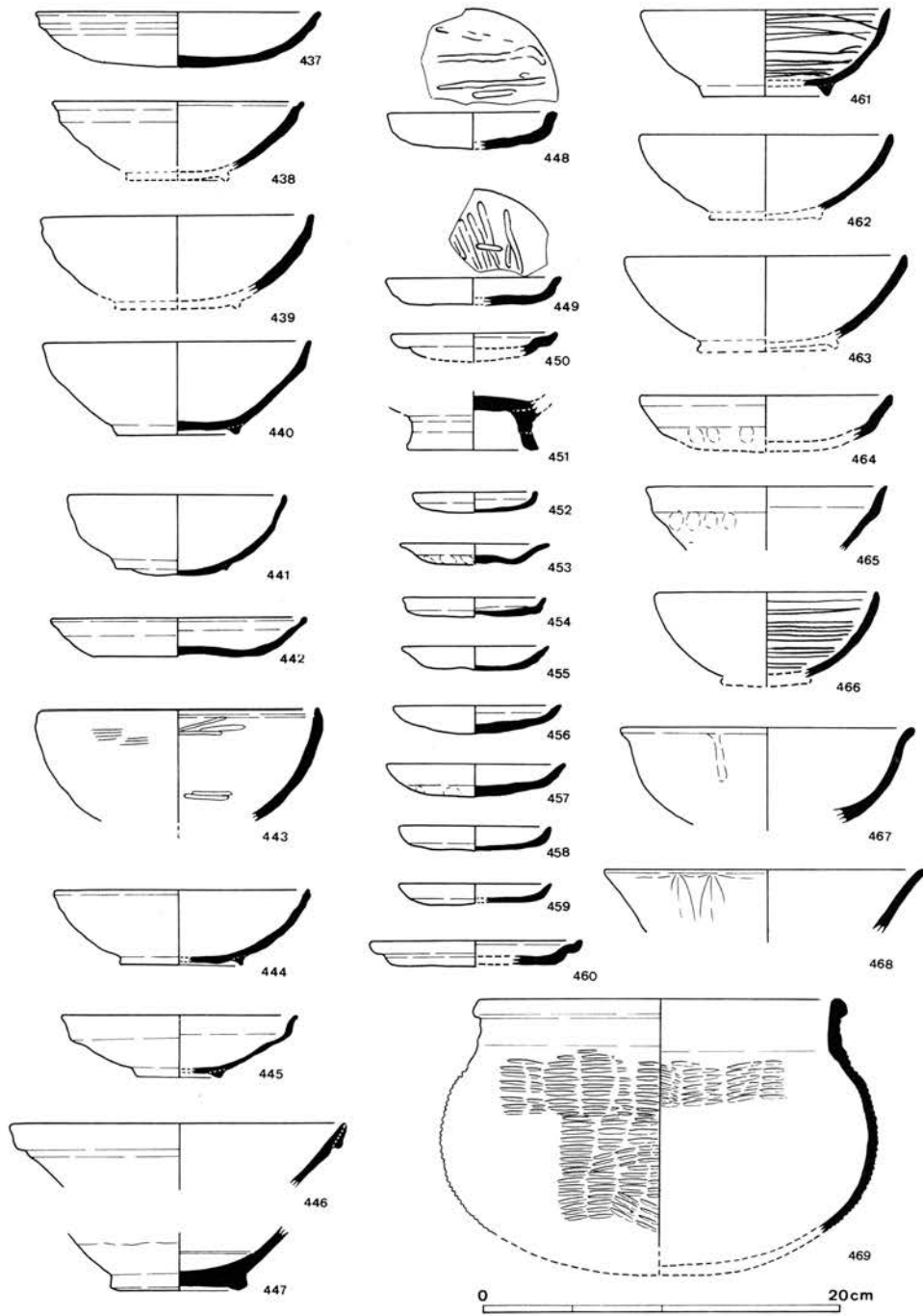
SE24はおおむね13世紀前葉頃である。

B-SE 25 出土遺物 (第76図)

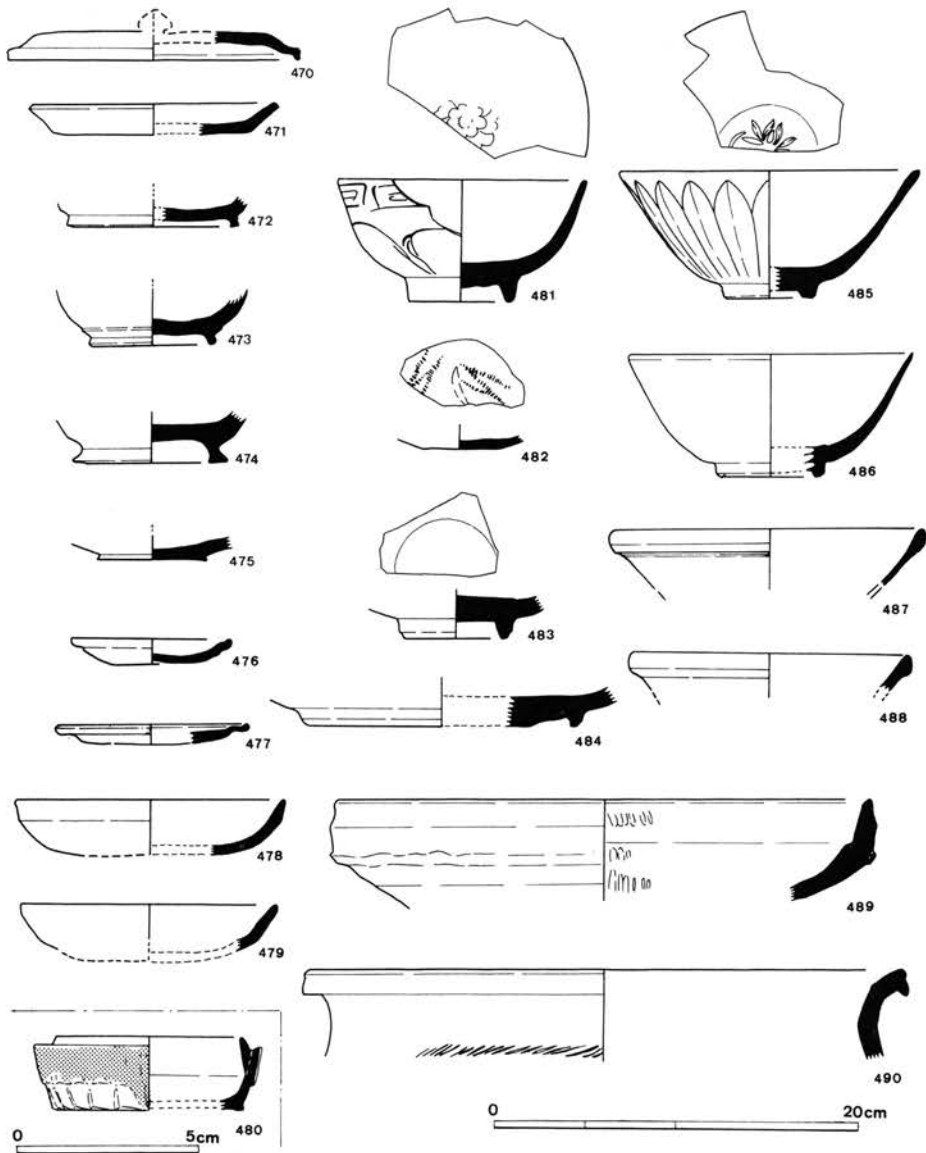
瓦器碗・土師器台付皿が出土した。

瓦器碗は、口縁部が肥厚しゆるく内湾するもの(405・408),わずかに外反するもの(406),直線的なもの(409)がある。409の口縁端部は401・402と同様である。高台は405・406・409は断面が低い三角形を呈する。408は粘土紐を粗く貼りつけただけで、高台としての用途を果たさない。いずれも内面に間隔のあく渦巻状暗文、見込み部には底部欠損の409を除いて4～10往復の鋸歯状暗文を施す。

土師器台付皿(407)は、台部のみ残存する。内・外面に横ナデ調整を施す。



第80図 B地点 SD 28・SE 29・SK 30, C地点 SE 28 ほか出土遺物



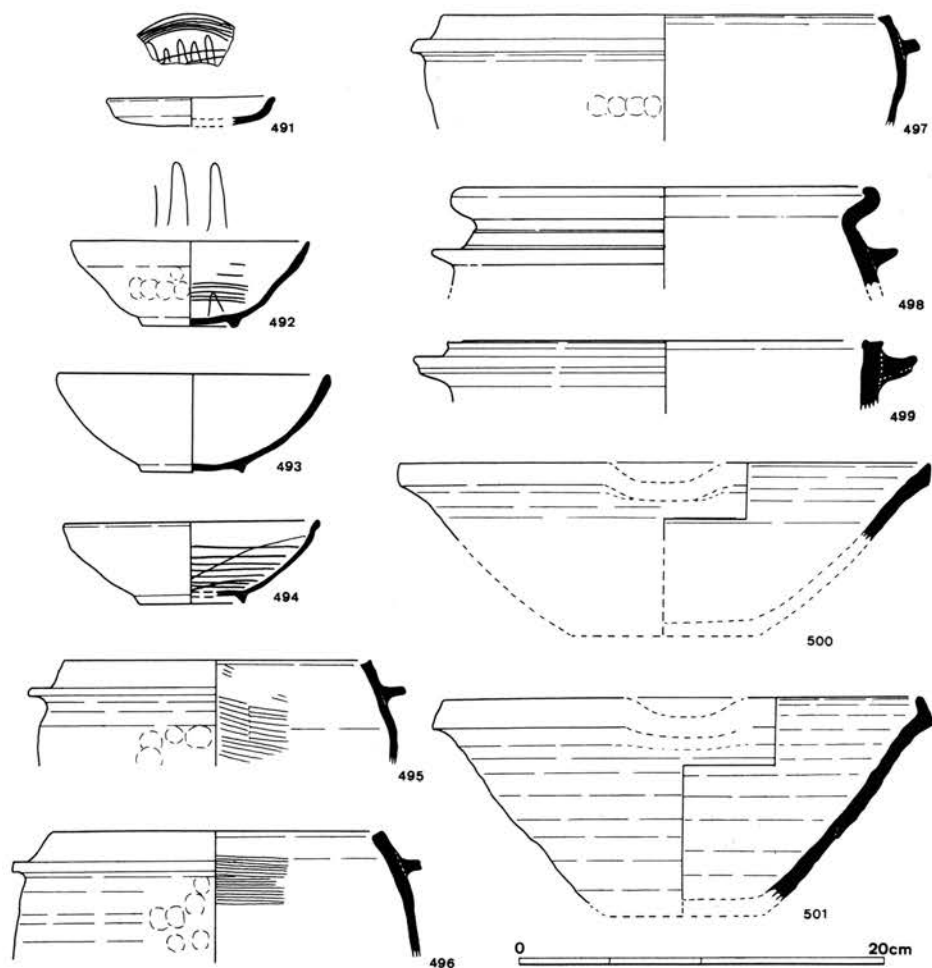
第81図 C地点 SD 22・SE 23, B・C地点包含層出土遺物(1)

SE25出土遺物はSE24に連続し、13世紀中葉頃と考えられる。

B-SE 04 出土遺物 (第76図)

瓦器碗・甕，土師器皿が出土した。

瓦器碗は、体部から口縁部にかけて直線的に伸びるもの(410)，直線的な体部から口縁部がまっすぐ斜上方に立ち上がるもの(411・417)，口縁部が肥厚・内湾するもの(413)がある。底部には414を含めて、いずれも断面三角形の低い高台を貼りつけるが、外底面が



第82図 B・C地点包含層出土遺物(2)

接地ないし下方に張り出し、高台としての用途は充分には果たさない。410・411は内面に間隔の広い渦巻状暗文を施し、410の見込み部には6往復の鋸歯状暗文が見られる。417は口縁部外面の粘土接合痕が明瞭である。

瓦器甕(412)は、口頸部が「く」の字状に外反し、端部は外方に伸びる。

土師器小皿(415・416)は、いずれも口縁部が斜上方に短く立ち上がる。

SE04は、おおむね13世紀中葉～後葉頃である。

C-SB 62 出土遺物 (第79図)

土師器皿、瓦器碗・皿がある。

土師器小皿(418・419)は、口縁部が外方に屈曲し、端部が内側に肥厚する、いわゆる「て」の字状口縁のもの(418)、口縁部が斜上方に短く立ち上がるもの(419)がある。

瓦器碗(428・432～434)は、体部から口縁部にかけて直線的に伸びるもの(432)、口縁部が肥厚し斜上方にまっすぐ立ち上がるもの(433・434)がある。いずれも端部内側に沈線がめぐり、428は底部に断面方形の安定した高台をもつ。

瓦器皿(420・427)は、口縁部が内湾して立ち上がり、端部が直立するもの(420)、口縁部が斜上方にまっすぐ伸びるもの(427)がある。427は幅広の暗文を口縁部内面には密に、見込み部には粗く施す。

C-SK 64 出土遺物 (第79図)

瓦器皿・土師器皿が出土した。

瓦器皿(421)は、口縁部が斜上方に短く立ち上がる。

土師器小皿(422・423)は、口縁部が外反気味のもの(422)、「て」の字状口縁のもの(423)がある。

C-SK 65 出土遺物 (第79図)

土師器中皿(424)が出土した。「て」の字状口縁で、底部が厚い。

B-Pit 87 出土遺物 (第79図)

須恵器碗(425・426)が出土した。いずれも平高台の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚して丸味をもって終わる。底部は回転糸切りである。

C-SK 27 出土遺物 (第79図)

須恵器碗(430・431)が出土した。430は口縁部が内湾し、端部が肥厚し丸味をもって終わる。431は回転糸切りによる平高台の底部をもつ。

C-Pit 101 出土遺物 (第79図)

土師器皿・瓦器碗が出土した。

土師器大皿(429)は、口縁部が外反して伸び、底部との境が屈曲する。

瓦器碗(435・436)は、断面方形の安定した高台をもつ底部から口縁部まで内湾して伸び、深目の器形を呈する。435は端部が外反気味である。436は端部内側に沈線がめぐり、体部内面に比較的密な渦巻状暗文、見込み部には鋸歯状暗文が認められる。

435・436の瓦器碗は、本遺跡では特異なタイプといえよう。Pit101は12世紀代と思われる。

B-SE 29 出土遺物 (第80図)

土師器皿・台付皿、瓦器碗・皿が出土した。

土師器皿(437・450)は、丸味をもつ底部から口縁部が内湾気味に立ち上がる大皿(437)、「て」の字状口縁の小皿(450)がある。

土師器台付皿(451)は、台部のみ遺存する。台部はゆるい「く」の字状に屈曲する。

瓦器碗(438～440)は、口縁部が肥厚してまっすぐ伸びるもの(438)、体部が内湾し口縁部が直立気味のもの(439)、体部が直線的で口縁部が直立気味のもの(440)がある。438は端部内側に沈線をめぐらす。440は底部に断面三角形の低い高台をもつ。

瓦器皿(448・449)は、いずれも口縁部が外反気味に短く立ち上がり、見込み部に幅広の暗文を粗く施す。

B-SD 28 出土遺物 (第80図)

瓦器碗・土師器が出土した。

瓦器碗(441)は、体部が内湾し、口縁部がわずかに外反する。高台は粘土紐を粗く貼りつけただけで、全く用途を果たさない。全体に器形が歪む。

土師器小皿(452・453)は、口縁部が短く直立気味のもの(452)と外反して伸びるもの(453)がある。

C-SD 49 出土遺物 (第80図)

土師器大皿(442)が出土した。わずかに内側に凹む底部から口縁部がまっすぐ斜上方に伸び、端部は丸味をもって終わる。

C-Pit 70 出土遺物 (第80図)

瓦器碗(443・444)が出土した。443は体部から口縁部にかけて内湾し、深目の器形を呈する。端部は直立し、内側に沈線がめぐる。内・外面とも磨滅しているが、内面にわずかに暗文が認められる。444は断面三角形の低い高台をもち、底部から口縁部までゆるく内湾して伸びる。

C-Pit 89 出土遺物 (第80図)

瓦器杯(445)が出土した。断面三角形の低い高台をもつ底部から体部が直線的に伸び、口縁部が外反気味に立ち上がる。器壁は薄く、器形は全体に歪む。

C-Pit 22 出土遺物 (第80図)

白磁碗(446)が出土した。幅広の玉縁状口縁をもち、体部は直線的である。胎土は灰白色で黒細粒を含み、釉は黄色がかった白色を呈する。横田・森田氏分類の白磁碗Ⅳ類。^(注15)

C-Pit 58 出土遺物 (第80図)

白磁碗(447)は、削り出しの浅い幅広の高台をもち、底部は厚い。見込み部に圏線がめぐる。胎土は灰色で黒細粒を含み、釉は灰色がかった白色を呈する。外面は体部下半から底部にかけて露胎である。白磁碗Ⅳ類。

C-SK 30 出土遺物 (第80図)

土師器小皿(454・455)が出土した。454は口縁部が短く直立気味に立ち上がる。455は口縁部が斜上方にまっすぐ立ち上がり、端部は尖り気味である。

C-Pit 94 出土遺物 (第80図)

土師器中皿(456)が出土した。丸味をもつ底部から口縁部が短く斜上方に立ち上がる。

C-Pit 2 出土遺物 (第80図)

土師器中皿(457)が出土した。456とほぼ同型である。

C-Pit 3 出土遺物 (第80図)

土師器皿・鍋が出土した。

土師器皿(458～460)は、小皿では口縁部が短く直立気味のもの(458)、わずかに外反するもの(459)、中皿では「て」の字状口縁で器壁の厚いもの(460)がある。

土師器鍋(469)は、球形の体部から口頸部が直立し、端部が外方に肥厚する。体部外面に平行タタキを施す。外面の一部に火を受けている。

C-SE 28 出土遺物 (第80図)

瓦器椀(461～463)が出土した。461は体部がわずかに内湾し、口縁部が直立気味である。底部に断面三角形の安定した高台をもち、内面にやや間隔のあく渦巻状暗文が見られる。462・463は体部から口縁部にかけてゆるく内湾して伸びる。13世紀前葉頃である。

B-SD 04 出土遺物 (第80・81図)

土師器皿・瓦器椀・青白磁合子が出土した。

土師器大皿(464)は、口縁部が外反して伸び、口縁部と底部の境は稜をなす。

瓦器椀(465・466)は、直線的な体部から口縁部が肥厚し外反気味に立ち上がるもの(465)、体部から口縁部にかけて内湾して伸びるもの(466)がある。466は内面にやや間隔のあく渦巻状暗文を施す。

青白磁合子・身(480)は、型造りで外面に菊座状文を施す。胎土は黄灰色、釉はやや緑色がかった淡青白色を呈する。

C-Pit 30 出土遺物 (第80図)

青磁椀(467)が出土した。体部は内湾、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。胎土は灰色、釉は灰色がかった淡青緑色で、外面に玉垂れが見られる。龍泉窯系。

C-SK 44 出土遺物 (第80図)

青磁椀(468)が出土した。口縁部はゆるく外反して伸びる。外面に鑄蓮弁文を削り出す。胎土は灰白色で黒細粒を含み、釉は淡青緑色を呈する。龍泉窯系椀Ⅰ類。

C-SD 22 出土遺物 (第81図)

須恵器、青磁椀・盤が出土した。

須恵器杯蓋(470)は、平坦な頂部から縁部が屈曲し、端部を下方に折り曲げる。宝珠つまみがつくものと思われる。

皿(471)は、平坦な底部から口縁部が斜上方に立ち上がる。

壺(472~474)は、いずれもヘラ切りの底部に断面方形ないしは外方に踏んばる高台を貼りつける。

椀(475)は、回転糸切りによる平高台をもつ。

青磁椀(481・483)は、高い断面方形の高台をもつ厚目の底部から体部が内湾して立ち上がり、口縁部がまっすぐ伸びる。外面に片彫りの雷文帯と幅広の蓮弁文、見込み部に花文様のスタンプを施す。胎土は灰色で黒細粒を含み、釉は暗緑色で全面に施した後に外底面を削り取る。破損面に漆が付着しており、かつて破損した際に接合したものである。483は見込み部に圈線が廻る。胎土は481と同様で、釉は淡緑色を呈し、全面施釉後に外底面を削り取る。

青磁盤(484)は、断面方形の低い高台をもち、外底面が接地する。見込み部に片彫りの文様がわずかに認められる。胎土は灰色、釉は灰色がかった淡緑色で、全面施釉の後に外底接地面のみ削り取る。いずれも龍泉窯系である。

C-SE 23 出土遺物 (第81図)

土師器皿・陶器挿鉢、また木製品として曲物が出土した。

土師器小皿(476)は、「て」の字状口縁であるが、器壁は厚く段は不明瞭である。

陶器挿鉢(489)は、口縁端面が幅広の縁帯状を呈する。内面に6本単位の挿目を施す。備前焼である。

曲物(M-5)は、板材を2~3重に重ね合わせ、竹皮で綴じる。

C-SD 11 出土遺物 (第81図)

土師器中皿(477)が出土した。「て」の字状口縁で底部は厚目である。

B-SD 13 出土遺物 (第81図)

白磁椀(487)は、玉縁状口縁をもち体部は薄い。胎土は灰白色で黒細粒を含み、釉は灰色がかった白色を呈する。白磁椀Ⅳ類。

包含層出土遺物 (第81・82図)

包含層では、土師器・瓦器・須恵器・中国製磁器が出土した。以下、器種ごとにまとめて述べてたい。

土師器

皿・釜が出土した。

皿は、いずれも大皿で口縁部が内湾するもの(478)、外反気味のもの(479)がある。

釜は、口縁部が「く」の字状に外反し、肩部に鐙をめぐるもの(498)、口縁部が直立し、端部直下に鐙のつくもの(499)がある。前者は大和、後者は摂津地方からの搬入品である。

中国製磁器

青磁皿・碗，白磁碗が出土した。

青磁皿(482)は，見込み部に片彫りの文様と櫛による鋸歯状文を施す。胎土は灰白色，釉は淡青緑色で全面施釉後に外底部のみ削り取る。同安窯系皿Ⅰ類。

青磁碗(485)は，厚目の底部から体部が内湾して立ち上がり，口縁部までゆるく外反して伸びる。外面に鑄蓮弁文を削り出し，見込み部に圈線と花文様のスタンプを施す。胎土は灰白色で黒細粒を含み，釉は淡青緑色で全面施釉後に外底面と畳付部は削り取る。龍泉窯系碗Ⅰ類。486は削り出しの浅い高台をもつ底部から体部が内湾し，口縁部はゆるく外反する。胎土は灰白色，釉は黄味の強い淡緑色を呈する。龍泉窯系。

白磁碗(488)は，玉縁状口縁をもつ。胎土は灰白色，釉は黄味がかかった灰白色を呈する。白磁碗Ⅳ類。

瓦器

皿・碗・釜が出土した。

皿(491)は，口縁部が外反気味に短く立ち上がる。内面に渦巻状暗文と直交する2重の鋸歯状暗文を施す。

碗(492～494)は，体部が内側に凹み器型の歪んだもの(492)，体部が内湾気味で，口縁部は肥厚しまっすぐ伸びるもの(493)，直線的な体部から口縁部が内湾して立ち上がるもの(494)がある。492は体部内面にやや間隔のあく渦巻状暗文を，見込み部に鋸歯状暗文を，494は体部内面に間隔のあく渦巻状暗文をそれぞれ施す。

釜(495～497)は，いずれも口縁部が内湾し，肩部に幅の狭い鑿をもつ。495・496は体部内面にハケ調整を施す。山城型。

須恵器

甕・ねり鉢が出土した。いずれも東播系の製品である。

甕(490)は口縁端部が幅の狭い縁帯状を呈し，口頸部下半に平行タタキが見られる。内面に炭化物が若干付着している。

ねり鉢(500・501)は，口縁端面が幅の狭い縁帯状のもの(500)，口縁部を内側に折り返し，端面が幅広のもの(501)がある。どちらも端面には黒青緑色の自然釉がかかる。

(中坪 央暁)

第4章 総括

第1節 第I期の遺構について

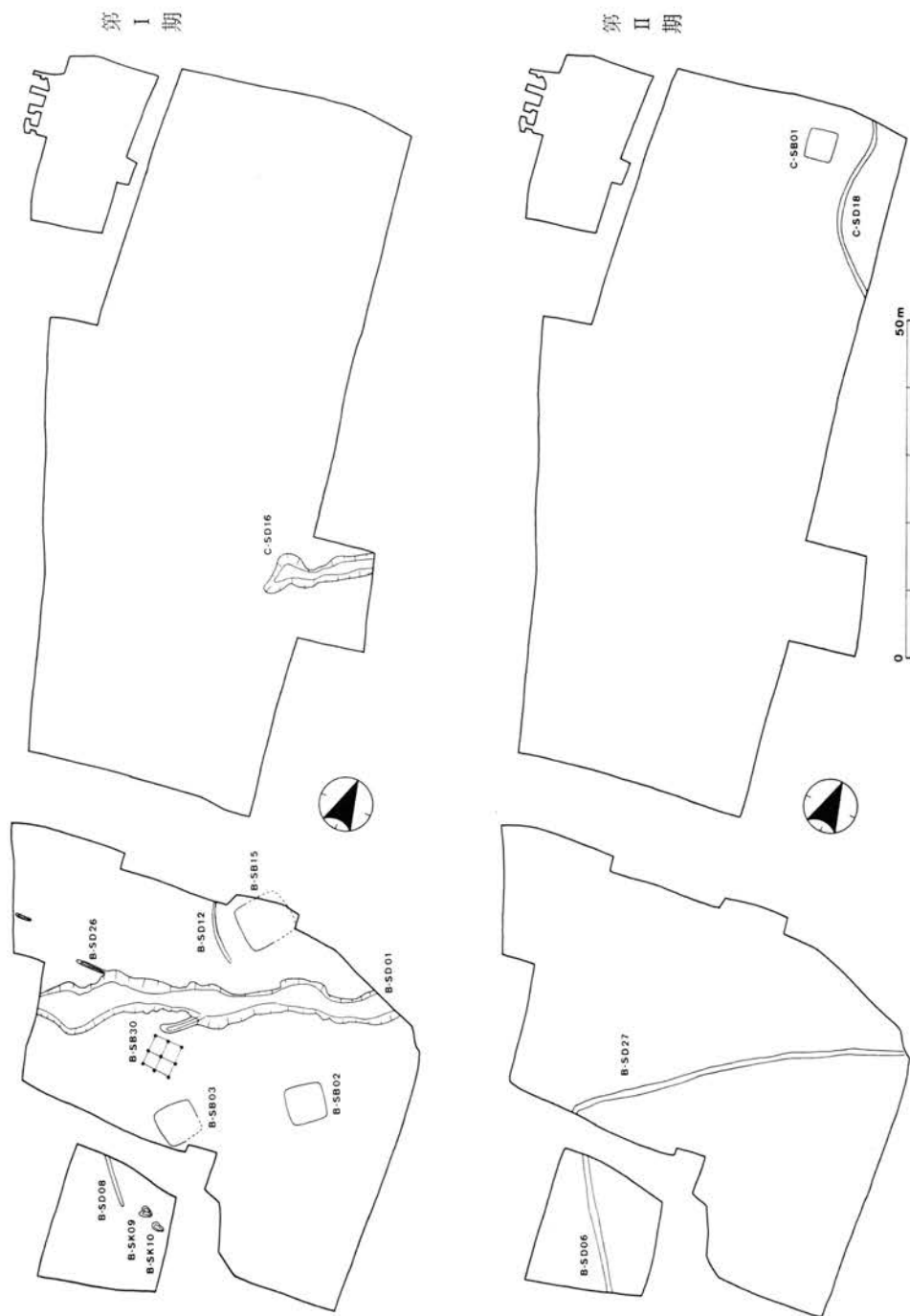
第I期の遺構は、前述のように竪穴式住居跡と溝状遺構・土壇・ピットがあり、B地点に遺構の集中が認められる。

竪穴式住居跡は3基確認し、平面形態はいずれも隅丸方形を呈する。各竪穴式住居跡の規模は、SB02が一辺5.8m、SB03が一辺5.8m、SB15が一辺7mを測り、SB15の規模がわずかに大きくなる。SB02は東壁を中世の溝状遺構によって削平され、また、壁の立ち上がりも10cm未満であり、遺存状態は悪い。SB15はB地点の西端に位置し、北壁は現在の側溝および農道に、東壁は水田の側溝によりそれぞれ削平されており、西壁および南壁の一部と壁溝の一部を確認したにすぎない。SB03は一部中世以降の溝状遺構によって削平されるが、周溝および床面の遺存状態は良好である。SB03の床面直上には柱および小木が火を受けて倒壊した状態で出土し、各辺の隅および周溝内から35個体分の土器が出土した。また南壁溝中央には円形土壇があり、貯蔵穴と考えられている。貯蔵穴と思われる円形土壇はSB02の南側溝中央で確認したが、SB15では遺存状態が悪く、貯蔵穴の有無については不明である。各竪穴式住居跡の主柱についてはSB02・SB15が四本柱と考えられるのに対し、SB03では5～6本柱の多角形をなす。

各竪穴式住居跡では外周する周庭帯および入口の痕跡を示す遺構は確認されなかったが、SB03では貯蔵穴の位置、土器の出土状態、SD01との関連から入口は北壁にあった可能性が考えられる。また、各住居跡の位置関係はSB03の西壁とSB02の東壁間が約14m、SB02の北壁とSB15の南壁間が約21mを測り、各住居跡間の間隔は広い。

SD01は検出長約55m・上面幅約6～9m・深さ約1.5～2.0mを測る大溝であり、3基の竪穴式住居跡間の中央を貫流し、なお、東西方面にのびるものと考えられる。SD01は地下水とともに北金岐遺跡の後背部に位置する行者山の谷間部から注ぎこむ水を、西側の現水田部にそそぎこむ意図をもって人工的に構築されたものであり、その水流を調整するため調査地西端には堰の施設がある。堰は3枚の板を組みあわせて構築されたもので、堰板中央には逃げ水を意図した切り込みが認められる。SD01は、集落と調査地西方に広がると考えられる生産場所(水田面)を結ぶ水路であり、大雨の際には集落を守る排水施設を意図したものと考えられる。

SD01は、規模において多大の労力を必要とし、3基の竪穴式住居跡の居住人員ではまかないきれない労力であり、SD01の出土遺物も多量であることから、大規模な集落が予



第83図 北金岐遺跡B・C地点遺構変遷図(1)



第84図 北金岐遺跡B・C地点遺構変遷図(2)

想され、発掘調査された3基の竪穴式住居跡は、その一部であったと考えられる。この場合、調査地東部に台地が広がり、SD01出土遺物も調査地東端に集中することにより、集落の中心は調査地の東方にあったものと考えられる。(石井 清司)

第2節 竪穴式住居跡内出土遺物について

北金岐遺跡では3基の竪穴式住居跡の床面および埋土内から土器・石器が出土した。

各住居跡内出土遺物の検出状況は、遺構で記したようにSB02は床面直上および埋土内に土器細片が散在し、図化しえる資料が少なかった。これに対し、SB03は火災により倒壊したかのように床面直上に完形品を含む良好な状態で土器が出土した。SB15は床面の大半が削平を受け、周溝およびピット内から完形品を含む土器が出土した。このように各住居跡内の土器の出土状態は一律でなく、同一レベルでの資料として言及することに難を感じたが、ただ土器組成および土器様相について各住居跡ごとに特徴をしめすものがあり、若干、私見を論述したい。

各住居跡内出土土器の個体数は、口縁部を基準とした器種・器形のわかる資料では、SB02; 8個体、SB03; 35個体、SB15; 4個体を数える。そのうち、土器出土状態の良好なSB03をみると、壺; 4個体、甕; 5個体、鉢; 12個体、高杯; 9個体、器台; 1個体、手づくね土器; 4個体をかぞえる。壺・甕の比率は1:1.25と甕の個体数が壺の個体数をわずかに上廻るが、後述するSD01出土土器の壺・甕の比率(1:3)と比較すると、壺の比率が低い。壺・甕の個体比率を相前後した時期の一括資料である長岡京市今里遺跡、向日市中海道遺跡^(注17)と比較すると、同様相を呈する。長岡京市今里遺跡検出の竪穴式住居跡(SB1223)の土器組成は壺; 9個体(遺構内における比率22.5%)で壺・甕の比率が1:1.5となり、北金岐遺跡SB03の出土比率に近似する。向日市中海道遺跡では竪穴式住居跡が検出されず、溝状遺構内から125個体の土器が出土した。溝状遺構内出土の壺は19個体(総個体数に対し15.2%)、甕は52個体(総個体数に対し41.6%)を数え、壺・甕の比率は1:2.7と甕の比率が増大し、北金岐遺跡SD01の土器組成に近似する。このような壺・甕の比率の差異は、竪穴式住居跡と溝状遺構という遺構の性格の差異が反映されているものと考えられる。竪穴式住居跡にみられる単一時期での土器消費量の比率と、溝状遺構にみられる使用後あるいは突発的事故による土器の排棄・堆積した資料の差異であり、溝状遺構内の甕の比率は、甕の消耗品としての回転の早さを裏付ける資料であると考えられる。

北金岐遺跡検出の竪穴式住居跡(SB03)は、前述のように南西および北西は後世の溝状遺構により削平を受けるが、床面直上での土器の出土状態が良好であった。土器の出土状態から、竪穴式住居跡内の土器配置を復元すると、土器は中央部には少なく、北東隅と北

西隅に土器の集中がみられる。北東隅には一部周溝に重なる状態で鉢E・台付鉢B・器台Dなど5個体が、北西隅には周溝内に土器の集中があり、壺Bd・E、甕Ae・Db、台付鉢、高杯B、手づくね土器など8個体が出土した。壺・甕など貯蔵・煮沸用具などが北西隅に、祭祀具としての高杯・器台などが北東部に多く、各辺で土器の器種様相が異なる。

(石井 清司)

第3節 近江系土器について

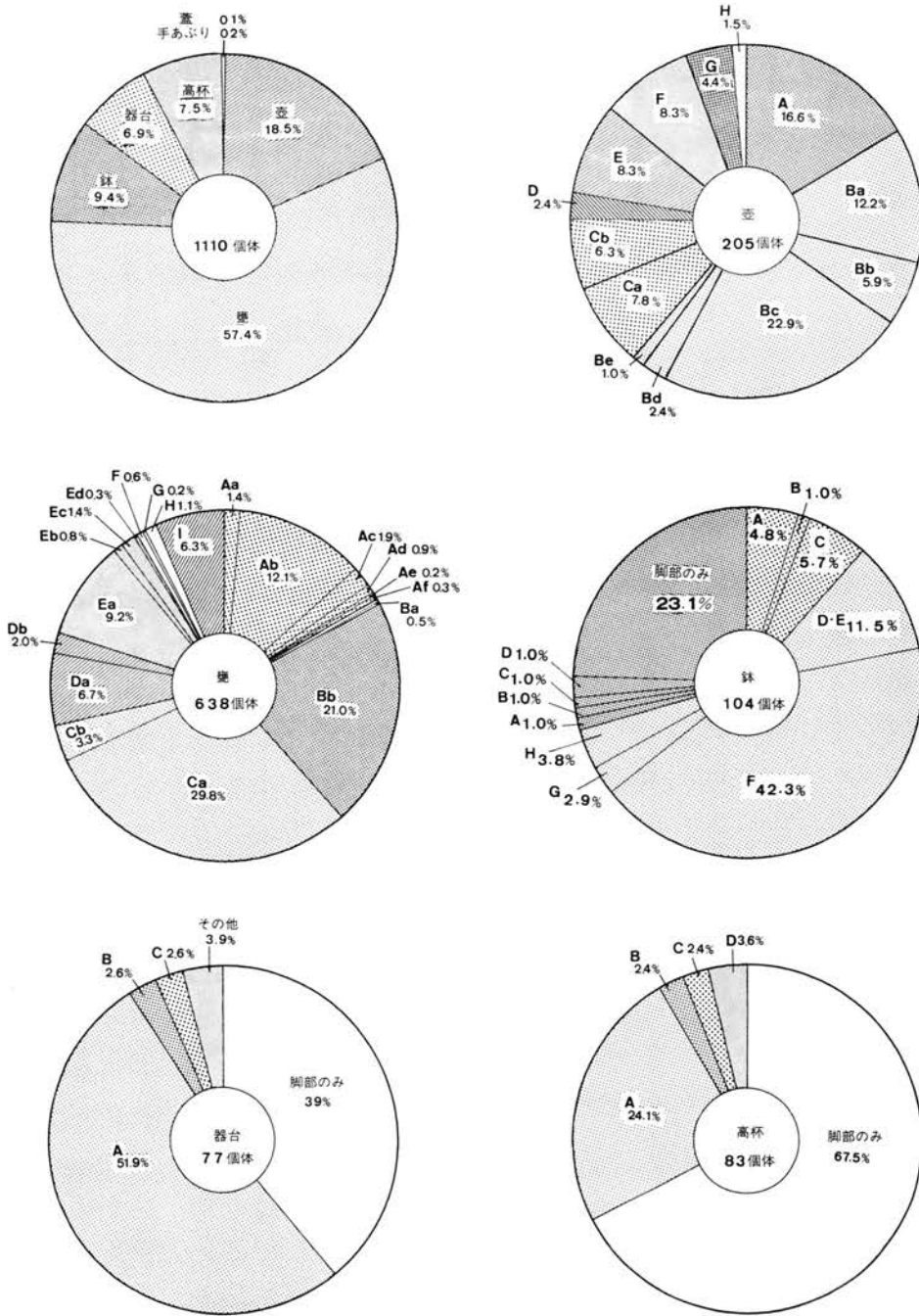
近江系土器については、古くから東海系の「S字状口縁」の影響を受け、成立したものと考えられていたが、昭和50年以降、近江地方の各報告書・論文において、東海・伊勢湾地方から切り離れた近江の独自性・地域性が強調されつつある。特に『北大津の変貌』^(注18)では琵琶湖周辺での近江系甕の分布・出土比率について詳細に検討され、湖西・湖南・湖東・湖北における近江系土器と他地域の土器(畿内・北陸・伊勢湾・東海系など)の受け入れかたを明らかにし、琵琶湖周辺での地域差を検討されている。

北金岐遺跡で、近江系土器として抽出したものには、口縁部が受口状を呈する甕E・鉢C、特徴的な器形である手焙型土器などがあり、全体に装飾に富んだ土器が近江系土器に相当する。

北金岐遺跡における近江系土器の出土状況は、SB02から甕Ea, SB15から鉢Cb, SD26から鉢Cb, SD01から甕Ea・Eb・Ec, 鉢Ca, 手焙型土器のほか、壺Bに近江系土器の装飾を加えたもの(160)などがある。各遺構における近江系土器の比率はSB02; 25%(総個体数8に対し甕Ea 2個体), SB15; 25%(総個体数4に対し甕Ea 1個体), SD01; 7.2%(総個体数1,110に対し甕Ea・Eb・Ec, 鉢Cb, 手焙型土器, その他80個体)を測る。但し、各遺構出土土器の個体数の計測には口縁部を基準としたため、体部片に明らかに近江系と思われるものがあり、全体的には近江系土器の比率は若干上回る可能性がある。

このように、各遺構ごとに近江系土器のしめる割合は異なるが、SB02・SB15とも総個体数が少なく、遺跡の性格を反映しているとは言いがたい。これに対し、SD01は総個体数が多く、SD01にみられる近江系土器の比率が、北金岐遺跡における近江系土器の比率を反映していると考えられる。

SD01出土の近江系土器のうち、個体数が多い甕をみると、口縁部外面に櫛描列点文、体部外面に櫛描直線文+櫛描列点文を加飾する甕Eaが59個体、口縁部及び肩部外面にヘラ描きあるいは棒状列点文を施す甕Ebが14個体、無文の甕Ecが2個体を数え、甕Eaが主体をなす。これら北金岐遺跡出土の甕Eを、近江地方の編年にあてはめると、前述の『北大津の変貌』における編年案では、甕Eaにみられる口縁部の櫛描列点文が口縁部の上端に



付表4 B地点 SD01 出土土器種別組成表

は至らず、中位よりやや上方から下端にかけて加飾されており、「青灰色土層式」に相当する。ヘラ描きおよび棒状列点文の甕Eb・無文の甕Ecは、甕Eaから新相を呈し、「黒褐色土層Ⅰ式・黒褐色土層Ⅱ式」に相当する。

近江系土器、特に甕・鉢・手焙型土器の分布範囲をみると、京都府下では第85図のように、19遺跡以上をかぞえ、図に記載されているもの以外に、さらに増加しているものと考えられる。

近江系土器が出土する遺跡を概観すると、第Ⅱ様式には京都市深草遺跡・同長刀鉾町遺跡のほか、峰山町扇谷遺跡など広範囲に分布している。

第Ⅲ・第Ⅳ様式には京都市大藪遺跡・同東土川遺跡・同森本遺跡などが知られるが、第Ⅴ様式の資料に比し、出土例は少ない。

第Ⅴ様式には近江系土器の出土例が増加し、広範囲にひろがる。これを盆地あるいは河川単位でグルーピングすると、Ⅰ；亀岡盆地周辺(北金岐遺跡・南金岐遺跡・丹波国分寺など)、Ⅱ；京都盆地東南部(岡崎遺跡周辺)、Ⅲ；山科地域(中臣遺跡など)、Ⅳ；乙訓地域(大藪遺跡・東土川遺跡・森本遺跡・中海道遺跡・今里遺跡など)、Ⅴ；八幡丘陵周辺(幣原遺跡・美濃山廃寺下層遺跡など)、Ⅵ；南山城地域(田辺天神山遺跡・涌出宮遺跡など)、Ⅶ；高槻および枚方丘陵(安満遺跡・渚遺跡・藤田山遺跡など)、Ⅷ；その他(青野遺跡・上中遺跡・松熊遺跡など)に分かれる。

これら第Ⅴ様式の近江系土器が出土した遺跡のうち、第Ⅴ様式のなかでも、やや古相を呈する中臣遺跡・東土川遺跡・幣原遺跡などと、やや新相を呈する中海道遺跡・森本遺跡などがある。

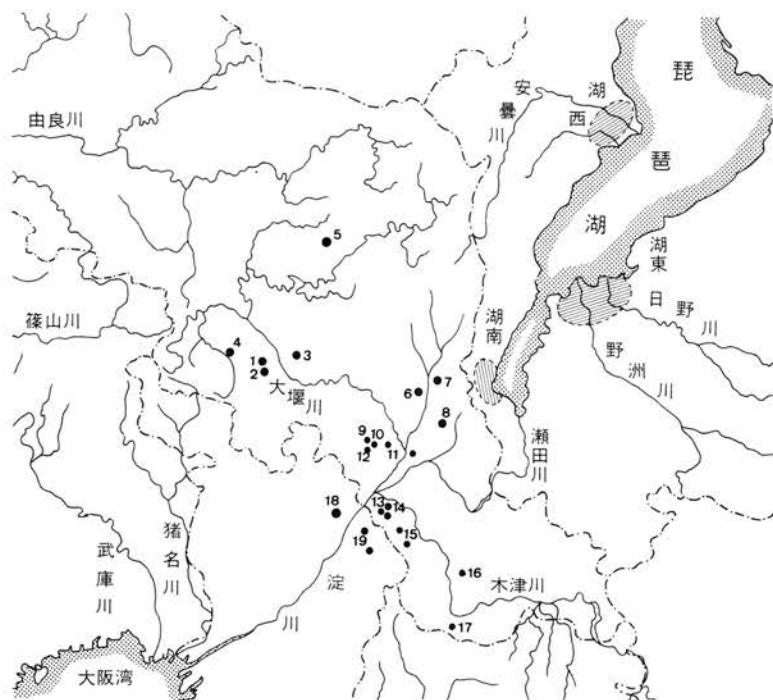
北金岐遺跡に関連して、その分布範囲を概観すると、北金岐遺跡を含む亀岡盆地では、大堰川の右岸に北金岐遺跡・南金岐遺跡・千代川遺跡があり、大堰川の左岸には国分寺遺跡がある。また、大堰川の支流である弓削川流域には京北町上中遺跡、同じく大堰川の支流である本梅川流域には松熊遺跡があり、琵琶湖→淀川→大堰川→その支流を媒介として近江地域の影響が考えられる。大堰川およびその支流での近江系土器の出土比率は、一括性を欠く資料が多いため速断しかねるが、現時点では北金岐遺跡で近江系土器の個体数が上まわることより、北金岐遺跡を媒介として上中遺跡・松熊遺跡などに影響を及ぼした可能性も考えられる。なお、大堰川の上流である園部川に隣接した園部町曾我谷遺跡では北金岐遺跡と相前後した時期の土器群であるにもかかわらず、近江系土器を含まないことが注目される。

各遺跡における近江系土器の占める割合については公表されたものが少なく、これまでの報告例では向日市中海道遺跡・同森本遺跡・長岡京市今里遺跡・高槻市安満遺跡が知ら

れるのみである。

中海道遺跡では、溝状遺構内から甕52個体に対し近江系土器3個体(5.7%)を数える。森本遺跡でも甕における近江系土器の割合が6%を数える。これに対し、長岡京市今里遺跡では、甕における近江系土器の割合が61.5%を数え、そのなかには甕C₂と分類された搬入品も含まれる。高槻市安満遺跡では110個体に対し、近江・山城系と考えられる甕Eは27個体(26.4%)を数える。今回調査した北金岐遺跡では、SD01を基準とすると、甕638個体に対し近江系甕75個体(11.8%)を数える。また、八幡市幣原遺跡2号住居跡では総個体数における近江系土器の比率は13.7%を数える。このように京都府下では近江系土器の混在は10%前後で、今里遺跡の様相が特異であると考えられる。今里遺跡の特異性については、地域間交流の多寡・通婚圏の有無・近江からの拠点集落などが考えられるが、堅穴式住居跡および土壇の性格と、中海道遺跡・北金岐遺跡などの溝状遺構の特殊性にもその差異があらわれると考えられる。これは北金岐遺跡SB02・SB15出土の近江系土器の割合がいずれも25%を測り、溝状遺構の比率をはるかに上回ることも留意する必要がある。

(石井 清司)



第85図 京都府下における近江系土器の出土遺跡分布図

	遺跡名	所在地	立地および遺構の概要	遺物の概要	備考
1	北金岐遺跡	亀岡市大井町北金岐	行者山から派生する扇状地の末端、堅穴式住居跡・大溝(SD01)などより出土。	甕Ea・Eb・Ec, 鉢Cb, 壺, 手焙型土器など	詳細は本文で述べた
2	南金岐遺跡	亀岡市大井町南金岐	行者山から派生する扇状地の末端、溝状遺構内より出土。	甕Ea, 鉢Cb, 長頸壺の扇部に櫛描列点文を加飾する。	
3	丹波国分寺	亀岡市千歳町国分	大堰川の東岸・沖積平野を望む河岸段丘上。国分寺創建以前の堅穴式住居跡内より出土。	甕Ea, 手焙型土器	
4	松熊遺跡	亀岡市東本梅町松熊	大堰川の一支流である本梅川の流域に開けた本梅盆地の中央、弥生時代の集落跡と推定されるが試掘調査のため、詳細は不明。	甕Ea, 手焙型土器	
5	上中遺跡	北桑田郡京北町下弓削	大堰川の支流である弓削川によって形成された平地。顕著な遺構がなく詳細は不明。		
6	長刀鉾町遺跡(平安京左京四條三坊十三町)	京都市下京区四條烏丸東入長刀鉾町	鴨川と堀川の氾濫原の中間にあたる舌状の微高地。溝状遺構内より出土。	甕Ea・Eb, 鉢Cb, 手焙型土器(第Ⅱ様式の近江系甕も出土している)	
7	岡崎南御所	京都市左京区岡崎南御所	採集資料のため、詳細不明。	甕Eb・Ec, 手焙型土器	
8	中臣遺跡	京都市山科区	堅穴式住居跡内などより出土。	甕Ea・Eb・Ec, 鉢Cb, 手焙型土器など	
9	中海道遺跡	向日市物集女町中海道	桂川の右岸, 向日丘陵東面の緩傾斜地, 溝状遺構内より出土。	甕Ec, 手焙型土器	甕に定める近江・東海系土器の割合は5.7%
10	森本遺跡	向日市森本町	桂川の右岸, 向日丘陵の東側面の低位段丘上	甕Bb・Ec, 手焙型土器	
11	大藪遺跡	京都市南区久世大藪町	桂川の右岸, 向日丘陵の東側・旧河道	甕Ea, 壺の口縁部に櫛描列点文の加飾をもつ	
	殿城遺跡	京都市南区久世殿城町	採集資料		
	中久世遺跡	京都市南区中久世	採集資料		
	東土川遺跡	京都市南区久世東土川町	立会調査	甕Ea(第Ⅲ様式の甕を含む)	
12	今里遺跡	長岡京市今里	桂川の右岸, 向日丘陵東南の緩傾斜地, 堅穴式住居跡・土坑内より出土。	甕Ea・Ec, 鉢Cb, 手焙型土器	全体の52%が近江系であり, 搬入品とともに在地産のものがある。
	長岡京左京第36次調査	向日市森本町戌亥	溝状遺構内より出土。	甕Ea	
	長岡京右京三条二坊六町遺跡	長岡京市今里三ノ坪1-1	河道跡内より出土。	鉢Cb	

	遺跡名	所在地	立地および遺構の概要	遺物の概要	備考
13	幣原遺跡	八幡市幣原	丘陵上, 竪穴式住居跡, 包含層内より出土。	甕Ea, 手焙型土器	全体の5.7%が近江系である。
14	美濃山廃寺	八幡市美濃山字古寺	丘陵上, 竪穴式住居跡内より出土。	甕Ea・Eb, 手焙型土器	
15	安満遺跡	高槻市大字安満	平野部, 周溝墓内などより出土。	甕Ea・Eb・Ec, 鉢 Cb・手焙型土器	甕110個に対し近江・山城系と考えられる甕E29個体(26.4%)をかぞえる。
16	藤田山遺跡	枚方市		甕Ea, 鉢Cb	
	渚遺跡	枚方市			

文献

- 南金岐遺跡：村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第1冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983
- 丹波国分寺：樋口隆久ほか「史跡丹波国分寺跡第2次発掘調査報告書」（『亀岡市文化財調査報告書』第13集 亀岡市教育委員会）1984
- 松熊遺跡：樋口隆久ほか「松熊遺跡試掘調査報告書」（『亀岡市文化財調査報告書』第13集 亀岡市教育委員会）1984
- 上中遺跡：増田孝彦『小さな展覧会』第3回資料（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984
- 長刀鉾町遺跡：寺島孝一・若松良一ほか「平安京左京四条三坊十三町一 長刀鉾町遺跡」（『平安京跡研究調査報告』第11輯 財団法人 古代学協会）1984
- 岡崎南遺跡：飛野博文「山城の弥生後期の土器」（『京都大学構内遺跡調査研究年報』一昭和56年度一京都大学埋蔵文化財研究センター）
- 中臣遺跡：『中臣遺跡発掘調査概要』昭和55年度～昭和58年度，京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所）
- 中海道遺跡：高橋美久二・森 毅ほか「中海道遺跡発掘調査報告」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集 向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所）1979
- 森本遺跡：都出比呂志『向日市史』上巻一第2章弥生時代一向日市 1983
- 大藪遺跡・殿城遺跡・中久世遺跡：木村捷三郎ほか『大藪遺跡1972発掘調査報告』六勝寺研究会
- 今里遺跡：高橋美久二・吉岡博之ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概要(1979)』京都府教育委員会）1979
- 長岡京左京第36次調査：竹原一彦「長岡京跡左京第36次(7ANDII)発掘調査略報」（『長岡京』第18号 長岡京跡発掘調査研究所）
- 長岡京右京三条二坊六町遺跡：小田桐 淳「右京第117次(7ANISB-2)地区調査概報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター）1983
- 幣原遺跡：高橋美久二「幣原遺跡」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会）1969
- 美濃山廃寺：江谷 寛「美濃山廃寺跡発掘調査報告」（『八幡町文化財調査報告』第1集 八幡町教育委員会）1977
- 安満遺跡：原口正三・森田克行『安満遺跡発掘調査報告書』一9地区の調査一（『高槻市文化財調査報告書』第10冊 高槻市教育委員会）1977
- 藤田山遺跡・渚遺跡：西田敏秀「枚方台地における古墳時代前期集落の展開」（『(財)枚方市文化財研究調査会 研究紀要』第1集（財）枚方市文化財研究調査会）1984

第4節 丹後・北丹波系土器について^(注19)

日本海沿岸(北陸以西)の土器様相、特に弥生時代後期の土器様相については、北陸・山陰の二大文化圏があると提唱され、丹後地域は山陰の土器文化圏として扱われてきた。

ところが、近年、丹後・北但馬地域を中心に発掘調査例が増加し、山陰あるいは北陸地方とは土器様相が異なる地域として認識されつつある。

丹後・北丹波地域の弥生時代後期の土器様相には、装飾器台などの特殊器形のほか、器形変化を如実にあらわす甕では、頸部を「く」の字形に屈曲させたのち、口縁端部を肥厚あるいは粘土帯をつぎたす「複合口縁」形を呈し、口縁部外面には3～5条の擬凹線文を施すもので、頸部から口縁部への屈曲が鈍く、擬凹線文も板状工具と思われる施文具により鈍い擬凹線文となるもので、山陰・北陸とも若干の差異が認められる。

丹後・北丹波系土器の分布範囲については、東は若狭・西は北但馬の一部まで広がり、南については、丹波高原を南限とすると考えられていた。

今回調査された北金岐遺跡では竪穴式住居跡(SB03)・溝状遺構(SD01)内より、明らかに丹後・北丹波系土器を含み、これまで調査された口丹波地域の遺跡とは若干様相を異にする。

SB03では総個体数35個体を数え、そのうち、脚部および器種不明のもの9個体を除いた25個体での丹後系土器の割合は4個体(16%)ある。器種ごとの内訳をみると、甕では口縁部および体部の形状が明らかなもの4個体に対し、丹後・北丹波系甕が2個体(50%)を測り、体部外面にタタキ目を残す畿内型甕を上まわる。高杯は杯部の形状が明らかな5個体のうち、丹後・北丹波系高杯が1個体(20%)、器台は丹後・北丹波系装飾器台が1個体のみである。SB03出土土器の特徴として、畿内系土器とともに丹後・北丹波系土器が目だつものに対し、前述の近江系土器を含まないが、SB02・SB15出土土器には近江系土器を含む反面、丹後・北丹波系土器を含まず、同一集落内での土器の受け入れかたに差異が認められる。

SD01出土遺物では総個体数1,110個体に対し、丹後・北丹波系土器は67個体(6%)になる。これを器種別にみると丹後・北丹波系と考えられる壺Beが2個体、壺Dが5個体あり、壺における丹後・北丹波系土器の割合は壺205個体に対し3.4%を測る。甕は甕Da・Dbに丹後・北丹波系土器の特徴を備え、甕638個体に対し8.8%を測る。高杯は脚部片が多く、特徴をあらわす杯部27個体に対し、丹後・丹波系高杯(高杯D)が3個体(11.1%)ある。ほかに台付鉢D2個体をかぞえる。

北金岐遺跡出土の丹後・丹波系土器を遺跡ごとに検討すると、SB03出土甕D(26)は、口縁部の屈曲に丸みを持ち、口縁部外面には不明瞭な3条の擬凹線文をめぐらす。装飾器台

は口縁端部に粘土帯を貼りつけ、明瞭な擬凹線文を施す峰山町古殿遺跡SX11出土装飾器台と比較すると、口縁部に粘土帯を貼りつけ肥厚させたもので、口縁端部外面には擬凹線文を施さない。2段目受部には透しがなく、全体の調整も古殿遺跡のものが全面へら磨きを施すのに対し、北金岐遺跡の杯部調整にはナデを主体とし、古殿遺跡SK11に比し、甕とともに新しい様相を呈する。

SD01出土の丹後系土器のうち、型式変化を如実にあらわす甕でみると、口縁部外面に擬凹線文を施さない甕Dbが13個体あるが、甕Dbより古相と考えられる甕Daが43個体を数え、甕Daが主体をなす。甕DaはSB03出土甕Daと同様、頸部から口縁部の屈曲に丸みをもち、擬凹線文も鈍いことから、古殿遺跡SX11より新相と考えられる。

丹後系土器、特に甕の特徴として、体部外面をタテハケ、内面をへら削り調整するものが大半であり、甕Aといわれる外面をタタキ調整、内面をハケ調整で仕上げるものとは異なり、器種の差異が調整手法の差異にも影響することが認められる。

(石井 清司)

第5節 在地系土器について

北金岐遺跡における第I期の遺物は、SD01から出土したものがその大半であり、同遺構出土の遺物をもって在地系土器を検討していきたい。

口丹波地方では近年、9号バイパス・府道・都市開発事業により発掘調査例が増大し、弥生時代後期～布留式併行期の遺跡が増大しつつある。千代川3次調査では竪穴式住居跡・溝状遺構内から庄内期を中心とした土器の出土が知られ、北金岐遺跡に隣接した南金岐遺跡でも同期の資料が多量に出土した。

このように口丹波地方では弥生時代後期～布留式併行期の資料について出土例が知られるが、出土遺物の個体数及びその地域性について検討された報告例がなく、なお不明な部分が多い。

今回調査されたSD01出土遺物も、弥生時代後期～布留式までの土器が混在し、溝状遺構という性格を考えあわせ、一括性をもつ資料とはいいがたいが、多量に土器が出土したことから意図的に在地系土器の抽出を試みたい。

在地系土器の抽出に関しては、前述の近江系・丹後・北丹波系土器を排除するとともに、庄内式と考えられる甕(甕H)・布留式併行期の壺(壺I)・甕(甕I)を除去し、年代決定が流動的と考えうる資料を中心に記述を行う。

SD01出土遺物を口縁部の形状・調整技法の差異により個体数を計測すると、壺では全体にバラツキが認められるが、壺の総個体数205に対し、壺Aは34個体(16.6%)、壺Baは

25個体(12.2%)、壺Bcは47個体(22.9%)あり、その他は10%にも満たない。壺A・壺Baは完形資料によると、口径14.0cm・器高26.0cm(壺A)、口径12.2cm・器高24.7cm(壺Ba)の中型品であり、壺Bcは口径10.2cm・器高15.7cmを測る小型品である。中型品である壺Aは筒状の頸部から口縁部を外反させ、体部最大径は中位より上方にあり、倒卵形を呈するものである。壺Baは短い筒状の頸部から、口縁部を外反させたのち、直立ぎみに立ち上がる複合口縁(受口状口縁)を呈し、体部最大径は中位にある。壺Aと壺Baを比較すると、壺Aは西の辻I式に系譜がたどれる器形であり、壺Baは、弥生時代後期後半以降、口縁部の複合口縁化を反映した器形であって、壺Aが壺Baに先行するものと考えられる。壺Bcは壺Baと同様、複合口縁化を反映した器形であり、中型品の壺Baとセットをなす小型品として位置づけられる。

甕は口縁部の形状とともに、調整技法に特徴が認められ、体部外面にタタキ目を残すものは、体部内面をハケ調整で仕上げるが、最終ハケ調整のものには内面ヘラ削りが目立つことは前述した。このため、甕形土器の分類には調整技法を重視し、甕A・B・C・D・E・F・G・H・Iの分類を行い、口縁部の形状によりさらに小分類を行った。この分類結果によると、甕の総個体数638個体に対し、甕Cが211個体(33.1%)、甕Bが137個体(21.5%)・甕Aが107個体(16.8%)となる。個体数の多い甕Cは口縁部の複合口縁化とともに体部外面を最終ハケ調整で仕上げたもので、甕C211個体に対し甕Caが190個体(90%)とその大半を占める。甕Bは甕Cと同様、最終ハケ調整とともにナデ調整により仕上げるものが認められ、甕B137個体に対し甕Bbが134個体(97.8%)とその大半をしめる。甕Aは口縁部の形状からa～eの5分類ができるが、口縁部が「く」の字形に屈曲したのち、上方に立ち上がり「複合口縁化」する甕Acが甕Aの総個体数91に対し、47個体(51.6%)を測る。以上のように甕の個体数をみると、甕Ac・甕Bb・甕Caが主体をなすが、甕Acは畿内中心部(大和・摂津・河内など)の特徴を備えるため、在地系土器から切り離す。甕Bb・甕Caは在地系土器の可能性はあるが、ただ甕Caは丹後系甕Db、近江系甕Ecと識別がむずかしく、流動的な器形である。このため甕Caに関しては、甕Caのうち在地系土器として抽出しえる様相があり、今後、調査例が増加した段階で検討を行いたい。

鉢は台付鉢を含め104個体を数えるが、その大半が鉢Eといわれる。底部に円孔をもつ砲弾形のもので、相対的に畿内及び畿内周辺部で出土例が多く地域性を示しがたい。

高杯・器台とも脚部片の出土例が多く、全体の器形を表わす資料が少ないため、鉢と同様、在地系土器として抽出しえるものはない。

以上のように、SD01出土遺物をみると、時期的なばらつきがありながらも、壺A・壺Ba・甕Bb・甕Caが在地系土器として抽出しえる可能性がある。

なお、SD01に関連した他調査地出土土器群の整理例がないため、SD01の土器様相が口丹波周辺の土器様相を反映するものか、北金岐遺跡のみに限定しえるものかは、今後の報告例をまって検討していきたい。(石井 清司)

第6節 「製塩土器」について

北金岐遺跡では、竪穴式住居跡内(C-SB01)、溝状遺構内(C-SD18)より、古墳時代後期の製塩土器を確認している。前項では個々について具体的説明を行ったが、ここでは比較的まとまった形で検出した、古墳時代後期の製塩土器とその出土状況をめぐら問題について再度、事実関係の整理を行いながら記していくことにしたい。

(1) 遺構・遺物の年代

古墳時代後期の製塩土器が出土したのは、C地点SB01とSD18の二つの遺構である。SB01は南北4.5m・東西4.2mのほぼ方形を呈する支柱穴4本の住居跡である。住居跡床面は黄色粘砂質土の貼り床で、西壁に接して炉跡と推定される焼土層を検出している。同時に炉跡と同様の色調・質を呈する焼土がところどころに分布しており、床面直上は全体に暗赤褐色を呈し、製塩土器は炉跡を中心にこの焼土中から微量だが検出している。共伴遺物として須恵器・土師器があり、床面直上層を取り上げ洗浄した結果、滑石製白玉・ガラス小玉等の装身具の存在が明らかとなった。遺構の年代は土器の残度が良好でないため断じえないが、須恵器杯身、高杯脚部破片の型式から6世紀前半(TK47前後)^(注20)を推定することができよう。

SD18はSB01の東側を蛇行しながら東流する浅い溝で、遺物は溝底において検出した。製塩土器は大半が細分化した状況で確認したが、完形に近いものもある。共伴遺物は須恵器と土師器で、遺物周囲の埋土には焼土状の暗赤褐色土と木炭片がみられた。須恵器杯身・蓋は約半分を欠いているが残度がよく、これらの型式的特徴から遺構の年代の一点を6世紀初頭(TK208~TK47)と考えた。

遺物の年代・組成からSD18はSB01に付設する住居跡関連遺構であり、製塩土器をはじめとする遺物はSB01において用いられた後、この溝に廃棄されたものとみてよからう。ただし、時期を比定しうる遺物が細片にすぎ点、SB01出土須恵器は、SD18のものに比べて新相を呈する点などから、両遺構が同時期であると断ずるには少なからず問題が残るであろう。この点については、両出土遺物が遺構継続年代の上限と下限の一点を示すものであると考えておきたい。

(2) 製塩土器

製塩土器は器壁が極めて薄い、いわゆる小形丸底土器で、硬質な焼成、画一的な容量を

持つ。タタキ整形痕を顕著にとどめるもの(当遺跡Aタイプ)とナデによる整形痕をもつもの(Bタイプ)とがあり、後者の割合が高い。また、二次的焼成を著しく受けているものと全く受けないもののがあって、当該土器は一律に同一条件下において機能したものでないようである。

この種の土器は、焼き塩された固形塩としての「堅塩」の運搬ならびに精製容器であると考られている。「堅塩」は潮解性が小さく運搬・保存に適する形態の塩であるが、水分を含めば溶解してしまうため再度焼成し固形化する必要があった。北金岐遺跡出土遺物にみる焼成痕のある土器は、溶解した固形塩を使用するにあたって再度焼成する必要があったことが原因で生じたものもあると思われる。

さて、今回確認した資料は内陸部出土の製塩土器の典型例ということができよう。海岸線より遠く離れた地域において製塩土器が出土する遺構には、炉跡・堅穴式住居跡・溝・工房跡・祭祀跡・土壇など各種が知られているが、中でも溝・土壇内から製塩土器が出土する比率が比較的高く、土壇のなかには灰・炭の存在が顕著であることが指摘されている。この場合、滑石製勾玉・紡錘車・管玉・ガラス製小玉・双孔円盤等の祭祀遺物をセットないしは単独で出土する例が多い。また、河内湖周辺においては馬歯もしくは馬骨が出土する31遺跡中、25遺跡に製塩土器が伴うという。このように内陸部出土の製塩土器は、祭祀関係遺物にともなう確率が高く、北金岐遺跡出土製塩土器・遺構も先述した共伴遺物などからこうした祭祀に関する遺構の一つであると考えられるであろう。

製塩土器はその性格上、搬入土器である。整形手法のバリエーションから二地域以上からの搬入を推すことができよう。才原氏は整形痕による搬出地推定のほかに、調整手法の相違性という点からも検討の必要性を説いておられるが、当該遺物中にも内面に明瞭なハケを残すものを含んでおり、同様な注意が必要であろう。搬出地域については明らかにしがたいが、大阪湾岸に面した内陸部出土例に近いと見られるため、同方面からの搬入の可能性を指摘するにとどめたい。
(田代 弘)

第7節 第III期の遺構・遺物について

第III期の遺構には掘立柱建物跡・柵列・溝状遺構・井戸のほか、大小のピット群からなる。

各遺構からはB-SD01・C-SD04・C-SD08の溝状遺構を除き、出土遺物は少量であった。このため、出土遺物の明らかな溝状遺構を除き、掘立柱建物跡・井戸が第III期に帰属するかどうか厳密には明らかでない。このため、各遺構、特に掘立柱建物跡は、(1)第IV期の掘立柱建物跡の掘形が直径20cm前後に対し、直径40cm前後を測る掘形をもつ建物群、

(2)掘立柱建物跡の各柱間が $\approx 30\text{cm}$ を基準として割りつけられるもの、(3)掘立柱建物跡の方位が、 $\text{N}0^\circ\sim 5^\circ\text{W}$ の範囲でおさまるもの、(4)第Ⅲ期の遺構として明らかなB-SD11・C-SD04・C-SD08の遺構に影響を受けて配されている掘立柱建物跡および柵列を、第Ⅲ期に帰属する遺構として考えた。

これら諸条件を考えると、第Ⅲ期の遺構には前述の溝状遺構のほか、南北棟建物跡(B-SB07・C-SD13・C-SB32・C-SB52・C-SB53)、東西棟建物跡(C-SB14・C-SB51)、総柱建物跡(C-SB19・C-SB20)、柵列(C-SA05・C-SA06)・井戸(C-SE34・C-SE54)などがある。

各建物跡はC地点の北端部(C-SB07・C-SB13・C-SB14)、中央部西側(C-SB19・C-SB20)・南部東側(C-SB32・C-SB51・C-SB52・C-SB53)の三区画に分かれ、各建物跡群は溝状遺構との関連が指摘できる。

C地点北端部では、 $\text{N}7^\circ 40'\text{W}$ の振り角をもつC-SD04を境に2間×3間の東西棟の建物跡であるC-SB14、南北棟の建物であるC-SB07・C-SB13、直角に屈曲する柵列であるC-SA05・C-SA06がある。各掘立柱建物跡の振り角はC-SB14が $\text{N}4^\circ 40'\text{W}$ 、C-SB07が $\text{N}5^\circ 15'\text{W}$ 、C-SB13が $\text{N}0^\circ 50'\text{W}$ 、C-SA05が $\text{N}3^\circ 50'\text{W}$ 、C-SA06が $\text{N}5^\circ 10'\text{W}$ とほぼ $\pm 2^\circ$ の誤差におさまり、規格をもった建物群と考えられる。また各建物跡群に関連した遺構としてC-SB14の南東部に、相前後した時期と考えられる素掘り井戸がある。

C地点の南半部、C-SD08の南側には、2間×3間の南北棟建物跡であるC-SB32・C-SB52・C-SB53と、2間×4間の東西棟建物跡であるC-SB51がある。各建物の振り角はC-SB32が $\text{N}6^\circ 00'\text{W}$ 、C-SB51が $\text{N}1^\circ 20'\text{W}$ 、C-SB52が $\text{N}2^\circ 10'\text{W}$ 、C-SB53が $\text{N}3^\circ 30'\text{W}$ を測り、C-SB32の $\text{N}6^\circ 00'\text{W}$ を除き、北端部の建物跡群と $\pm 2^\circ$ の誤差が認められるのみである。また、建物群の中央には、C地点北端部の建物群と同様、1基の素掘り井戸がある。

C地点の中央には調査地を $\text{N}6^\circ 30'\text{W}$ の振り角をもって東西に貫流するC-SD08に隣接して2棟の倉庫跡と考えられる2間×2間の総柱建物跡(C-SB19・C-SB20)がある。C-SB19は $\text{N}0^\circ 30'\text{W}$ 、C-SB20は $\text{N}0^\circ\text{W}$ を測り、C地点南半部の建物跡群とほぼ同じ振り角をなす。

これら各建物跡と溝状遺構との配置をみると、各建物跡群は溝の区画を単位として構築されている。すなわちC-SD04を中心とする一群(北部建物跡群)とC-SB08とB-SD11に画された一群(南部建物跡群)があり、南部建物跡群では中心建物とその北西部に2棟の倉庫群が配されている。溝は自然地形を利用して穿たれた可能性があるが、断面が \sqcap 字形を呈し、深さが1m前後を測る部分があることから、人工的に掘削されたと考えられる。各溝間の心々距離は各溝に方位のずれがあるため一定しないが、C-SD04とC-SD08の心々距離は44.5~46.0m、C-SD08とB-SD11の心々距離は66.5m、C-SD04とB-SD11の心々

距離は109～110mを測る。このC-SD04・B-SD11の心々距離は現在の条里制遺構の一坪の長さ360尺(109m)に相当する。ただB-SD11・C-SD04は現存条里水路とは一致せず、条里水田開発と関連するとはいいがたい。

各建物跡群及び溝状遺構全域を覆うように3m方眼をのせ、建物及び溝の規格があるかどうか検討したが、各建物、溝は整然と配さず、全域をカバーする建物規格についてはなかったと考えられる。

第Ⅲ期に相当する出土遺物は、前述のように溝内出土遺物以外、良好な資料は出土しなかった。溝内出土遺物をみると、B-SD11では土師器皿A・須恵器杯A・杯B・杯蓋・鉢・甕があり、土師器皿Aはb手法とb₃手法があり、内面には2条の螺旋文と右回りによる1段の斜放射暗文を施す。須恵器杯Bは高台が底部から口縁部へ屈曲する屈曲点から内側に断面台形の高台を貼りつける。また、須恵器杯A・杯Bの径高指数は杯Aが0.25～0.28、杯Bが0.26～0.36を測る。C-SD04・SD08は出土遺物が少なく時期決定の資料を欠くが、C-SD08出土土師器皿Aでは内面に2重の螺旋暗文+右回りによる2段の斜放射暗文を施し、土師器皿Bではb₃手法により、内面には2重の螺旋暗文+1段の放射状暗文を施し、B-SD11に比しやや古相を呈する。ただ、C-SD04・SD08出土須恵器をみた場合、形態・法量ともに近似することから、B-SD11・C-SD04・C-SD08は平城宮Ⅲ期の略年代の一点、西暦750年を前後する時期の資料と考えられる。

このように遺構・遺物を検討すると、北金岐B・C地点の第Ⅲ期は、奈良時代の中頃にその中心があり、溝に区画された集落であると考えられる。この集落は北金岐遺跡全域をカバーするような方格地割は認められないが、北部建物跡群と南部建物跡群に分かれ、北部建物跡群はC-SD04の溝を境にさらに2群に分かれる。南部建物跡群は溝に区画され、北西部に2棟の倉庫をもつ中心建物跡であり、北部建物跡群は溝により区画された従属建物跡群と考えられる。これら建物跡群の性格としては、出土遺物に瓦を含まず、また硯も須恵器杯蓋を利用した転用硯が1点あるのみであり、国衙・郡衙に代表される官衙施設とはいいがたく、一般庶民の村落形態の1例として位置づけられると考えられる。

(石井 清司)

第8節 第Ⅳ期の遺構について

第Ⅳ期の遺構は、B・C地点の全域に広がり、北金岐B・C地点の遺構の大半が第Ⅳ期に帰属する。遺構としては、性格が不明の不整形土壇を100以上数えるピットのほか、性格が明らかなものとしては、掘立柱建物跡・柵列・井戸・溝状遺構などがある。

掘立柱建物跡は、B地点で5棟、C地点で13棟を数えるほか、100以上を数えるピット

群の内に建物としてまとまる可能性のあるものを含む。

各掘立柱建物跡は、南北棟建物跡(B-SB31・B-SB33・B-SB38・B-SB48・C-SB09・C-SB10・C-SB15・C-SB17・C-SB29・C-SB58)、東西棟建物跡(B-SB32・C-SB56・C-SB57・C-SB60・C-SB63)、総柱建物跡(C-SB02・C-SB62・C-SB64)があり、各建物跡の方位は真北より8°の範囲におさまり、第Ⅲ期の建物跡方位に比べ、建物跡の振れが大きい。また、各柱間についても、第Ⅲ期にみられた≒30cmの基準尺にはあてはまらず、不統一である。第Ⅳ期の建物群の掘形内の埋土には、黒色粘土層を埋土とするものと、黒色粘土と地山に近似した黄色粘土のブロックを埋土とするものがある。後者の建物跡群(B-SB32・B-SB48・C-SB56・C-SB57)は前者の建物群より上面で遺構の輪郭があらわれ、層的には新しい建物である。B-SB32・B-SB48・C-SB56・C-SB57の掘形はいずれも直径50cm以上を測り、柱穴内には直径20cm前後の柱痕が遺存するものがある。前者の建物群の掘形が直径20cm前後を測り、柱穴の痕跡を明瞭にとどめないものとは様相を異にする。

第Ⅳ期の建物跡群は1～2間×2～3間の小規模なものが大半であるが、C地点の北端部に集中して3間×4間、あるいは3間×3間の総柱の建物跡を3棟(C-SB02・C-SB62・C-SB64)検出した。この3間×4間を測るC-SB02は東端の柱間が若干狭くなり、南廂となる可能性があり、C-SB64は南半部が田畑の畦畔により調査しえなかったが、東西3間・南北3間の可能性がある建物跡である。これら3者の建物は1°前後の誤差で建物の方位がそろい、C-SB02とC-SB62は柱列がほぼ平行することから、相前後した時期の建物跡群と考えられる。各建物跡の掘形内には土師器・瓦器の細片を少量出土しており、この資料によると、C-SB02・C-SB62・C-SB64は13世紀を前後する時期と考えられる。

(石井 清司)

第9節 第Ⅳ期の遺物について

北金岐遺跡における第Ⅳ期の遺物は、その内容・量ともに豊富であり、丹波地方の中世を考える上で良好な資料になるものと思われる。ここでは、出土した中世土器・陶磁器類についてまとめ、さらに若干の考察を試みたい。

第Ⅳ期は平安時代後期から室町時代にわたるが、出土遺物から見てそのピークをおよそ12～13世紀に置くことができる。この時期の遺物は、器種としては土師器・瓦器・須恵器・中国製磁器などがあり、一方器形は椀・皿・釜・ねり鉢・甕などが主体をなす。これらの器種と器形の間には一定の関係がみられ、当地方の基本的な食器組成が想定される。

まず供膳用は、瓦器椀・土師器皿のセットが中心となり、これに少量の瓦器皿と中国製

磁器が加わる。碗は同じ亀岡盆地の篠窯跡群(須恵器)から須恵器碗が11世紀まで供給されるが、同窯跡群の終焉ののち、12世紀から瓦器碗が普及したと考えられている。^(注23)

13世紀には瓦器碗の使用は最盛となるが、その後は急速に姿を消す。これに代わるのは木碗(漆器碗)であるが、北金岐遺跡ではB-SE24で一点が瓦器碗と伴出しており、ある時期両者が併行していたことが推定される。

丹波地方の瓦器碗については、かつて橋本久和氏が篠山盆地などの資料に基づいて「丹波型」を設定され、一定の地域色を示された。^(注24) そののち、北金岐遺跡をはじめ亀岡盆地・福知山盆地などで出土資料が急増し、それを受けて「型」を細分化する試みがなされている。^(注25) 北金岐遺跡に限っても、同一時期にいくつかのタイプが混在する状況が見られる。出土量の多い13世紀の資料について見ると、B-SE24・SE25・SE04 出土の一連の粗悪化を示す系列に対してB-SE37・SD29出土資料のように器型・つくりの点で明らかに別タイプの製品が存在している。周辺遺跡での出土資料と比較すると、隣接する小金岐古墳群をはじめ琴敷遺跡・丹波国分寺跡などでやはり器型・暗文の施し方の異なるタイプが認められるが、現時点ではそれらを厳密にグルーピングするにはいたっていない。資料がさらに増加した段階で検討すれば、瓦器碗の生産・流通はかなり細かい単位でおさえられるものと予想している。また、C地点で出土した口縁端部に沈線を有する一群については、その独特の器型から「丹波型」とは一線を画する製品であり、搬入品の可能性を考えたい。

また、土師器皿については、「て」の字口縁のものなど京都からの搬入品と思われる製品もあるが、現時点では検討できていない。

次に煮炊用は土師器・瓦器土釜で占められ、鍋がほとんど見られない点が特徴として挙げられる。土釜は既に触れたように畿内諸国から搬入されたものと考えられる。摂津型の土師器土釜はやや年代的に遡る製品だが、大和型・山城型は12～13世紀に属する。^(注29) 鍋は13世紀末葉から14世紀頃の土師器鍋が一点あるが、これは中丹地方から摂津地方で中世墓の蔵骨器に多用されるタイプで、その性格については若干留意する必要がある。^(注30)

また、煮炊形態が土釜によって占められる状況は、亀岡盆地においては一般的な傾向である。たとえば、前出の琴敷遺跡では13世紀前葉を中心とする土器群が出土しているが、ここでも瓦器碗と共伴するのは主に山城型と思われる瓦器釜で、鍋は極くわずかである。さらに、丹波国分寺跡では大和型の土師器釜の出土例もあるが、^(注31) 鍋の出土は今のところみられない。このように、現時点では出土資料が充分とは言えないものの、煮炊形態として土釜のみが主体的に出土する傾向は明らかであり、これは隣接する京都で同時期に土釜・鍋が併用されていることなどに対し、^(注32) 一定の地域性を示していると言えよう。また、これとは逆に、中丹地方の綾部では、瓦器鍋が瓦器碗と共伴する傾向が13世紀前葉の資料の出

土する青野南遺跡などでみられ、興味深い。^(注33)丹波地方における土器の流通は、瓦器碗という共通項を持つ一方で、煮炊形態によって独自に地域性を示すことが可能であると考える。

調理用としては、東播系須恵器ねり鉢がわずかに見られる程度である。これらは13～14世紀にかけて若干の年代幅をもって出土しており、また、他の製品がみられないことから、少量ずつながらコンスタントな供給があったことが推定される。

貯蔵用の製品は、須恵器・瓦器甕がわずかに出土したのみである。須恵器甕は東播系の製品のほかに、産地不明の体部片がある。^(注34)瓦器甕は畿内からの搬入品であろう。また、丹波焼甕と思われる破片も出土しているが、年代等は確定できない。貯蔵用の製品は琴敷遺跡などでもほとんど出土しておらず、今のところ不明確な状況である。

最後に、中国製磁器について触れたい。北金岐遺跡では量的には限られるが、ほぼ12～14世紀にわたって出土が見られる。12世紀までは白磁碗、13世紀からは龍泉窯系青磁碗で占められる。これらは調査地区のうちC地点に集中する傾向にあり、遺構の状況とも合わせて、ここが村落の中心的な位置であったことを示している。また、青白磁合子が出土しているが、この種の合子は経塚に埋納される例が多く、一般村落から出土した点を特に留意しておきたい。^(注35)

以上、北金岐遺跡の12～13世紀の食器組成を中心に第Ⅳ期の状況をまとめてみた。基本的には、在地系の碗・皿、畿内諸国から搬入された煮炊・調理・貯蔵用の製品、そして少量の中国製磁器が加わるという、中世村落としては予想される一般的なパターンが示されたといえる。こうした様相が丹波地方全体の傾向であるのかどうか、今後の資料の増加を待って、さらに検討していきたい。
(中坪 央暁)

おわりに

北金岐遺跡の発掘調査は試掘調査を含め、調査終了まで継続ながらも3か年を要した。また、整理作業・報告書準備までを含めると4か年半という長期にわたる作業であった。

この間、現地調査にあたっては地元作業員・補助員の、整理作業にあたっては整理員の援助を受け、全期間を通じて、幾多の方々から、援助・助言をいただいた。

北金岐遺跡の調査成果を要約すると、古くは縄文時代晩期より遺物の出土が知られるが、明確な遺構として存在するのは弥生時代後期に至ってからである。弥生時代後期以降、古墳時代前期までの第Ⅰ期には住居跡とそれに関連した大溝、第Ⅱ期の古墳時代後期には北金岐遺跡の後背部に立地する横穴式石室を主体とする小金岐古墳群と相前後した時期の住居跡が確認された。奈良時代から平安時代中期までの第Ⅲ期には溝に区画された集落の形態が明らかになり、第Ⅳ期の鎌倉時代以降、室町時代には中心住居跡とその周辺の小規模

住居跡の存在など、各時代を追って集落の変遷を垣間見ることができる。

出土遺物をみると、SD01の大溝内より弥生時代後期後半の時期を主体とする土器が多量に出土し、今後の周辺部の調査により弥生時代後期の編年の一指標になるものと考えられる。第Ⅱ期には堅穴式住居跡内より玉類とともに製塩土器の細片が出土し、堅穴式住居跡の性格を考える上での資料である。第Ⅳ期には掘立柱建物跡内には遺物は極少であったが、5基以上をかぞえる井戸内から瓦器碗を主体とする土器が出土し、中世を考える上での良好な資料と考えられる。

以上のように、調査範囲が道路路線帯という限られた範囲での調査ではあるが、多大な成果をおさめた。今後、本報告書が、丹波地域の歴史を考える上での資料となることを期待する。

(石井 清司)

注

- 注1 田代 弘「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要 (4)北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983
- 注2 村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要 (2)桑田郡条里制遺構(南金岐)」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注3 石井清司・田代 弘「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要 (1)北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
ここに記した遺構一覧表は、現地調査時に作成したものであり、整理・検討の結果、建物跡等に一部変更がある。
- 注4 村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要 (1)千代川遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注5 村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要 (3)太田遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注6 田代 弘「北金岐遺跡出土の晩期縄文土器」(『京都考古』34 京都考古刊行会) 1984
- 注7 森下 衛「千代川・桑寺遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注8 樋口隆久・沢 裕俊「史跡丹波国分寺跡第1次発掘調査報告書」(『亀岡市文化財調査報告書』第12集 亀岡市教育委員会) 1983
- 注9 樋口隆久ほか「御上人林廃寺(第一次～第六次)発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第3集～第11集 亀岡市教育委員会) 1973～1981
- 注10 石井清司・森下 衛「北金岐遺跡B地点検出の大溝について」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984.3
- 注11 寺島孝一・横田洋三・若松良一「平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一」(『平安京跡研究調査報告』第11輯 財団法人古代学協会) 1984
- 注12 『中臣遺跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981
- 注13 高橋美久二・奥村清一郎・吉岡博之・木村泰彦・李 進枝「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要』京都府教育委員会) 1979
- 注14 奈良時代の土師器の手法については、奈良国立文化財研究所編の報告書の記載に準拠する。

- 注15 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館) 1978
- 注16 注13と同じ。
- 注17 高橋美久二・森 毅「中海道遺跡発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集 向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1979
- 注18 中西常雄『北大津の変貌』1979
同「近江における甕形土器の動向一庄内期を中心として」(『考古学研究』32-1 考古学研究会) 1985
- 注19 北丹波地域という呼称は一般的ではないが、今回は亀岡盆地周辺を口丹波地域と呼称、由良川中流域の綾部・福知山周辺を北丹波地域と呼称する。
- 注20 田辺昭三『須恵器大成』
- 注21 岡崎晋明「近畿地方の内陸部より出土の製塩土器」(『ヒストリア』105 大阪歴史学会) 1984
- 注22 才原金弘「東大阪市内出土の製塩土器」(『東大阪市遺跡保護調査会年報 1979年度』東大阪市遺跡保護調査会) 1980
- 注23 石井清司・引原茂治・伊野近富「亀岡盆地出土の瓦器について」(『京都考古』37 京都考古刊行会) 1985
同論文で北金岐遺跡を含めた亀岡盆地出土の瓦器について編年作業が進められている。瓦器碗に先行する黒色土器B類(碗)については、当遺跡で細片が1点出土したのみである。
- 注24 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』(『高槻市文化財調査報告書』第13冊) 1980
- 注25 注23に同じ。
伊野近富「京都北部の中世土器について」(『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会) 1985
- 注26 注23に同じ。
- 注27 道路工事の際に採集されたもので、亀岡市教育委員会・樋口隆久氏の御好意により、資料を実見する機会を得た。
- 注28 亀岡市教育委員会・樋口隆久氏の御好意により資料を実見する機会を得た。丹波国分寺跡出土の瓦器碗のうち、見込み部に格子状暗文を施したものが1点ある。
- 注29 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所) 1982
- 注30 伊野近富・岩松 保ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第6冊-1 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
『古代・中世の墳墓について』(第13回埋蔵文化財研究会資料) 1983
- 注31 樋口隆久『史跡丹波国分寺第3次発掘調査』(『亀岡市文化財調査報告書』第14冊 亀岡市教育委員会) 1985
- 注32 浜崎一志「京都大学病院西構内A F15区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財研究センター) 1982
- 注33 綾部市教育委員会・中村孝行氏の御好意により、資料を実見する機会を得た。また、同市鍛冶屋町で採集された12世紀前葉の資料についても、同様の傾向が示されている。中村孝行「綾部市鍛冶屋町出土の中世遺物」(『大瀬波考古』第3号) 1983
- 注34 図化していないが、外面に平行タタキを施したものがある。
- 注35 和歌山県田辺市上秋津高尾山経塚出土品などに類似。12世紀中葉、福建省産である。亀井明德ほか『世界陶磁全集一宋一』1977

調査参加者

補助員 中井秀樹・小早川泰章・河原昭夫・大村武之・榎 康史・岩崎公一・甲田陽亮・籠谷治男・

原田昭一・谷口秀樹・東前龍一・森田由郎・西村健司・萩原浩昭・細川康晴・青井 敏・
松井正明・佐藤 賢・村山一弥・美馬秀和・北村大輔・南部敦弘・内藤正裕・齊藤秀和・
人見克之・上田俊章・伊豆田晃正・勝田典範・山崎浩久・西村安弘・小仲幹夫・小谷 悟・
佐藤勝憲・永岡一郎・中坪央暁・木村要吾・矢野 敏・青木義貴・福島弘了・大里秀典・
中西 宏

整理員 藤田順代・岡本美和子・坂本明美・村尾多美子・毛利悦子・加藤百合子・酒井信子・石原
俊子・田中智子・松家みはる・並河智実・高田幸子・出口瑞鳥・山本清美・日下部恵子・
村田みどり・高田江見子・箕輪真紀・山口あずさ・吉岡みよ子・広瀬順子・浅田芳子・
堀井幸子

作業員 柿田秀雄・田中格一・八木感一・直継幸男・八木初次・渡辺春三・松本 終・並河義次・
八木淑子・野々口文子・松本はつゑ・松本菊栄・小西てる江・俣野ふじを・八木千代江・
八木美重子・山内タカ子・柿田喜代子・西村和代・山本美代子・八木よし子・堤 和子・
野々村礼子・松山晃子・野々村沢子・野々村美さを・松井よし子・俣野利江・山内きくの
・原田敦子

付表5 第Ⅳ期の土器観察表

遺構	器種	器形	遺物番号	法量 (cm)	特記事項	胎土	焼成	色調	
SE 54	瓦器	椀	381	口径 14.2 器高 5.8 底径 6.0		精良・灰白色	良好・堅緻	銀灰色	
			382	口径 15.6		精良・灰白色	良好・堅緻	銀灰色	
			383	口径 14.6					
			384	口径 14.0					
			385	口径 14.4		精良・灰白色	良好	内面：銀灰色 外面：黒灰色	
			386	口径 13.4					
			388	口径 14.0					
			391	底径 7.4		精良・灰白色	良好・堅緻	銀灰色	
	392	底径 5.6							
	393	底径 6.0							
	土師器	皿		387	口径 12.2 器高 2.0		精良	良好	淡褐色
				389	口径 22.0		砂粒を多く含む	良好	暗褐色
		鉢		390	口径 22.2		精良	良好	青灰色
SE 49	瓦器	椀	394	底径 6.4		精良・灰白色	良好・堅緻	銀灰色	
			397	底径 6.1					
			395	口径 16.0		精良・灰白色	良好	黒灰色	
			396	口径 16.0		精良・灰白色	良好	内面：銀灰色 外面：黒灰色	
SE 24	瓦器	椀	398	口径 12.4 器高 4.7 底径 5.9	○外面に弧状の重ね焼痕がある ○完形	精良	良好・堅緻	銀灰色	
			399	口径 13.0 器高 4.6 底径 6.0	○内・外面に重ね焼痕がある ○完形	精良	良好・堅緻	銀灰色	
			400	口径 13.5 器高 4.9 底径 6.5	○内面に重ね焼痕がある	精良・灰白色	良好・堅緻	銀灰色	
			401	口径 13.5 器高 4.9 底径 6.6		精良・灰白色	良好	灰黒色	
			402	口径 13.3 器高 4.9 底径 5.6		精良・灰白色	良好	灰黒色	
			404	口径 19.6	○幅約1cmの上向きの鏝がつく	砂粒を多く含む・灰白色	良好	灰黒色	
		釜							

遺構	器種	器形	遺物番号	法量 (cm)	特記事項	胎土	焼成	色調
	土師器	皿	403	口径 11.4 器高 2.6		精良	良好	淡黄褐色
SE 25	瓦器	椀	405	口径 12.4 器高 4.4 底径 4.9		精良・灰白色	良好	灰黒色
			406	口径 11.6 器高 4.0 底径 3.7		精良・灰色	良好	灰黒色
			408	口径 12.8 器高 4.8 底径 4.5		精良・灰白色	良好	灰黒色
			409	口径 13.8 器高 4.3 底径 6.0		精良・黄灰色	良好	灰黒色
	土師器	台付皿	407	底径 9.8	○台部のみ残存	精良	良好	淡赤褐色
SE 04	瓦器	椀	410	口径 12.0 器高 4.6 底径 5.7	○見込み部中央がわずかに欠損, 穿孔か	精良	良好	黒灰色
			411	口径 11.8 器高 4.2 底径 5.0	○410と同タイプ ○完形	精良	良好	黒灰色
			413	口径 11.9 器高 4.2 底径 5.2		精良・灰白色	良好	灰黒色
			414	底径 5.5		精良・灰白色 高台のみ砂粒を含む	良好	灰黒色
			417	口径 12.1 器高 4.4 底径 5.1	○内面に重ね焼痕 ○外面に粘土の継目 ○ほぼ完形	精良・灰白色	良好	黒灰色
	甕	412	口径 26.3	○表面の剝離が激しい	砂粒を多く含む・灰白色	良好	灰黒色	
	土師器	皿	415	口径 8.0 器高 1.2		精良	良好	淡黄褐色
			416	口径 8.4 器高 1.3		精良	良好	淡黄褐色
SB 62	土師器	皿	418	口径 8.2 器高 1.2		精良	良好	淡褐色

遺構	器種	器形	遺物 番号	法量 (cm)	特記事項	胎土	焼成	色調
	瓦器	皿	419	口径 8.0 器高 0.8		精良	良好	淡黄褐色
			420	口径 10.0 器高 1.8		精良・灰白色	良好・堅緻	淡灰色
			427	口径 10.0 器高 2.4	ほぼ完形	精良・灰白色	良好	灰黒色
	瓦器	椀	428	底径 6.4		精良・黄灰色	良好	灰黒色
			432	口径 13.8		精良・黄灰色	良好	灰黒色
			433	口径 14.0				
			434	口径 15.6				
SK 64	瓦器	皿	421	口径 9.0 器高 1.4		精良・灰白色	良好・堅緻	銀灰色
			土師器	皿	422	口径 8.4 器高 1.4		精良・砂粒を わずかに含む
	423	口径 8.8 器高 1.4				精良	良好	淡赤褐色
SK 65	土師器	皿	424	口径 9.6 器高 1.6		精良	良好	淡黄褐色
Pit 87	須恵器	椀	425	底径 6.2		精良	良好・堅緻	青灰色
			426	口径 15.2 器高 4.6 底径 6.8		精良	良好・堅緻	青灰色
SD 27	須恵器	椀	430	口径 15.0		精良	良好・堅緻	青灰色
			431	底径 6.0		精良	良好・堅緻	青灰色
Pit 101	土師器	皿	429	口径 15.2 器高 2.1		精良	良好	淡赤褐色
	瓦器	椀	435	口径 14.8 器高 6.4 底径 5.6		精良・黄灰色	良好	漆黒色
			436	口径 14.4 器高 7.0 底径 5.6		精良・黄灰色	良好	漆黒色
SE 29	瓦器	椀	438	口径 14.2		精良・暗灰色	良好・堅緻	銀灰色
			439	口径 15.2		精良・灰白色	良好・堅緻	淡灰色
			440	口径 14.8 器高 5.2 底径 6.8	ほぼ完形	精良・灰白色	良好	灰黒色

遺構	器種	器形	遺物 番号	法量 (cm)	特 記 事 項	胎 土	焼 成	色 調	
		皿	448	口径 9.4 器高 2.0		精良・灰白色	良好・堅緻	内面：淡灰色 外面：黒灰色	
			449	口径 9.8 器高 1.5		精良・灰白色	良好・堅緻	内面：淡灰色 外面：黒灰色	
		土師器	皿	437	口径 15.9 器高 3.1		精良	良好	淡褐色
				450	口径 9.2		精良	良好	淡赤褐色
				台付皿	451	底径 7.2	○台部のみ残存	精良	良好
SD 28	瓦器	椀	441	口径 12.2 器高 4.4 底径 6.2		精良・乳白色	やや軟	灰黒色	
			土師器	皿	452	口径 6.8 器高 1.1		精良	良好
	453	口径 8.3 器高 1.2				精良	良好	淡赤褐色	
SD 49	土師器	皿	442	口径 14.2 器高 2.2		精良	良好	淡褐色	
Pit 70	瓦器	椀	443	口径 15.6	○内・外面とも炭素がほとんどとんでいる ○器壁は全体に厚い	精良・乳白色	良好	淡黄灰色	
			444	口径 14.2 器高 4.2 底径 6.7		精良・灰白色	良好	灰黒色	
Pit 89	瓦器	杯	445	口径 13.0 器高 3.4 底径 4.6		精良・乳白色	良好	灰黒色	
Pit 22	磁器(白磁)	椀	446	口径 18.7		やや粗・灰白色・黒細粒を含む	良好	黄色がかかった白色の釉	
Pit 58	磁器(白磁)	椀	447	底径 6.7		やや粗・灰色・黒細粒を含む	良好	灰色がかかった白色の釉	
SK 30	土師器	皿	454	口径 7.9 器高 1.0	○完形	精良	良好	淡褐色	
			455	口径 8.2 器高 1.2		精良	良好	淡褐色	
Pit 94	土師器	皿	456	口径 9.4 器高 1.5		精良	良好	内面：淡赤褐色 外面：乳白色	

遺構	器種	器形	遺物番号	法量 (cm)	特記事項	胎土	焼成	色調
Pit 2	土師器	皿	457	口径 10.0 器高 1.8	○ほぼ完形	精良	良好	淡黄褐色
Pit 3	土師器	皿	458	口径 8.4 器高 1.4		精良	良好	淡黄褐色
			459	口径 8.6 器高 1.1		精良	良好	淡赤褐色
			460	口径 11.8 器高 1.4		精良	良好	乳白色
		鍋	469	口径 19.5	○調整は口頸部横ナデ・体部外面は平行叩き・内面上位は横方向のケズリ・中位は不定方向のナデ ○外面の一部が火を受け黒色を呈する	砂粒を多く含む・やや粗	良好・堅緻	淡褐色
SE 28	瓦器	椀	461	口径 13.8 器高 4.9 底径 6.9	○炭素の吸着が悪い	精良・乳白色	やや軟	灰黒色
			462	口径 14.2		精良・乳白色	良好	灰黒色
			463	口径 15.6	○内・外面とも炭素がとんでいる	精良・乳白色	良好	乳白色
SD 04	土師器	皿	464	口径 14.2		精良・砂粒をわずかに含む	良好	乳白色
	瓦器	椀	465	口径 13.4	○炭素の吸着が悪い	精良・灰白色	やや軟	灰黒色
			466	口径 12.4				
	磁器(青白磁)	合子(身)	480	口径 5.0 器高 2.0	○釉は外面上半に施し下半は露胎	精良・黄灰色	良好	緑色がかった淡青白色の釉
Pit 30	磁器(青磁)	椀	467	口径 16.3		やや粗・灰色	良好	灰色がかった淡青緑色の釉
SK 44	磁器(青磁)	椀	468	口径 17.6		精良・灰白色・黒細粒を含む	良好	淡青緑色の釉
SD 22	須恵器	杯蓋	470	口径 16.0		精良	良好	青灰色
		皿	471	口径 13.4 器高 1.6	○底部ヘラ切り	精良	良好	青灰色
			472	底径 8.7	○いずれも底部はヘラ切り	精良	良好	青灰色
			473	口径 6.4				
		474	口径 6.8					
椀	475	底径 5.9	○底部は回転糸切り	精良	良好	青灰色		

遺構	器種	器形	遺物番号	法量 (cm)	特記事項	胎土	焼成	色調
	磁器(青磁)	椀	481	口径 13.6 器高 6.6 底径 6.0		精良・灰色・黒細粒を含む	良好	暗緑色の釉
			483	底径 6.0		精良・灰色・黒細粒を含む	良好	淡緑色の釉
		盤	484	底径 14.6		精良・灰色	良好	灰色がかった淡緑色の釉
SE 23	土師器	皿	476	口径 8.6 器高 1.4		精良	良好	淡黄灰色
	陶器	挿鉢	489	口径 29.4	○口縁端面の外面にわずかに自然釉	粗・1~3mmの砂粒若干と1cm程の小石を含む	良好	明茶褐色
SD 11	土師器	皿	477	口径 10.4 器高 1.2		精良	良好	淡黄褐色
SD 13	磁器(白磁)	椀	487	口径 16.8		精良・灰白色・黒細粒を含む	良好	灰色がかった白色
包含層	土師器	皿	478	口径 14.6 器高 3.0		精良	良好	淡黄褐色
			479	口径 14.0		精良	良好	乳白色
		釜	498	口径 22.2	○幅約1.5cmのやや上向きの鏝がつく	やや粗・砂粒を多く含む	良好	内面：黒褐色 外面：灰褐色
			499	口径 22.2	○幅約2cmのやや上向きの鏝がつく ○鏝部下側に粘土を補充している	やや粗・砂粒を多く含む	良好	淡茶褐色
	磁器(青磁)	皿	482	底径 4.0		精良・灰白色	良好	淡青緑色の釉
		椀	485	口径 16.6 器高 7.0 底径 4.7	○器表に貫入	精良・灰白色・黒細粒を含む	良好	淡青緑色の釉
			486	口径 15.6 器高 6.8 底径 5.4		精良・灰白色	良好	飴色の釉
	(白磁)	椀	488	口径 15.0		精良・灰白色	良好	黄色がかった灰白色の釉
	瓦器	皿	491	口径 9.2 器高 1.6		精良・灰白色	良好・堅緻	銀灰色

遺構	器種	器形	遺物 番号	法量 (cm)	特 記 事 項	胎 土	焼 成	色 調
	椀		492	口径 13.0 器高 4.7 底径 5.2		精良・灰白色	良好	灰黒色
			493	口径 14.6 器高 5.4 底径 5.7		精良・灰白色	良好	灰黒色
			494	口径 13.9 器高 4.4 底径 5.6		精良・灰白色	良好	灰黒色
	釜		495	口径 16.8	○幅約1.3cmの鐏がつく ○内面は全面ハケ調整ののち口縁部のみ横ナデを施す	やや粗・砂粒が多い・黄灰色	良好	灰黒色
			496	口径 18.0	○幅約1.4cmの鐏がつく ○内面は口縁部横ナデ・体部ハケ調整	やや粗・砂粒を多く含む・灰白色	良好	黒色
			497	口径 24.2	○幅約1cmの鐏がつく ○内面は粗いナデ	やや粗・砂粒を多く含む・灰白色	良好	灰黒色
	須恵器	甕	490	口径 32.7	○口頸部内面・口縁部ロクロナデ, 口頸部外面上半叩きのちロクロナデ, 下半叩き調整 ○内面に炭化物付着	精良・砂粒を若干含む	良好	灰色
		ねり鉢	500	口径 29.0	○口縁端面に自然釉	やや粗・砂粒を多く含む	良好	青灰色
			501	口径 26.0	○口縁端面に自然釉 ○内面下半は使用により磨滅	やや粗・砂粒を多く含む	良好	青灰色

圖 版



B・C地点全景（垂直写真・上が南）



(1) B地点全景（垂直写真・上が西）



(2) C地点全景（垂直写真・上が西）



(1) B地点北半部の遺構(東から)



(2) B地点SB03 床面直上遺物出土状態(北から)



(1) B地点SB03 完掘状態(東から)



(2) 同上(北から)



(1) B地点SB03 土壌内遺物出土状態（東から）



(2) B地点SB03 床面直上遺物出土状態（西から）



(1) B地点SB03 床面直上遺物出土状態（東から）



(2) 同上（南から）



(1) B地点SB03 壁溝内遺物出土状態(東から)



(2) B地点SB15 完掘状態(北から)



(1) B地点SD01 完掘状態 (西から)



(2) 同上 (東から)



(1) B地点SD01 上面遺物出土状態(南から)



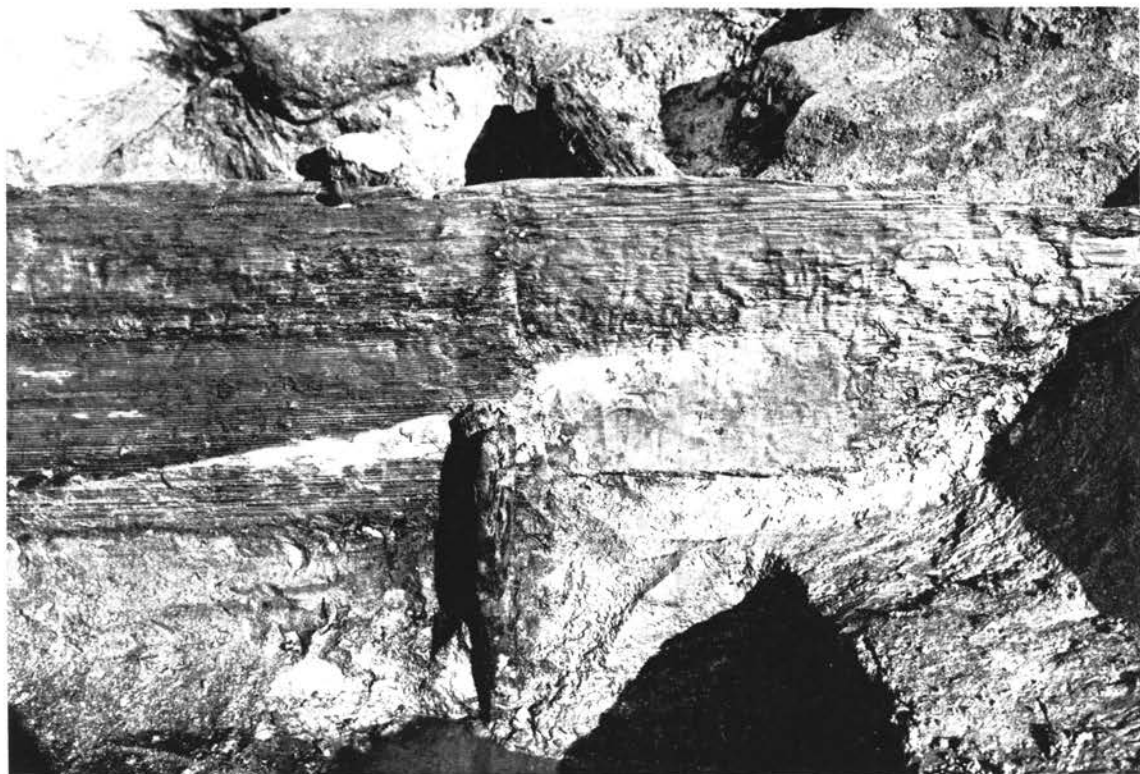
(2) B地点SD01 出土遺物細部(南から)



(1) B地点SD01 堰出土状態(西から)



(2) 同上(北から)



(1) B地点SD01 堰細部 (西から)



(2) 同上 (西から)



(1) B地点SD01 船型木製品出土状態 (西から)



(2) 同上 (西から)



(1) B地点SD01 梯子型木製品出土状態(南から)



(2) B地点SK10 遺物出土状態(北から)



(1) B地点SB32・SD11 (西から)



(2) B地点SB32・SD11 (南から)



(1) B地点SE24・25 (南西から)



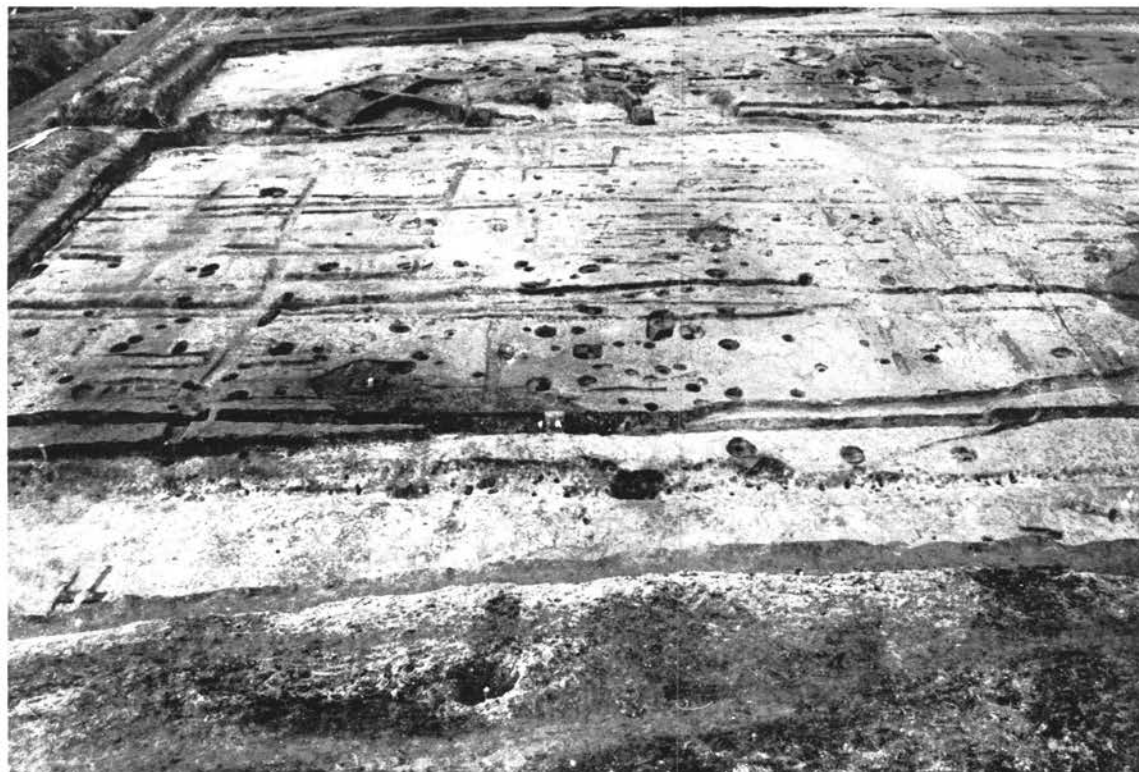
(2) B地点SE25細部 (南西から)



(1) C地点SE23 (南から)



(2) B地点SK04 (南から)



(1) C地点南端部遺構検出状態（東から）



(2) C地点中央部遺構検出状態（東から）



(1) C地点全景 (南から)



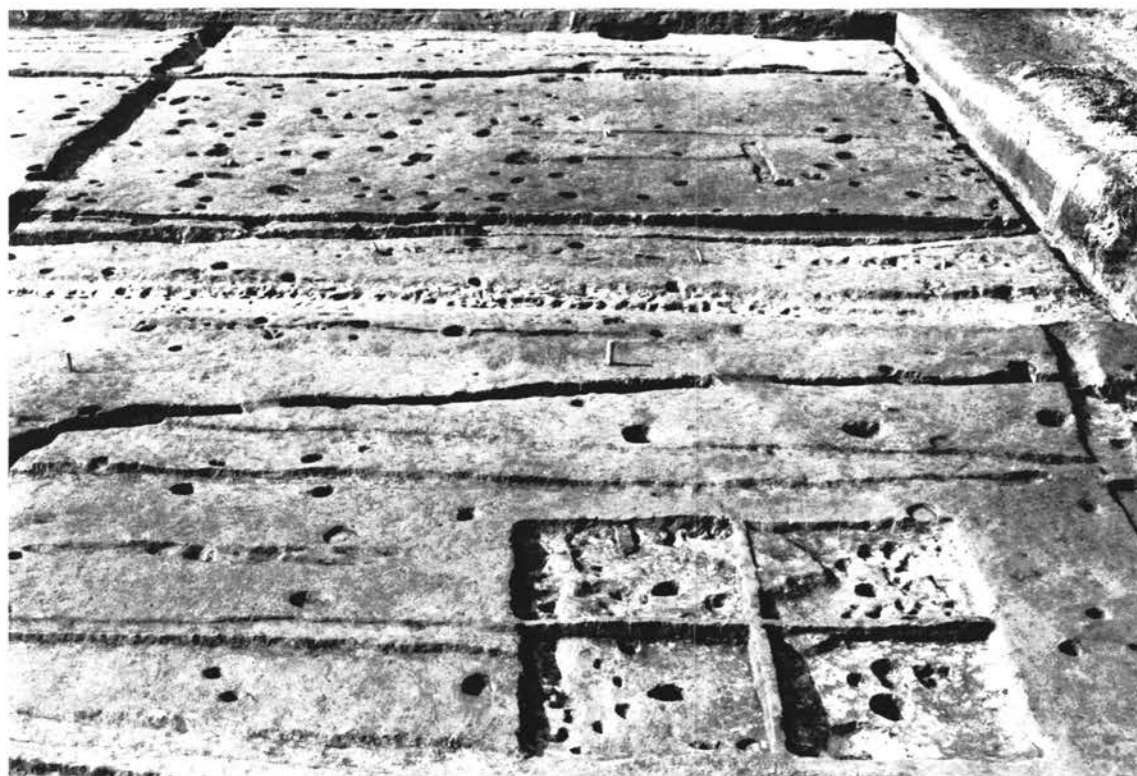
(2) C地点北端部遺構検出状態 (東南から)



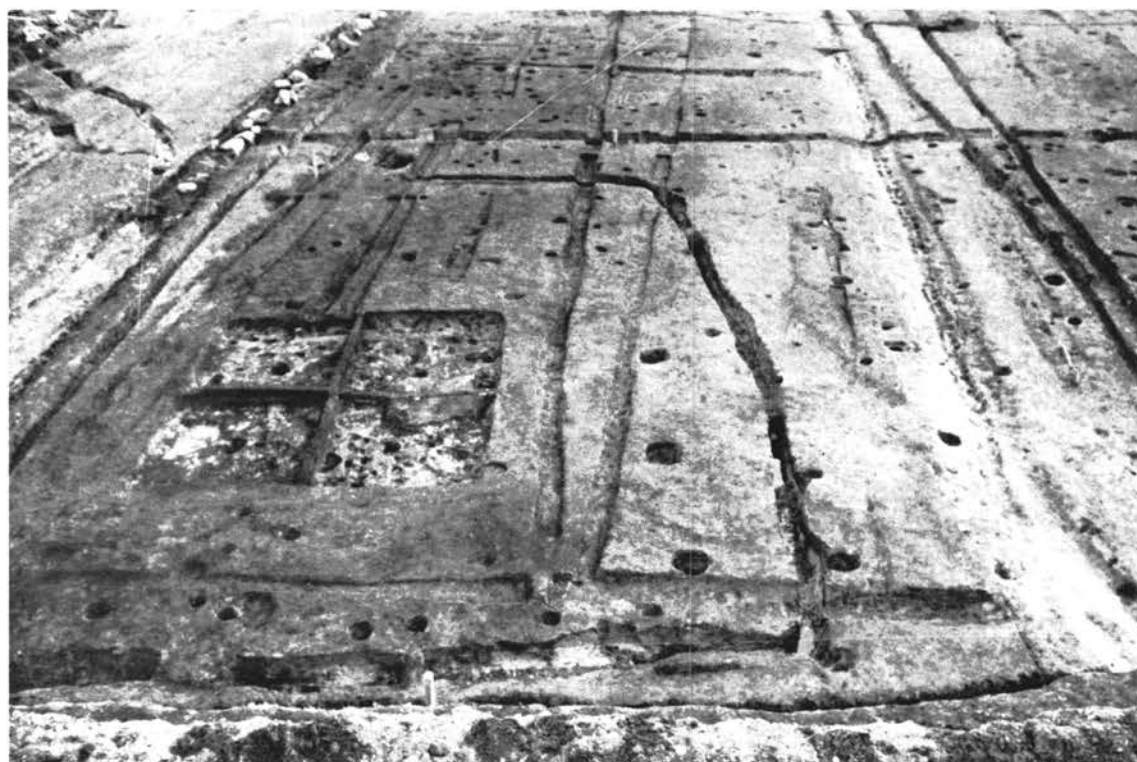
(1) C地点SD04・SB13・SB14（東から）



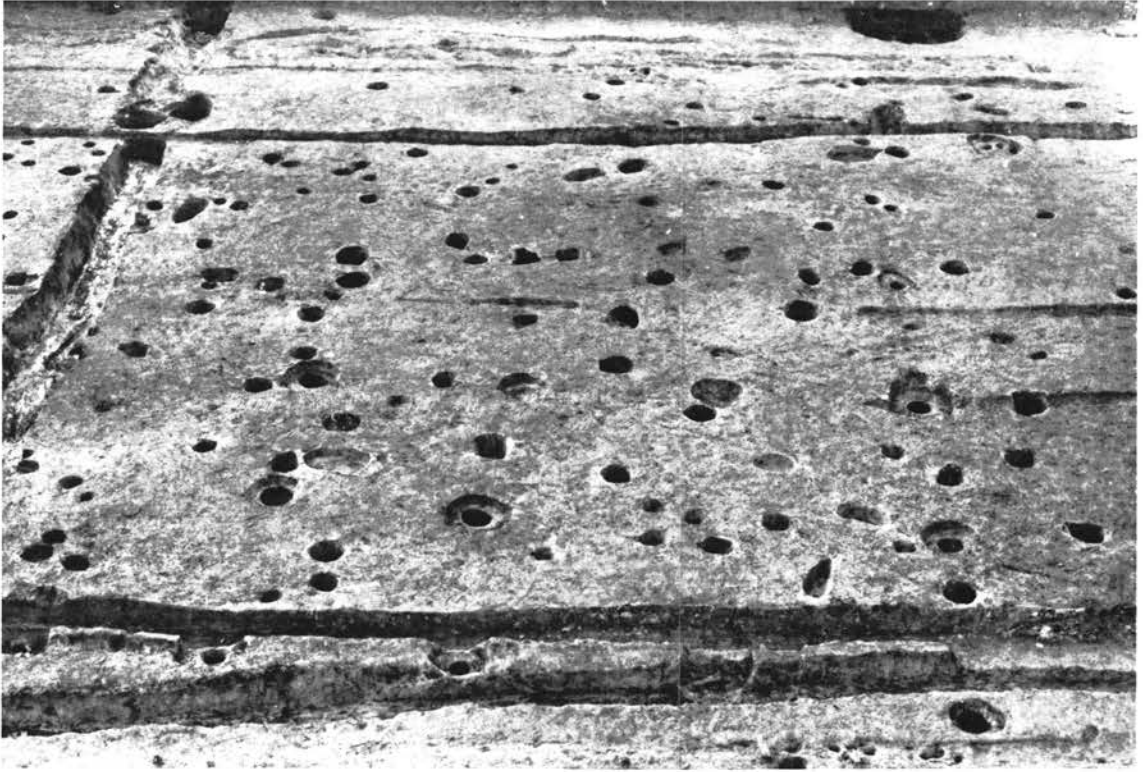
(2) C地点SD04・SB14（東から）



(1) C地点SB01・SB02・SB13 (東から)



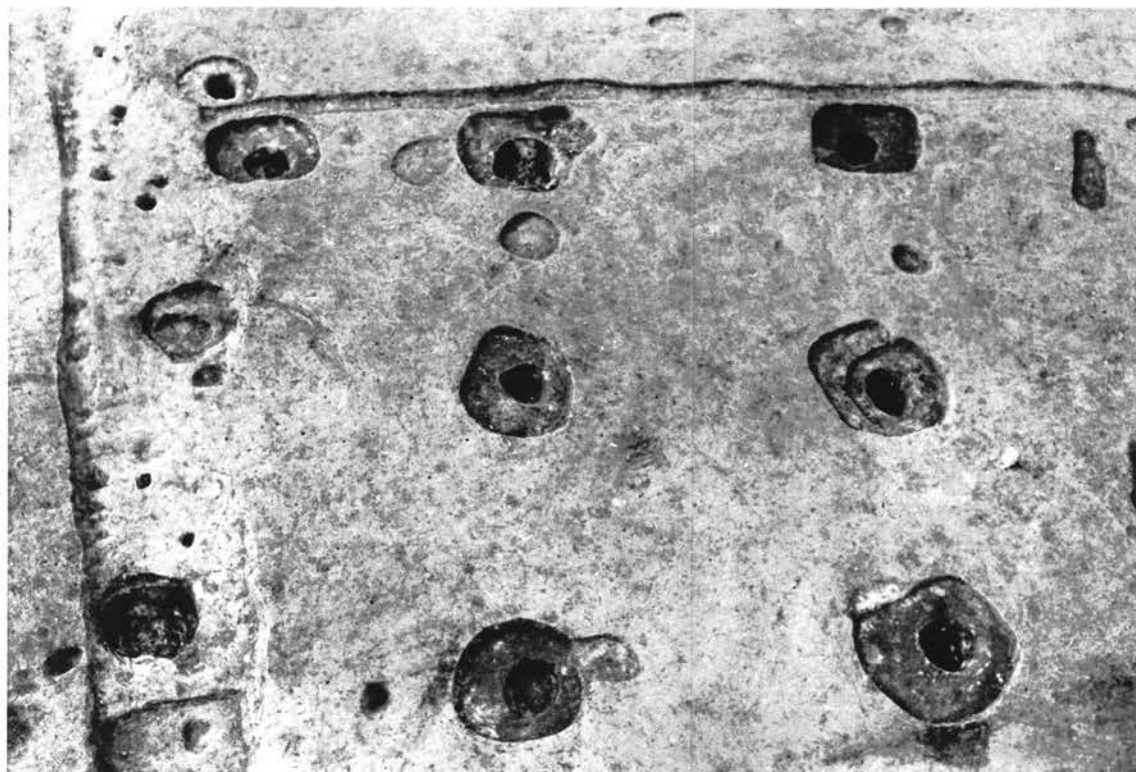
(2) C地点SB01・SD03 (北から)



(1) C地点SB02・SB13 (東から)



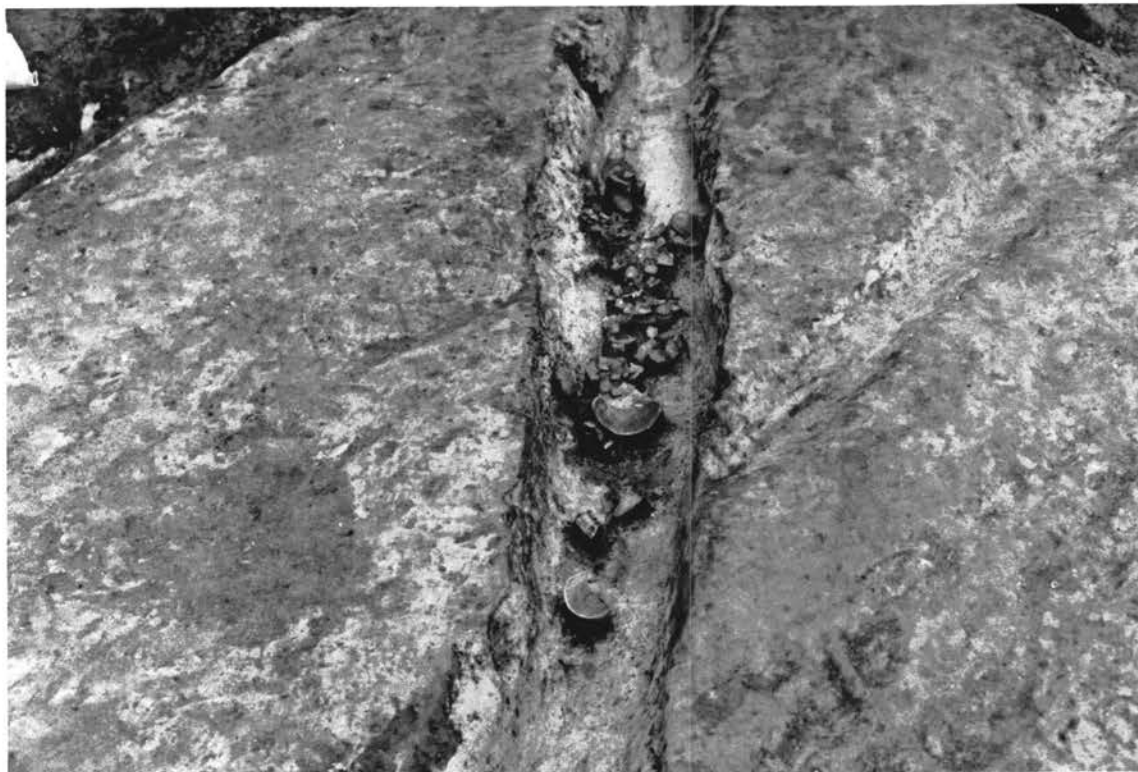
(2) C地点SB19・SB20 (東から)



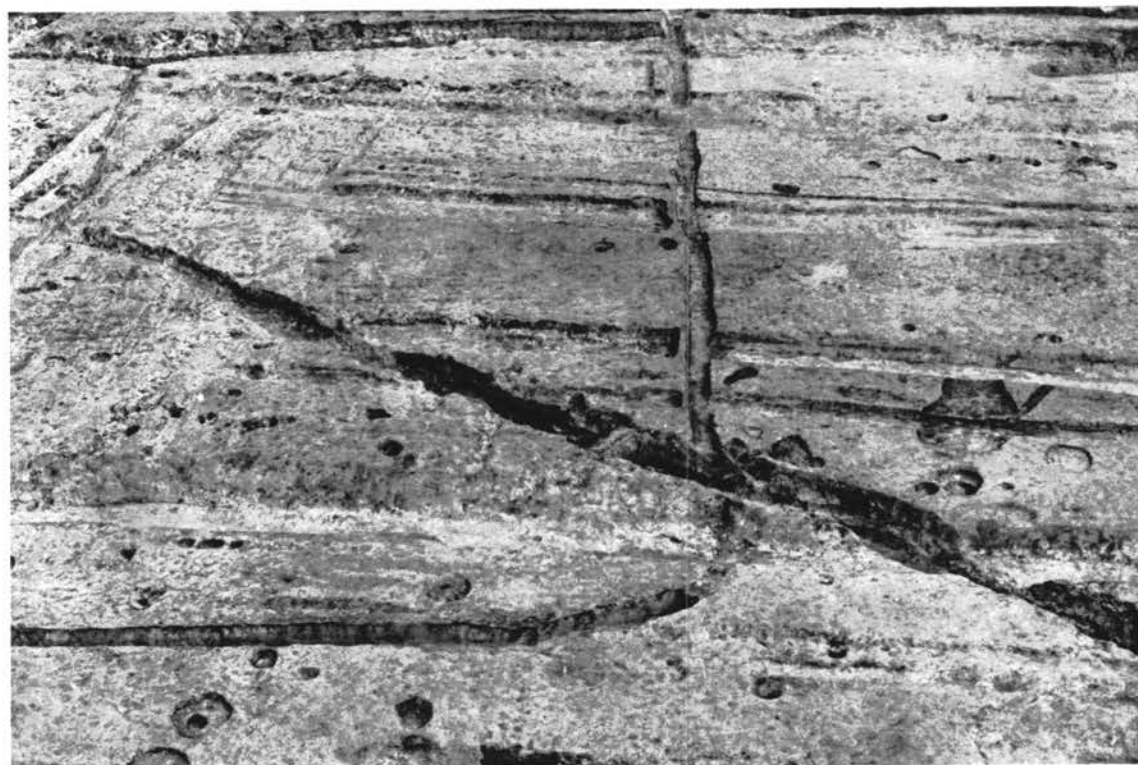
(1) C地点SB20 (東から)



(2) C地点SB51・52 (南から)



(1) C地点SD18土器出土状態(北から)



(2) C地点SD21(東から)



(1) C地点SD22 (東から)



(2) C地点SD16 (北から)



3



1



4



6



8



16

B地点SB03 出土遺物：土器(1)



23



18



9



19



13



12

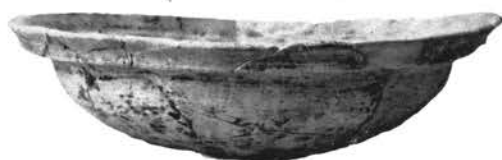


11

B地点SB03 出土遺物：土器(2)



17



24



5



22



26



25

B地点SB03 出土遺物：土器(3)



33



44



32



45



48



46

B地点SB15・SD26 出土遺物：土器



73



60



155



159



66



160

B地点SD01 出土遗物：土器(1)



71



182



86



87



85



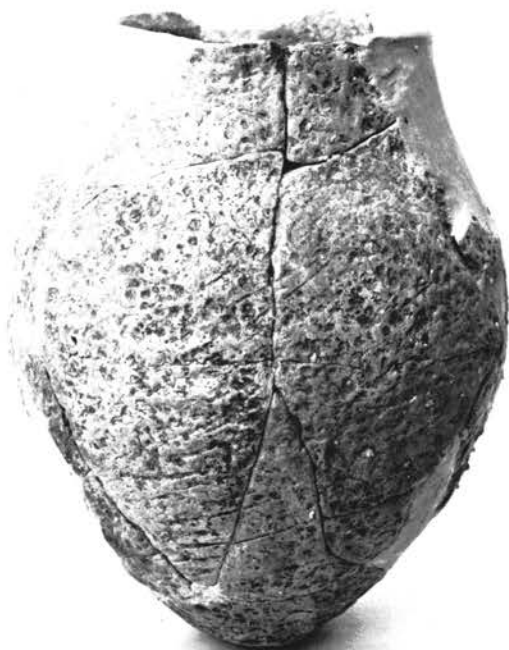
203



88



89



90



202

B地点SD01 出土遺物：土器(3)



188



138



93



161



156



94



120



145



117



116



138



132



187



109



219



164



184



162



199



176



178



174



179



170



84

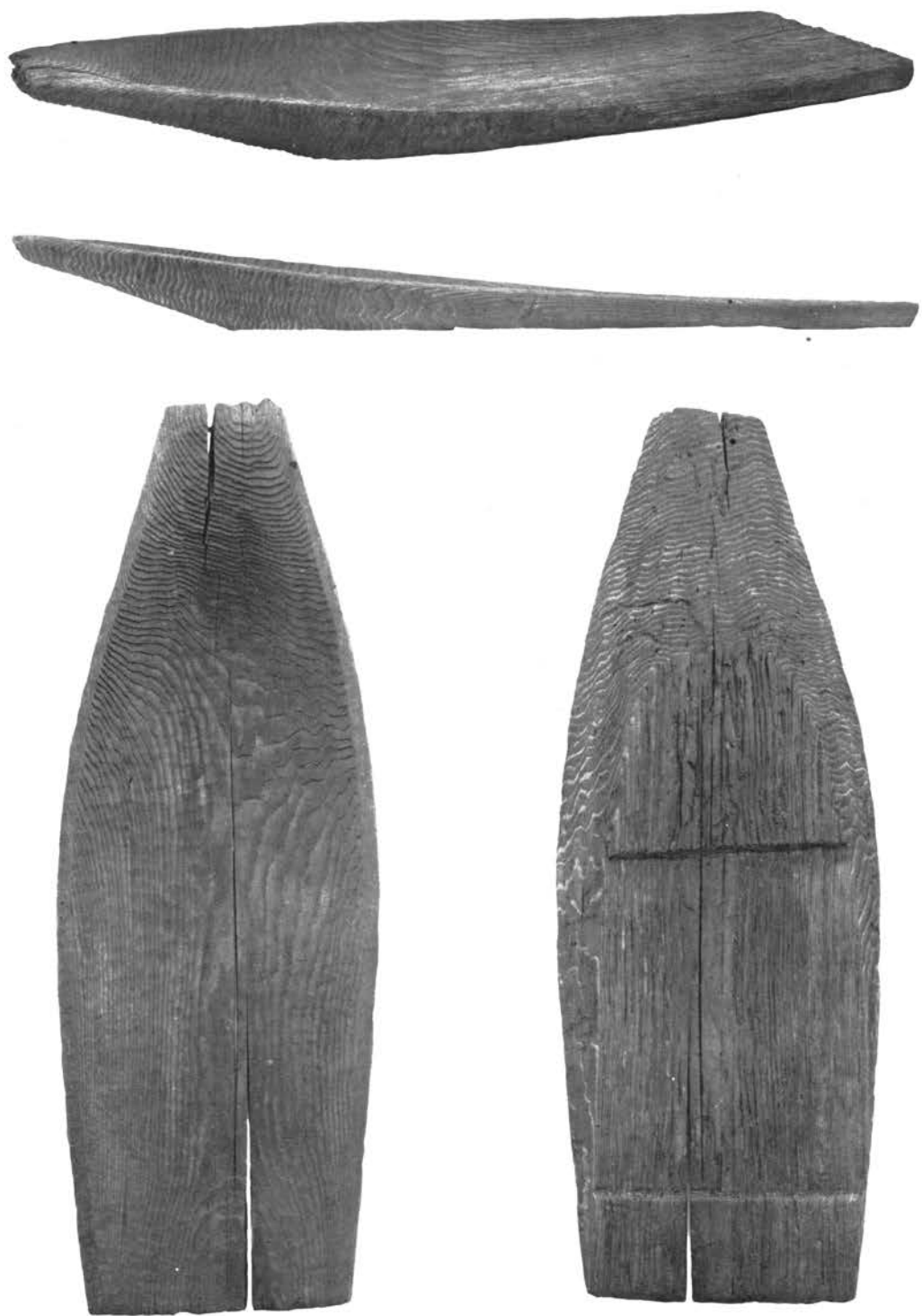


190

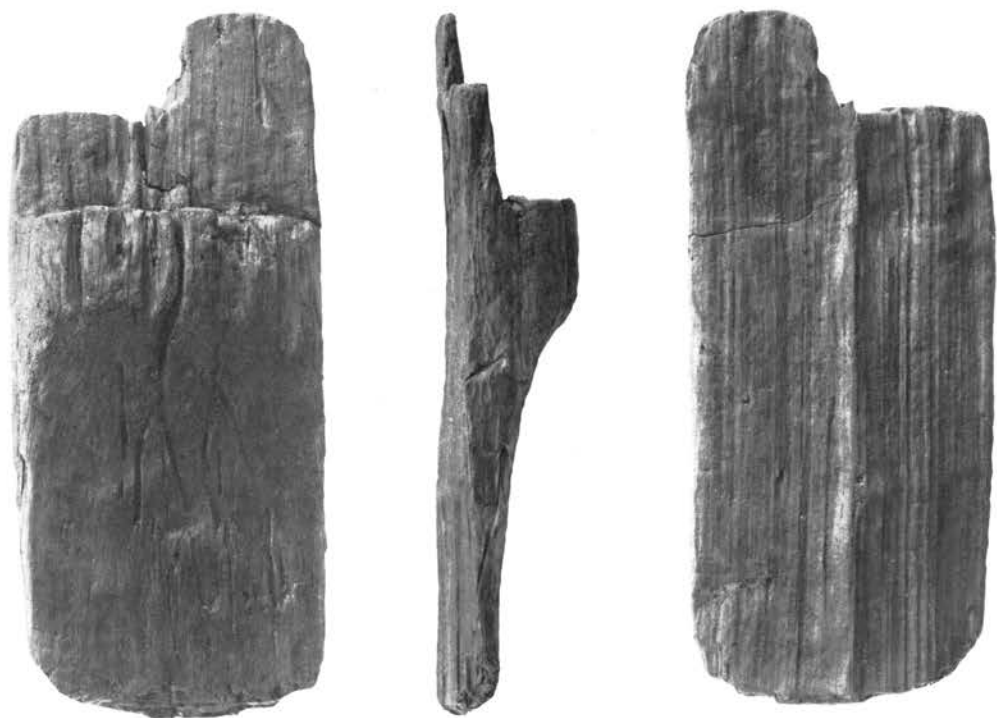


192

B地点SD01 出土遗物：土器(8)



B地点SD01 出土遺物：船型木製品



2



3

B地点SD01 出土遺物：梯子型木製品・鋤型木製品



264



251



500



260



258



271



270



277



249



280



269



296



326



297



327



284



335



343



351



340



378



361



362



329



365



405



290



409



338



413



337



411

京都府遺跡調査報告書 第5冊

昭和60年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)